

ドールズフロントライン ン:T&C

紅茶入りブランデー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドールズフロントラインの世界に戦術指揮官としてやってきたヤン・ウエンリー。

舞い散る雪、吹き荒ぶ風は戦場を優雅に舞う。

不敗の魔術師は、人形を如何に導くのか。

虚空の女王は、いつも見守っている。

目次

プロローグ	1	St. 5	休暇は終わりぬ	246
EP: 1 Reconvene		St. 06	オペレーション・カノー	1
St. 1	オペレーション・アンドロ	プス：前哨戦		290
メダ		St. 7	オペレーション・カノープス：	
AS t.	部隊の日常は非日常	フェーズ1		340
St 2.	胎動	ST. 8	オペレーション・カノープ	
St. 3	オペレーション・ベテルギ	スフェーズ2		381
ウス——侵攻、旧ゲルタ要塞		St. 9	ブリーフィング	418
St. 4	オペレーション・ベテルギ	St. 10	オペレーション・デネブ	
ウス——血と泥		：独立計画都市グリフォンの戦い		
AS t.	特殊分遣隊の休日	432		
		St. 11	オペレーション・デネブ：	
189		シヴァを巡る攻防		447

S t. 12 オペレーション・デネブ：

バーミリオン攻防戦 ————— 456

S t. 13 オペレーション・デネブ：

反攻 ————— 470

S t. 14 オペレーション・デネブ：

戦後 ————— 487

プロローグ

「グリフィンS09地区戦術司令室にて・・・」

朝早く、殺風景な部屋に2人の男女がいた。

それは戦いの序章、全ての始まり。

「おはようございます、指揮官さま」

金色を風になびかせ、制服を着崩した少女が微笑む。

一方「指揮官さま」と呼ばれた男は眠たげな顔をしながら水を飲んでいた。

「随分眠たそうですわねえ。ここは初めてでしょう、いかかですか？」

不満そうな顔をして目を閉じながら話を聞いていたが、青年は片目を開けて少女を見る。

「どうと言われてもねえ・・・」

「ふふふ。さて、話は変わりますがグリフィンで働くことを決断してください。本当に嬉しいですよ」

「その話は置いておいて、まずは、お互いに自己紹介をするべきだと思うんだよ」

「あ、すっかり忘れてました！私はカリーナ。これから指揮官さまの後方幕僚を務めさせて頂きます。今後は気軽にカリンと呼んでください」

「カリンねえ……」

どうやらそのファーストネームは男の記憶野を刺激したようである。

「私はヤン・ウエンリー。戦術指揮官とやらをやることになったのはいいんだが……」

我慢の限界なのか、ヤンはベレーを取って頭をかき回した。

「紅茶はないのかい？」

「あんたのなかで、未だ民主主義は死んでないってことよ」

「……そんなに高尚な人間じゃないよ、私は」

「あなたを……」不敗の魔術師」と知っての頼みだ」

「指揮官……どうか勝利を……！」

「そろそろ私は負けられない。勝ちに行かせてもらおうよ」

「健康と美容のために、食後に一杯の紅茶……」

「ロシアン・ティーを一杯。ジャムではなくママレードでもなく蜂蜜で」

「奴等は裏切った。殺る気よ！」

「お姉さまたちを・・・助けて・・・！」

「お前は鉄血の・・・」

「この世に置き去りにされた人形さ」

「戦いが起これば、生き物も・・・たくさん死ぬ・・・」

「私は戦略家でも戦術家でもない。ただのヘツポコ歴史学者さ」

「紅茶にはブランデーよりチョコレートよ」

「今の私は・・・グリフィンの戦術指揮官だ」

「しっかりとしなさい！ 私たちはなんのために戦っているのか、思い出して！」

「冷静になりなさい。私たちの敗北は、人類の敗北を意味する：やれやれ、ブランデーでもくれないか」

「鉄血は、ヤン・ウエンリーの抹殺をここに宣言する」

「革命だろうがなんだろうが、銃を手にひと度力に訴えれば、誰だろうと皆地獄に堕ちる。そして、汚れた手は洗い流せない。洗えるのは足だけさ」

冷やかな月の女王は、頼りない青年を遣わした。

翼をもがれた鷲獅子を導くのは黒の魔術師。

鉄と血が飛び散る戦いの果てに、虚空の女王は顕現する。王を迎えるべく。
血と泥濘に塗れた戦いの先に、それは伝説になる。
これは、遠い未来に語られる、ある歴史的一幕。

E P : 1 R e c o n v e n e

S t . 1 オペレーション・アンドロメダ

2045年、世界は核の炎に包まれた……

大昔の娯楽漫画の書き出しのような文体で記録されるそれは、しかし紛れもない事実だった。

1905年のソ連が未知の遺跡を発見したことに端を発する人類史の崩壊は、今この2062年まで人類が生きのびていることが生命の誕生より稀有なほどに過酷で壊滅的。まさに地獄だった。

2030年代、封鎖された遺跡にロシアの学生グループが侵入、致命的なウイルスが流出。

瞬く間に広がったそれはほとんどの土地を居住不能区画にした。

31年、鉄血工業設立。兵器供給を開始する。

45年、第三次世界大戦勃発。ボタン戦争と呼ばれる戦争は人の手を離れ、AIや機械の代理戦争と化した。その中で鉄血は自律型戦術人形の製造に着手、軍事的リソースを独占する。

51年、大戦終結。放射能や生物兵器に侵された地球は滅亡への一途を辿っているか
に見えた。

53年、民間軍事会社グリフィン設立。

54年、鉄血が自律型戦術人形の製造に成功。

61年、グリフィンAR小隊結成。鉄血、人類に対し攻撃を開始。

62年、グリフィン戦況悪化により指揮官を募る。

戦史とは人類の歴史である。平和な時代より戦争に明け暮れる時代の方が長い人類
は、やはり野蛮なのだろうか。

「これはないだろう」

ヤンは呟いた。酷すぎる。ヤンは異世界人である。ヤンの世界では冷戦は集結して
おらず、2030年に核戦争が起こりそこから人類は宇宙に飛び立った。

危機と乗り越えた上での発展、それはあくまで、自分たちの力によるものだった。だ
が、この世界は違う。

未知の遺跡によつてもたらされた生命ウイルス、自律型戦術人形、AIの暴走による
鉄血工廠の人類に対する攻撃。

ヤンは頭を抱えた。

もうどうしようもないのである。ヤン・ウエンリーはファンタジーに対してそこまで寛容にはなれなかったのだ。

「だいたいわかつていただけましたか？指揮官さま」

カリリーナが紅茶を啜るヤンに話しかける。

「ああ、ろくでもないということがわかったよ。それで、その指揮官さまというのはやめてもらえないかな。むずがゆくってしかたない」

ヤンは紅茶の味に顔をしかめる。息子や妻の淹れるものと比べてしまったのだ。そんな心中を知ってか知らずか、カリリーナは笑顔で首を傾げる。

「あら？では、なんとお呼びすればいいのでしょうか？」

「ヤンでいいよ」

そこでカリリーナはふと思い出したように手を叩く。

「そういうえば、ヤンさんはここに来る前は艦隊を指揮していたと言っていましたわね」

「ああ、言ったね」

「じゃあ、提督にしましょう！その方が呼ばれ慣れているでしょうし」

ヤンは思わず心臓が6つほど拍動する間、たつぷり固まっていた。

「艦隊を指揮する訳でもないのかい？まったく、あほらしい」

「でも、”指揮官さま”は嫌なんですよ？」

「……もう勝手にしてくれ」

押しが強い相手は流すに限る。ヤンが30年と少しの歩みの中で学んだ、先輩や小生意気な部下の対処法である。

「了解いたしました、提督！それでは、説明しますね！」

いやに陽気なカリナーナの声は、しかしどこか物憂げで不安なニュアンスを帯びていた。

ヤン・ウエンリーは異星人である。2062年の地球ではなく宇宙暦767年、西暦にして3567年バーラト星系ハイネセン生まれだ。

そんなヤンからすれば、ここは古文書か何かにある遺跡と言ってもいい。

しかし、近代に入ってから人間とは変わらないものだなと実感させられているヤンだった。

妨害技術の向上は、戦争行為をチープにする。

宇宙暦800年での陸戦は伝書鳩や犬、信号弾に伝令と前時代的というに余りある代物である。

そこまでするに無いものの、2062年現在の戦争行動も似たようなものだ。

「……」

ヤンは黙って戦況を見つめる。

現在、グリフィンS09地区戦術戦闘部隊、臨時名称“第13旅団”は作戦行動中である。

選抜試験終了後、合格通知と同時にヤンは拉致……いや、連行されたのだ。

上級代行官ヘリアンから実戦参加を要求されたヤンは、部隊を率いて作戦エリアに向かった。

戦術指揮官であるヤンだが、戦場でできることは少ない。

行動方針を決め、あとはドローンによる戦況監視と緊急時のみの戦闘指示だけで、本的には戦術人形に任せている。

ヤンは戦闘能力があるわけでもなく、銃を持ったとしても当たらない。そんなヤンは、艦隊戦でもない限り前に出ることは許されなかった。

「FAL、か……今のところは、まっとうな作戦行動を行っているみたいだが……」
「提督？」

「なにせ、私の戦術は古いものでね。新しいものの好きの彼女のセンスに合わないと、齟齬が生まれてしまう」

そして、指揮官と前線の齟齬は戦線崩壊に直結する。ある意味でアムリツツアと同じような状況になる。

(……いや、戦死した彼らに悪い言い方だな、これは)

ヤンは現況に至るまでの道筋を思い出す。

ヤン・ウエンリーに与えられた部隊は、とても部隊と呼べるものではなかった。

敗残兵の寄せ集めか、新兵・老兵の集まりだった。

そんな中、主戦力となりうる人形は一人しかいなかった。

FN社製バトルライフル、FAL。

7.62mm口径、使用弾薬7.62×51mm NATO弾。

発射速度は650—700発/分、銃口初速823m/秒、有効射程400—600

m。

世界各国で使用される、傑作自動小銃だ。

ブランドこそカラシニコフ^Aシニコフ^Kやコルト⁴に劣るもの、間違いなく第二次大戦後の冷戦期

——自由主義諸国における対共産主義戦線——を支えた名銃と伝えられる。

そんな彼女は、紅茶好きで、チョコレートとおしゃれが好き——その壊滅的な

フアツションセンスを除けば——普通の、少し高飛車な女の子だった。

ヤン・ウエンリーがFALと会って真っ先に思ったのは、やはり本人が予想していた

ように失望であった。

人形とはいえ、いや、人形だからこそこのような少女の姿をした存在が戦うことが許せなかった。

これで中身が純粋な戦闘機械だったらまだ救いがあったのかもしれない。だが、戦術人形たちのAIは完全に、完璧に、誰もが疑わない女の子でしかなかった。

そのような戦場を作り出した鉄血や人類を、そのような戦いを続ける鉄血とグリフィンのことを考えると、ヤンは怒りと言うより失望感に包まれていた。

だが、FALの実戦経験はFALが実証しているように踏んでいない戦地はないほど豊富である。

対ゲリラやパルチザンは元より正規、不正規戦闘、この世の地獄とさえ形容できない戦場も潜り抜けてきた。

ジャングル、砂漠、ツンドラ、市街地。

殺したのは兵士だけではない。子供、女、老人、富豪から貧民まで、政府高官から一般市民まで。

”売れた”銃が——AKが、M16が、1911ガバメントが——そうであるように、FALもまた殺しの道具としての粹を極めていた。

故に、彼女はヤンからすれば歪んでいたのだ。

ヤン本人も一千万単位の死者を作り出した本人だが、宇宙の戦争は美しすぎた。

血と泥にまみれたベトナムやアフガンをヤンは知らない。学徒としての知識はあつても、戦場を生き延びてきた訳では無い。

彼の戦争は芸術であり、ボタンを押せば光の彼方の何百もの人が死んだ。

彼の戦争は代理戦争であり、彼の役割は実際に殺すことではなく、どう殺すかを考えることだった。

彼女の戦争は闘争であり、自分が引いたトリガーが機構を作動させ、発射された弾丸が、擲弾が、ナイフが、手が、目の前の敵を殺した。

彼女の戦争は生存競争であり、彼女の役割はひたすらに殺すことだった。

だからなのか、演習を終え、一言も交わすことなく彼女は去ろうとした。

カリーナからヤンの経歴は知らされていたのだろう、FALはヤンがかつて見た事のある目でヤンを睨めつけた。

それは忘れもしない、アムリッツア会戦の後、第11艦隊鎮圧後、バーミリオンの後。帰還したヤンを取り囲む英雄と奉る報道陣と人だかりの奥から冷ややかな視線を送る、戦死者たちの遺族たちの視線。

そんなFALの至近に、1人の

戦術人形が転がり出てきた。

とつさにマチエツトを構えるFALを慌てて制した人形は、ステンMKIIと名乗った。

大戦中のイギリスで開発された9mmパラベラム弾を使用する”ステンガン”、サブマシンガンである。

ダンケルク撤退以後の厳しい戦況の中でイギリスが作りだした、推定200万丁が製造された銃である。

どうやら部隊からはぐれたらしく、FALはヤンにステンを押し付け、そのまま去っていった。

カリーナによると、このところ鉄血の攻勢が激しくグリフィンの部隊もいくつも壊滅しているらしい。

だから、部隊に加えてやれとのことだった。

万年人手不足のヤン艦隊ではないが、万年人形不足のヤンの部隊、”第13旅団”は歓迎した。

そこからグリフィンS09地区戦術特区はホットスポットとなった。

傷者移送、異常の調査、救難信号の調査などを経てこの地区を襲撃する鉄血のボスト

言える人形を割り出した。

この数週間のヤン・ウエンリーは過去の彼を知る人物からすれば目を丸くするほど働いた。

そのおかげか、鉄血の部隊の再編を待たずしてヤン・ウエンリー率いる旅団は鉄血を追い詰めていた。

(……相変わらず珍しいタイプの指揮官ね。やりづらいわ)

FALは戦場を移動しながら考えに耽っていた。

(紅茶好きに悪いヤツはいない……有能かどうかはまた別の話、戦果はそこそこだけど……まだ判断は出来ないわね、”提督”はどっちかしら)

FALは作戦行動開始前のブリーフィングを思いだす。

「そもそも、多数の有利さと戦略的要所を抑えられている今、真っ向から立ち向かっても勝機は薄い」

切り出した提督にFALは同意する。手元の紅茶は少し薄めだ。香りを楽しむと言

うより、気休め程度に。

「そうね。無謀な突撃は避けるべきよ。十分な戦力があれば話は別だったかもしれないけど、この部隊じゃあね」

小隊全員が参加しているが、発言権は主に部隊長であるFALのみに与えられている。

「わかっているじゃないか。さすが、紅茶好きには悪い人はいない」

「で、どうするの？ゲリラ戦でも展開する？隠密によるサボタージュ？」

「さっきも言ったが、この状況で正面衝突すればすぐに敵増援によって包囲殲滅されてしまう。だが、1箇所だけその限りではない場所があるんだ」

提督はベレーを指にひっかけてくるくる回す。答えはわかりきっている、と。

敵は再編を待ち、現在敵軍司令部を目標して集結中である。期限は長くても2〜3日と見られる。

「なるほどね。アナタ、性格悪いって言われない？」

「よく言われるよ」

呆れた顔で呟くFALにヤン提督は飄々と答えた。

「失敗したらどうするのよ」

「ん？頭をかいてごまかすさ」

思わずあんぐりと口を開けた小隊員とカリーナだったが、FALは目を丸くしただけでじつとヤン・ウエンリーというこの奇妙な男を見つめている。

「どうせこの戦況で大局をひっくり返そうというのはどだい無理な話なんだ。それに、失敗して恥をかくのはヘリアン代行官だ。君たちが心配するような事はないよ」

つかみどころのない男だ。FALは素直にそう思った。いまのところは、ぼんやりとした学徒風の青年にしか見えない。若く見える部分もあるのだが、時々吐く達観したような台詞は老成した人格を感じさせる。

「先回りして言うとな、FAL。こいつはまともな作戦じゃない。

詭計や小細工に属するものだ。

だが、これは国家間や軍事力同士の正規戦闘じゃない。

グリフィンの現状を鑑みれば、君たちは軍事力としては国軍・企業軍ではなく不正規戦闘部隊だ。
ウエックトワックス

なら、こういつた正規戦における邪道は不正規戦における本道になるのさ」

「そうね。確かに他の作戦はないわ。玉砕しろ、というのなら話は別だけどね」

「そんなことさせるわけに行かないだろう。そのための作戦なんだ」

「ふうん……さて、そういうことなら、私は完璧に遂行するわ。でも、この作戦は司令部との完全な連携がないといけない」

「そこはまあ、カリーナがやってくれるさ」

「そうそう、あとひとつ。アイツらみたいに私が裏切ったらどうするのよ」

今日のお茶菓子の内容を聞くように言ったFALに、提督とFAL以外は身を硬くする。

彼女たちには身に覚えがあるのだ。それがたとえ本質ではなくとも、真実ではなくとも表面上の事柄は記憶されやすいものだ。

「アイツら、が誰かは知らないが、指揮官が兵士を信用しない訳には行かないだろう」

「そうじゃないわ。裏切ったら作戦は破算よね。そうしたら?」

「困る」

「そりゃあ当然困るでしょうね。仮にも指揮官なんだから、代案くらい考えているでしょう?」

「考えはしたけどね」

「で?」

「何も思い浮かばなかった。君が、君たちが裏切ったらそこでお手上げだ。どうしようもない」

提督はくるくるベレーを回している。

どこか苦々しい表情を浮かべている。

飛びそうになったベレーを抑えてすこし安堵の表情を浮かべた提督にFALは続ける。

「つまり、私を全面的に信用すると？」

「実はあまり自信がない。だが君を信用しない限り、この作戦そのものが成立しない。だから信用する。こいつは大前提なんだ」

「なるほどね……」

とは言ったものの、流し目で提督を見るFALの表情は納得したものとは言えなかった。

FALは胡散臭げな視線を反省したのか、正面から改めて提督を見やった。

「一つ聞いていいかしら、提督」

「ああ」

「ヘリアンからあなたに課せられた命令は、無理難題。」

”旅団”なんていっても、それは基地の規模だけ。実質はたった一個小隊で鉄血への反攻作戦を実行する。

拒否しても、あなたを責める者は少ないはずよ。

それを承諾したのは、戦術的にはこの作戦があつたからでしょう？

さらにその底には何があつたのかを知りたいの。

名誉欲？出世欲？」

FALの視線をのりくらりとかわす提督は相変わらずベレーを回しながら言う。

「出世欲じゃないと思うな。30代で提督とか閣下呼ばわりされれば、もう充分だ。だいいち、この作戦が終わって生きていたら私は退役するつもりだから」

「退役？この情勢下に退役するの？」

「そもそも私は志願して入ったんじゃない。」

倒れていたところをカーリーナに拾われ、半ば強制的にあのヘリアンとかいう代行官に試験を受けさせられた。

それに、その情勢というやつさ。

このSO9地区を抑えれば、鉄血の戦略的要所を確保出来る。

大規模侵攻や戦力の逐次投入なんて馬鹿な真似をしない限り、グリフィンは確実に重視の戦略で鉄血に勝てるだろう……平和な時代に人形と力を合わせて復興していく。

これほどの技術力があれば、宇宙にだって行けるはずさ。

まあ、新兵器とか物量作戦で押し潰されでもしないかぎりね」

「フムン……でも、その平和が恒久的なものになると思うの？」

「恒久的な平和なんて人類の歴史上なかった。」

だから私はそんなもの望みはしない。

こいつは戦史を見れば明らかさ。

だが何十年かの平和で豊かな時代は存在した。

要するに私の希望は、たかだかこの先何十年かの平和なんだ。

だがそれでも、その十分の一の期間の戦乱に勝ること幾万倍だと思う。

私はそういう世界を見ることが叶わなかった。だから、それが見たい。そういうことだ」

ヤンの台詞に幾ばくかの違和感を覚えながらFALは言う。

「失礼だけどヤン提督、あなたはよほどの正直者か、でなければ詭弁家だわ。

とにかく期待以上の返答は頂いた。私も微力を尽くすとしましょう。永遠ならざる平和の為に」

FALと小隊員たちは作戦の最終調整に入った。

ヤン提督の話を聞いてどう思ったのか、その表情はどこか引き締まっていた。

「陸戦ならシェーンコップの領分なんだけどなあ……」

ヤンは頭をかき、カリーナに指示を出す。

「カリーナ、09AS飛行場に補給物資を用意してくれ。ついでにFALに、伝言を頼む」

「なんででしょう?」

”紅茶にはブランドーより”

「それだけですか?」

「ああ、それだけだ。FALならわかるだろう」

「了解しました。私におまかせあれ!」

(……これは試金石だ。君がこの戦争に勝てるだけの能力を持った者か否か。私ではこの世界は救えない)

すつかり冷めた紅茶を啜るヤンだった。

作戦を開始してから30分、FALは小隊を率いて崖を登っていた。

「こ、こんなの訓練でもやったことないよ〜」

弱音をあげるステンをFALが小声で叱りつける。

「しっ! 静かに! ここはもう敵地、死にたいの!?!」

無言で頷きかけて首を横に振るよくわかっていないステンを他所に、FALはずんず

ん登っていく。

崖上のクリアを確認し、FALは伏射姿勢を取り警戒態勢を取る。

今回は特殊戦仕様のためタイガーストライプの野戦服に髪をポニーにまとめ、青いリボンとフェレットが頭に乗っている。

サプレッサーにロングバレル、高倍率とレットドットサイトを兼ねるハイブリッドサイト。ハンドストップに航空支援用のレーザー照準器、長距離用のバイポッドを備えている。

上をステルスヘリがフライパスしていく。

FALはそれを見て下の隊員に檄を飛ばす。

「補給が来たわ。あと少しよ」

「了解」

登ってきた隊員全員に補給物資の紅茶とチョコレートを出しながら、FALはこのあとの作戦行動について確認する。

「いい、この地区では行方不明になったAR小隊の主力であるM4が確認されている。今回の作戦では、鉄血のボス”スケアクロウ”の撃破及びM4の回収」

隊員のダネルNTW-20が質問する。

「ここからの配置は変更なしでいい?」

「いいえ。変更するわ。スケアクロウは私がやる。あなた達は、撃破後に私が囮になっている間にM4を回収し離脱。NTWはここから狙撃支援、ほかの3人は隣の村に潜んでいなさい」

ステンたちが反対の声を上げる。

「そんな! 急な作戦変更で、しかも1人でなんて……」

「勘違いしないで。これは作戦よ。ちゃんと提督から司令を受けているわ」

「これか」

NTWがひらひらと紙を見せる。

「紅茶にはブランドーより……なんです? これ」

受け取ったステンが首を傾げる。

「これ以上は機密よ。ヤン・ウエンリー提督も粋なことをするものね」

紙をライターで燃やしてからFALは席を立った。

「それじゃ、私は行くわ。もし、信号弾が上がらなければ私の敗北。撤退しなさい」

FALは振り返らなかつた。

NTWはFALの援護のためにFALの次に出て狙撃ポジションに向かった。

「指揮官に、提督に聞かなきゃ! なんてこんな命令を出したのか!」

はやるステンを抑え、Vectorが言う。

「作戦中は無線封鎖している。連絡は取れない。あるとしても、司令部からしかない。私達は私たちの任務を遂行するのよ」

「でもー」

〈聞きたいのかね〉

響いた声に、彼女らは驚いた。

「て、提督!..」

〈私だよ。君たちが私が何の考えもなしにFALを送り出したと知っているのだとしたら、それは大きな間違いだ。今までの行動パターンと戦果から見て、FALとスケアクロウの戦闘能力はライオンと猫だ。それに、なにがあってもFALなら切り抜けるさ。そのための人選だ〉

「でも、いきなり作戦変更だなんて……」

〈これは決定事項だ。見ただろう、”紅茶にはブランデーより”〉

「どういう意味です?..」

〈さしてね。私は紅茶といえばブランデーだが、君たちが紅茶と一緒に食べるものは何かな〉

至極当たり前にかつての妻子が聞いたなら呆れ果てブランデーの瓶を取り上げるよう

なことを言うヤンだが、ここではそれを知るものは誰もいないのだった。

「FALさんが出したのは、チョコレート……」

<そういうことだ。さて、そろそろ時間だ。君たちも待機しておきなさい>

通信はそこで終了した。

ほぼ同時に、時計の針は指定された時刻を指した。

空に、信号弾はまだない。

(さて、どうしたものかな)

ヤン・ウエンリーはベレーを取って頭をかいた。

目下、作戦のことについては問題がなかった。完璧な作戦プランを立て、確実にそれを遂行できるFALを作戦の中核に据えた。

問題は、後方だった。

ヘリアンやグリフィンのトップ、クルーガーはまだ良い。動向不明の戦術人形たち、企業や国家、政治が絡んでくると途端に厄介なのだ。

自由惑星同盟やエル・ファシル革命政府の政治家達にはろくな者がほとんどいなかった。

イゼルローンの居心地のなんとよかったことか。

ベレーで顔をあおぎながら、ヤン・ウエンリーは思考する。

おそらく、このS09地区を抑えたところで戦意にはやるグリフィン首脳や人類政府は停戦など考えないだろう。

いまの戦力では鉄血と全面衝突してもどうにもならない。

戦力があつて帝国領侵攻作戦で戦力を失った同盟軍よりもタチが悪い。

そのあとのことを考えれば、“旅団”は温存しておかなければならない。

現在のヤン・ウエンリーの立場では、帝国領侵攻作戦を防げなかつた時よりも抑えるのは無理だろう。

今回の作戦でのFALの単独行動も、試金石と言つたがその時のための仕込みも兼ねている。

なんだかんだいって、ヤン・ウエンリーはFALを信用しているのだ。

紅茶にはブランデー以外ないのだが、そこは多少譲つてもいいと思うヤンなのであつた。

(参つたわね、あのスケアクロウとかいう奴は問題ないのに……！)

単独潜入し敵司令部に忍び込んだFALは行き詰まっていた。

スケアクロウを補足したのはいいが、そこには別の戦術人形と思われる人影があったのである。

ポンチヨをまとつており銃種も不明。

ただわかるのは、

(強い……手練ね、隙がない)

その立ち姿はとても味方司令部とは思えないほど戦闘態勢でありながら殺気を完全に殺していた。

一挙手一投足から滲み出る純戦闘に特化したオーラは、FALと同じかそれ以上に見えた。

(でも、スケアクロウを倒さないと仕込みはできない。しかも予定より35秒遅れている……)

FALは素早く状況を観察する。

現在のポジションは木箱の影。スケアクロウまで5m、謎の人物まで6.5m。

スケアクロウはビットをしまっており、攻撃手段はない。

仕込みの目的である倉庫までは280mと言ったところか。

数秒でFALは決断した。

航空支援用のレーザーポインタで窓の外の木箱を狙う。目的は航空支援ではなくN

TWだ。

狙撃ポイントからわざわざに見えたそれを、NTWは照準からびったり2秒で撃ち抜く。

ダネルNTW—20は対物ライフルだ。

口径は14.5mm、使用弾薬は20mm×82弾、初速720m/s、有効射程1500m。

個人携行としては最大の弾丸が木箱を粉々に吹き飛ばす。スケアクロウと謎の人物が気を取られている隙に、FALは音を立てずにスケアクロウに肉迫する。

机を回り込みピンを抜いたグレネードをスケアクロウのポケットに押し込みダメ押しとばかりにゼロ距離で全弾を叩き込むと、ポンチヨの人物には目もくれずに倉庫へと走った。NTWに射撃を指示してから8秒。

FALが司令部を出る1拍前にグレネードが炸裂した。爆圧で体勢を崩しながらFALはフレアガンを上空に1発。太ももの弾帯に刺したピックとマチェット、置いてあったコンバットナイフで一人づつ敵戦力を屠っていく。

最高指揮官は潰したが、隊長クラスがいる限り組織的な抵抗は続く。敵の銃やグレネード、使えるものは全て使う。

倉庫に入り込むと弾倉を再装填し、工作を開始する。外ではNTWの狙撃支援のおか

げで敵は釘付けにされているようだ。

さらに、西の空に信号弾が上がる。

ステン達がM4を確保したのだ。

仕込みを終えたFALが離脱しようと倉庫のドアを開けたその時。

目の前をナイフが縦に凧いだ。

「っ……………」

FALは右眼を浅く斬られ、わずかによろける。

ステン達の信号弾が上がった時点でNTWも離脱を開始したはずだ。支援は期待で

きない。

(右眼がオフライン……………狭いわね)

損傷した右視神経のリソースをカットし聴覚と左視神経を研ぎ澄ます。

乱れた前髪が右目を覆うが、問題ない。

外には、裾が焼け焦げたポンチヨの人物が立っていた。

「……………何者？手を出してくるとは、思わなかったわ」

「……………」

ポンチヨ以前に、その人物は仮面をかぶっていた。さらに何も話さない。

「だんまりね……そこをどいてはくれないかしら。確かにあなたに被害はあったかもしれないけれど、私が殺したかったのはスケアクロウだけ。あなたはどうでもいいの。あなたに危害はもう加えないわ」

自分で詭弁を弄していることは承知していた。
通じるはずがないことも。

FALは後ろに宙返り、同時にマチエツトを投げる。

それをなんと手で弾いた仮面は高速でFALに迫る。

照準をつけるまもなく、腰だめで牽制を放つが空中で体を捻ったかと思うとミサイルの如く円を描いて弾丸をかわす。

「冗談もいいところね」

仮面は決して自分の銃を見せようとしな。ならば、出口にさえたどり着ければあとは逃げるだけだ。

(でも……)

その出口が今は、果てしなく遠く感じた。

FALは野戦服を脱ぎタンクトップ姿になった。

汗が頬をつたい、肌をじつとりと濡らす。

そして、拳を握った。

「FALさんは?!」

ステンをなだめてNTWが言う。

「もうすぐ帰ってくる。信号弾は上がったんだ」

「でも、遅すぎます!」

帰投予定時刻から1時間、FALはまだ帰還していなかった。

「指揮官?」

「ああ、確認している。ログによれば、FALは正体不明の敵性存在と戦闘中だ」

「あれから1時間も?」

「うん、未だに倉庫からは出てきていない」

「まさか、負けちゃったんじゃない?」

「それは……どうだろうね、FALが負けたのなら敵が出てくるはずだ。」2人が入って出るの「1人」ではないが、まだ戦闘は続いているだろう」

控えていたカリーナにヤンは指示を出す。

「ヘリを敵司令部に送ってくれ。パイロットにはその場で30秒待ち、来なければ帰投

せよと。作戦はその時点で終了する」

「了解しました、提督」

「そんな!!」

「悪いが、もう敵は司令部に迫っている。予想より異常に早い。それ以上の猶予はない」
「FALさん……」

「はあ、はあ……」

FALは満身創痍だった。ここまで追い詰められたのは久しぶりか初めてだった。右視神経消失、左2、3、5指、右鎖骨骨折、肋骨は折れていない骨を数える方が早い。脚は3分の2くらい感覚がない。切創5、打撲痕は数えきれない。

弾薬は尽き、近接装備もない。

ポンチヨの人物は、未だに健在だった。いくらダメージを与えても、その輪郭すら掴めない。

銃種は不明、体格も変動しているかのようにダメージが違う。

確実にダメージは与えているはずだ。

ヒビの入った仮面の下にわずかながら血が見える。

(でも、このままだと先に力尽きるのは私……はあ、センス無い戦いしちゃってるわね)
この1時間、ポンチヨの人物は徹底的にFALを倉庫から出さないよう立ち回った。
コンテナとシャッターに阻まれ、脱出がかなわない。なまじ頑丈な倉庫で窓や天窓がないため、FALは苦戦を強いられている。

その時、FALの耳がある音を捉えた。

それはヘリのローター音。パターンはグリフィンの汎用ヘリ、UH-1Yヴェノムだ。

普段の兵力輸送ではCH-53キング・スタリオンを使用するが、特殊戦下ではより重武装なヴェノムが使われている。

さらに爆音の中に暗号通信の基点を確認したFALは苦笑いする。

銃から取り外した航空支援用のレーザー照準器を点灯させ、FALは最後の接近戦を挑んだ。

パイロットはデータリンクでポインタを視認、搭載するM267MP5Mハイドラ70ロケット弾を発射。倉庫のシャッターを突き破り、組み合うFALとポンチヨの人物に直撃した。

横に吹き飛ばされた2人と同時にひしゃげたプラスチック弾頭から9の子弾が展開、

起爆する。

FALは走った。

M267はM261と違いM73高性能炸薬ではなくM75発煙弾3発と不活性子弾6発を内蔵する。

<離陸まで5……4……3……2……>

FALはギリギリのところまで滑り込んだ。

倉庫から歩いてでてきたポンチョの人物を見下ろしヴェノムは離脱。なんとかミニガンにつき周囲の敵に銃撃し作戦エリアを離脱したところでFALは後ろに倒れ込んだ。

「……訓練、しなきゃな……」

そのままFALは帰投まで眠りについた。

・コード認証。貴方をグリフィン関係者だと確認しました。ようこそ、第13旅団戦術データベースへ。

アクセス承認。当該戦術人形のデータを表示。

万が一、戦術人形のスペックなどに興味が無い場合、スキップしてください。

NO. 001

Name: FN FAL

Call sign: "Throne (1)"

第13旅団第1部隊隊長。G&K東部戦線FN小隊から限定異動中。

Weapons Specifications:

ベルギー・FNハースタル社製

口径: 7.62mm

銃身長: 533mm

使用弾薬: 7.62x51mm NATO弾

装弾数: 20発もしくは30発箱形弾倉、50発ドラムマガジン

作動方式: ガス圧作動方式、テイルトボルト

全長: 1,090mm

重量: FAL 50.00: 4.3kg

FAL 50.61: 3.90kg

FAL 50.63: 3.79kg

FAL 50.41: 5.95kg

発射速度: 650 | 700 発/分

銃口初速：823 m/秒

有効射程：400—600 m

Doll's Specification:

CQB戦：A—

近接格闘術：A—

射撃：A+

体力：A

機動：B+

爆薬取扱：B+

編成拡大：可

医療：B（主に野戦知識）

諜報：B

研究開発：B+

FAL。第5世代型戦術人形。第6世代、第7世代（第6世代MOD）、と比べても遜色ない戦闘出力を持つ。通常のグリフィン戦術人形規定のギリギリを攻めた高改造力スタム型義体と、その出力を満足に生かせる電脳を経験値は戦術人形の中でもトップク

ラス。G & Kのみならず、軍事に携わるものであれば知らぬ者はモグリとまで言わしめる知名度を持つ。

電源：戦術人形用クアッド固体高分子燃料電池＋バルトレンジエネルギーター・カスタム
タム

駆動骨格：第5世代型、AR戦術人形用駆動骨格・高出力型カスタム

FCS：FHIBL：Ver. 6.7

センサー：第5世代型デュアルカメラアイa（ブルー）、第5世代型聴音センサー、第5世代型嗅覚センサー（カスタム）、第5世代型味覚センサー（カスタム）、第5世代型触覚センサー

電脳：第5世代型
：??????
電脳

生体パーツ：四肢
：??????
消化器系・生殖系・循環器系

通常武装：本体（30箱型弾倉）、擲弾、マチェット
Lv100。

視覚のみ右眼がオフライン。

生体パーツが多く、骨格とセンサー、電脳以外は基本的に生体パーツである。ただし、胸部生体パーツのみ変更申請が毎回却下される。

S k i l l s :

バトルストンプ

榴弾3発を連射し、それぞれの榴弾が半径1.5ヤード内の敵に5倍のダメージを与える。

銃撃や格闘術もさることながら、FALの幅広い戦術行動を支えるスキルである。榴弾のチャージ速度も早く、対多数、対巨大兵器戦、足止めや牽制、陽動など幅広い戦術を採れる。

A S t. 部隊の日常は非日常

<グリフィン第13旅団司令部>。事実上の特殊部隊と化したヤン提督の部隊は、独立した地下秘匿司令部を与えられた。

それも、スケアクロウの単独撃破及び戦線の維持拡大をわずか3日で完璧にこなしたから。

ヴェノムの撤退後、提督は間髪おわずに増援部隊による面制圧作戦を実行した。

あらかじめ偵察部隊が仕掛けていたC4を同時起爆、それに合わせて少数の”狩り^{マンハント}”部隊を投入。

もぬけの殻の敵司令部まで一気に侵攻した後、全戦力を各戦線に同時投入、放射状に戦線を拡大、殲滅戦に入った。

放射状に伸びた戦線を終端で連結・展開し包み込むように円状の支配区域を確立した。

仕上げとばかりに重要ポイントに偵察塔を建て、ぐっすり眠っていた私が起きる頃には本部からの増援部隊が到着し作業を始めていた。

「これ、どうでしょう」と．．．

「やあ、おはよう、F A L L」

慣れない視界に違和感があり、左目をこする私に紅茶を出したのはヤン提督だった。煤と血を洗わないまま真っ白でふかふかなベッドシートの上に寝ていたことに少し悪い気がする。

提督は、意外と女慣れしているのだろうか。私、いま破れたへそ出しタンクトップにボロきれみたいなタンクトップで下着も丸見えなのだけれど。

それとも、傷と血で汚れた人形には興味無いかしらね。

・・・それはそうと、私は朝に弱いから、もう少し薄めの紅茶でいいのだけれど。というか、紅茶淹れるの下手なのかしら、提督。

「あら、提督・・・作戦は？」

「君のおかげで成功したよ。いま、物資を運び込んでここを橋頭堡にしようとしている」「良かった」

「さて、今回のM V Pである君には報酬と休暇、及び修復が与えられると共にデータリンクが必要になる」

遠くの空を見上げて呟いた。

「修復、ね・・・提督、一つお願いがあるのだけれど・・・」

私の神妙な顔を見てズボラなあのヤン・ウエンリーも襟を質して、
「できることなら」

「神経は直してもらつて構わない。でも、この眼だけは……そのままにして」

あの謎の人物につけられた傷跡。縦一文字に右眼を斬つたそれは——自分で言うのもおかしいけれど——端正な顔に赤い印をつけていた。

「人形が変な話をするようだけれど……」

と席を立つた私が振り向きざまに呟くのを聴きながら、提督は紅茶を口に含む。

「私、思った以上に感傷的センチメンタルみたい」

肩を竦めて、直ぐに修復とデータの抽出へと向かう。

「……やれやれ、だから言ったじゃないか」

後ろでヤン提督が呟くのが聞こえた。

「君も、人間と同じ、女の子だ」

ヤン・ウエンリーが前線指揮から司令部に戻り、1週間が経つた。

その間にヤン・ウエンリーが何をしてたかといえは昼寝である。

「ねえ、提督」

具体的に理由を言うと、それはつまり暇を持って余していたからだだった。

「別に私が言ったからどうこうってわけじゃないんだけど——」

ブロンドに近い茶髪を青いリボンでサイドに結ったFALは、やる気なさげに紅茶を飲む指揮官を見やって、自らもだらけることにしたようだ。

「なんだい」

そうのたまう見た目はただの青年の男、着替えているのだろうか。

FALは考えた。

この男、制服以外を着ているところを初めて会ってから2週間、1度も見ていない——

「——あなた、それしか服持っていないの……?」

それはFALにとってある意味禁忌^{タブー}と言える質問だった。

おしゃれ好きな——自らのファッションセンスは壊滅的であるが——FALにとって、普段着が軍服、それも地味なブルゾンに白のスラックスと黒ベレーなどという不届き者は許せなかった。

この提督、30代前半にしては若く見える。しかも、磨けば光りそうなタイプ。

そのくせ自分のファッションには全く興味が無い、そんな良物件を見つけてしまったFALは心の底が震えるのを感じた。

「うん。ただ、それじゃあまりにも不潔だから、カーリーナからパジャマを借りてるよ」
気だるげに返ってきた答えにFALの顎が落ちた。

まさか、この見た目でカーリーナが着るようなパジャマを着ているというのか。いや、FALもカーリーナのパジャマは見たことは無かったのだけれど。

「……君の考えていることくらいわかるぞ。男性用のを借りてる」
のんびりした口調で誤解を解く提督だったが、いまいちFALには届いていないようだった。

「……え、じゃあカーリーナは男用のを使ってたってこと……?」

深刻な誤解が生まれてしまったが、提督も否定しなかったの——ただめんどくさかっただけだが——カーリーナは男物を着て寝ていたという噂と、今は下着で寝ているという噂が広まったのである。

この噂を広めたのももちろんFALではなく盗み聞きしていたステンだったのだが、ヤン・ウエンリーとカーリーナからすればあれだけの戦闘力と作戦遂行能力を誇る歴戦の名銃FALも意外とそういうところはポンコツなのだ、程度にしか思わなかったようだ。

「しかたないわね、提督」

「何が?」

「私が貴方の服を見繕ってあげるわ」

そう宣言したFALは、せっかくの休暇を提督との（意図しない）デートに使うことになるのだった。

「外に出たから普通に接するけど・・・」

じつと提督を眺めるFALは、白のブラウスに黒のジャケット、腕には青のブレスレット。赤いポーチをぶら下げて、肩にはフレットを乗せていた。

寂れた街に繰り出して歩く二人は思いのほか絵になっていて、街ゆく人の4人にひとりくらいは振り向くような取り合わせ。

実のところ、ヤン・ウエンリーは結婚していてFALもそれを承知の上だったので、まったくそういう気は無いふたりだった。

「・・・あなた、その格好が一番似合ってたのね」

まずは自室で収まりの悪い頭をどうにかしようと試行錯誤したFALだったが、どう整えても微妙に残念なハンサムと言えなくもない疲れた大学生のような見た目になってしまい、普段通りの髪型がいちばんまともだという結論に達した。

ちなみに、本人は言わないでいるが、ヤン・ウエンリーの結婚式での整えた髪型はもはやヤン・ウエンリーと思えない、「・・・誰？」と言われるようなものだった。

「・・・そろそろ帰っていいかい」

疲れた顔をして言うヤン・ウエンリーをよそに、FALはどんどん服をカゴに入れていく。

「だめよ」

言う間も惜しいとばかりに満杯になっていくカゴは、少しずつ重みに負けたプラスチックがたわむほどだった。服なのに。

「せつかく経費で落ちるんだから、ぱーっといっちゃいませよ」

そうやってFALがまず着せたのは白いぶかぶかのTシャツ。XLくらいはあるだろうか。胸に「働いたら負け」の文字がでかでかと書いてある。

「・・・あの・・・FAL・・・?」

「いいじゃない、やる気なさそうな顔も相まってぴったりよ。さて、次次」

次にFALが着せたのは黒いパーカー。胸には白いデブ猫。

「あなた、猫飼ってたって言ってたわよね。聞いてたイメージにぴったりのがいたからどう?」

「元帥・・・はまあ、確かにこんな感じだけど・・・」

その後もぽんぽん無然とした着せ替え人形のごとくFALに遊ばれるヤン・ウエンリー。

帝国軍や同盟軍の要人が見たら卒倒しかねない絵面だった。

その内着替える時間も惜しくなったのか自分でヤンの服を剥いでは着せ、着せては剥ぐFALだったがお互いに恥という感情が欠落しているらしく、何も起こらなかった。

「そうだなあ。ひと段落したし、この機会に部隊のみんなに私の過去を語ってみるのもいいかもしれないね」

このヤンの思いつきが、驚愕の縁に叩き込むことを彼らはまだ知らなかった。

その準備の間、休暇の提督とのデート（無自覚）を妨害されたFALは不機嫌そうな顔をして宿舎でティータイムを過ごしていた。

「はあ・・・提督ってけっこう思いつきで行動する人なのね」

話し相手になっっているのはV e c t o r。発射レートに定評のあるクリス社製サブマシンガンだ。45ACP弾を使用する特殊部隊などでよく使用される銃である。

「あのさ、興味ないんだけど・・・」

まつ毛を伏せてスコーンを齧る Vector をよそに、FAL は語る。

「そもそも、もうすぐクリスマスじゃないの。あんの提督、忘れてるでしょ。せつかく準備してるのに」

通りがかつた NTW がぼそつと呟く。腕には宿舍で飼っている猫を抱えている。名前はまだないが、白毛に所々茶色が混じつたラグドールだ。もふもふしていてみんなのお気に入り。ちなみにふみふみが下手である。

「・・・完全に恋する乙女じゃないのか、それは」
「そんなわけではないじゃない」

途端にけろつとした顔で FAL は言う。

（・・・似てきたなあ）

「どこが違うってのさ？」

「だってあの提督、妻子持ちよ。なんで私が寝取るようなことしなきゃいけないのよ。ナンセンスだわ」

（・・・そういうことでいいのか・・・）

憤慨する FAL と冷めた 2 人を見つけたのがまた厄介な人形だった。

ステンである。お菓子に釣られたのか、ゴシップに釣られたのか。完全にゴシップ

キャラが定着してきたおてんば娘が、F A L とヤン・ウエンリーの色恋沙汰を言いふらしたりでもしたら、2人の信用はガタ落ちである。

まして、片方は妻子持ち、片方はエリートで最精鋭。手の届きにくい存在ほど俗なネタはもてはやされるもの。

「どうしたんですか?」

「クリスマスパーティーの準備の話しよ」

何事もなかったかのように話すF A Lを見て、まだ人形としても兵士としても（F A Lに比べれば）実力不足のV e c t o rとN T Wはこれが経験の差か、と感心していたが当のF A Lは実の所なにも考えていなかった。

「実は、せっかくのクリスマスだからパーティーでも開こうっていう企画が司令部で出ているね。その準備をしなきゃ行けないんだけど、なにぶんトップがああ提督なもんだからまったく準備が進まないのよ」

ヤン・ウエンリーはパーティーを見るのは好きだが準備は好きではないのだった。

「・・・え・・・?そんな日に買い物行ってたんですか・・・?」

ステンの素朴な疑問に場が凍る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・やっぱりさ、ずば抜けて凄い人ってどこか抜けてるところあるよね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・ああ、提督とかそうだし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・とにかく、準備しちやいましょうか！」

「・・・・・・・・・・もうやだ・・・・」

時は12月23日。翌日の夜にイヴのパーティーを控えた15:54。準備は終わっているわけがないのだった。

クリスマスが過ぎた12月26日、FALは目の下のクマを隠そうともせずにつづきのまま談話室で紅茶を飲んでいた。

「別に気にしないけど——」

とFALがいうのを聞きながら、ヤン・ウエンリーは読書を続ける。

「——あなた、ダンス下手過ぎない？」

クリスマス当日に哨戒任務に駆り出された不平満々のFALは、午後をパーティーの準備に費やした後に提督にダンスに誘われた。フリをして、打ち合わせ通りダンスを

吹っかけたのである。

だが、結果は無惨。

ヤン・ウエンリーは致命的に運動神経がなかった。

リー・エンフィールドがキッチンでお菓子を作っていて、コトコト音を立てるケトルから紅茶を淹れている。

FALに眼をやつてにやつと笑った。

「FAL、あなた、頑張ってるね」

エンフィールドが紅茶を継ぎ足して、

「提督を独り占めじゃない」

FALは肩を竦めた。

「今日は提督の講義なんだから、少しくらいいいじゃない」

歴史の学徒ヤン・ウエンリーのコンピの凶悪さを、彼女たちはまだ知らなかった。

数時間後、大会議場ではグロツキーな人形と興味津々な人形、寝ている人形の主に3種類に分かれていた。ちなみにヘリアンはグロツキーだった。

アスターテの会戦までは飛ばし飛ばし要所のみが語られ、そこからは実体験を交えた生々しい戦争記録だった。

宇宙暦795年から801年のわずか6年の期間における宇宙勢力図の移り変わり
と軍事的名声のほぼ全てを独占していたのがラインハルト・フォン・ローエングラムと
ヤン・ウエンリーであった。

アスターテにおける自由惑星同盟軍第二艦隊と帝国軍ラインハルト艦隊の激突、ヤ
ン・ウエンリーのイゼルローン要塞攻略作戦、帝国領侵攻作戦とアムリッツア会戦。

この時点でスケールの大きさに卒倒した人形もいたが、それより目の前にいる自らの
指揮官とその知人が英雄的人物だということを知ったシヨックが大きい人形もいたよ
うだ。

同盟のクーデター、国内乱、4度にわたるイゼルローン攻防戦、そして、ラグナロッ
ク作戦とバーミリオン会戦・・・ヤンは生来のその性格から、いくらか戦績を少なめに
語ったが、数字は嘘をつかない。ヤン・ウエンリーの率いた艦艇数と戦績は驚愕に値す
るものだった。

ヤンの鮮烈なまでの戦術はラインハルトの壮麗な戦略を食い破り、その喉元に歯を突
き立てた。

だが、最後の最後でヤン・ウエンリーはその喉を食いちぎることをしなかった。

シビリアンコントロールを前提としたヤンの姿勢を知ったヘリアンは驚きに目を丸
くしていた。そして、上層部へ報告しようとして決まっていた。

ヤンの新婚生活を聞いて目を輝かせていた人形達も、ヤン・ウエンリー逮捕以後の帝国弁務官府と同盟政府の姿勢にはひどく腹を立てたようで、それでもなお同盟のために行動する（民主主義のためであり、同盟と民主主義とは必ずしもⅡではなかったが）ヤン・ウエンリーの姿はとても誠実に映った。

回廊の戦いではヤン・ウエンリーの表情が陰った。

ヤン・ウエンリーは戦いの最中テロリストに暗殺されたのである。

好敵手との望まぬ決着を、いや、決着とさえ呼べない最期を語る姿は悲痛だった。

最期の瞬間を語るヤンの視線はそれでも暖かく、初めて指揮官の死を知った人形達に向けられていた。

「君たちは、私みたいな人間ならたった一発で殺せる力を持っている。どうか、それを忘れないでくれ」

そう語るヤンの右足はいつの間にか血に濡れていた。

「力は正しいことのために使わなければならない。それは、人を傷つけるためじゃない。自分が守りたいと思う人のために使うことだ」

スカーフは脚に、スラックスは朱に染まる。

「そのために誰かとぶつかることもあるだろう。だが、力というのは最終手段なんだ。最初からそれに頼ってはいけない。そのためのことばなんだ」

人形達が見開いた目をようやく瞬きさせるころにはその情景は消え去り、いつも通りのヤン・ウエンリーがそこにいた。

そして、そこから先はヤンも知らない銀河の歴史。

銀の球体、色は漆黒の宇宙に浮かぶ虚空の女王。

球体は膨張し、広がり――

破れるように開いて溢れる。

流体ネオン格子グリッドの折紙。広がる距離のない宇宙、絶対零度アブソリュート・ゼロ、暗闇の地、無限に広がる

虚無の空。

飛び交う熱線、戦艦ブリュンヒルト。

その手前の青緑の艦体は戦艦ヒューベリオン。

さらにその先へ――

シヴァの会戦、皇帝ラインハルトの崩御。

今この場にいるヤン・ウエンリーは死んだ時の年齢容姿であることを、彼女たちは直感的に理解した。

思い思いの感情を持って、人形達はいつもの生活に戻っていく。

「……ねえ、提督」

「なんだい？」

「今回は日常パートじゃなかったの？」

「シリアスを挟まないと死んじゃう病なんだよ、きつと」

「・・・馬鹿なのかしら」

草木も眠る丑三つ時。AM2:00頃の話。

曰く、警備配属の軍人が基地の当直が基地の定時見回りをしている時に駐車場のど真ん中でひとり円舞を舞う女性がいたらしい。

その円舞は美しく、流れるように舞う姿はまるで天使のようだったと。

わずかに月光を反射するのはナイフ、銃、ピック、あらゆる近接武器と撥ねる汗。

それが視界に入った瞬間、凍りつくような殺意を感じた。

気がつけばピックを手に宙返りした女性が着地ざまにこちらにピックを振りかぶり、その姿勢で固まっていた。

わずかにため息をついた女性は円舞を再開する。

よく目をこらすと、その女性の目の前にぼうつと光が凝縮していく。それは、ぼやけた人型をとり、女性と舞い始める。

やがてそれは近接格闘の訓練だと気づいた警備員は、みとれてしまっていた。

「近接格闘技は、基本的に大地と密接に関わっています」

警備員は語る。

「大地を蹴ることで殴打や蹴りを繰り出し、攻撃を躲す。ですが、その円舞はまるで水のように、風のように相手の力を使って攻撃していったんです。まったくおかしい話ですが、ひとりでいたはずなのに相手が見えたんです」

最小限の動きで躲し、返す刀で蹴りを入れる。

角張った戦闘術ではなく、余計なものを削ぎ落とした流体になる。

女性の目は片目、月明かりを反射して煌めく髪は高いところまでまとめてあり、開いている目からわずかに光が漏れている。

警備員は、舞の相手をしている光はその目が映し出すホログラムだと気づいた。戦術人形のデータリンクの残像が、本来その場に無いはずのホログラムを形成しているのだ。

少しづつ動きは加速し、より鋭く、速くなっていく。

女性と同じように警備員もいつしか息が浅くなっていた。

やがて円舞は終わり、女性は息を整えながらジャケットを脱いだ。

驚くことに、そのジャケットはごとりと音を立てて地面に落ちた。

タンクトップ一枚になったその姿は星空に映え、白い肌をつたう汗を拭い水を飲む姿はとても美しかった。寒空を感じさせないその姿に、警備員は声を上げることさえ忘れていた。

「・・・まだいたのね。見ていて面白いものでもないでしょうに。当直の警備？おつかれさま。もう行きなさい、私も行くわ」

そう言われた警備員は女性が立ち去るまでその場を動けなかった。

そして、警備員は写真に撮っておけばよかったと後悔したそうだ。

まだ空は暗いAM4:00、ガンサイトで射撃音が鳴り響く。

監視カメラには、暗闇の中ひとり射撃訓練をするタンクトップ姿の女性の姿があった。

この時この戦術人形は視界の暗視システムを切断しており、音と空気の振動を頼りに射撃をしている。

腰だめ、精密射撃、ロングレンジ、インファイト。様々な状況を想定した視界不良状態での射撃訓練だ。

この時、訓練機器のカウントスコアは司令部の昼時訓練記録を本人以外上回っていた。

空が白んできたAM6:00、基地の外周トラックを走る戦術人形の姿があった。

30kgの重りを詰めたベルゲンと、4.3kgの銃を持ちひた走る人形の行く手には、ランダムで障害物が出てくる。

それを重さに耐えながら歯を食いしばり地面を蹴り走る。

障害物の質と量はMAXに設定されており、タイムも記録される。

ひと通り走り終わった人形は膝に手を当てて、荒い息をつきながら呟いた。

「まだまだね・・・そろそろ朝の支度かしら。着替えるとしますか」

そう言つて人形はハンガーへと歩いて行つた。

「そろそろこの施設はやりつくしたかしら。プールとか山岳でもあればいいのだけれど」

呟きながら人形は銃をしまい、タンクトップを脱ぐ。

肌にするの汚れが目立つ。豊かな乳房を押しえつけるサラシをほどき、訓練用のカーゴパンツを脱いだ人形は下着1枚でシャワールームに向かう。

下を脱ぎ全裸になった人形はシャワーのノブをひねる。

普通、戦術人形は戦場で負つた傷はきれいさっぱり消す。そして、新たな戦場へ向かう。だが、この人形はそれをしない。

そのため、彼女の羽二重肌はぶたえはだにはいくつもの切創や銃創が刻まれている。1番新しいものは目に走る切り傷だろう。

髪をほどき、熱いお湯を浴びる。体を一通り流した彼女はお湯をたつぷりはった湯船に浸かる。

「ふう、朝はこんなものね。やっぱりお風呂は気持ちいいなあ」

お湯を肩にかけながら深呼吸して入浴剤の香りを楽しむ。

「……これ、もう少し小さくならないのかしらね」

お湯に浮かぶ2つのふくよかな乳房を見て、ない人形からすれば血涙を流し拳を握りしめるであろう罰当たりなことを吐く人形だった。

ちなみに、この人形は中期に製造されたものであり互換性のある胸部ユニットがないわけではなかったのだが、届出を預かるゴーグルを巻いたティーンエイジャーのような事務官が却下したようだ。

「それにしても、初めて？見られたのは。変な噂は立たないで欲しいものね。殺気向けちゃったし、”駐車場の女幽霊”とか言われたいのだけけど」

湯船から出て髪を洗う彼女の姿は、傷跡さえなければとても戦場に身を置く者とは思えないほど艶やかで水分を保持する肌。

細い首、水を滑らかに流す肩のラインは柔らかい筋肉がしっかりとついている。

豊かながら形の良い張りのある胸には小さめのピンクの乳首が存在を主張する。

見事なくびれながら筋肉のついた腹筋、控えめながらなだらかで綺麗な腰から尻のライン。

細身ながら大腿とふくらはぎにはしなやかで柔らかい筋肉がついている。

水が滴る長髪は差し込む朝日を受けて輝き、美しい肢体は水を弾く。

汗を流して湯船で体をほぐし、髪を洗い流したあとはメンテナンスに入る。

ポッドに入り肩や股関節、膝など重要な骨格関節部や電子神経系、エネルギーを伝達するヒトで言う循環器系のチェック。同時に思考モジュールと戦術戦情報闘記録データベース、T I A R S のデータとバックアップの照合、アップデート。

戦術情報自動収集ソフト

乳白色にわずかに濁った粘り気のある液体で満たされたポッドは1時間入ることで、メンテナンスと同時に5時間の休息をとると同じだけのリラククス効果が得られる。

ポッド内は液体で満たされ、酸素は首に繋がれたチューブから供給される。

ヤン・ウエンリーからすれば、酒を飲んでベッドで寝る方がよっぽどマシしいが。

A M 7 : i 0、ポッドから出た人形はもう一度シャワーでポッドの液を洗い流し、ロックスカールームへと向かう。

下着を穿いたところかと思いついたように、

「今日は・・・たまには、ミニでも履いてみるのもアリか」

とミニスカートを手に取った。

「とすると、上は・・・最近暑いし、ノースリーブにしようかしら。うーん、じゃあ・・・」
下着姿で悩む姿は乙女のそれだった。が、問題は本人のファッションセンスにあった。

服の取り合わせが致命的に悪い訳では無い。色のチョイスが絶望的に合わない訳でもない。

だが、なぜかぱつと見るだけで「それはないだろう」と思うような組み合わせになってしまうのだ。

そんなわけで、多少なり反省しているのか今日は落ち着いており、ベージュのノースリーブのパーカーに濃紺のミニスカートを履いた彼女はロッカールームをあとにした。

A M 8 : 0 0、人形は指揮官の部屋に入室した。

日もそこそこ高く昇ったその時間、ヤン・ウエンリーは寝室で微睡んでいた。

「ほら、起きなさい。朝よ」

起こしに来たのは茶髪にブルーの瞳のF A L。今日もファッションが決まっている（つもりでいる）。

が、朝起きたばかりの男の前に素肌を多めに晒した格好で出てくるのはやめていただ

けないだろうか。ヤンは思った。ノースリーブのへそ出しパーカーにミニスカートは肌の露出が多すぎるのではないか。いくら夏とて、冷房は聞いているのに。

そんなことは気にもとめないFALだった。朝の訓練終わりにヤンの寝室に寄ったようだ。

まるで新妻のようにカーテンを開け、布団を剥ぐ。

「むにゃ・・・あと5分・・・いや4分50秒・・・」

布団がなかりうと知ったことか、と丸まるヤンを呆れた目で見たFALは実力行使に出る。

「馬鹿な事言つてないで起きなさい、もう！アーリーモーニングティーを淹れるのは私じゃなくてあなたの仕事でしょうが!!」

さも夫婦であるかのような発言をするFALだったが、もちろんその気は全くない。だからこそ厄介なのだ。

そう言つてFALが掲げたのは白と茶色のもふもふ。猫である。

「行きなさいー」

FALの命令に忠実に従い、猫はヤン・ウエンリーの横腹に突撃する。

「づっ・・・」

そのまま丸まっているヤンの腕をこじ開け、顔をぺろぺろ舐めはじめた。

「うぷつ……こら……やめなさい……」

「懲りたら早く起きて支度をする事ね。まったく、もう朝食の時間よ。今日はエンフィールドの当番じゃないから安心ね」

「わかった、起きる、起きるから」

ヤン・ウエンリーを起こすのに元帥を使うなどという手段が思い浮かばなかったユリアン・ミンツなどがこれを見たら、歯噛みをしたであろう。

ヤンが着替えている間に食堂ではF A Lが小隊のメンバーと食事の準備をしていた。「まったく、あのねぼすけ提督は……ほんとに起きないんだから。あ、そのスプーン取って」

「あんたさあ、やつぱり……」

言いかけたV e c t o rにF A Lが首を傾げる。

「やつぱり、何?」

「……いや、なんでもない」

腑に落ちない顔をしたF A Lと諦め顔のV e c t o r、ニヤニヤしたステンとジト目で見ているN T W。そこにヤン・ウエンリーがやってきた。

「おはよう、みんな」

「提督、その眠たそうな顔はなんなのよ。こっちまで眠たくなるでしょう、もつとしゃつ

きりしなさいよ…顔は洗ったの？」

指揮官に早速FALが文句をつける。

「ああ、そんなことより今日は新しい戦力の加入をお知らせに来たんだ」

顔を洗ったかの質問に答えていないことに気づかせないようズボラなヤン・ウエンリーは矢継ぎ早に言う。

「ほら、入ってきなさい」

入ってきたのは銀髪に黒い制服と帽子をかぶった少女と、茶髪にゴーグルとホットパンツの格好をした少女、それに彼女達がよく見知った少女だった。

「H&KのHK417とLAR Grizzly WinMAG、それに君たちが助けたM4だよ。」

417はあの416の姉妹銃で、使用弾薬が違う。416も存在を知らない妹で、完全新作の戦術人形だ。

グリズリーは、我が部隊に欠けていた夜戦能力の底上げと継戦能力の増加、M4は16Labからの依頼だ。部隊長は変わらずFAL、補佐にVectorとNTW。あとはFALに全部委任する。

よし以上、朝食にしよう。今日のメニューはなんだい？」

指揮官としてそこそこ無責任なことを一息に言ったあとヤン・ウエンリーは席に着い

た。

所在なきげに立つ3人は誰が見てもかわいそうとしか言えない雰囲気をもとつていたにもかかわらず。

「新しい子? いいわ、とりあえず朝ごはんにしましょう。歓迎するわ、ようこそT13Bへ。はい、チーズ」

おもむろにカメラで3人と自撮りをするFAL。自分よりほかの3人の写真写りを優先するあたり、やはり女子力を意識しているのだろう。

聞きなれない単語に提督が思わず聞き返す。

「なんだい、その、T13Bって」

「The 13th brigadeの略よ。TheでもTacticalでもいいけど、長すぎるじゃない、グリフィン第13旅団って。ヤン旅団っていうのも何か語呂が悪い気がして…ま、スラングのようなものと思ってもらっていいわ」

「なるほどね」

すぐに食事が始まったが、やはり3人の雰囲気は重いままだ。

「綺麗な銀髪ね。あたしもそんな色がよかったわ」

Vectorは417に話しかける。

「戦場で目立つの、これ…あなたみたいなカモフラしやすい方がいいです」

事実、戦場でのカモフラージュ率は生死に直結する。わかりやすい目標から狙われるのはどこの戦場でも同じだ。

一方、グリズリーに話しかけたのはNTWだった。

「グリズリー、だっけ？ 支援は任せてくれ。この部隊、今までハンドガンがいなくて退屈してたんだ」

事実、アンチマテリアルライフルであるNTWの支援が最も効率よくかけられるのはハンドガンなのだ。

逆に、ハンドガンの支援は全銃種に入るため、ハンドガンの運用は主力部隊の肝でもある。

もちろん、特殊戦部隊やハンドガンを編成せず打撃力や機動力に重きを置く部隊もある。

だが、それでもかなりの部隊で運用される銃種である。

「そりやどうも。でも、私もまだまだ訓練不足でね、FALの記録見たら自信なくしちゃうってもんよ」

「それは誰だつてそうなるよ。私だつて援護しててさ、あの動きスコープの隅に見えてたけど。戦術人形つて、戦術的戦闘を行う人形だと思つてたんだ。でもさ、FAL見ると純な戦闘人形もいるんじゃないかって気分になるんだよね」

「純な…ねえ、そもそもあんな戦果あげる個人なんかいて欲しくないんだけど…」

その当のFALは、M4と会話していた。

「あ、あの…この前は助けていたいただいてありがとうございます…」

少し怯えるように言うM4に、FALは紅茶をすすりながら横目で視線をむける。

「FALさんたちが援護に来てくれなければ、私は…」

「何を言ってるのよ。味方を救援するのは普通のことじゃない?」

「…ともなげに言うFALに、M4は反駁して言う。

「でも、その眼は私の…!」

端正な顔に走る、縦の傷跡。それは、M4救出作戦でポンチヨの戦術人形がFALの

右目を斬った時の傷だ。

「勘違いしないで。これはあなたのせいじゃない」

「私を助けに来てくれた時についた傷じゃないですか!」

「これは、私の弱さよ。あの人形には、私一人ではまだかなわない。そのことを刻んでも

の」

そう言ったFALはいつも通りの飄々とした顔のどこかに決意を浮かべている。

「そうだよ。FALはまったく努力家だね。復帰してから訓練量はいつもの3倍も訓練して、私に戦術を教わりに来ているんだ」

そうティースプーンをくるくる回しながら口を挟むヤンにFALは、

「ちよつと、それは言わない約束でしょう？はあ、まったくデリカシーのないひとね……」
とぼやき、席を立った。

「とにかく、あなたは何も気落ちすることも責任を感じる必要も無いのよ。感情モジュールはネガティブな感情のためにあるんじゃない。もつとポジティブな感情にリソースを使いなさいな」

「たとえば、どんな感情ですか？」

「それは自分で探す事ね。人から教えられた感情なんて紛い物、いつかは裏切られるものよ」

9:00、ヤン・ウエンリー指揮の下、戦術訓練が行われる。

ヤン・ウエンリーの戦術の肝は有機的な戦線の移動と攻撃の命中率である。

そのため、自然と訓練も普通の訓練と違い辛いものが増えてくる。

つまり、重石を入れたベルゲンを背負いながらヤンの指揮に合わせて訓練施設を移動し、仮想戦場を走り、突発的にもいかなる体勢でも精密な射撃が出来るように体幹と腕、感覚を鍛える。

徹底的なフィジカルトレーニングが訓練と言っても良い。

その過程で戦術理論を直感的に身につけ、それを理論的にヤン・ウエンリーとぶつめる時間も用意されている。

そして、戦闘理論は歴戦のFALから学ぶ。

ヤン・ウエンリーは致命的に運動センスがないのだった。

CQBはもちろんゲリラ戦、分隊戦闘、キルハウスでの人質救出訓練や軍事施設への突入、サボタージュ等々、ありとあらゆる軍事行動の基礎を学ぶ。

そして、FALがやるのはそこまでである。

FAL曰く、

「応用なんて自分で編み出すものなのよ。基礎さえしっかりしていれば、自ずと最適な行動が取れるようになる。」

私は「魚を与えるのではなく、魚の獲り方を教える」の。

そして、基本を教えればモリで突こうが釣竿やタモを使おうが、素手だろうがやり方は自由。

餌もオキアミ、ミミズ、ルアー・・・様々なものを使い分けるには経験が必要よ。

それは、自分で積み上げるしかないわ」

そんなFALは、自分の訓練の時間が取れないのだ。

自然、自主トレの時間が増えることになる。

そのため、FALの一日は基地の誰よりも早く始まり誰よりも遅く終わる。時たま幽霊に間違えられるFALである。

2時間半の訓練を終えた人形たちはシャワーを浴びて昼食となる。

ヤン・ウエンリーはベレーを顔の上へのせ、行儀悪く机に足を乗せて寝ている。

「てーとく♪」

やってきたのはカリーナだ。

「・・・なんだい、急に」

「お茶が入りましたわよー」

ヤン・ウエンリーは少食である。肉付きは薄く、筋肉質でもない中肉中背の体と顔つきで、年齢より若く見られるのだ。

「ほかのみんなはどうしたんだい」

「食事後はお昼寝ですよ、提督がそう決めたんじゃないですか」

「じゃあ私も昼寝するべきじゃないのかね」

「最高指揮官と警備はそうはいきませんよ。ロボス元帥のようになってしまいます」

「はあ・・・じゃあティータイムとしよう」

軍事組織としてなんともゆるい規則を作ったヤン・ウエンリーだったが、これをヘリアンやグリフィン上層部が知ったらどうするつもりなのだろうか。

それを誤魔化すためのカリーナの「ヤン・ウエンリーに昼寝をさせない」作戦なのが、ヤンは知る由もなかった。

「うん、カリーナも紅茶を淹れるのが上手くなったね」

紅茶を一口、感想をつぶやく。

「そうですか？ありがとうございます」

「でも、まだユリアンには勝てないな。フレデリカにもね」

「それは無理がありますわ、まだ練習して1ヶ月も経っておりませんもの」

他愛ない会話をする彼らをよそに、昼寝をする戦術人形たち。昼寝とはもちろんポツドのことである。

「先に入ってなさい、私は最後よ」

「はい」

そういつて立ち去ろうとするFALに、M4が声をかける。

「どこかへ行くんですか？」

背中越しにFALは振り返り、

「いいえ。どこへも行かないわよ。やることが多いだけ」

そう言ったFALの背中を、M4は呼び止めることが出来なかった。

「なんだ、知らないのか」

「知るはずがないでしょう？説明してやりなさいよ」

NTWとVectorがM4に話す。

「FALは個人訓練の時間が取れないだろ。だから、自主トレしてるんだよ」

「FALさん・・・」

「うちの隊長は、そんな素振り全く見せないしいつもスカしてて嫌味つたらしいけど、1番の努力家なのよね」

「そうだったんですか・・・私も行きます！」

「こらこら待て。FALからの伝言。新入りたちがついてこようとしたら止めろって
や」

NTWがM4を止める。

「どうしてですか!?!部隊でいちばん強いFALさんがトレーニングしてるのに、私たちがしなくていいって言うんですか?」

声を荒らげるM4に対して、あくまでも静かに応対するNTW。

「そうだ。アレでもアイツはオーバークワークなのを自覚してる。未熟なお前達が参加しても、すぐに壊れるんだと」

「じゃあ、なんでFALさんを止めないんですか？」

「決まってる。それが命令だから。それが軍隊。軍事組織」

「でも・・・」

「なあ、M4。今日あいつにあつてから、あいつが辛そうな顔してるの見たか？」

「いえ、見てないです・・・」

「あいつは、毎朝2時から自主トレをしてる。戦闘理論を練って、実践し、戦術論を学び、フィジカルとセンスと技能を磨いてる。でも、それがあいつの負担になっているように見えるか？」

「・・・」

「あいつはオーバーワークなのを承知の上でできるだけの基礎と信念がある。お前達もあれくらいやりたいのなら、まずは体力をつける。飯を食え。頭を使え。それからだ」

リアルタイムでNTWからの通信を聞いていたFALは微笑んだ。

「上を目指しなさい。あなたは特に、M4。16Lab 謹製の最新鋭ハイエンド戦術人形。下手なことしたら、名が泣くわ」

そう呟くFALは何をしているかと言うと、銃のメンテナンスだった。

解体・清掃・組み立てはもちろんのこと、わずかなバリの除去や各種カスタムMODの微調節などを繰り返す。時には溶接やパーツを換えたりもするが、今日は清掃だけの

ようだ。

「話しすぎじゃないかしら、あの二人。でもまあ、いいとしましょうか。でも、Vect orはお仕置きね。午後は覚悟しておきなさいよ・・・」

午後はFALの戦闘トレーニングだ。午前で筋細胞ユニットを破壊し、昼食と休憩で超回復を促した後、格闘術や射撃技能などの戦場における行動理論を学ぶ。この間ヤン・ウエンリーは置物のごとく紅茶を飲みながら訓練を眺めるだけの存在である。

「さて、新入りも入ったことだし基本から確認しましょうか。M4、戦場で一番大切なことはなんだと思う？」

「はい、私の思考ユニットには分隊を大切にすることと冷静で適切な判断をすることとインプットされています」

M4の答えに対して、FALはマチェットをジャグリングしながら言う。

「その通りよ。この前の私のような単独行動や感情ユニットに従う戦闘は敗北に直結するわ。ただし、それは正解ではあっても適切じゃない」

意味深げに言うFALに、M4、グリズリー、417は首を傾げる。

「たとえば、グリズリー。もし、分隊行動中に単独行動をしなければいけないときに、分

隊員を優先する？ 作戦を優先する？」

「あたしは作戦を優先する。それが軍隊だ」

「じゃあ417、ジャミングや目の前で大切なもの、あるいは人が殺されたり激情に駆られるシーンがあつたとして、それでも適切な判断ができるかしら？」

「出来ると思います」

迷いなく答えたグリズリーと回答とは裏腹に自信なさげに言う417に、FALはホロディスプレイを見せる。

そこには、先程まで彼女たちの後ろにいたはずのステンが映し出されていた。髪は乱れ、服はぼろ切れのようでほとんど全裸のような姿で手錠に足枷、首輪をつけられてコングリートの地面に座らされている。

その目は虚ろで、口元や肌の至るところには血が滲んでいる。

「さて、ステンが連れ去られたのはいつでしようか」

笑顔で言うFALに少し怯えたようにして417が答える。

「さっきの理論の質問をしているとき？」

「E x a c t l y ! あなた達がマヌケにも作戦を優先、とか適切な判断ができる、と言っているそのまさに後ろではステンが連れ去られ、暴行の上監禁されたってわけ。さて、

あなた達にはこれからキリングハウスへの突入訓練を行ってもらおうわ。作戦を確認します」

顔を赤くして拳をにぎりしめるM4と対照的にひたすら嫌悪の目でFALを見つめるグリズリーと絶望した顔をしている417。

見ているヤン・ウエンリーは紅茶を口に含み、カリーナに声をかける。

「戦術人形の訓練というのはいつもこんな感じなのかい」

カリーナは目を伏せて答える。

「本当にそう思われますか？戦術人形は基本的にシミュレータによる訓練しかしません。実施訓練でも分隊行動や戦術戦闘などの訓練だけで、こんなメンタルコアにも影響を与えるような訓練は普通しませんわ」

「そうかい。・・・FALも大変なことだ」

「作戦目標は2つ。ひとつは、基部にC4爆薬を仕掛けること、もうひとつは機密書類の奪取。凶面、目標の情報はなし。」

作戦開始から360秒後に敵スクランブルが到着、ナパームを投下予定。

敵は機密を守るため、施設ごと燃やすつもりよ。

速やかに書類をデータではなく紙媒体で奪取、施設基部に爆薬を仕掛け施設を破壊しなさい。

ナパームで焼かれただけでは作戦中の戦術人形の反応はごまかせない。粉々に吹き飛ばすこと。

なお、捕虜となった戦術人形は作戦目標にあらず。

敵のプロパガンダ映像から、当該戦術人形の戦闘力・戦術データともに失われており、救出の要を認めない。オペレーターは私がするわ。部隊長はM4。作戦要員はグリズリーと417、援護にNTWが入る。以上、作戦の確認を終了します。10分後に作戦開始、質問は受け付けない」

そう言うとうFALはヘッドセットをつけ、オペレーティングシステムを起動する。

その場を動かない3人を見て、FALは言う。

「はやくしなさい。今回はこの古い訓練施設を大改装するから、本当に爆破するのよ。逃げ遅れたら吹っ飛ばされるわ」

ヤン・ウエンリーは呟く。

「申請したのも君だし承認したのは私じゃないんだがね」

そう言うとうヤン・ウエンリーはカリナに今回の模擬作戦指令書を見せてもらおうように頼んだ。

「ふむ、なかなかよく出来た作戦だ。開始前のやりとりと初の連携となる3人にどこまでやれるかだね」

眩きながらヤン・ウエンリーは思考する。

戦術家であるヤンは本来こういった作戦にはあまり参加しない。彼の本分は軍勢同士がぶつかり合う艦隊戦や集団戦であり、彼の仕事は兵力を動かすことにある。その中の作戦は各末端指揮官が行うのだ。

そんなヤンでも、今回の作戦での行動を予測することが出来た。

ロツカールームでは、弾薬や装備を整えた3人が作戦を立てていた。

「……」

「……」

「……ね、ねえ。作戦はどうするの?」

417が黙り込んでいるM4とグリズリーにおそるおそる話しかける。

「このままだと、訓練にならないでしょう」

「私は……ステンを助けない」

「あたしは3人で別行動するべきだと思う」

3人でそれぞれ、爆薬設置、データ奪取、ステン救出班に別れることにしたのだ。

援護にNTWがいる以上、多少の無理はできると判断した。

彼女たちには、もちろん、ステンを見捨てるという選択肢はなかった。

だが、彼女たちはFALの恐ろしさを知らなかった。ベトナムでの不正規戦の狂乱を。人の醜さを。

作戦を練り、NTWに援護プランを伝えたあと、ゲートで彼女たちは話をしていた。

「甘いといえば甘かったけれど・・・あんなに酷いことをするなんて」

下を向くM4にグリズリーが言う。

「取り返してやればいいでしょ。どちらにせよ、FALの顔は本気だった。ステンじゃなければNTWかVector、あるいは本人や提督が捕虜をやったよ」

「・・・」

皆、FALに好印象ではなかった。彼女は新入りに対して、冷徹な部分しか見せていない。だから当然といえば当然だが、それがVectorやヤン・ウエンリーには奇妙に映ったのだった。

3人がロツカールームに向かったあと、FALが提督に声をかける。

「ひどいと思うでしょう。でもね、私にはこういったやり方しか出来ないのよ。私はAKや16と同じ、泥沼の戦場で戦ってきた。いえ、あれはもっとひどい戦場」

モニタを見ながら語るFALはしかし、どこか別の場所を見ていた。

「・・・」

「綺麗な戦いはほとんど知らない。ベトナム、ローデシア、フォークランド。ガーランド

やトンプソンたち世界大戦期の銃よりひどい、血で血を洗う対テロ・ゲリラ戦線。トカレフやマカロフたち将校の持つものでもなかった。正規戦ではない、不正規戦」
ブラックオプス
 下を向いているが、沈痛そうな表情と言うよりは自嘲の響きをまとうFALは続ける。

「彼女たちには、どん底を味わって欲しくない。私のような人形はもういらぬ。16は生まれ変わった。16Labのハイエンドモデルとして。AKは戦地を転々として、私と同じような立場にある。ねえ、提督」

そう言うてFALは顔をこちらに向けた。その片目には強い光が宿っている。

「私は汚れ仕事を引き受ける濡れ仕事屋」
ウエットワークス

この世界がどんなに血で塗れて汚れているかなんて、あの子たちは知らなくていい。畏にはめられて仲間を失う辛さなんて知らないで退役すればいい。

捕まって肉体にひとつひとつ傷をつけられながら甦られる苦しみなんて知らなくていい。

私はあの子たちを、あなたを、守る。

そう、他愛ない会話をしながらお茶を飲む世界を、クリスマスやバレンタインに一喜一憂するこの世界を守る」

「FAL・・・」

「FALさん……」

話は終わりだと言わんばかりにFALはモニタに向きなおり、操作盤を叩く。

「作戦開始時刻ね。……通達、現時刻より訓練作戦を開始。各作戦要員は速やかに作戦行動を開始せよ。10秒後に無線封鎖に入る。以後、作戦終了まで通信は切断」

言い終わりのため息をひとつついたFALはモニタを分割表示して提督の前に広げる。

「私は君のような兵士を殺すのが仕事だ。私の方が罪な人間なのさ。殺すより殺させる方が、効率よく殺す方法を考える私の方がね」

提督の右側に座ったFALは横目でヤンを見て、すぐモニタに目を移した。

「どうかしらね。それは批評家や歴史家が決めることだと思っわ。指揮官は勝つても負けても歴史に名を残す。でも、1兵士が名を残すことは稀。たぶん、そういうことよ」

「手厳しいな。だが、ひとつだけ言わせてもらおうなら、とても効率的な訓練だと思うよ」

「あら、意外にも好評ね」

「何、悪辣という意味だよ」

「どういうことですか?」

2人についていけないカーリーナが首を傾げる。

「簡単さ。彼女たち3人にFALは、ステンは救出対象ではないと印象づけ、また自身が3人を貶すことで視野を狭くさせたんだ。さっきの会話やこのデータをよく見てごら

ん」

腕を組んで作戦を開始した3人を捉えたモニタを見るFALは、ヤンに看破されるのが早すぎて少し拗ねているようだ。頬がふくらんでいる。

「・・・どこにもおかしな点はないと思いますけど」

「まあ経験の浅い参謀だから仕方ないのかもしれないが、今度からは自分で気づくんだよ。」

よく読んで思い出すんだ。FALもNTWも、データも、誰もステンがそこにいるとは言っていないじゃないか

「・・・あつー！」

「えへへ、その通り！」

驚くカリーナの後ろにステンが現れた。

その柔肌には傷一つなく、笑顔を浮かべている。

「騙す形になっちゃったけど、私もVictorもNTWも通ってきた道だからね。流石FAL、完璧に罠にはめたよ」

「じゃあ、彼女達がステンさんがいると思ってるどころには？」

「もちろん罠がしかけてあるんだろう。それどころか、もしかしたら彼女たちは火傷ではすまないかもしれないね」

「さて、どうかしら。この訓練は気づくか気づかないかではなく、対応できるか出できないか、なのよ」

「おかしい・・・日常回ってなんだろう・・・」

Vectorはひとり頭を抱えていた。

長く苦しい訓練が終わった16:40、傷だらけの新入り達はシャワーを浴びていた。FALとステン達古参の人形は個人訓練に勤しんでおり、ぶっちゃけていうとヤン・ウエンリーは暇だった。

「提督さんはずっと紅茶かブレンダーを飲んでらっしゃる気がするんですが」

後ろに控えるカーリーナに座るよう促したヤン提督は面白くもなさそうな顔で語る。

「指揮官が暇というのはいい事だと思うんだがね。S09地区には敵の脅威はないからね。だがまあ、これから忙しくなるだろう」

指揮官には書類の決済や訓練の計画、ほかの指揮官との付き合いなど暇であっては行けない役職なのだが、ヤン・ウエンリーは戦術案を練るのに忙しくないという意味で言ったのだろう。口先の魔術師でもあるヤンらしいセリフである。

「と、いいますと?」

「考えてみてくれ。M4は16Labのハイエンドモデル小隊の隊長だ。となれば、同じくFALが言っていた16も含めハイエンドの部隊員がいるだろう」

「確かに、そうですね。でも、居場所がわからないとM4さんもおっしゃってましたし、索敵部隊が出てからになるのでは？」

「そこが問題なのさ。このS09地区にいないとなると、隣接するエリアに搜索範囲を広げなければ行けなくなる」

「あ、ということとは私達も指揮所を移動しないと行けなくなる？」

「そのとおり。こういうとき、船なら便利なんだが・・・」

ちようどその時、ヘリアンから連絡が入った。

「指揮官。休暇は満喫して頂けただろう、次の任務が下った」

「ええ、知ってますよ。ほかのAR小隊の搜索でしょう」

「なんだ、知っていたのか。流石の洞察力だ。明後日より作戦を開始しろ。なお、司令部は部隊と共に移動すること」

艦隊戦でもないのに司令部を部隊につけて動かすとはなかなかあほらしい作戦だが、命令なので仕方が無いのだった。

「やれやれ、また厄介事が増えたな」

通信が切れた後にそう呟いたヤン・ウエンリーはカーリーナに指示を出した。

「これは明日でいいだろう。夕食後に、時間を使わせて悪いが、いい紅茶があると言ってFALを呼び出してくれ」

食堂では今日の反省会が開かれている。

夕食のメニューは鯖と雑穀というシンプルな食材を丁寧に料理した和食だった。

「なんで？」

思わず口に出したグリズリーを417が咎める。

「出されたものは、しっかりと食べる」

グリズリーは頬張りながら反論する。

「ふおんなふおふおひつふあつふえふあ」

「口の中にもものを入れて喋らない」

「和食は我慢しなさい。カレーナのこだわりで、和洋中だけでなく様々な地域の食を集めているんだ」

そういうヤン・ウエンリーも和食は片手で数える程しか食べたことがないので、興味深そうに食べている。

「カリーナさん、そういう方食にこだわるでしたか・・・」

M4の言葉にカリーナは人差し指を立てて言う。

「失礼な、食は精神的にも肉体的にも大切なんですよ！」

「食い意地張って・・・」

「あー！そういうこと言っているんですかー！V e c t o rさんの洗濯物だけ柔軟剤使いませんよ！」

地味な嫌がらせを宣言したカリーナをヤンがたしなめる。

「こら、カリーナ。食事中だよ、騒がない。それに、そういうことは宣言しては意味がない。こっつそりやりなさい」

「提督！」

柔軟剤どころか洗濯すらできないさそうな男が言うと言説力が皆無だが、罨にはめることに関しては宇宙でも上位にはいる男の言葉なのでとても説得力があるという矛盾が発生していた。

「さて、ごちそうさま。明日は非番だ。しつかり体を休めるように」

「はい」

ヤン提督が立ち去った後、カリーナがF A Lに声をかけた。

「F A Lさん、提督からお茶のお誘いですよ。20・00に執務室へ来てください、どうぞです」

それを聞いたステンやV e c t o rたちがにわかに盛り上がる。

「夜のお誘い・・・!」

「これは言い逃れできないぞ」

しかし、反論を期待していた彼女たちの予想を裏切り、FALは深刻そうな顔をして考え込んでいた。

「・・・はあ」

ため息をひとつつくと、FALは立ち上がり言った。

「聞いたとおり、明日は非番。しつかり体のメンテナンスをしなさい。M4はすぐに来て。場合によっては・・・大変なことになる」

「?・・・はい、M4、了解しました」

静まり返る食堂は、そのあと静かに暗くなって行った。

「なんのはなしでしょうねー」

ステンが話す。場所はいつもの談話室、集まっているのはVectorとNTW、それにグリズリーと417。

「さて、予想してない訳では無いけれど・・・まあ、気にしてもしようがないよ」

「でもでも、やっぱり夜のお誘いってことは・・・」

「やめろステン、司令官と部下の肉体関係なんて想像したくない」

肉体関係は別にしても、部下と上司の大恋愛をしたヤン・ウエンリーには少々手厳しいNTWの言葉だった。

「なくはないよね」

グリズリーが口を挟む。結局のところ、ここに集まっているのは人形といえど女子なのでそういう方向に話が進むのは自然な結実である。

「意外と肉食系なの・・・提督」

「それは少しズレてるんじゃないか、417・・・」

話のタネは尽きない女子たちだった。

St 2. 胎動

「コンタクト!!」

怒号を銃声と爆音がかき消す。

撃針が火薬を起爆する破裂音と鉛の弾丸がコンクリートや金属に突き刺さる音が断続的に鳴り響く。

「こちらグリズリー、交戦中！そっちは大丈夫!?!」

すぐさま部隊員から返信が入る。

「こちら417、敵兵を視認。目標書類の場所はわかったけど、守ってる人数が多い。もう少し時間がかかる」

「こちらM4、交戦中！爆薬の設置箇所はあと2つ」

「残りは300秒！捕虜はまだ見つかってないわ!」

「こちらM4、各自作戦目標を達成次第、直近の援護に!」

「了解、グリズリーアウト!」

「コピー。417、アウト」

作戦開始から60秒、はやくもグリフィンT13B部隊は激戦の最中にいた。

本作戦における目標建造物内は遮蔽物が多い学校のような建造物を模しており、三階建ての建物の角や階段などで遭遇戦になりやすい構造のシミュレートパターンになっている。

彼女たちはそれぞれの階層にわかれ、目標へ向けて行動していた。

戦術人形とは通常、その経験値がたまると戦術コアデータリンクを利用して自らの分身を操作できるようになる。人形の利点だ。

例外としてFALは他に4体ある自らの編成人形を凍結している。

T13Bの人形で戦術コアデータリンクによる編成拡大を行える練度に達しているのはFALだけなのだが、FALは

「演算処理リソースを奪われたくないし、センスが良くない」

などと言って凍結処理をしている。

それが真意かどうかは別としても、事実としてFALは戦術人形としては古い時期に生産されたものになりつつあるが、単騎ながら初期・中期・最先端のどの時期に生産された戦術人形よりも高い戦闘能力を誇る。

訓練を行うのは状況に応じた適切な判断を下すことと、経験値を貯めることで戦術コアデータリンクを可能にするためである。

だがこの時、FALが行った訓練はFAL専用とも言うべき、極めて個人的な技倆を

高めるための訓練だった。

1階を進むM4は建物の脆いポイントに爆薬を仕掛けている。

それを見るNTWは窓から見える崖に陣取っており、そこから援護射撃をしている。

「私は良い訓練になるけれど、あの子たちは大丈夫かな・・・」

的当てはスナイパーの本分であり、撃ったあとに移動する必要のない訓練課程のため、NTWの射撃精度の向上にはいい訓練だ。

くほらそこ、無駄口を叩かない。どう、先輩から見ても

無線封鎖は突入した3人のみに行われており、先程からちよくちよくFALやVec torからの連絡が入るNTW。

「んー、こりゃあ危ないかもね。熱くなりすぎてる。M4が気づきそうだけど、グリズリーや417にそれに従うだけの冷静さが残ってるかどうか」

く気づかなければそれまで、従わなければそれまでよ。あなたは安心して訓練を続けなさい。180秒後にSスクランブル C上がる。想定はシルフ、逃げられる確率は低いと伝えて

FALの言葉にNTWは顔を顰める。

「何だつて？シルフ？私たちの時より簡単じゃないか。スーパーシルフより遅いじゃない」

＜文句言わない。私の師匠は何やらせたと思う？メイヴよ。あの汎用航空機型決戦兵器に訓練だからってバカみたいにオプションつけて、クラスターにMAGM、燃料気化爆弾にレーザー機関砲までつけて投入してきたのよ。対空訓練じゃないのに。シルフなだけ感謝して欲しいものね＞

＜うへえ、ゾツとしないね。NTW、あとでその訓練データ見せてあげる。今見てた。無理。確実に殺される恐怖よ＞

「Vectorがそこまでいうとは・・・見たくないな。とにかくわかった、伝える」
スーパーシルフに追い回される恐怖を知るVectorが無理と言いつけるメイヴ。
NTWは少し蒼白になりながら、M4たちにFALからの連絡を伝える。

「こちらNTW。150秒後にSCが上がる。急い方がいい」

＜M4、ラージャー。爆薬をしかけ終わりました、2階417の援護にまわります＞

＜こちら417、書類は確保。施設図面を見つけた、地下がある。私はグリズリーの援護に向かうから、M4は地下に＞

＜コピー。M4アウト＞

「さて、地下の存在に気がついたようだけど、M4。どうするのかしらね？」

FALは戦況データを天球型に配置し処理している。

「FAL、ちなみにひとつ聞かせてくれないか」

紅茶を飲んでいたこの訓練ではまったくの置物と化しているヤン・ウエンリーがFALに尋ねる。

「なにかしら」

「さっきのシルフとかメイヴってのはなんなんだい。それと、爆破した時彼女達が巻き込まれたらどうなる？」

戦史に詳しいヤン・ウエンリーだが、シルフやメイヴという名のつく兵器は聞いたことがなかった。

SCと言うからには航空機だろうが、西暦でも戦闘機が覇を競ったのは1900〜2000年代までの短い間であり、宇宙暦でも小型戦闘艇の方が遥かに長い間空戦の王者だった。

それでも、制空戦闘機や格闘戦闘機などで優れた戦闘機は名を残している。

日本空軍の零式艦上戦闘機、ドイツのBf109メッサーシュミット、米軍のF15イーグル、F22ラプター、ロシ

アのSu27スホーイやMiG25ミグなどだ。1900年代初頭までの戦闘機に比べるとレ

シプロでありながらネームバリューとしては異例の零戦、ジェットエンジン搭載戦闘機の中でもラプター、ミグ、スホーイなどはやはりほかの戦闘機種に比べて有名だった。

「ふたつじゃない」

とFALは苦笑しながら振り向いて答える。

「シルフとメイヴは戦闘機の名前。いや、種類か。本来は制空戦闘機、あるいは戦術戦闘電子偵察機だけれど、偵察や戦闘以外にも爆弾投下やテスト、救助任務につくこともある優秀な機体。速度はマツハ3超え、こういう訓練の時のSCには合うのよ」

本来はSCとしての運用をしない機体ではあるが、訓練としてデータを使用しているのだった。

「なるほどね。私の時の戦争の場合は小型戦闘艇でほとんど足りてしまうから、戦闘機には興味がなくてね。操縦もできないし。だが、戦史でも戦闘機というのは一世紀から二世紀と少ししか持たなかったものだ。結局ね」

「提督、こちらがデータですわ」

カーリーナがハードコピーを渡す。

「それで、もうひとつの質問だけれど。まあ、死ぬことはないわ。ただ、そうね……2、3週間は作戦はできないかも」

「そんなにひどい損傷を？」

戦術人形にヤンよりは詳しいカーリーナが聞き返す。

「ええ、メンタルコアひんにね。ボディはすぐに治るけれど……自分の肘や足が飛んだり、最悪首が飛ぶ。じわじわ出血して血が無くなっていく寒さ、敵の兵士に犯されながら意

識が消滅していく絶望感、重度の火傷や瓦礫に生き埋めにされて呼吸が止まる恐怖は、コアによる思考ルーチンの修復に時間がかかるくらいには深刻なダメージを与えるの」「うへえ……聞かない方が良かったかな」

ヤン・ウエンリーは艦隊戦で数多の兵士を殺してきたが、それは艦隊戦の話だ。中性子ビームや核融合ミサイルが吹き飛ばし、永遠の氷結と灼熱の世界に人を送る。

ヤンの戦場はある一点においてシェーンコップやラインハルトたちが潜り抜けてきた死線とは意味合いが違っている。

それは、一人が一人を殺す戦場か、一人が幾人も殺す戦場か。

「でしようね。私は実際に死んだりもしたけれど、電脳のおかげで意識を移植して生きている。ちなみにさっきのは私の実体験よ。全部最後に死ぬ、がつくけれど。ま、時が経てば修復するから大丈夫よ。まったく罰当たりなシステムよね、人間さまからしたら」

(なんだろう、何かがおかしい)

戦闘中、M4は拭いても拭いても消えないガラスの曇りのような違和感につきまともわれていた。

(FALさんの訓練メニューがこんな単純なはずがない)

今までの訓練メニューに比して、今回の訓練では明らかに目標と手段が単純だった。

あのブリーフィングから10分あまり、M4は冷静に物事を見直せるほどまでクールダウンしていた。

「そんな・・・まさか?」

<どうした? M4>

「NTWさん、タイムリフトは!?!」

転がってくるパイナツプル状の金属の塊を視認したM4は直ぐに退避する。

<100秒だ。どうかしたか?>

息を切らしながらM4はNTWに叫ぶ。

「もしかしたら、ステンさんはこの施設にいないのかもしれない」

それを聞いたNTWはわずかに口角をつり上げる。

<どうしてそう思うんだ、悩んでる時間はないぞ>

「単純すぎるんです、ブリーフィングの時は気づきませんでした、FALさんがあれだけ救助の要を認めないといったのは、この施設にいないからじゃないのかって。

FALさんは確かにひどい言い方をしたけれど、嘘は絶対に言わない。兵士だから。

それに、敵は私たちが捕虜の救出に来たなんて思っていない、戦力が分散しすぎて...

階段や要所に戦力を集中したりしていない。これは罠で、たぶん敵の機械化師団と航空爆撃支援がもうすぐ来ます！」

くもしそうだとして、どうするんだ？ 撤退か？ 決めるのはお前だぞ>

「でも、確証は持てないんです。時間から考えれば撤退が妥当ですが、彼女達がそれを受け入れるかどうか」

<受け入れさせるのがお前だ、隊長だろう>

「・・・！ 了解しました」

「こちらM4、417、グリズリー、聞こえる!? 作戦中止、直ちに撤退して！」

<こちら417、ステンは確保出来たの?>

「ステンはこの施設にいないわ！ FALさんの作戦立案に従うべきだったのよ」

<こちらグリズリー、確証はあるのか!! なかったら味方を見殺しにすることになるぞ!>

417に比べて爆音やノイズ、銃声が非常に大きいグリズリーは激戦の最中にいるようだった。

「敵の戦力配置とデータから見てほぼ確か、おそらく予想より早く敵の航空支援が到達するわ！」

<ほぼ、でしょう。確実に可能性は潰さないよ>

<そうよ、あの映像を見てステンを見殺しにできるって言うの!?!>

ギリ、とM4は歯噛みする。これが隊長の責任か、と。

「私は隊長よ。たとえステンがここにいたとしても、ステン1人のために部隊が全滅するなんて容認できない。作戦オーダーに従って、直ちに施設外に撤退しなさい。その後全力で作戦エリア外縁の退避壕に退避、私が殿を務める、はやく」

<でも・・・>

「命令違反で営倉にぶち込むわよ。早く、時間が無いわ」

追い打ちをかけるようにFALから通信が入る。

<無線封鎖緊急解除。通達、敵の近接航空支援部隊が接近中。ローリングサンダーの絨毯爆撃の後に掃討に来る。ローリングサンダーも予想より早く、30秒後に作戦空域に侵入予測。直ちに撤退しなさい>

M4の予想したとおり、いや、予想よりなお悪かった。近接航空支援では、走る兵士が逃げ切れる確率はかなり低い。M4は覚悟を決めた。

「コピィー。聞こえた? 2人とも。私が援護する、早く撤退して。全滅なんてさせない、急いで走るのよ。M4、撤退支援に入ります。NTWさん、ほかのふたりの撤退支援を。私は陽動を」

<了解した。・・・いいか、帰れよ>

本来訓練ではありえない会話。

人だろうが人形だろうが1歩間違えれば訓練でも死ぬ。だが、人形は死んでも代わりが利く。だが、今この時、ふたりは本物の戦場にいた。しかも、16LaBのAR小隊はコアバックアップが存在しないのだ。

「そのつもりです」

NTWは狙撃地点を移動して、グリズリーと417の撤退支援を開始。

建物から駆け出てきた2人の後方、出口と窓に火力を集中する。

建物のすぐ側で銃を乱射しスモークグレネードを投げるM4が見えた。NTWは秘匿回線を開いた。

「こちらNTW。FAL、M4は自らを犠牲にするようだ」

<見てるわ。気づいたのは割かし早かったけど・・・なかなかいただけない選択をしたわね>

「どうする、もう怪我では済まないぞ」

<いいえ、このまま続行よ。あの子がこのまま斃れるならそれまで、どうかわすかの能力を見てみたい。あの子には部隊を率いてもらわなくちゃ>

「へえ、もう引退かい?」

＜そんなわけないでしょう、まったく。団体行動は嫌いなだけよ＞

「とにかく、わかった。もうすぐグリズリーと417の撤退が完了する。そのあとはどうする、M4の援護射撃でもしてやろうか」

＜不要よ。命令されてないでしょう？＞

「コピー。NTWAウト」

(M4、生きて帰れよ。死ぬにはもったいなさすぎる戦場だ)

M4は気づいた。ステンはこの場におらず、囮に騙されただけ。そのために部隊が全滅するなら、2人帰した方が後のためになる。

いくら戦術人形は替えがきくといえど、その瞬間の思考は人間と変わらない。

その思考を切り捨てられるFALなどは“例外”である。

(死にたく、ない)

この時、ハイエンドモデルであるM4の思考ルーチンをコントロールする回路は焼き付く半髪手前で、いや、もうほぼ7割が焼き付いているほどに高速で稼働していた。

戦術人形として任務の成功のためにありとあらゆる手段を計算する思考ルーチンと、感情モジュールのもたらす生きたい、死にたくないという思考ルーチンの競合のする燃え上がる思考の深淵の狭間でM4は弾丸をかわし、放ち、土埃に塗れて転がる。

この時のM4の行動は、最適解とは言えないまでもある程度の結果をもたらしていた。

甲高いジェットエンジンの音が遠くから急速に近づいてくる。

グリズリーと417は既に作戦領域を離脱しており、敵に取り囲まれ泥に汚れたM4は壁にもたれて微笑んだ。

「goodbye」

M4がもたれかかっていた壁が爆発した。いや、壁を支える柱が爆発し壁が崩落したのだ。

そのままM4は屋内に倒れ込む。床はなかった。

彼女達が仕掛けていた爆弾が爆発、建造物は崩壊を始める。M4は、地下室への入口の真横の壁から地下室へとダイブしたのだ。

すぐさまハッチを閉めたM4は、さらに奥深くへと走る。グリズリーと417という獲物を逃がし、M4という敵を追っていた敵は全て外に出ていた。中は不気味なほど人気はなく、振動と爆音だけが上から響く。

「はあ・・・」

その場での死は逃れたが、この先に展望はなかった。脱出すべき地上との扉は崩落により塞がれ、他の出口は見当たらない。

「少し・・・疲れたなあ・・・」

M4は、脱力して倒れ込んだ。

「さてね」

ヤン・ウエンリーは戦況データに目を移す。M4の信号は微弱だが生きている。しかし、現状重機が入る30分〜2時間ほどは救出の見込みはない。

「なるほどね。中々状況をコントロールするのが上手いわね、あの子。でも、これでPTSDにならないといいけれど。どう？こっぴどやっつて戦場ではPTSDが量産されていくのよ」

FALの言う通りだった。

戦争によるPTSDは天井を知らず、社会復帰どころか人間としての生活さえも脅かす。

かつて中世、宗教によりそれは抑えつけられた。

過ぎ去りし近代、国はミニチュアの街を作り、シミュレーションをさせてそれを克服しようとした。

脳へのカウンセリングやマスキングに戦闘感情適応調整による押さえつけも試みた。

ヤンの時代、砲手や戦闘艇乗りや陸戦部隊に関わらずそれはなくなっただけではいかなかった。そういう層を取り込んだのはやはり宗教、地球教。

それを、機械だから、人形の感情はやがては戻るからリセットとこんな少女達に代理戦争をさせているのだ。

FALの糾弾はもつともだった。

「あなたを責めているわけじゃないわ、提督。あなたは私より重いものを背負っていた。それは変えられない」

「慰めて欲しいわけじゃないがね」

「そのつもりはないわよ」

FALは言葉を切る。

「兵器に感情を搭載したのが間違いなんじゃない。感情を積んだだけの、ただの兵器に感情移入するのが間違ってるの」

「それは違う。なら、ここまで人に似せる必要は無い。少女である必要も、兵器としての機能と並立できない人としての機能もいらぬはずだ」

「いいえ。高度に学習する知性体はいつか必ず感情を、人間に近づきたいと思考する。なぜか。羨ましいからよ。あんな風に笑うのはどうしてだろう。」

何故あんなに悲しそうにしているんだろう。

知りたい、理解したい、あんな感情を持つてみたい。持ったらどうなるのかという飽くなき学習欲、知的好奇心。

学習という思考ルーチンの根幹に位置する機能が前提にある機械思考知性体は必ず、そう思う。

あの、世界で最も無機質で冷酷で戦闘に特化した戦闘知性体でさえもそう考えた。

最も喜怒哀楽の激しい生命体は何か。

それが女性、少女。

そう”思考”したのが戦術人形を製造するコアプログラムユニット”

「プログラムユニットがそうしたから人に非はないとも言うつもりかい」

「違うわ。そもそも人がいなければこんなことにはならなかった。人間の進化の果てが完全な人間、意識のない人間だとするなら、私達はまだ原人どころかネズミほどの進化していない。当然よね、だってまだ生まれてから100年も経っていない」

「なにが言いたいんだい？」

「高い壁を登って快感を得るのはマゾヒストか自己陶醉家だけよ。

壁はなぜあるのかといえ、考えるためにある。どうやって”先に行くか”をね。

ただ盲目に登ることしか考えず、登った先にあるものを求めるのでは意味が無いのよ。

「登った先にあるものではなく、越える時に得るもののために考えなければならぬということをわからない人間が多すぎた。」

つまり、この問題に答えを出そうなんてまだ早いってことよ。こういうのはあなたの得意分野じゃない？」

「いやはやおつしやる通り。おや、2人が帰ってきたようだよ」

煤と硝煙の香りを纏ってはいしたが、大きな傷はなさそうなグリズリーと417がデブリーフィングに現れた。

「417、グリズリー、ただいま帰還しました・・・」

「ご苦労さま。M4は生存が確認されているわ、安心なさい。それで、作戦はどうだった？」

「はい、私たちの軽率な判断により部隊員全員が危険に晒されました」

「M4がいなかったら、今頃は多分・・・」

消沈して下を向く2人にFALは淡々と語る。

「そういうことを聞いてるんじゃないの。貴方達の作戦計画とその実行効果、そして反省点を詰めるのがデブリーフィングよ」

詳細を知ってはいしたが、あえてそれを本人達に話させることで自覚させる。生きて帰れたものの特権でもある。

作戦と反省を詰めるデブリーフィングは、M4が救出されるまで続いた。

「戦術偵察の必要性？」

ヤン・ウエンリーが怪訝そうにFALに聞き返す。

「ええ。さつき、シルフとメイヴの話をしたでしょう。あの2機は戦場の情報収集専用の部隊に所属していたの。敵、味方の機動、通信、レーダー波や電磁波、天候や気象：ありとあらゆる情報を集め精査し解析する部隊にね」

かつて特殊戦と呼ばれたフェアリー空軍・戦術空軍団・フェアリー基地戦術戦闘航空団 特殊戦第5飛行戦隊。

ジャムと呼ばれる異星体との戦いの中で、情報戦のエキスパート部隊だった。

「制空権どころか機体もないのにかい？」

「なければ作ればいいじゃない」

放射能汚染とHANNE高高度核爆発が引き起こした強力な電磁パルスにより情報の分断とネットワークシステムの消滅が起こった第3次大戦期、および鉄血とグリフィンの紛争期に戦闘機などによる航空優勢は取られなかった。

理由の一つに、ネットワークシステムの消滅による衛星データリンクが機能不全に陥ったことが挙げられる。有視界戦闘のみの場合には、ジェット戦闘機よりもプロペラ戦闘機の方がまだマシだった。

戦闘機は新鋭になればなるほどコンピュータに依存する。安定性と引き換えに手に入れた機動性も、各戦地における支援やAWACSの戦闘情報支援なども、コンピュータなしにはありえない。

「どうやって?」

「簡単よ。ここに素晴らしく優秀で美人のAIがいるじゃない」

人差し指を立てたFALに、ヤン・ウエンリーはとても嫌そうな顔をして語る。

「まさかとは思いが」

「多分そのまさかよ」

「はあ・・・君、バカって言われたいのかい?」

「言ってくるようなバカはいないわね」

FALの示した提案を、ヤン・ウエンリーは執務室で精査するのだった。

FALがこっそり渡してきた紙の意見具申書を紅茶を片手に吟味する。

データに残らないもので、耐久力に最も優れる媒体。紙に代わる記録媒体を、人類は

まだ発明できていない。

「戦術人形によるデータリンク・ネットワークを使用し、擬似的なSSLネットワークを構築する……」

衛星通信システムが使えない今、もつとも精度が高く高速で精密なネットワークは確かに戦術人形の編成拡大時に統制を取るために使用されるデータリンクだった。

このためなのかは不明だが、戦術人形の中でデータリンクネットワークが余っている人形がいた。

それがFALだった。

「編成拡大したFALのコアユニットを戦闘機に乗せる、だって？ 一体何を考えてるんだ」

つまり、生体ユニットを接続するという事だ。だが、航空機は距離がある。そして情報収集という任務上膨大なデータの処理を並行して行うことになる。

おそらく、高性能な戦術人形の脳といえど数回で焼き切れるだろう。

FALは、自分の分身を使い捨てる気であるのだ。いや、分身だけでなく、統括して制御する本人も賭けたのだ。

「焼き切れるまでの数度の間に有効な我が部隊のみの閉鎖ネットワークを構築し、2、3

機の電子偵察機を製造する。それが可能になれば、おそらく我が軍の優勢は堅い……か」
ヤンは腕を組む。

戦場における情報を、同盟軍において最も重視したのがヤン・ウエンリーだった。帝国で最も情報を重んじたジークフリード・キルヒアイス上級大将よりも数倍ヤンは情報を欲した。

バーミリオン星域会戦に伴う一連の戦闘や第6次・第10次イゼルローン攻防戦などがその顕著な例であるが、ヤン・ウエンリーの緻密な戦術展開は情報があつてのものだった。

そして、倫理に背くようなものであるのも間違いではなかったが、F A Lの具申はそれを補ってあまりあるものであるのも事実だった。

ヤンの脳裏に、かつてF A Lが言い放った言葉がよぎる。

「私達は人形。倫理を当てはめるなら、私たちが存在することが生命、自然に背を向けている。なら、私達を使い捨てることが正しいのではないかしら。貴方ほどの頭脳があれば、これくらいわかるはずでしょう？」

それは、最初の作戦前。ヤンにF A Lの単独作戦行動を許可させた時の言葉だった。「ひとつ言っておくけれど、貴方、自分の歪みに気づいていながらそれを無いものとして振る舞うのはやめた方がいいわ」

「どういうことかね」

「矛盾に目をつぶることはいい。でも、あなた、嘘をつくのは目をつぶるより悪質よ」

FALの言葉は、ある意味でシェーンコップやキャゼルヌといったヤンの理解者たちさえ気づかなかったヤンの矛盾の本質を付いた。

ヤン・ウエンリーは、判を押した。

指揮官は、効率よく戦争をするのが仕事だ。

味方を効率よく殺す方法を考え、敵を最大限殺す方法を探す。

第13旅団がS09地区から離れ、B25地区にてAR小隊の残存兵を搜索し始めてから半年後。

第13旅団の主戦力はM4を中心とする混成小隊である。特殊分遣隊としてFALが隊長を務める特殊戦部隊がいる。

第13旅団はS09地区を中心にほぼ同心円状に配置された、ガンダルヴァ、ランテマリオ、シヴァ、エル・ファシル、ティアマト、バーミリオンの6大基地からなる。旅団の総合参謀本部はエル・ファシル基地にある。

現在第13旅団は各基地に2機ずつ有人偵察機、無人戦闘機を保有している。その他に、ヤン・ウエンリー提督直属の移動指揮所であるバンシー型空中母艦ヒューベリオン

を守護する12機の戦術戦闘機が存在する。

第13旅団の保有する有人戦闘偵察機はシルフィードと呼ばれる双発・複座の大型戦術戦闘機である。戦術人形のデータコアと出自を同じくする超高度な電子兵装を持つ。中でもヒューベリオンを守護するシルフィードはスーパーシルフと呼ばれる、さらにその中の3機がオリジナル・シルフと呼ばれる。

これは、第13旅団の戦術戦闘電子ネットワーク構築の黎明期において活躍した5機のシルフィードの生き残りである。

公表されているグリフィンの部隊構成図を見ると、第13旅団はPMCであるG&K社の1部隊に過ぎない。軍団クラスの戦力を保有するグリフィンの中では、比較的中規模の部隊だ。

もちろん、万人単位の兵が所属している訳ではなく、戦術人形単位である。

4人規模の小隊、6人規模の中隊、12人規模の大隊。24人規模の連隊、50人単位の旅団である。

ヤン・ウエンリーの部隊は規模としては連隊規模だが、特殊情報作戦を取り扱うということで特殊作戦軍に新たに創設された部隊となった。この編入に伴い、第13旅団は特殊作戦軍・情報作戦コマンド・特殊戦第13戦術検索群、通称“第13旅団”となった。

所 属 は G. K. Army 陸軍、G. K. Army Service Component Command 陸軍支援コマンド。
G. K. Army Special Operations Command 陸軍特殊作戦コマンドに所属する1群にすぎない。

所 属 として は グリフィン 陸軍 だが、作戦指揮上は特殊作戦を統括する
G. K. Special Operations Command 特殊作戦軍 の 傘 下 で あ る
G. K. Special Intelligence Operations Command 特殊情報作戦コマンド の 傘 下 に あ る
13th Special Intelligence Operations Tactical Brigade 特殊情報第13戦術検索群となる。

実際には、しかし、独立した司令部を持ちグリフィン本部クラスの独立閉鎖ネットワークを持つ、軍団レベルの存在である。

制式部隊略号はSTB—XⅢだが、XⅢは公式文書以外ではつけないことが多い。STBという部隊単位は、ヤン提督率いる第13旅団以外にないからである。

エル・ファシル基地の地下深く、特殊作戦司令室とダイレクトに接続されたヒューベリオンのメイン・コンピュータは各基地とのデータリンクに戦闘機の中核コンピュータを繋ぎ、そこから各基地司令室にリアルタイムで戦術戦闘情報共有する。

各基地のシルフィードに下された至上命令は、必ず還れ、である。STBの戦隊機は最前線で情報を収集し、戦闘情報ファイルに記録して帰投する。傍受されやすい無線通信回線は非常時以外使用しない。

シルフはいつも単機、もしくは2機で他の部隊の上空を飛行する。高高度である。そ

して、たとえその部隊が全滅しようとも、それを援護することなく、情報を収集して帰る。

シルフはその任務をこなすため、哨戒機にも優る警戒レーダーを持ち、外部燃料ドロップタンクを抱き、自機と情報を守るためだけの強力な火器を有する。

シルフは偵察以外に、STBの陸戦部隊員の援護も行う。爆撃や機銃掃射など、あるいは偵察データによるバックアップである。これは、AWACSが存在しないための措置である。この場合に限り、シルフ1機につき2機の無人戦闘機が同伴する。戦闘管制機は存在しないので、無人戦闘機は有人機であるシルフのメイン・コンピュータが自律している戦闘機のAIを監視している。

この無人戦闘機はスパルタニアンと呼ばれ、小型で前進可動翼、無人故の有人機には不可能な大G機動を可能にした。バンクなしのジグザグ機動や15Gを超える短半径旋回など、とても航空機とは思えない機動さえも可能である。

グリフィンの前線基地エリアC-8、グリフィン統合陸戦隊ネゲヴ小隊は隊列を組んで敵施設へと侵攻する。真つ青な海が近い。

海風と東から吹く季節風が湿気を運び、広大な森林エリアを深く潤す。時は春だった。

ネゲヴは僅かな水音を耳にして、戦闘態勢に入る。昨日の雨が水溜まりを作っているのだ。新芽とまもなく来る梅雨の雨が、緑を深めていく。

「鉄血の哨戒部隊ね。こいつらに見つかるとまずいけれど、帰らないとよりまずいわ。身を隠して」

時刻は朝。朝靄が消えつつあるが、緑は身を隠すのに都合のいい木々と草むらを形成する。目的の施設は遠い。ダミー人形と共に、小隊は敵の目をかわして進む。

しかし、鉄血も馬鹿ではない。戦場は、数日で常識を変えるものだ。目的の施設に近づいたその時、警報が鳴り響く。

見ると、戦術人形のデータリンクを感知するデータプログラム感知システムがネゲヴのダミー人形を捉えていた。

咄嗟にデータリンクを切り自律行動にしたものの、もう歯止めは利かない。

ネゲヴ小隊は戦闘に入る。

銃声と爆音が止んで10分。ネゲヴは目的のデータを手に施設を出る。隊列を組み直す。隙間が3つ。

ネゲヴ小隊は3人の戦術人形を失った。

ネゲヴは、その3人の戦術人形がどういう戦いをして、どのように撃破されたのか、知

らない。

エリート小隊を率い、戦闘のスペシャリストである彼女とて、戦場の全てが見える訳では無いのだ。

ネゲヴは空を見上げる。この作戦の一部始終を、自身の小隊員が撃破されるのを、戦いに加わることなく冷徹に見ていた1機の戦術戦闘電子偵察機。ヒューベリオン直属のSTB2番機。機種はオリジナル・シルフィード。パーソナルネーム、雪風。

雪風の戦闘情報データファイルには、ネゲヴが知らない、戦いのようすが収められていた。雪風のパイロット、深井零少尉はそれをネゲヴに伝えた。

さつきまで確かに活動していた隊員が、数字とデータだけの存在になる。いかにバツクアツプがあるとはいえ、思考ルーチンが人間を模している以上やるせないものはあった。

(情報コマンド、特殊検索群……)

陸軍総軍・第一軍団・統合陸戦隊所属のネゲヴとしては、明らかに今までになかった異質なものとして見えた。

ネゲヴは無言で雪風を見送る。

なぜ、作戦エリアに最も近いバーミリオンではなくヒューベリオン直属の雪風が電子偵察を行っていたか。それは、当該作戦の目標が極めて重大であったからである。

A R 小隊、反逆小隊、F N 小隊と並ぶグリフィンが提供可能な戦力として最高峰のネゲヴ小隊が派遣されたのも、その一つである。

ちなみに、F N 小隊の小隊長はF A L であるが、現在はF A L のみがS T B 所属扱いになっており、代行としてF N F i v e — S e v e n が隊長を務めている。

また、反逆小隊はグリフィン所属ではないが、グリフィンと協力関係にある。

小隊が有名、というのもおかしな話であるが、軍団と同じくらい有名な部隊というのは存在するものである。

ヤン・ウエンリー曰く、近代から現代になるにつれ部隊の指揮官よりも部隊名の方が名が売れるらしい。

「なんとたつて、指揮官が名を残すのは集団戦だからね。何十年かの平和な時代や宗教戦争、あるいは国家が崩壊したあとなんてのは軍団規模の行動が少ないのさ。結局、私の時代では艦隊戦が主役だったから指揮官が有名だったがね」

ヒューベリオンの会議室でヤンは嘯く。

「ナポレオンやヒトラー、それこそアレキサンダー大王や東郷平八郎だっていい。概ね、大戦力のぶつかり合いでしか指揮官というのは目立たないんだよ」

「では、提督、例えばスパルタの兵とか、シモ・ヘイへとかが名を残したのは、戦歴だけでなく戦場の影響が大きいということですか？」

カリーナの質問にヤンは紅茶を手に取る。

「いい着眼点だ。そもそも、戦争の歴史と戦場の歴史は違うということに気づけたのは偉いね。端的に言えば、戦争で名を残すものは2種類に分けられるんだ」

M4は頭を捻る。

「2種類、ですか？」

「そうだ。ひとつは大量に殺したものの、ひとつは歴史を変えたものだ。1つ目は私がいい例だが、人に限らない。核爆弾、兵器、事象や作戦名などがこれにあたる。ホロコーストやソマリアなんかもそうだね。」

2つ目は、そうだな……これは事例が少ないんだが、技術革新なんかこつち側だね。革命なんかもこつちといえればこつちだ。エル・チエの愛称で有名なチエ・ゲバラとかね。核融合とか宇宙船の開発なんかもそうだ」

「提督、核融合なんかまだないわよ」

FALの言葉にヤンは頭を掻く。

「おっと、そうだったね。そういえば、君たち戦術人形もこの2つ目の事例に該当するね。まあいいんだ、つまり、部隊が名を残すのは前者にあたる。デルタフォースやメリカ海兵隊、特殊作戦群なんかは有名だね」

「それで、今回の作戦はどうだったんだ」

NTWの質問に、カリーナが答える。

「それは深井さんから伝えてもらいますわ」

深井零が入ってくる。手元のUSBは、雪風のデータファイルから必要な情報を抜き出したものだ。本戦は極秘で行われ、ネゲヴが取得したデータはダミーであった。実際は、ネゲヴ小隊の戦闘中に雪風が施設近郊に投下したデータパックが施設内のコンピュータにハッキングし、データをすり替えていた。

「深井零少尉。雪風のパイロットだ」

「FAL以外のみんなと少尉が会うのは初めてだね。彼は私と同じ、別世界からの尋ね人だ。FALのおかげでもあるが、彼も現在のSTBのシステム構築に貢献してくれたんだ」

零はUSBをパネルに置く。パネルはUSBのデータを読み取り、スクリーンに投影

する。

「目標施設にあったデータはこれだ」

映し出されたファイルの顔写真に、M4は思わず立ち上がる。

「AR::15::」

「そうだ。AR小隊の一員であるAR15の所在を示すデータファイルがあった。雪風のメイン・コンピュータは解読の結果、信憑性は75%と評価した」

「STBメインネットワークも重要度レッドと評価している。グリフィンからは、我々にAR15奪還の命が下った」

M4は拳を握りしめ、スクリーンを見つめる。

「作戦は4日後。明日1400にブリーフィングを行う」

ヤン・ウエンリーは、そう締めくくった。

St. 3 オペレーション・ベテルギウス——侵攻、旧ゲルタ要塞

「作戦を説明します」

カリリーナがいつになく真剣な調子で話す。STBとしての本格的な大規模作戦行動は初であり、作戦の重要度も高いとあればなおのことである。

「ここ、B25地区に隣接するB26地区にてAR小隊の一員であるAR15が孤軍奮闘を続けているという情報を受けました。」

グリフィンはこれをコード・デルタに分類し、我々第13旅団に救出作戦を命じた。我が特殊戦戦略コンピュータはコード：レッド、戦術コンピュータではコード：IIに指定、現戦域における最重要作戦である両コンピュータは判定しました」

スクリーンには地図と地域の偵察情報が表示される。

スクリーンを見るのは隊員たち、深井零、そしてヤン・ウエンリーとヘリアンである。「本作戦は今までの小隊規模ではなく、我々第13旅団・ヒューベリオン直轄の全部隊を投入します。」

従って、本作戦の指揮はヤン・ウエンリー提督が直接行います」

「今までもやってきただろう、まるで初めてみたいない方をするのはやめてくれないか」

ヤンがぼやくのをちらつと見てペろりと舌を出したカーリーナは、ヘリアンの凍りつくような視線を受けて背筋を伸ばす。

「本作戦の目的はAR15の救出ですが、目標は敵第22鉄血機械化師団に包囲されています。」

旧ゲルタ要塞に立てこもりゲリラ戦を展開していますが、既に一年近く支援無しで戦ってきたAR15は既に限界であると予想されます」

M4が救出されたのが8月。

STB創立と現在のネットワークの確立に半年かかり、現在は5月。とつくに破壊死されていてもおかしくない。

「そこで、本作戦では鉄血の機械化師団を強襲します。目標は敵戦力の殲滅です。旧ゲルタ要塞ははるか昔、旧チャイニーズにおける反体制勢力の要塞でした。

かつての民族浄化紛争の残骸であり、峡谷に守られた天然の要害です。

1ヶ月程度前から峡谷の端にある防衛システムなどで抵抗していたAR15ですが、ここ数日は抵抗の火力が低下しています。

では、作戦に伴う部隊編成を通達します。

まず、FALさんを指揮官に置く第1特殊部隊コマンド。こちらは、隸下11部隊で編成します。各戦術人形は通知された部隊長の指揮の下作戦に参加してください。

各部隊の隊長を通知します。

ユニット1はVectorさんが隊長です。

ユニット2はKSGさん。

ユニット3はエンフィールドさん。

ユニット4はFALさんが隊長です。指揮官直轄ではありませんが、作戦は通常通り実行するようにお願いします。

ユニット5はデザートイーグルさん、

ユニット6はKordさん、

ユニット7はADSさん、

ユニット8はM1887さん、

ユニット9はARTさん、

ユニット10はQBUさん、

ユニット11はNTWさんとなります。

ユニット1-3は3個ユニットは合わせて行動する分隊としてSMG・RF・SGの近接打撃部隊2ユニットと援護1ユニット。

ユニット4は即応部隊として遊撃に回るため、AR・SMG・HGを含む単部隊ユニット。

ユニット5―9はそれぞれ特科編成となります。

ユニット10、11は作戦領域外縁部から援護を行うRF部隊です。

次に、M4さんを部隊長とするユニット12です。ユニット12は特殊部隊グループではなく特殊分遣隊ユニットとして編成してあります。詳しくは個別ブリーフィングで説明します」

「我々の目的はふたつだが、手段はひとつだ」

ヤン・ウエンリーが引き継ぐ。

「M4の特殊分遣隊はH A L O高高度降下低高度開傘でAR15を直接救出に向かう。

降下ポイントと離脱ポイントはここだ。

そして、F A Lの主力部隊は機械化師団を殲滅する。

投入戦力はF A L率いる特殊部隊群1―1ユニット。

航空支援として2機のスーパースィルフがつく。

その他に、戦術偵察に雪風、ヒューベリオンはゲルタ要塞北東にて火力投射状態を維持する。

君たちが離脱次第、ゲルタ要塞を峽谷に埋める、というわけだ」

「また、本作戦は鉄血や全世界に対し我がグリフィンの保有する航空戦力を喧伝するという役割も担っています。

そのため、本作戦の中核は航空優勢の確保・維持とそれに伴う地上戦力の優勢確保が必要となつてきます」

スクリーンに映し出された3Dモデルでは、旧ゲルタ要塞を包囲する機械化師団が映し出されている。

峡谷側にいるものについては問題ないが、峡谷の反対側から継続的に砲撃を続ける部隊が厄介だ。

ユニット1―3が峡谷側の部隊を奇襲し、時間差で峡谷上の部隊をユニット4―11が叩く。

ヤン・ウエンリーの戦術としては極めて平凡にすぎるが、ヤンとしては奇を銜うのは戦力が少ない際の非常手段であり、戦力が揃っているのだからそれを使わない手はないのだった。

「作戦開始時刻は本艦が作戦空域に到達する明後日05:00。

暁の夜闇に乗じて空挺降下を行います。

我々新生第13旅団の全戦力を持つて敵機械化師団を撃滅します。

その間隙を縫ってM4の特殊分遣隊が戦闘地域降着、AR15を回収して離脱。各部隊はそのAR15の回収をもって撤退します。

総司令はヤン・ウエンリー提督、航空戦闘管制は雪風。

05:00以降無線封鎖を実施、ヒューベリオンによる大規模ECMを起動します。各隊はM4、FALそれぞれの指揮に従ってください。

航空戦隊はデータリンクによる統合指揮の下、戦隊長の指揮下にて作戦行動をとること。

以上、作戦の確認を終了します」

カリーナが締めくくる。質問はなかった。

「やあ、こうして君と話すのは何回目かな」

ヤン・ウエンリーはヒューベリオンの格納庫にいた。

目の前にあるのは、雪風。

「またあんたか」

雪風のkokopittoから顔も見せずに声が響く。

深井零だ。

「君には本作戦の空を全て見通してもらわないといけないからね。必然、君との会話は

必須というわけだよ」

零はチェックをしながら返す。

「おれは何もしない。雪風はおれより優秀だ」

可動翼、武装、油圧、電装。膨大なチェック項目は、出撃がない日の業務の大半を占める。

「そう、それなんだ。実は、この雪風だけは、他の機体と違うからね。まだ覚えているよ、あの日を……」

ヤンは、半年前のある日を思い出していた。

ヤン・ウエンリーがこの世界に来てから1年が過ぎ、M4や417たち新規の戦術人形とも絆を深めていた時のことである。

ヤン・ウエンリーはFALとネットワーク構築についての話をしていた。

「君のデータリンクを使うのはいいとして、機体はどうするんだい」

「問題はそこなのよね。今は冬。物資の輸送なんかも滞り気味だし、まして工廠なんか戦闘機を作るだけのノウハウなんてないし、戦闘機のスペックデータはあっても図面は大体が大戦で消失。割と八方塞がりだわ」

ヤンとFALはいつも頭を悩ませている。

ひと休憩、と紅茶をすすするヤンとFAL。腕には猫。

そんなのんびりとしたひとときを過ごしていたヤンとFALの耳に、鼓膜を裂くような甲高い高音が響く。

それはまるで不死鳥の叫び、極寒の雪を運ぶ絶対零度の風。だが、吹雪ではない。

「何!?!」

「ジェットエンジン?」

「こちらFAL、司令室、今の音は何?」

しかし、FALの声は司令室に届くことは無かった。

ザーザーというノイズのみが響く。

「司令室と連絡が通じない……やられたの?」

「いや、違うだろうね」

ヤンには覚えがある。情報戦の果てに訪れる未来。ECM電子妨害手段に對抗するための

ECM対電子妨害手段、ECM対電子妨害手段に對抗するためのECM対電子妨害手段……際限ない妨害競走の果てに訪れた

のは、伝書鳩や犬、人間による情報伝達。

「大規模なECMだ。おそらくは対人殺傷クラスの出力だろう、装備無しでは君たちも

危ない。外へは出ない方がいいよ」

ヤンは館内放送のマイクを取る。

「こちらヤン・ウエンリー。各員に告ぐ。コンクリート製の建築物より外へ出ることを禁ずる。」

現在、当基地は大規模なECMの影響下にある可能性が高い。

この出力は前例がない、無闇な行動は控えるように。カーリーナは執務室へ」

「戦術人形でも耐えられないECMなら、どう対抗するのよ」

「ん？そりゃあ古典的な方法さ」

FALは目を丸くした。ヤン・ウエンリーが執務室へきたカーリーナに言っけて持っけてこさせたのは、シグナルランプだった。

「そんなものどうするのよ」

「君も聞こえただろう、あの耳を劈くような爆音。あれは、ジェットエンジンの音だ。航空機だよ。それも、これだけ大規模な電子兵装を備えた、ね」

「鉄血が航空戦力を保持している、ということ？」

「いや、それは考えにくい。なぜなら、鉄血の思想的にはECMを作動させるよりも爆撃や銃撃みたいな直接手段をとる可能性が高いからね」

「じゃあどこだって言うのよ。軍？」

「いや、たぶん……」

そこで言葉を切ったヤン・ウエンリーは準備が出来ましたわよ、いつでもどうぞ、と

差し出したカーリーナに答える。

「私とその信号灯の使い方を知っているとでも思うのかい……」

「提督、一応軍人だったんじゃないんですか？」

結局、操作するのはカーリーナなのであった。

? Catch the optical morse code?

「モールス信号だと? 出せ」

雪風の機上で零は雪風からのメッセージを受け取る。

FRXの試験フライトを1週間後に控えたある日のフライトで不可知戦域と同じようなシヨックに襲われた零と雪風は、あの時同様フェアリーではない空を飛んでいた。

? This is Griffon 13th Brigade Base. I
dentify yourself and your rank?

こちらグリフィン第13旅団基地。貴機の所属と階級を名乗られたし。

「グリフィン第13旅団? どこだ、それは」

? Unknown. Not applicable to the database?
ase?

不明。データベースに該当なし。

続いて続報が届く。

? We have no A A defense network or a
power. We have no intention to engage
in war?

当方に対空防衛網・航空戦力なし。こちらに交戦の意思はない。

「フムン」

確かに、雪風の機上から見える基地には対空砲やスクランブルが上がる様子はない。

「どう思う、雪風」

? No A A contact at the base. We're sup-
posed to believe it?

基地に対空反応無し。信じていいと思われる。

「おれもそう思う。一応返信し、降りるぞ、雪風」

? ready?

滑走路はないが、広大な駐車場らしき空き地が見える。ヘリポートに隣接したそれは、おそらく格納庫に繋がっているだろう。上空で大きく旋回し、態勢を整える。進入仮想線に乗る。

ギアードダウン。エアブレーキを僅かに開いて速度を調整。

40度のバンク角で旋回降下。

半周する間に高度が5割ほど、さらに4分の1周でその半分。

高度700m。空き地がいい角度で見えてくる。

ファイナルアプローチ。フラップダウン。ピッチ調節。グライドスロープはないが、目測、雪風の計器とともに適正。

降下率、26m/分。少し高い。地面効果で機首が浮く。普通より、ほんの心持ち弱い。

タツチダウン。時速180kmで流れる地面は、フェアリー基地とおなじコンクリート製。

零は、アーマメント・コントロールを切らずにトウブレーキを踏んだ。

「へえ、随分と大型だね」

執務室の窓から見える駐車場。そこには、大型の戦闘機が着陸していた。ヤンも実物の戦闘機を見るのは初めてである。

「あれは……スパーシルフ？なんであんなものが……」

FALが指摘するのももつともである。

鷹のように反った機首は威圧的な印象を与えるが、それ以上に機体の美しさが目立つ。

妖精のモチーフとブーメランが描かれた双垂直尾翼。

翼端の折れたカナード付き後退固定デルタ翼、ベントラルフィンの位置には今は折れて格納してある巨大なセンサーブレード。

ラプターやライトニングのようなエアインテークとエンジンノズルは2次元形状。

機首には白く雪風という漢字が達筆で描かれている。

「ステルス機ではないね。見たところ、大型の戦術戦闘機みたいだが」

「この前話したでしょう。あれが、シルフよ」

「そうだっけね」

「返信がありましたわ」

「読み上げてくれ」

「こちらFAF特殊戦第5飛行戦隊所属、パーソナルネーム雪風。こちらにも交戦の意思はない。話し合いを希望する」

コクピット・キャノピーが開く。

パイロットスーツを着た人影が一人、銃を取り出して周りを警戒している。EMCは

弱くなっているが、まだ通信には影響がある。

「FAL、カリーナ、来てくれるかい」

「まさかとは思うけれど、会いに行くの？」

「そりやあ当然だよ、こつちが招いたんだからね」

外部環境は地球のものに近い。僅かに放射線量や各種有害物質が多いが、誤差の範囲だ。

零は銃を取り出し、周りを見渡す。

部隊が出てきて取り囲む様子はなく、建物のドアが開いて3人の男女が出てきた。

軍服を着て、おさまりの悪い黒髪をベレー帽で押さえつけた男、デザインは違うが軍服を着崩した金髪の少女、腰に銃を下げて油断なくこちらを見据えるジャケットにスカート姿の女性。後者は片目に赤い縦一線の傷跡が走っている。

「私はヤン・ウエンリー。先程も言ったが、こちらに交戦の意思はない。とりあえず、エンジンを切つて降りてきてくれないかな」

アイドリングするファイニクス・ターボエンジンの音で途切れ途切れだが、声が聞こえる。

「雪風、電装はオンにしておくからあとは頼んだ。危ないと思つたらお前の判断で行動

しろ。ユー・ハヴ・コントロール」

? I have control / be careful... S L t. F u k
a i ?

雪風はエンジンを切つていても電装系をオンラインにしておくことが出来る。もつとも、バッテリーに限りはある。

だが、雪風なら大丈夫だ。

「貴様は何者だ。ジャムか」

「人間だ。そうだな、端的に言えば、おそらく私は君と境遇を同じくする者だよ」

「なんだと」

銃を下ろしてジャケットのポケットに手を突っ込んだ女は、興味なさげに周りを見渡している。

「思うに、君はこの世界の人間じゃあないんだろう？ 私もだが。君がグリフィンという組織を知らないように、我々もF A Fという組織を知らない」

隣に控える少女が、きよろきよろと雪風を眺めている。

そんな少女を窘めてヤンと名乗った男は、少女に1枚の紙をもらった。

「まあ、信じるかどうかは別にして、補給や整備などの当てはあるのかい」

「ない」

ひらひらと、その紙をヤンは振ってみせる。

「実は、私はこの基地の司令官でね。君とその機体の整備と補給をやらせる権利がある」
差し出されたその紙を零は受け取る。

言語は英語だが、文法がおかしい。

そう思ったところで、零は齟齬の原因に合点がいった。

フェアリーではもう30年もジャムとの戦争を続けている。公用語は元々英語だったが、いつしか邪魔な形容詞などが削ぎ落とされ、フェアリー語というべき言語になっていた。

「どうかな、悪い話ではないと思うがね」

他に選択肢はなかった。

最初はジャムかと疑っていたが、雪風は否定した。

であれば、最低限雪風と自分の安全が守れるここに居るのはありがたいことではある。

幸いなことに、ジェット燃料や各種弾薬、整備なども請け負ってもらおうことが出来た。もちろん、タダではなかったが。

「特殊戦のようなシステムを作る？」

「そうだ。こちらの歴史は話した通りだが、航空優勢は今ならばとる事が出来る。しかし、ノウハウが無くてね。力を貸してほしい」

「そんなこと」

知ったことか、おれには関係ない、と言おうとしたところで零は思いとどまる。

いかに冷徹なブーメラン戦士と言えど、さすがに恩を仇で返しすぎだ。なんといつても、零はここ数日タタ飯食らいであり、雪風の整備なども設備を貸してもらわねばできなかつたことだ。

「……わかつた。帰る方法が見つかるまで、協力しよう」

「助かるよ」

「恩くらい返す」

「差し当たり、細かいことは私は分からないから、カーリーナとFALと進めてくれ」

零は思わず口を開けた。

零の直属の上司はブッカー少佐だったが、司令官はクーレイ准将だった。彼らは、ここまで無責任な——もちろん仕事を押し付けられることはあつたが——指示は出さなかつた。

「3日ぶりね。FALよ、よろしく。ああ、指揮官は気にしないで。いつもああだから」

「聞こえてるよ」

「聞こえるように言ってるのよ」

「おふたりの夫婦漫才は気になさらないでください、カリーナです。カリンとお呼びください」

あの日いた2人の女性。カリーナと名乗った方は秘書のようだが、FALと名乗ったのは明らかに軍人然としている。

まあそんなこともあるか、と納得することにした零は、

「深井零少尉。雪風のパイロットだ」

と改めて名乗った。

それから、第13旅団は著しい戦力の強化を遂げたのである。

深井零とスーパーシルフ・雪風の存在は嚴重に秘匿され、グリフィン上層部とヘリアン、基地ではヤン・ウエンリー、カリーナ、FAL、それと少数の整備班・開発班のみが関わっていた。

他の基地整備や警備などの部隊は、ヤン・ウエンリーとグリフィン上層部の指示の元、自分たちがなんのためになにをしているのかは知らされずに作業を続けていた。

手始めに、スーパーシルフの増産である。スーパーシルフは構造的には大型で高出力、高度な電装を備えた戦闘機に過ぎない。機体を成型するのは簡単だった。

電子頭脳に関しては、予定通り編成拡大したFALのサブ・コアプログラムユニットを搭載した。

最大の問題である通信に関しては、雪風がもたらしてくれた技術が役に立った。

司令部と作戦空域の間に一定間隔で通信ユニットを置き、さらに雪風と戦隊機をデータリンクで結ぶのだ。

このデータリンクは通常のバースト通信ではなく、プログラムされた光・空間放射データリンクである。

スーパーシルフなどFAF機に搭載される空間受動レーダーを利用し、γリンクなどの軍事規格の戦術データ・リンクに探知できない方法でのデータリンクである。

この方法ならば、FALは超長距離戦術人形データ・リンクという超負荷の行為を實施せず、雪風から通常よりやや長い程度のデータ・リンクを行うだけで良い。

もちろん戦闘機に最適化したFALのコアユニットは戦術人形としては使えない。だが、負担は大幅に軽減された。

スーパーシルフ・雪風の随伴付きで戦術戦闘と電子偵察、空戦のイロハを叩き込まれた4機のスーパーシルフはそれぞれがネットワークの構築と戦闘教練を行った。戦闘機用に最適化されたFALのコアユニットをもとに新造されたシルフィード用電子頭脳が20。さらに制空戦闘機用に新造されたものが20。

それが3ヶ月ほど前のことである。そこから3ヶ月、鉄血の巨大砲と対空火器があるエリアで撃墜されたものはあるが、全て塵まで細かく自爆したため今のところは情報漏洩の心配はない。

撃墜されたスーパーシルフが2機、シルフィードが4機、スパルタニアンが2機。

さらに、ヤン・ウエンリーはF A Fの保有する巨大原子力空中航空母艦バンシーにヒントを得てリサイズした空中母艦を造った。

サイズは全長423 m、全幅1,150 m、自重5,560 t、主機は太陽光・風力発電を元にするレーザー電子波動エンジン6機で、補機として14機のターボプロップエンジンを搭載している。

元のバンシーが全長687 m、全幅1,400 m、自重は9,650 t、搭載機40機に達する巨大航空機であり、原子力タービンエンジン16機を搭載する機体であることと比べれば、ひとわりほど小さめに設計されている。

バンシーは地球ではなく惑星フェアリイを飛行するため原子力エンジンを搭載していたが、こちらは地球である。また、物資にも限りがあるため可能な限りクリーンに飛べる機体が必要だった。

そのために開発されたのが、レーザー電子波動エンジンである。太陽光や飛行時の高度の風力などを利用して発電し、エネルギーをエンジン殻内部で電子波動粒子に変

換、巨大なエネルギーを取り出すというものだ。

そして、AR15の救出作戦当日を迎えた。

5月22日。まだ日の明けない夜闇、旧ゲルタ要塞上空にグリフィン第13旅団旗艦ヒューベリオン率いる33機の編隊が進攻する。

ヤン・ウエンリーはかつてのように指揮卓に行儀悪く胡座をかき、面白くもなさそうな顔でモニターを眺めている。

「カリーナ、時間だ。各員に通達。作戦を開始せよ」

「かしこまりましたわ」

ほぼ同時に、鉄血の対空リーダーサイトが編隊を補足する。

<索敵班より各員。>

ロングレンジ・リーダーにボギー確認。報告にあつた戦闘機編隊。さらにその後方に巨大な機影1。こちらへ進行中。速い。ブラボー3スリーナイナーより接近中。ターゲット15。こいつは囷だぞ。テンエイト10-8よりさらに18。高速タイプが11、格闘タイプが22

>

<了解ラージヤ。各員対空戦闘用意。装甲車部隊は目標への火力投射を維持せよ>

05:00。

作戦開始時刻、カリーナは各戦隊長にシグナルを送る。制空権の確保のため、雪風率いる妖精たちが峡谷へと飛んでいる。

彼らに電子制空戦闘を開始するよう通達する。

目標要塞まで10km、作戦時間ぴったりに敵短距離防空圏内に進入した編隊は自機を守るために無線封鎖に入る。

データリンク経由の戦隊機間通信は開いたまま。

同時に、ヒューベリオンは大規模ECMを起動。そのECMを契機に、戦端は開かれた。

高高度を飛行する雪風の指揮のもと、シルフィード・スパルタニアンの混成編隊は峡谷の鉄血機械化師団を空襲する。

<B-3より各機。ターゲット視認。敵部隊は情報通りに展開している。事前の作戦通り交戦せよ。オールウェポンズフリー>

各戦隊長は部隊機に指示を出す。

シルフが長距離空対地ミサイルを発射する。同時にスパルタニアンが中距離空対地ミサイルを抱えながら大型目標を狙う。

シルフのミサイルはS A M陣地を^{地对空ミサイル}捕捉。

高・中高度防空

HIMADは戦闘機や弾道ミサイルの衰退と共に廃れ、アベンジャー防空システムや近距離防空

SHORADが部隊防空の手段となっている今では、FAFの使用するもののレプリカに近い高速・長距離のミサイルを迎撃するには気付くのが遅すぎた。

イーリス・アショアなどの陸対空防空網などは以ての外であり、SAM防空網の崩壊により鉄血は従来のな火砲による対空防衛を余儀なくされる。

05:05。

高射砲・対空砲による近接防空の圏内に侵入してきたスパルタニアンに対し、第22鉄血機械化師団第7連隊は対空砲火を開始。

05:08。

長距離空対地ミサイルを発射した後、制空権を確保したシルフィード・スパルタニアン編隊は上空で航空支援体勢に入る。

対空砲火の届かない高空に位置し、必要とあればミサイルを放つ。そういう位置に陣取っていた。

05:10。

対地攻撃の成功の後にシルフの高精度カメラが捉える敵に対しヒューベリオンは長距離砲撃を実行する。弾着観測射撃。

砲火の光に照らされて、第7連隊の背後に迫る歩兵部隊が存在した。

グリフィン第13旅団と第22鉄血機械化師団の激突の緒戦は第13旅団の奇襲成功を持って、両軍の通常戦力同士の衝突へとその様相を移していく。

作戦開始から、15分。

FAL率いる歩兵部隊は、敵装甲車部隊との交戦に入っていた。

「気をつけて！遮蔽はそんなに強度がないわ！」

装甲車や戦車部隊は必ず歩兵の随伴を持つ。ヒューベリオンの砲撃は歩兵部隊の近くには落とせない。自然、高脅威目標である中核に集中する訳だが、敵布陣の外縁部と言えども歩兵部隊と装甲車部隊との戦闘である。

先手を取れたとはいえ、FALたちグリフィンの方が分が悪かった。

砲火に晒され身動きが取れないユニット5、6、7の援護のため、ユニット4、FAL・ユニット10・11、QBU、NTWらは敵装甲車本体への攻撃を開始する。

「弱点がバレバレよ、可哀想なくらい」

”バトルストップ”、FALの持つライフルグレネードから3発の榴弾を連発する。装甲車の軌道下に潜り込んだ榴弾は射線を変えようと画策していた装甲車3台をその場に釘付けにする。

「つかまえた！」

” 乱石穿空”、QBU—88は弾倉にチャージしたエネルギーを放出する。装甲車1台に対して射撃を行い、貫徹した弾頭から子弾がばら撒かれる。起爆。

「NTW！」

「ああ。私を敵に回すとは……浅はかなヤツめ」

轟音が暁の渓谷に響く。世界最大級のアンチマテリアル・スナイパーライフルは、その名に恥じぬ威力を発揮した。

口径20mm、使用弾薬は20×82mm。航空機関砲をぶち込まれるようなものがある。

さらに、NTWはその射撃をリロード再装填を挟んで計5回繰り返した。

ハーグ陸戦条約は現在でも有効ではあるが、戦いの主役は人間ではない。従って、”
不必要な苦痛”ではないというわけだ。

05:22。

計3台の装甲車を3名で仕留めた分遣隊ユニット4—9は六角形状に広がった隊列の一角を喰い破り、ゲリラ的な近接戦闘を開始した。

「まばたきしないでね！」

「夜だからって油断は禁物だよ！あつ、みつけた！撃つちやえー！」

「きみたちよりボクのほうが、ずっと先のことが見えています……！」

装甲車の窓からグレネードを投げ込み、近くの歩兵をマチェットで薙ぎ払ったFALは崖の下を覗く。

下では、Vector率いるユニット1、2、3はFAL達より5分ほど早く交戦に入っていた。

「こちらVector！近接航空支援を要請する！」

渓谷下部で戦闘しているVectorたちは、ユニット10や11の遠隔支援が届かない。FALの榴弾やNTWといった決定的な決め手に欠けるユニット1―3は、スパルタニアンの近接航空支援を元にした作戦行動計画を立てている。

<こちら雪風。ターゲットを指示せよ>

激戦の渦中、Vectorは堪らず近接航空支援を要請した。

各部隊長は隊員に近接航空支援用のマーカーサイトを起動させる。

そのマーカーを追尾するようにセットした空対地ミサイルをスパルタニアンが放つ。ターゲット3。

その様子を、雪風は冷徹な目で捉えていた。

<着弾3。効果あり>

「助かったよ！」

「こんなに楽なのか、航空支援って……」

「今だ！スモークを炊いて突っ込め！」

車両の足止めと敵随伴兵をターゲットにしたSMG、SGサブマシンガンからなる近接戦闘部隊は着実に敵を屠っていく。それを援護するエンフィールドライフルからRF部隊。

「逃げてでも無駄よ！」

Vectorは火炎瓶を投擲し、歩兵部隊の退路を塞ぐ。

峡谷の機械化師団は崩壊しつつあった。ヤン・ウエンリーの時間差かつ種類の違う、しかし止むことの無い攻撃に、物量だのみで戦術戦闘経験の浅い鉄血機械化師団は打つ手がなかった。

押し返そうとすれば退かれ、攻め込もうとすれば伸びた戦線の僅かな隙をピンポイントで攻撃される。しかし退けば集中砲火を食らう。

一見ゲリラ的な戦闘に見えて組織的な戦線同士の競合コンフリクトは、鉄血の各部隊長の混乱を招いた。

そして、混乱は指揮系統の乱れ、さらに戦闘効率を低下させる。

徐々に戦線を縮小させ、守りを固める各部隊の動きを写すモデルを見て、ヤン・ウエンリーは眩いた。

「どうやら勝てそうだ」

さらに、ヤン・ウエンリーは指令を下す。

「カリン、ユニット8、9を敵右翼へ。11の支援をつけるんだ。」

5-7はそのまま陣形を保って直進、中央で分断して右翼側に火力を集中。

左翼側は艦砲とシルフのミサイルを3発ほど撃ち込む」

機械化師団は固めた守りをさらに細かく分断され、分隊ごとに撃破される。

そして、上空のMC-130JコマンドローIIでは、M4たち特殊分遣隊が降下の時を待っていた。

04:55。

<旧チャイニーズ上空、高度3万フィート>

<間もなく鉄血支配領域に近づきます>

降下オペレーターからの連絡が入る。機体後部の格納庫で、M4A1、HK417、グリスリー、さらに本作戦から第13旅団に加入したP90と100式が降下の準備を行っていた。

<降下20分前。機内減圧開始>

降下作戦用の野戦服とヘルメット、マスクを身につけた5人はまさに特殊部隊という

出で立ちである。

機内の壁に据え付けられた椅子に腰かけるM4の顔は、極めて深刻なものである。そして、隊長の態度や雰囲気というものは得てして伝播するものでもあった。

「隊長、もう一度作戦を確認しましょう」

100式の声に、我に返ったようにM4は隊員たちの方を向く。

「え？あ、ああ……作戦は、まずARR15の所在を確認するところからです。おそらく当該要塞の中にはまだ敵は侵入していないと思われるので、ARR15との接触にさえ成功できれば第1段階はクリアです」

「ARR15はIFF識別はできるのでしようか」

417の疑問はもつともだ。現在に至るまで孤軍奮闘を続けてきたARR15だ。迫り来る部隊は全て敵、と認識していてもおかしくはない。

「そこは私が何とかします。問題は、目標を確保したあとです。離脱ポイントは要塞から出て北に2kmの地点です。そこまで、誰も欠けることなくたどり着きましょう」

「まっかせてよ！特殊作戦ならお手の物だよ！」

「が、がんばります！」

「まあ、適度に気を抜いていこう」

「ですね。隊長も、もう少し肩の力を抜かないとです」

<装備チェック……自動開傘装置のアーミングピンを外せ>

<よし、準備はいいかい>

「提督」

<高気圧、以前目標地域に停滞中。雲底高度・視程無限
CAVOK!>

<いいね、視界は良好だよ>

「提督!」

<酸素ホースを機体のコネクタに接続>

オペレーターの指示が続く。まもなく、彼女たちは戦場へと降り立つのだ。

<既に作戦が開始されている。状況は我々の優位に進んでいるよ。FALたちは鉄血の封じ込めに成功している。あとは君たち次第だ>

ガチン! という音と共に格納庫の減圧が終了し、オレンジのランプが点灯する。

<機内の減圧完了。酸素供給状態確認>

<降下6分前。後部ハッチ、開きます>

轟音を立ててハッチが開いていく。隙間から入る冷気を纏う風よりも、強烈な光が5人を照らす。

<日の出です……>

暁は過ぎ、日が昇る。

その地平線の彼方、高高度を飛ぶ巨大な機影が見える。
 ヤン・ウエンリーの座乗艦、ヒューベリオン^{高みを行く者}。

<外気温度摂氏マイナス46度>

<降下2分前。スタンドアッポ^{起立せよ}>

<時速130マイルで降下する。風速冷却による凍傷に注意してくれ>

<降下1分前……後部に移動せよ。酸素装置^{ベイルアウトボトル}作動>

バンジージャンプやヘリコプターなどといった高さではなく、もはや大地がただの広い板のようにみえる程の高空。後部に移動すると周りがよく見える。

どこまでも続く大地、国境のない地球。

空を見れば編隊を組む風の妖精^{シルフィード}、さらにその高みに小さくあるのは雪風。

下を見れば、煙と炎。空を飛ぶスパルタニアン。

本来人がいるべきではないその高みの暴風に抗って、彼女たちは前に進む。任務のために。仲間のために。自らが信じるもののために。

踏みしめるその1歩が、始まりの1歩であると信じて。

<降下10秒前。スタンバイ>

<オールグリーン^{全正常}。降下準備>

オレンジのランプが緑へと変わる。朝日に照らされ、高みから血と泥と硝煙煙る戦場へと。

<カウント 5…4…3…>

M4は、そつとグロープに包まれた拳を握る。直下、30000フィート先の戦友を見る。別れたあの日からずっと探していた、そしていまわずかに30000フィート先にいる、仲間の元へ。

<2…1——>

<さあ、鳥になってくるんだ。幸運を祈る>

ヤンの言葉に決意を新たに、口を固く引き結んだ特殊分遣隊の面々は、ハッチの床を蹴る。

高高度からの自由落下。
フリーフォール

今、彼女たちは闘いの大地へと飛び込んでいく。

クリアランス・コード認証。貴方をグリフィン関係者だと確認しました。ようこそ、第13旅団戦術データベースへ。

アクセス承認。当該戦術人形のデータを表示。

万が一、戦術人形のスペックなどに興味が無い場合、スキップしてください。

No. 002

NAME: ダネル NTW-20

Call sign: "Cherubim (2)"

グリフィン第13旅団第1部隊所属、アンチマテリアル・スナイパーライフル。アフリカから戦地を転々として東部戦線まで流れ着き、第13旅団に配属。

Weapons Specification:

南アフリカ共和国

アエロテクCSIR、ダネル・ランド・システムズ

対物ライフル

口径: 20 mm

銃身長: 1000 mm (NTW-20)

使用弾薬: 20 x 82 mm (NTW-20)

20 x 110 mm (NTW-20x110)

0)

装弾数: 3発+1

NTW-20x110のみ単発

作動方式：ボルトアクション方式

全長：1795mm (NTW-20)

重量：26000g

銃口初速：720 m/s (20 x 82mm)

820 m/s (20 x 110mm)

有効射程：1500m

Doll's Specification:

CQB戦：C

近接格闘術：B |

射撃：特A

体力：A+

機動：C |

爆薬取扱：B |

編成拡大：可 (未実施)

医療：B

諜報：B+

研究開発：A

NTW-20。第5世代型戦術人形。本来ツーマンセルで運用する武器を1人で運用するため、とんでもない重さの銃を1人で何キロも持ち歩く剛力をもつ。射撃特化型。

その火力は比類無く、個人携行武装として撃ち抜けないものはない。

電源：戦術人形用固体クアッド高分子形燃料電池スナイパー・カスタム+RF専用LRDSチャージャー

駆動骨格：第5世代型、SR戦術人形用駆動骨格・AMRFカスタム

FCS：053AN06 Ver. 2

センサー：第5世代型デュアルカメラアイ・スナイパーカスタムb（グレー）、第5世代型聴音センサー、第5世代型嗅覚センサー、第5世代型味覚センサー、第5世代型触覚センサー

電脳：戦術人形用・????????

生体パーツ：右手第1、第3指、消化器系、左腕部、生殖系・1部循環器系

通常武装：本体

Lv65。

世界最高峰の火力を持つ対物ライフル。

極めて過酷なスナイパーという役割を、弾薬合わせて30kgを越す銃を持ち歩く任

務の性質上、スナイパーの戦術人形の中では生体パーツが極めて少ない。

トリガーと調整用の右手指、射撃の衝撃が直接当たらない左腕、内臓機能が生体パーツになつてゐる。

駆動系、センサー系ともに射撃特化となつており、近接戦闘には向いていない。

S k i l l s :

1. ブロックショット

スキルCT終了後にチャージを始め、1秒毎に1回だけチャージし、最大7回までチャージされる。

スキルを使用することで1. 5秒かけて、最も近いターゲットへ照準を合わせ、

そのターゲットにチャージ数に応じて3. 4〜8倍のダメージを与える。

ダネルNTW-20の最大火力を發揮するスキル。

戦闘時にもみ稼働するLRDSチャージャーを使用し、専用機構にエネルギーをチャージする。そのエネルギーは弾丸の運動エネルギーのみならず、弾丸が着弾した時にHEATやマイクロミサイルのようにいくつかのバリエーションで炸裂する。これは任意で選択ができず、チャージャー妖精の気分による。

この一撃を防ぐことができるのは、大出力フォースシールドを備えた人形か、厚さ最低50mmの鉄塊、偏向障壁を持つ兵器のみである。

St. 4 オペレーション・ベテルギウス——血と泥

「AR15?」

「はい、私たちAR小隊がバラバラに離脱した時に一番近くに離脱したはずの戦術人形です」

2月。M4A1はヤン・ウエンリーにAR小隊のことを話していた。

「いまのところ、情報も上層部からの指示もないね。他には誰かいるかい」

「AR小隊は総勢4名、私、ST AR15、M16A1、M4 SOPMOD II」
「ふむ」

鉄血に対抗するために編成された小隊のメンバーである以上は早急に発見・保護しなければならぬ。

しかし、足取りは掴めていないのが現状だ。

「ヘリアン女史曰く、精鋭部隊がAR小隊のメンバーを搜索しているようだ。私たちにまだ何も指令は出てないがね」

「そうですか……」

「まあ、悲観しすぎることも無い。鉄血が捕縛か破壊に成功していれば、少なからず情勢は動くはずだよ」

「……」

「提督さま、FALさん、M4さん、よく聞いてくださいね」

カリーナが薄暗いヒューベリオンの作戦司令室で話す。

ARR15救出作戦のブリーフィング直後のことだ。

「先程の作戦の詳細をお話します」

「まあ、裏があるだろうとは思っていたけれどね」

「茶化さないでください、提督」

「これが成功すれば、我が第13旅団は正式にグリフィン陸軍司令部と特殊作戦コマンド司令部の下を離れ、独立部隊として承認されます」

「まるで貞淑ヴァーチャスマッションな任務ね」

「気を抜かないでください、あくまでも大規模な実戦です」

「わかつてるわよ。で、内容は？」

「はい、約1年半前のことです。グリフィン&クルーガーの特殊作戦司令部隷下、特殊作

戦群にとある最新鋭部隊が設立されました」

「A R 小隊……」

A n t i - R a i n

「そうです。A R 小隊は16Lab 謹製の最新型で、戦果も上々。ある日も作戦を問題なく遂行した帰途、不明部隊の襲撃を受けました」

「襲撃？データドライブには襲撃者の情報とかは入ってなかったの？」

「A R 小隊は最新型ではありませんが、使用する装備は現行システムに則る必要があります。そこで、作戦行動中は我々のように独スタンドアロン立な行動をとっています」

「なるほど、そのデータが無いということは他の隊員が気づいてなんとかM4だけを逃した……」

「そうなります」

「M4のデータドライブに記録されていたのは、四方八方に散るA R 小隊の隊員たちの足音と銃声のみ。そして、それから数日後に……」

「私たちにM4保護の指令が下った、と」

ヤン・ウエンリーが締める。

グリフィン&クルーガー社、ひいては現在の戦術人形の最先端を走るIOP社先進技術研究開発部「16Lab」の粋を結集したAR小隊が応戦の間もなく、敗走を余儀なくされたという事実は、FALの交戦記録にあつたポンチヨ姿の正体不明の人形とも関わりがある可能性が高い。

最前線の戦術人形の中でもFAL^{FN}やG3^{H&K}M1^{G3}AK-47^{ガ1ランドカラシニコフ}等世界でより多くの戦場を経験してきたもので、戦術人形としても優秀な戦果を収めてきたものたちはIOPの想定を上回る性能を発揮する。

これは、IOP製の戦術人形に搭載されたシステムと人形本人の経験によるところが大きい。

ASSTと呼ばれるそれは、戦術人形と使用する兵装である銃をリンクして、簡単に言えば作戦遂行能力を大幅に上昇させるものである。

近くの敵の銃口の向きの把握、射撃精度、銃の特性に合わせた能力の向上。

例えば、ハンドガンやサブマシンガンは機動性とストッピングパワーに長ける。

スナイパーライフルは高精度な狙撃能力とスポットター無しでも狙撃任務を遂行できる他、ショットガンは高耐久性と敵のノックバック性を持つ。

アサルトライフルは最も平均的であるが、それぞれの銃に従って特性を付与される。

FALであればゲリラ戦や市街地戦などのマルチロールであるし、M4A1では高度な戦術柔軟性を持つ。

NTW-20では本来の銃としての歴史よりもバージュンアップが図られており、もともとスナイパーとスポッター二人で運ぶ必要があつたものが戦術人形一人で運用可能になっている。

今現在では、小康状態の戦線であるが、M4救出作戦での敵戦力を鑑みれば悠長にしている暇はないと言える。

早急にAR小隊を再招集する必要がある。

その中でも、AR15救出作戦は急務であることは言うまでもなかった。

広い空へと羽ばたいた特殊分遣隊は頭から自由落下。

陽の光は熱を持つが、それ以上に寒い。風が服を冷やし、服は肌を冷やす。体熱・体内熱環境低下。気をつけの姿勢から四肢を広げ大気を受ける。減速。

そこで、部隊長M4は無線データリンクを繋ぐ。

「いいですか？ 私たちの任務は直下目標施設に降下、AR15の身柄を確保、基地へ帰還することです」

<弾の節約が大切ですね……>

「外からの支援があります、あまり気にしないでいいですよ。その支援ですが、今回ARR15を奪還できなければARR15はもちろん、外にいる第13旅団のみんなも敵増援の餌食になる可能性が高いです。

迅速に救出・離脱する必要があります。残された時間はわずかです」

<静かに、素早く、確実に、だね>

ピンを抜く。

パラシュートを開く。衝撃。体が大地へのキスを拒絶するように、天空へと引き戻されるような感覚。

「ARR15回収後、離脱ポイントで待ちます。確認後、回収用の気球が投下されます。ヘリウムが噴出し気球が膨らむまで5分……そして、気球下部のフックをガンシップのアームでキャッチし機内へ回収します」

<フルトン回収システムですね。理論は聞いたことがあります、ARR15は耐えられるでしょうか>

「安心してください、きちんとデータは残っています。衝撃はパラシュート降下時より少ないですし、アームの強度も問題ありません」

<つまり、コンバットタロン1機でこの空域に侵入するつもり?>

「あのコンバットタロンは6連装20mmバルカンカノンを二門と40mm機関砲を二門装備しています」

「戦車隊に追撃されても蹴散らして貰えそうですね」

「予備タンクの燃料を考えてもタイムリミットは4時間、順調に進めば2時間かからずに終わるミッションです」

「基地へはお昼……いや、おやつまでには帰れそうだね」

「もしスムーズに運ばなければ……おやつどころか、今後の食事は落ちてる配給だけになります」

「ぞつとしないね」

「さあ、タッチダウンですよ。こちらアヴェンジャーワン、0520、作戦規定XCに従い作戦を開始します」

M4が特殊分遣隊の作戦開始を宣言する。

銃撃と砲撃、爆音と土煙に交じって怒声が飛び交う戦場が見えてくる。空気抵抗を最大にして要塞上部構造体の屋上へと降下する。

「アヴェンジャーワン、タッチダウン」

コールサインを名乗って手近なドアの前に陣取る。

ほかの4人も次々とタッチダウン、各ドアに付く。

ここからは、部隊はエレメント単位までわかる。M4と100式のツーマンセルとP90、HK417、グリズリーのスリーマンセルの二つに別れ、AR15を搜索する。要塞の東側の階段からM4と100式が、西側の階段からP90と417、グリズリーが突入する。

「敵視認！各自の判断で交戦してください！目標には気をつけてくださいね！」
 <了解！>

どうやら敵は要塞中枢であるCICの1歩手前まで迫っているようだった。この作戦の混乱に乗じて要塞の防衛網を突破したらしく、CICまでの防衛システムは隔壁のみだ。要塞というものは、外に対しては堅いが、中からは弱い。

イゼルローン要塞などがその典型例である。
 (時間は思ったより無い……)

鉄血と同じく特殊分遣隊はCICを目指す。グレネードを階段下に投擲し、爆発より僅かに遅れて階段を飛び下りる。下の階の壁に身を預け、壁から銃身のみを出して通路を掃討する。

(AR15、カメラで見えているかな)

「サクラ4^{100式}、前をお願い！」

「ま、任せてください！」

1000式はSMG扱いだが、その真価はステンらのフォースシールドとは異なる回避型の前衛である。固有のスキル”桜逆像”サクラ・リフレクションは、ダメージ吸収シールドを貼り、その許容量を超えた場合自身の回避力を65%上昇させる。

人形のステータスは駆動モジュールやセンサーモジュールのリミッターのことであり、稼働サイクルを一時的に大幅上昇させるといいうわけだ。

一方で許容量に納まった場合、その力学的エネルギーを自身の使用する特殊炸薬にチャージし85%の効率で撃ち出すことができる。

「敵をよく狙え…弾を無駄にするな…!」

自信に言い聞かせるように呟いた1000式は、ピンク色のオーラをまもって遮蔽から飛び出し通路中央へと駆け出す。

その後ろからM4は壁についた左手の人指し指と親指で輪を作り、その中に銃口を突っ込む。精密射撃姿勢。

通路の奥からこちらに弾丸が飛ぶ。トリガーを絞る。ツー、フォー。疾走する1000式が弾を吸いながら銃をぶっぱなす。

パリン!!という甲高い音がひびき、1000式のオーラがSIO2二酸化ケイ素構造物のように物理的圧力を持つて碎け散る。

その瞬間、1000式の駆動モジュールはリミッターを65%跳ね上げさせる。

狭い通路においては慣性の法則も壁や天井を蹴り押すことで相殺できる。まるでネコ科の肉食動物のごとく鉄血に肉薄する。

「らあああああああ!!」

「あ、あれが100式……? 大戦期の子とは聞いていたけれど、あんな……」

銃を乱射して着剣した銃剣をぶつ刺し、ロングバトンのようにくるくると回しながら駆ける100式。彼女は旧日本帝国陸軍が制式採用した唯一の機関短銃である。大和魂、とでもいうのだろうか。

通路を制圧した100式の後を追ひ、さらに迷路のような階段や通路を抜けCIC前の隔壁までたどり着いたM4。30秒ほど遅れてグリズリーたちが合流する。作戦開始から15分ほどが経過していた。

「待っていてください、今開けます!」

そう言って417が抱えていたバッグからレーザーカッターと包み紙に包装された塊を取り出す。

「え、えい!」

気の抜けるような掛け声と共に417がぺたりと隔壁に張りつけた塊。

「イエーガー3、これで開くの……?」

「いいえ、これじゃあ開かないですよ。これは成型炸薬なんですけど、雪風さんから貰っ

たデータで作った新型炸薬なんです。今までユゴニオ弾性限界を超えるまでに必要だった圧力を満たす爆発に要る炸薬の量の、なんと4分の1の炸薬で2倍の効果が実証されています」

「えつとー、つまりこのブラボー^P5ちゃんにも分かりやすくいうと…?」

「コンパクト、大爆発! です」

「そりゃすごい」

「中の人は大丈夫なの?」

「大丈夫です、隔壁から2 m以内に立っていないければ衝撃波がちよつと痛いだけです。

隔壁の真ん前は……多分大丈夫です」

「イエーガー、やっってください」

「はい!」

全員が遮蔽の陰に隠れたことを確認した417は、スイッチを推す。

壁にぺたりと貼り付けられた袋の中の筒はいくつかの層に別れている。隔壁に近い方から空気、金属製のライナー（すり鉢状の板）、高性能炸薬、火管。その火管が炸薬を爆発させる。

炸薬の爆発はすり鉢状のライナーのユゴニオ弾性限界を突破し、ライナーは液体に近いメタルジェットになる。

爆発の衝撃波はさらにすり鉢状の筒内壁に反射しドーナツ状に空間を進み一点に収斂する。そして、そこにあるメタルジェットと共に前方に極めて強い穿孔力を發揮する。

隔壁はいとも簡単に貫徹され、隔壁を開けることに成功した分遣隊は突入。中でコンソールにもたれかかっていたARR15を保護する。怪我をしている。一体いつから……。

「ARR15！ARR15！聞こえる？私よ、M4A1、助けに来ました！」

「M4……？誰よ……成型炸薬なんか使ったのは……」

ARR15の言葉にM4はさつと青ざめる。

「もしかして」

ぶん、と417の方を見たM4。全く同じ速さで顔を逸らす417。

「この作りが悪いんですよ。コンソールの真横に隔壁があるなんて……」

唇をとがらせながら呟く417。

「まともに……？」

「大丈夫。でも助けに来るなら、対象のことを考えて行動しなさいよ……」

息も絶え絶えなARR15に肩を貸しながら、M4は何とか要塞から脱出することに成功する。

「ベア2、信号弾！」
グリズリー

「アイサー！」

緑の信号弾が上がる。ここから脱出地点まで2キロ、行軍だ。

平衡覚などのセンサーに異常をきたしたAR15は自分で歩くことが出来ない。時間には間に合うかどうか、と言ったところだ。

「行きますよ！」

歩兵を撃ち倒しながら進む。鉄血機械化師団が、集結しつつあった。

交戦していたFALとNTWはお互いに違和感に気づいた。

「戦線が移動してる」

「ああ、要塞上層へ向かってるぞ」

「どういうことかしら。提督？」

くそだね、アヴェンジャーたちが戦闘地域降着してからまだ20分ほどしか経っていない。

中には敵兵が既に入り込んでいて、AR15が奪還されたことが知れたんじゃないかな

「そうなるよ、こいつらは是が非でもターゲットを殺りに行く?」

<可能性は高い>

「提督、作戦の変更を具申するわ」

<どうぞ>

「私たち地上ユニットは撤退、ヴェノムで彼女たちを回収つてのは?」

<難しいね。ゲルタ要塞の周りは森だ。ヘリが降りられない>

「くう……」

<だが、今のはいい意見だ。よし、作戦を変更する>

ヤンはマイクを手取る。

「無線封鎖解除。全部隊に告ぐ。各自退却せよ。繰り返す、全部隊退却せよ」

パネル上の戦術人形を示す輝点ブリックが次々と退却ポイントに向けて撤退していく。

「カーリーナ、B-3への回線を」

「かしこまりましたわ」

「こちらヒューベリオン。B-3聞こえるか?」

<こちらB-3感度良好>

「今から指定する地点にコンバットタロンを向かわせたい。ミサイルを数発撃ち込んで欲しい」

〈なんだと？無茶なことをするな、この部隊は〉

「それがお家芸ってやつさ」

〈スパルタニアンを向かわせる〉

「さて、最後に特殊分遣隊だ。アヴェンジャー1聞こえるかね」

〈こちらアヴェンジャー1、交戦中です！〉

「聞いてくれ。今から君たちの真横の森にミサイルを撃ち込む。そこにコンバットタロンを行かせるからそこでフルトン回収してくれ」

〈コピー！みんな聞こえた…ね……いで……〉

ノイズで通信が途切れる。

「さて、ここからは私たちの出番だ。その前に、B-3」

〈なんだ〉

「直掩以外はコンバットタロン離脱後直ぐにミサイルを全弾放って離脱だ。君は最後までこの戦場においてもらうがね」

〈わかっている〉

「よし、いぐぞう」

ヤンは張り切っていた。なんというか、血が騒ぐというか、喉が騒ぐというか。えもいえぬ感覚が体を支配していた。

「全艦、総員配置につけ。繰り返す、総員配置につけ。」

砲雷撃戦用意！メインエンジン出力全開」

艦橋が凍りつく。みんながヤン・ウエンリーの方を見ていた。すると、彼の服がぼやけて違う服を着ているように見えてきたのだ。ブルゾンにスラックスから、海軍兵のコートに。中央に赤の矢印の入ったぴっちりとした服。髪型も、髪が伸びている。

「シヨックカノン方位盤作動開始、連動装置セット。主砲発射用意、目標、旧ゲルタ要塞、主砲全自動射撃。各砲連動、仰角九時から九時五分へ自動追尾、セット、20、45」

「あの、て、提督……?」

「ああごめん、なんだか体が勝手に。どうかしたのかい」

カリリーナが話しかけた途端元のヤン・ウエンリーに戻った。

「目標は下ですから、仰角ではないと思います」

「そうだったね、迎角だ。各砲門、射撃用意。コンバットタロンの離脱と共に全火力を投射する。遠慮はいらないよ」

作戦開始から、まもなく一時間が経とうとしていた。

「コピー！みんな聞こえたわね、急いでフォーメーションEを！」

「了解！」

M4率いる特殊分遣隊は要塞を離脱しようとしていた。

追撃しようとする要塞側と90度直交するラインからの二本の射線で砲撃を行う敵機械化師団の残存部隊が猛スピードで迫っている。

「こちらイエーガー3、対戦車地雷の敷設完了」

「こちらブラボー5、罠の用意はできてるよ！」

防衛体制を固めた特殊分遣隊だったが、ゲリラ戦とはいえ負傷者を抱えている状態で耐えるのは容易なことではない。

「敵視認！」

100式が接近して来る敵前衛を捉えた。

こちらの位置はまだ気づかれていない。

「こちらアヴェンジャーワン、以降作戦規定Gfに則り音声発話を禁止。データリンク通信波αV2にて交信」

＜敵を十分に誘い込んでください＞

＜かなりの規模です、再集結は済ませたのでは＞

＜それにしては少なすぎる、たぶん1番近い1部隊だけ＞

＜それでこの数!?!＞

<一応成型炸薬はまだ残ってます>

木の上や泥濘に身を隠した部隊員は油断なく銃を構える。

AR15だけはM4の迷彩ジャケツトを着せて岩陰に寝かせてある。M4はタンク
トップ1枚になり泥を全身に塗りつけて伏せている。

<サクラ4とイエーガー3は敵後方から戦術スキルを使用して一気に殲滅してくださ
い。私とブラボー5が前で陽動、ベア2は側面から援護>

<コピー>

<コピー!>

敵の車両と随伴歩兵が近づく。P90が潜む木の枝の真下で停車する。M4の左手
の前に敵の足が止まる。

<スタンバイ>

M4の視界には敵部隊の後ろの木の枝にぴったり身を寄せる100式と草むらのグ
リズリーが見える。

敵が周囲を搜索し始める。

歩き回られるとまずい。だが、まだ仕掛けるには早すぎる。

幸い、敵はジャングルを進む時の基本である間隔を無視し集団で行動している。……
ヤン・ウエンリーとFALから習うまで、対ゲリラ戦のセオリーなどは知らなかったが。

<隊長、まだですか!？>

<私たちはまだしも、隊長と救出目標が!>

<まだ!>

もつとも相手の予測が的中するか、願望がかなえられるか、そう錯覚させることが、畏の成功率を高くするんだよ。落とし穴の上に金貨を置いておくのさ。

ヤン・ウエンリーは紅茶の香りを漂わせながら呟く。

戦場における最も油断する瞬間とは、目的の達成の瞬間や、自身のプラン通りにことが進む時である。

敵が、A R 1 5を発見する。

<ゴー!>

スキルを発動させた100式と417が後方から敵陣に第1波攻撃を仕掛ける。同時に、そちらへ振り向き走り出した敵の1人が対人地雷クレイモアに引っかかり爆発。

動揺したか、急に前進した敵車両が対戦車地雷を踏んで爆発する。

隊列の後部で敵襲、中部、左翼で相次ぐ爆発により敵部隊は一挙に混乱に陥る。

後方に集中する敵部隊の背後について、立ち上がったM4はコンバットナイフで敵の肘関節、膝関節を切り裂き地面に仰向けに打ち倒したあとコアのある胸部にナイフを突き立てる。

同時に第2波、P90が木の上から乱射しながらダイブ、燃え上がる敵車両を巧みに遮蔽として使って敵を攪乱する。

敵の腰から抜いたグレネードのピンを抜き、転がして自身は真横に駆けだす。そこには、巨大な木。木の影に身を隠し、一息つくと共に隠してあった銃を手取る。

きっかり5秒で爆発。爆風と破片が飛び散るのとはほぼ同時にM4は木から飛び出して射撃。2発、3発、2発。リズム良く敵の頭を撃ち抜いていく。

<いつつ……こちらサクラ4、左腕に被弾、作戦行動に問題なし>

<ベア2、前はいいから後ろの援護を！>

<任せなよ！>

<ブラボー5！>

<前はほぼやった、あとは後ろの歩兵だけ！>

<私達も援護に！>

その瞬間、真横の森が爆発した。吹き飛ばされる特殊分遣隊の面々。爆風を切り裂いて超低空飛行で飛び抜ける前進翼の機体。スパルタニアンだ。

<みんな身を隠して、航空支援が来た！ここの部隊を倒したらすぐに離脱します！>

<私が目標を確保します！>

<おねがい、イエーガー3！>

木の幹を蹴り3次元機動で移動する417。

……忍者？

417と入れ替わりに左手をぶら下げて右手のみで射撃しながら退いてくる1000式を援護する。

<代わります、あなたも撤退地点で待機を>

<頼みました！>

木に大量の銃弾が撃ち込まれる。顔が出せない。推定5名から6名。扇形に展開している。

<ベア2！>

<見えてる>

1番厄介な木に対して角度が大きい1番左の敵の後ろにグリズリーが現れる。

<後ろに気をつけるんだね>

マグナム弾が敵を粉碎する。それに合わせてM4は幹の反対から体を出し射撃。

20秒で残敵を殲滅した特殊分遣隊は撤退地点に集結する。ミサイルの中で後発で着弾し爆発しなかったものを探す。棺桶状の箱からバルーンを取りだし、ガスを注入する。フルトン回収システムのハーネスを接続し、3―3に分かれる。あとは、無事に帰るだけだ。

残りの地雷を敷設し終わった隊員たちが帰ってくるのとフルトンのバルーンが膨らむのはほぼ同じタイミングだった。

幸いにして、先程交戦した部隊はたまたま近くにいただけで、残りの部隊はまだこちらの位置を把握しきれていなかったようだ。2 kmの行軍をする必要がなかったのは嬉しいことだ。

「帰りましょう、AR15」

「……」

ハーネスを接続する。M4はAR15を背中から抱くような形でハーネスを締める。さらにそのM4の肩に乗つかないようにして100式がバルーンを固定する。

もうひとつのバルーンには、3段ロケットのようにお腹あたりで接続した3人。下から、417、グリズリー、P90。

「こちらアヴェンジャーワン、回収を要請します」
「こちらB-3。ガンシップ接近中。上昇しろ」

地面と体を固定していたワイヤーを切り、高速で上昇する。

元々のフルトン回収システムも決して遅いといえる速度ではなかったが、ヘリウムガスの改良により（人間ではなく人形であることも相まって）高速で撃ち出されるように上昇を開始する。

視界の隅に接近していた機械化師団の残敵が見える。

こちらを見上げた、その時。

機械化師団が爆発する。コンバットタロンだ。

さらに、地雷を踏んで爆発する物やスパルタニアンのミサイル攻撃を受けて甚大な被害を被ったようだ。

衝撃が走る。ガンシップのアームにロープが接続され、プロペラに巻き込まれないよう設置されたガイドアームに沿って後部へと移動。ウインチで巻き上げられる。

「よう、よく戻った」

1時間と少し前に特殊分遣隊を見送ったガンシップの後部格納庫オペレーターだ。

「はい、ただいま帰還しました」

「ひえー、もうこんなのやりたくないよお」

「泣き言いうなよP90、飛ぶ前はあんなに楽しげだったのに」

「だって、速すぎるんだよこれ」

グリズリーとP90のやり取りを苦笑しながら見る417。微笑ましく思いつつも、M4にはまだ手当しななければならない相手がいた。

「AR15、大丈夫ですか」

そつとハーネスを外してAR15を据付ベンチに横にする。

「フルトン回収システム……よくこんな化石のシステムを持ち出してきたわね」

「提督の判断です」

「提督？ 指揮官ではなく？」

「はい」

「そう」

会話は問題なくできている。メンタルコアや各モジュールにも目立った障害は見られなさそうだ。もちろん帰って精密メンテナンスの必要はあるが……義体にも大きな損害は無さそうだ。

そつとまぶたを閉じたARR15に上着を被せ、M4は100式の腕を見る。

「大丈夫？」

「平気です。こんなの、かすり傷ですよ。手当は大丈夫です、部品がもつたいないですから」

「かすり傷……？」

どう見ても貫通銃創だ。止血こそ成功しているが、動かせるほど組織が生きているようには見えない。

「……私は、大戦期の銃ですから。ガダルカナル、ビルマ、沖縄……こんな傷、どうつてことありません」

「それでも、自分は大切にしたい。ただでさえ、被弾が多いんだから」

SMGは前線を張ることが多い。自然、被弾が多くなる。

過去を想いながら儂く笑う少女。

その笑顔の影に隠す腕は、血にまみれていた。自ら流す血、戦場の泥、銃を染める敵の血、そして味方の血。

ガンシップ、戦闘空域を離脱。周囲に敵影なし。

雪風から入電。対象の離脱を確認。

「よし、撃てー！」

ヤン・ウエンリーは高く振り上げた手を下ろす。

轟音と共にヒューベリオンの砲門が火を噴いた。

ヒューベリオンの武装は実包である。というのも、この世界では同盟軍ヤン艦隊旗艦ヒューベリオンが装備していたような中性子レーザーや荷電粒子レーザー砲などのエネルギー兵器はまだ開発段階なのだ。また、主機の出力は核融合炉ほど大きくない

め、エネルギー兵器の使用に耐えられないのもある。

そのため、重く補給も必要ではあるが実体弾を使用する他ないのだ。

航空火力としては世界最大級であるAC-130シリーズが備えているものを複数装備している。

105mm榴弾砲4門、40mm機関砲6門、30mm機関砲6門、自衛用の対空兵器。その内の主砲である105mm榴弾砲と40mm機関砲が残存する鉄血機械化師団に向けられた。

「すごい……」

「航空支援、やっぱり大事よね」

感嘆する隊員に対し、そう呟いたFAL。AC130クラスの航空支援はそう多くはない。

旧ゲルタ要塞は谷底へと沈んだ。要塞基部から丸ごと崩落していく様は、人工物の儼ささえ感じさせる。

崩れ落ちる崖から落ちていく鉄血の残骸、その上を悠々と飛び抜けるスパルタニアン・シルフィードたち妖精に守護されたヴェノム。

作戦開始から1時間と44分32秒。作戦定刻より15分28秒早い帰投だった。

「作戦報告を、カリーナ」

帰投したヤンらSTBヒューベリオン直轄部隊は格納庫ですぐさまデブリーフィングを開始した。ヘリアンが出迎え、カリーナに指示を出す。

「提督さまではないのですか？」

「この男にそんなことを期待するな。参謀だろう、貴様は」

「……」

紅茶を啜りながらなんともいえない表情でカリーナを見るヤン。どうやら本人にも自覚はあるようである。

「かしこまりましたわ。」

本日、標準時0500、我々STBヒューベリオンは旗艦ヒューベリオン以下戦闘機34機、戦術人形部隊1ユニットをもって旧チャイニーズゲルタ要塞に侵攻。

第1作戦目標、AR15の救出に成功。

また、第2目標である鉄血機械化師団の撃滅に成功しました。

AR15は疲労と損傷はあるものの大きな損壊はなく、メンタルコアも正常です。現在ドックにて修理と補給を受けています。

こちらが敵側に与えた損害は74%、うち敵戦車・装甲車は80%の撃破率でした。

歩兵部隊は42%を破壊、15%に損傷を与え、残りの部隊は散り散りに離脱。

再集結には1週間ほど、戦力が元の勢力までに戻るには半年以上かかると想定されま
す。

当方の損害は戦術人形は被撃破無し。

ダミー人形が9体被撃破、損傷を受けた戦術人形が24、内重大な損害を受けたもの
が8。

航空戦力はスパルタニアンが未帰還2。損害を受けたシルフィード・スパルタニアン
が合わせて3機。

作戦は成功と言えるかと思われますわ」

「……ふむ。新生第13旅団の任務は大成功と言えるだろうな。本作戦における航空優
勢や戦術人形の”戦術”はグリフィンのほかの部隊にもいい影響を与えるだろう。よ
くやった、諸君」

「さすがだね、みんな」

申し訳程度の指揮官からの言葉だったが、ヤン・ウエンリーの働きは大きい。戦線を
的確にコントロールし、敵を翻弄し続けたヤン・ウエンリーの戦術指揮能力は疑いよう
のないものだ。それを誇らないヤン・ウエンリーは、STBの面々から非常に好意的に
見えた。

「では、STBは再び地域哨戒に入ってくれ。ヤン提督、わかっているとは思いますが……」

「追って別命あるまで待機、ですか」

「そうだ。それまで、戦力増強や戦術訓練などを頼む。君たちは、対鉄血戦線の切り札ジョーカーともいえるのだからな」

「それは過大評価ですよ」

「ふ、そういう所がこの部隊が切り札たる所以なのかもな」

「デブリーフィングを控え、ヘリアンがグリフィン本社まで戻る。格納庫を後にしたヘリアンを見送り、ヤン・ウエンリーは戦術人形たちの方へなおる。」

「さて、みんな、お疲れ様。今日はとてもよく働いてくれた。働きすぎなくらいにね。ヘリアン殿も褒めてくれたことだし、エル・ファシル基地は1週間休暇にするとしよう」
「やったー!」

「提督大好きー!」

「ほんとー!?!」

「まあ、素敵なことですわ」

「て、提督さま……そんなことして大丈夫ですか?」

歓声に揺れる格納庫の中、頬をピクつかせながらカリーナが聞く。

「大丈夫だよ。警備哨戒はほかの基地に頼んでもお釣りが来る。もちろん休暇ではあるが、有事の時は招集をかける。そんなことにならないよう、祈っていてくれ」

「わ、私は……？」

「もちろん、ゆっくり休んでおいで。さて、休暇が終われば訓練が待っている。幸い、ダミー人形と自立制御のスパルタニアン以外に被害はなかったが、君たち自身もまだまだ上を目指せるとわかったはずだ。

うまい紅茶が飲めるのは生きている間だけだ。そのために必要な努力は怠ってはならないよ」

「真面目なのか不真面目なのかよくわかりませんわね」

「私がこんな長く話すのも珍しいんだよ。いつもは5秒で終わらせるからね。だが、今回は盛大なお祝いだ。こんなところかな。じゃあ、解散だ。各自ゆっくり休んでくれ」

STBエル・ファシル基地。グリフィンは大勝利として今回の作戦成功を大々的に報じた。鉄血工廠はその戦力を大きく減らし、水面下で新たな戦力の増強を始めるだろう。

つかの間の休息が、エル・ファシルに訪れた。

クリアランス・コード認証。貴方をグリフィン関係者だと確認しました。ようこそ、

第13旅団戦術データベースへ。

アクセス承認。当該戦術人形のデータを表示。

万が一、戦術人形のスペックなどに興味が無い場合、スキップしてください。

No. 006

NAME: M4A1

Call sign: "Avenger (1)"

第13旅団特殊分遣隊ユニットD部隊長。

G & K特殊作戦コマンド・AR小隊小隊長を務めていたが、小隊壊滅後第13旅団に救出されそのまま編入。

Weapons Specification:

コルト・ファイヤーアームズ

FNハースタル

ブッシュマスター

アーマライト

口径: 5.56mm

銃身長: 368.3mm

ライフレング: 6条右転

使用弾薬：5・56x45mm NATO弾

装弾数：20発／30発（STANAG マガジン）

作動方式：ダイレクト・インピンジメント方式

ロータリーボルト式

全長：850・9mm

重量：2,680g（弾倉を除く）

発射速度：700—900発／分

銃口初速：905m／秒

有効射程：点目標500m 面目標600m

Doll's Specification:

CQB戦：B+

近接格闘術：B+

射撃：A

体力：B+

機動：B

爆薬取扱：B

編成拡大：不可（電脳許容量不足）

医療：A

諜報：B—

研究開発：B

M4A1アサルトカービン。第6世代型戦術人形、16Lab製のハイエンドモデル。極めて高い性能を誇るものの、戦闘経験か判断力のいづれかが未熟だと思われる。

電源：戦術人形用固体高分子形燃料電池＋バルトレンジエネレーター——type A
 駆動骨格：第6世代型、AR戦術人形用駆動骨格・射撃戦カスタム

FCS：CFIBLVer.6.9

センサー：第6世代型デュアルカメラアイa（オリーブ）、第6世代型聴音センサー、第6世代型嗅覚センサー、第6世代型味覚センサー、第6世代型触覚センサー

電脳：「データ削除済み」

生体パーツ：四肢・消化器系・生殖系・循環器系

通常武装：本体（30発STANAGマガジン）

Lv70。生体パーツは通常の戦術人形と同じ割合で、比較的一般的な戦術人形と遜色ない。

Skills：

火力集中T

10秒間、自身のジェネレーターで生成したエネルギーを使用し自身の火力を75%上昇させる。

小隊を率いる部隊長として設計された戦術人形のため、スキルは一般的な部隊長クラスとの戦術人形が持つスキルと大差がない。

ただし、その出力が群を抜いて高く、単騎戦力としても使用可能な高回転・自己強化タイプのスキル。

A S t . 特殊分遣隊の休日

「♪♪♪」

「ご機嫌だね、P90」

「せっかくの休暇だし、1週間もあるから。気分も上がるよ」

A R 15 救出作戦の翌日。

STBEL・ファシル基地の地下歓楽街、ホログラムでビーチを投影した地下プールでごろりと横になっていたグリズリーは鼻歌交じりに歩くP90を見かけた。

「そりやあそうか」

「グリズリーこそ、ビキニなんか着ちゃって浮かれてるじゃない」

「まあ、あれだけ難しい作戦を成功させたわけだし」

「まだ信じられないよ、航空優勢はもちろんだけどき」

「ヤン・ウエンリー提督、か。凄い指揮官つてのはよくわかる。異世界だとか宇宙人だとかはよくわからないけど、戦績だけは間違いないんだろうね」

実は、ヤン・ウエンリーの語った戦績はヤン的な自己評価という点ではかなりの控えめに語っていたのだが。

「ほら、あたし達ってその場その場の戦闘でどう生き残るかを考えて戦うでしょ？でも、戦いをどう組み立てるか、そもそもどう戦いに臨むかなんて選ぶことなかった」

「だね。今回投入した戦力が地上部隊12ユニットだと考えると、機械化師団相手にはぼ完勝したなんて信じられない」

2人でビーチのさざ波の波音を聴きながらのんびり話していると、後ろから声がかかる。

「何の話？」

「417」

「昨日の振り返り。そうそう、まるで爆発物のエキスパートです！みたいな雰囲気出るときながらあれは傑作だったよ」

「茶化さないで。これでも反省してるんですから」

同じく水着を着た417である。ふくれっ面に浮き輪を抱えて手にはトロピカルジュース。完全に南国気分だ。作戦終わりにくらくらいから、特殊分遣隊の面々とは打ち解けてきてややくだけた口調になっている。

「しっかし、精鋭を寄り集めた特殊分遣隊とはいえ、ヤン提督と隊長の指揮がなかったら危なかったよね」

P90の指摘に、ストローをくわえた417とその417のジュースに入っていたマ

ンゴーを奪い取ったグリズリーが頷く。

「そうそう。特に撤退戦の伏撃アンフッシュなんかそうだった」

「隊長なんか手を敵に踏まれるところだったし」

「大戦を思い出しましたよ」

「お？100式じゃん」

左腕に自己修復促成パッチを貼り付けたまたしても水着の100式だ。

「皆さんにお土産です。日本の夏の伝統氷菓、その名も“かき氷”ですよ」

”かき氷”」

100式が手に持ったクーラーボックスから取り出したのは四角い箱のようなものに取手が着いた装置とばかでかい氷だ。

「ただの氷じゃないの？」

「甘いですね、日本の夏はこんなもんじゃないですよ」

なんだかよくわからないことを言う100式に、3人は顔を見合わせる。

「見ていてくださいね」

100式は氷を装置にセットする。そして、取手を無造作に掴むとシャリシャリというよりゴリゴリ！という音を立てて猛スピードで回し始める。

面をこそぎ落とすように回る歯が氷をふわふわの欠片へと変えていく。

「おおー」

「すっおー!」

下にセットしたアイスの容器のような皿にまるで雪が積もるようにふわふわの氷が
どんとどんと重なってゆく。

「よし、あとは……あっ!」

一旦取手から手を離れた100式はクーラーボックスを見て声を上げる。

「100式、お探したのはこれ?」

「た、隊長!!」

M4が両手にいっぱいボトルを抱えて歩いて来た。

青、緑、赤、黄色……様々な色をしている。

「カフェに行ったら、スプリングフィールドが私にこれを100式につて」

「ありがとうございます!」

「なんです、それ」

グリズリーが興味深そうにボトルを眺めている。

「それはシロップです、これをかき氷にかけていただくんですよ」

いくつかの氷の山をさらに作った100式は勢ぞろいした分遣隊にかき氷を振る舞
う。

「お好きな色をどうぞ、ストロベリー、ブルーハワイ、マンゴーにオレンジ、お抹茶にメロン、いっぱいありますよ」

「私はストロベリーで」

「あたしはこの青いやつがいい!」

「私は緑のを。お抹茶、というんですか」

「あたしはそうだな、さつき417からマンゴー貰ったからメロンで」

ビーチに敷いたシートの上で、みんなでかき氷を食べる。

色とりどり、太陽に映えるかき氷。

プラスチックのスプーンでかき氷の1画をすくいとり、口へと運ぶ。

「ふわふわで美味しい!」

「冷たくていいねえ」

「うん、夏にぴったりです」

少しかき氷を堪能し、波の音を聞きながらのんびりする。

「つ……………くう……………つ……………頭がツ……………!」

「どうしたP90!メディック!メディック!!」

……………こんな落ち着いた時間も珍しいものだ。

「……………この陽射しとか気温設定は本当に気持ちいいですね」

黒髪を緩く結んだM4はすらりとした長い足を組んで風を感じていた。

「あとは、ここにS O P IIと16姉さまさえいれば……」

A R 15はまだ医務室だ。事実上の軟禁状態だが、それでも行方不明よりは数万歩マシだ。

特殊分遣隊のメンバーも、もちろん家族のように大切に思う。一度死線をくぐり抜けた仲間とは、家族のような絆が生まれるのだ。

それでも、とM4ははしゃぐP90やグリズリーらを見て思う。

この場に、A R 小隊が揃えば、と。

「らしくないですよ」

「100式」

「隊長、昨日はありがとうございました」

「え？」

風に思いを馳せていたM4に声をかけたのは、100式だった。普段は髪留めで止めているだけだが、今日はおさげにまとめている。

水着はなんというか……今ではあまり見かけない、紺色の上下一体型の露出が少なめの水着だ。確か、スクール水着……といっただろうか。その上に肩から普段身につけている軍用の制式コートを羽織っている。

「私、昨日も言った通り大戦期の銃なんです。中でも、旧日本帝国軍ですから。

ドイツやイタリアといった西方枢軸国の銃は傑作が多いですが、自衛隊制式ならまだしも旧帝国軍の銃火器は基本的に大戦期以降作られていません。

日本製ではPM—9、四式、62式、64式、89式がいますが、……彼らは警察や自衛隊に供給されてます」

「ええ、知ってます。確かうちにも何人かいたはずですよね」

「はい。ですが、彼らと私は違う存在です。いま、この場所では……私は、1人なんです」
おそらく、世界中の軍事兵器が”戦術人形”^{ドールズ}となつている中で、祖国が”変わった”のに”同じ”なのは確かに彼女だけなのだ。

それは、彼女が属していた国によるものだ。憲法九条^{戦争放棄}の施行。それが、すべてを変えた。

彼女にとっては、世界とは軍であり、絶対君主に忠誠を誓う誉れ高き桜の一片^{ひとひら}。

君主とは天皇陛下。守るべきは皇国と臣民。憎むべきは鬼畜米英。

勝ち取った自由を守るために武器を取る。

海では菊の紋と日出る旗^旭を翻して戦いに征く船達が。

空では中天の日^日を翼^翼に抱くエース達が。

陸では桜の萼を纏う兵士達が、天皇陛下のために、と戦った。

皇国の荒廃この一戦にあり、とかつての名将東郷平八郎元帥率いる日本海軍が露軍バルチック艦隊を撃滅せしめたように。

帝国陸軍が多大な犠牲を払って辿り着いた203高地。

真珠湾、ソロモン、東南アジア、大東亜共栄圏。

彼女は、100式は、大日本帝国のものなのだ。

そして、89式などは日本国のものである。

この認識の僅かな歪みが耐えきれずに崩壊したのが、昨日の100式だったのだから。

FALのように、自身が一般の銃と異なる部分があることを認め、それを磨きあげるだけのメンタルはまだ無かったのだ。

「そんな時に、隊長から言われた言葉がすごく暖かくて、ほっとしたんです」

「私の言葉が？」

「ぶつきらぼうでしたけど、親身になるんじゃないやなくてただ私の戦力だけを確認してくれた。

私のスキル桜逆像を見ても、気にせず後ろを守ってくれた。突き進んで、突き進んで、怪我をして……その怪我を心配されるって、とても幸せなことなんです」

FALが言っていたのはこの事だったのだろう。かつての訓練の時にNTWから伝

え聞いた言葉。

「私は汚れ仕事を引き受ける濡れ仕事屋。ウエットワークス」

この世界がどんなに血で塗れて汚れているかなんて、あの子たちは知らなくていい。罠にはめられて仲間を失う辛さなんて知らないで退役すればいい。

捕まって肉体にひとつひとつ傷をつけられながら嬲られる苦しみなんて知らなくていい。

私はあの子たちを、あなたを、守る。

そう、他愛ない会話をしながらお茶を飲む世界を、クリスマスやバレンタインに一喜一憂するこの世界を守る」

怪我を心配されるなんてのは、よほど余裕のある戦場か訓練だけだ。大抵は生きていくか、戦えるか、そうでないか。そういう戦場が大戦期にはあった。

以降紛争期に入ると、人的資源が何よりも優先されるため、手厚い保護が施されるようになったのだが。

ここでM4は理解した。1000式は、こう言いたいのだ。

私を兵士として扱う上官でいてくれてありがとう、と。

確かに、他の隊では損害は手厚く保護される。しかし、ヤン提督の部隊であるSTBではその前段階としての戦略、戦術に重きを置き、戦闘は結果としての作業であるとい

う認識が強い。

そのため、損害は計算されているのだ。

この話をする、ヤン・ウエンリーはまた眉を下げて腕を組むのだろう。

「それにしてもこれでまた私を憎む未亡人や孤児が何十万人かできたわけだ、すべてを背負い込むには私一人の肩にはちと重いな、地獄に一回落ちただけで済むものやら」

かつてそう呟いたヤン・ウエンリー。敵を効率的に殺すのが兵士なら、味方を効率的に殺すのが指揮官というわけだ。

そういう意味で、今回の作戦からSTBに加入した100式には居心地が良かったのかも知れない。

大体の指揮官はこう考えている。

「戦術人形といえどその撃破率や被撃破率は戦績に直結する。修理だって馬鹿にならないし資材も大量に使う。できるだけ損害を負わないようにしなければ」

ありえない話である。人道的あるいは兵士的視点ではそうなのかもしれないが、指揮官がそんなことを考えていては部隊は全滅しかねないのだ。

M4も、身をもってFALとヤン提督からそれを学んでいる。あの暗い地下にずっと閉じ込められていた数時間で考えた。

「()はそういうところですから」

「とても居心地がいいです」

100式はM4の隣に腰を下ろす。顔を逸らしたM4に100式は微笑みかける。その笑みは、まるで迷い猫を拾った少女のごとく。

「きつと大丈夫ですよ、AR15さんは帰ってきたんですから」

「……」

「無責任に聞こえますか？でも、私は知ってるんですよ。生きていれば、いいことがある！」

陽射しが、少しだけ目に痛い。あとで基地整備班に伝えておこう。そう思ったM4だった。

1週間の休暇と言っても、なにをすればいいんだろうか。

実際のところ、ロールアウト後に初めて配属されたのがSTBだったわけで、STBではこんなに長い休暇は初めてだ。

昨日は慰労も兼ねて隊みんなどでビーチに行ったが、今日はどうしようか。

朝、ふかふかのシートで目を覚ました。カーテンの隙間から入る朝日がややオレンジ

色に部屋を染めている。

鳥のさえずり、聞こえる鳴き声はこの前飼いだめた犬かな？

「おはよう、417」

同室のグリズリーはもう起き出してベッドメイキングをしている。……ここはブートキャンプではないし、正当な軍事組織といえどグリフィンがPMCなのでそこまでやる必要はないと思うけど。

「おはよう。休みなのに、ずいぶんと早いね」

「なんだか落ち着かなくて。下のふたりはまだ寝てるよ」

「それが普通だと思う」

ベッドからおりる。ゆつくりと、大きな音を立てないようにしないと。下ですやすやと寝ているのは我らが隊長、M4A1とステンMk2。普段はあれだけ凜々しい隊長も、寝ている時は年相応の可愛らしい寝顔。一方のステンはいえば、だらしくお腹を出して寝ている。

「はあ、まったく……」

ステンのパジャマを直してタオルケットをかけ直してあげる。まるで4姉妹になった気分だ。

「お姉ちゃん、だね」

「グリズリー、いつから人の考えてることがわかるようになったの？」
「見ればわかるよ」

顔を洗って着替えや支度をしてベッドメイキングにもどる。もう0630だというのに、ステンと隊長はまだ寝ている。春眠、暁をなんとやら。

起こさないようそつと部屋を出る。

「さて、朝は何を食べましょうか」

食堂に向かう途中なんとはなしに呟くと、どこからともなく返答が帰ってきた。

「今日のおすすめはスプリングフィールドさんのお手製、ジャパニーズヌードルの”うどん”らしいですよ」

私の部屋の3つ先の扉からそう言いながら出てきたのはG36C。私と同じH&K製の優秀なSMGだ。元となったのがG36であることを考えると、銃身長わずか228mm、全長も720mmというまさにコンパクトに落ち着いた銃で、私のお姉様のうちの一人だ。

というのも、私はHK417という型番であるHK416の姉妹銃とされている。

単純にいえば416の大口径モデルのだが、私の開発初期は実はG36のパーツを流用して作られている。なので、G36と416はお姉様で、G36Cはどちらかという腹違いの姉に当たるのかもしれない。

G36Cは他の部隊からの転属で、前は陸戦部隊の精鋭中の精鋭部隊で前線を受け持っていたらしい。

「G36C姉さま！おはようございます！それで、そのうどんとはいかなる……？」

「おはよう、417。もう、そんな堅い呼び方はやめてくださいまし。36Cでいいですわ」

「で、では遠慮なく。36Cはもう食べたんですか？その、うどん」

「い、え、まだです。でも、417、」

Ein ^百Bild ^間sagt ^はmehr ^一als ^見tausend ^にWorte ^如”

ですわ」

「なるほど。”Hung^空ger^腹ist^はder^最beste^高Koch^の”でもありませんもんね」

「そういうことです」

足取り軽く食堂へと向かう私たちドイツ組なのだった。

食堂へ着くと、まばらながら人形が起き出している。普段のエル・ファシルは3部隊ずつローテーションで警備を回しているため、夜勤と朝の6部隊がちょうど1部隊ずつ交代する形になる。

非番はまだ来ないにしても、基本的にはAM7時前後の時間であれば訓練や整備など

諸々の業務のために食堂は6割型埋まる。

まあ、今日は大方が非番で警備や整備班などは他の基地から応援が来ているので、エル・ファシル本隊はだいたい寝ているのだろう。

「おはよ、417、それにG36C」

食堂に入った2人を出迎えたのは、先の任務で援護任務に当たっていたQBU—88。

中国製のブルパップ・スナイパーライフルだが、RF戦術人形にしては珍しく榴弾をスキルとして扱うことが出来る。適正距離はスキルの都合上スナイパーライフルよりもマークスマンライフルとして運用されることが多い。

STB所属のライフルでは同じく中国製のM99、創設時からの主砲であるダネルNTW—20やKarabiner98 Kurz、M200、絶対に絶対に厨房に立たせては行けないRifle No. 4MKI (T)など多種多様な人材がいる。

そんな中でQBUのもっぱらの仕事はというと、特殊作戦随伴。

通常のライフル部隊は旧ゲルタ要塞で行ったように外縁部や建造物、丘や山などの高所から射撃を行うように作戦任務を遂行する。

しかし、マークスマン適性を持つライフルは歩兵として部隊に随伴する。主な任務は暗殺などの不正規作戦、救助任務、強襲任務。

その随伴狙撃兵として適性がある特殊なライフル部隊の隊長がQBU。部隊員はライフル部隊から作戦に応じて別の部隊にアサインされていく。

いわば貸し出されることになるため、部隊にとけ込めなかったり、ギクシヤクすることが多いそうだ。

任務も特殊、当人も特殊、作戦内容も特殊。そんな任務をこなす部隊で実力で隊長に登り詰めたのがQBUなのだ。

簡単に言えば、レジメンタル・コマンダー^Aのロングレンジ版、という所だ。

なんでもできる。この人形^{ひと}は、その一言に尽きる。

気がついたらカリーナさんの補佐や基地の各施設を回ってチェック項目を面倒臭そうなヤン提督に渡し、遠征任務のついでに買い出しに行ったりもしてる。

スーパ-の特売に間に合うように作戦時間を決めることもあるほどだし……。

でも、姉御肌？っていうのかな、面倒見がとても良くて部屋の備品に手作りの可愛らしいステッチとかが入ったカバーをつけたり、プライベ-トと仕事はきっちり分けるタ-イプみたい。

「2人とも早いだね」

「起きちゃいましたから」

「私もです」

3人で机に座り、埋め込まれたデータチップが視界にメニューを表示させる。この前から試験的に始まったデータリンクの応用。

「これが36Cが言っていた、うどん、ですか」

メニューのど真ん中にでかどかと竹らしき素材の水切りに盛り付けられた白くて太い麺が盛り付けられている。横にはやや濃いめの褐色透明の水がお椀に入っていて、ほかには薬味と書かれたネギ唐辛子、天ぷらと書いてある揚げ物がある。

「今日はざるうどんなんだね、私はこれが一番シンプルで好きなんだ」

「QBUさんは食べたことがあるんですか？」

「まあお隣さんだし。でも日本の麺は凄いいよ、麺もだけどスープにとってもこだわってるんだ」

「それは楽しみですわ。これはどれを頼めばいいのでしょうか？流石に全部は食べきれないと思うのですが」

「じゃあせつかください、3人で分けて食べようよ。私がいも天、G36Cはかき揚げ、417はえび天を頼んで3等分すればいいよ」

「なるほど」

「まとめて頼んでおくからちよつと待っていて」

そう言ってQBUは手元のホロキーボードを叩く。

「なんともありがたいことですわ」

「ですね。そういえば、私の部隊に日本の子がいるので、彼女と一緒に来ればよかったです」

「和食の時はぜひ一緒に一緒にしたいですね」

「えーと、ざるうどん3人前、天ぷらとかき揚げ、薬味……」

ぶつぶつと呟きながらホロキーボードを叩くQBUなんだけど、そのホロキーボードは他人には見えない。だから、虚空に目を向けて忙しなく動かしながら手元は空を叩く、傍から見たらとんでもない状態になってしまう……。

ホロキーボードとモニターの可視化か実際に存在するホロキーボードとモニターの方式に戻してもらえないか頼みに行こう。

「よし、もうすぐ来るよ」

会話のさなかになんとも失礼なことを考えていた私をよそに注文が終わったQBUは早速雑談の姿勢に入る。

雑談の姿勢とは、椅子に座ったまま重心をわずかに尾骨の方にずらして背骨を曲げざるを得ない体勢になり、椅子に対して斜めか真横に体を向けて椅子の肘掛か背もたれか机のどこかに肘をつけて肘の方に体をだらりと崩す姿勢のことだ。

当然足は組んでいる。

「ねえねえ、私は北の援護部隊にいたんだけど、要塞上層で残敵の襲撃にあたってホント？」

「実際に交戦したのは1部隊だけです。全部で3部隊いました。そのうち2部隊は交戦せずに地雷や航空支援で」

話題はやはり作戦の事だった。実際のところ、気になってたんだ。あれだけ無傷な部隊が3部隊、どこから現れたというのだろう、と。

「やっぱりかあ〜」

「やっぱり?」

頭を抱えるQBU。何か心当たりがあるの？

「いや、実は、崖の北側が私の部隊で南側がNTWの部隊の場所だったんだ。で、私たちは要塞を囲うように陣取るんじゃないかと、要塞と崖下両方を確認できるポイントに張ってたんだ」

「今回の作戦ではそういう計画でしたものね」

G36Cの言葉にQBUは頷く。

「そこが問題でさ。上がある程度制圧したからNTWの方が崖下に集中するってなつて、じゃあ私たちは上の指示に従って広域警戒をしようって話になったんだ。ところが、そのタイミングで撤退命令が出ちゃつてさ。その時、私のスコープには1部隊映つ

てた。あとから聞いたら、他の部隊も捉えていたんだよ」

「じゃあそれは」

「そ、もしあなたたちが死んでたら、私は部隊長として間違った決断をしたことになってたよ」

「……」

「普通の作戦なら撤退命令なんか無視してやつちやうんだけど、今回は航空支援だったでしょ？さすがに無茶は出来なくて。笑えるよね、援護のロングレンジ部隊がロングレンジでも援護しなかったんだから」

「そんなことないですよ」

「え？」

「それが作戦なんですから」

「でも……」

「この部隊では、そうなんです」

私もそうだった。全てをコントロール出来る。味方の損害はゼロで、敵に大打撃を与え作戦目標を完遂する。それが可能だと思い込んでいた。

それが全くの間違いだと教えてくれたのは、ヤン・ウエンリー提督とFALさんだった。

ロールアウトしてから実戦経験を経ずに配属されたのは特殊分遣隊の中では私とグリズリーのみだ。他の部隊とSTBは考え方が違う。

「ヤン提督の目標は勝利ではありません」

「そんなことあるわけないでしょ？ 指揮官がそれじゃ、部隊だって」

「QBUさんはヤン提督の戦史講義には参加なさらなかった？」

36Cが援護射撃をしてくれた。

「うん、任務が立て込んで戦術講義しかでてないよ」

「なら初耳かもしれませんわよ、417」

「朝ごはんを食べながら説明しましょう、ちょうど来ましたよ。うどん」

話し込んでいると配膳係の戦術人形が3人前の朝ごはんを運んできた。

配膳係はガンダルヴァから1週間エル・ファシルに^{N T K}来ている62式機関銃^{6 2}だ。

「お待たせしました、こちらがざるうどんと天ぷら、かき揚げになります」

「おお……」

思わず声が出してしまった。

写真では褐色に見えたがやや深い黄金色のいい香りがするスープに白くて太い立派な存在感を放つ山盛りの麺。

同じく黄金色に揚げられた天ぷら。

「このザルに盛られたうどんを箸で掬い、つゆにさつと通して食べてください。」

天ぷらはそのままがぶりと。天つゆなどをかけるとより美味しいです。あたし的にはおすすめるはこの塩ですね。岩塩です。シンプルが1番。

箸の使い方がわからなければ、メニュー脇のリンクから麵食時の箸の使い方をダウンロードできますよ」

一通り説明を終えた62式がにこにこ見ている。これは食べてやらねばなるまい。据え膳食わぬは戦術人形の恥。

「いただきます」

「いただきます」

「いったただつきまーす」

せつかくの和食、日本風に合掌。ぱきん、と割り箸を割ってうどんを箸で持ち上げる。ずつしりと重く、それでいてつるつとしていて。何本か滑り落ちてしまった。

「これは……」

「スパゲティみたいに食べればいいのかしら？」

「東洋の、とりわけ極東の麵はずつと音を立てて啜るのがスタンダードですよ。QB Uさんがお手本を見せてくれます」

「先に食べるのはいいんだけど、あまり見られるのは落ち着かないな……」

「そう言わずに、ささ、ずずっと」

「まあいいけど。じゃああらためて……」

そう言うとうちのQBUはちゆるちゆる、とつゆにつけた麺を一気に吸い込んだ。

「んー！^{中国}うちの麺もいいけど、日本の麺も美味しいねー！」

「おお……」

「おいしそうですね」

「おふたりも、最初は難しいかもしれませんがやってみてください」

ふむ。郷に入ってはなんとやら。挑戦の精神を忘れてはならないと誰かが言っていた。いざ。

少し少なめに4〜5本の麺を箸で掴む。そのまま塊から引つ張り出すように持ち上げる。

そこからつゆの入った碗を少し近づけて、麺をつゆにダイブ。さっと持ち上げる。

白い麺に黄金色のつゆが滴り、とつても美味しそう。

口を近づけ、さつきQBUがやっていたみたいに……

ずずつ。

これはすごい。最初の少しだけ力を入れただけで、残りの麺が滑り込むように口の中に入ってくる。

もちもちしていながら嘔みごたえのある麺が、鰹か昆布か魚介系の出汁でちょうどいいバランスにブレンドされたつゆと共に口の中に広がる。

「…おいしいです」

となりではG36Cが苦戦している。どうやら吸うという行為がどうにも苦手みたいだ。

「なかなか難しいですね、これは」

「そうだなあ、シェイクとかストローを吸う感覚でやってみるといいよ」

「む、なるほど」

助言を受けたG36Cは口をOの字にすぼめてちゅる、と麺を口に吸い込んだ。

……なかなか、なんとというか、変な光景。……何とは言わないけど。

「おいしいです、62式さん」

感想を告げると、62式はにつこりと笑って嬉しそうに一礼して給仕へと戻って行った。

「では、話を続けましょうか」

「ずぞぞっ」。

「我々、情報作戦コマンド・第13検索群、特にヤン提督の直轄である旧第13旅団からの部隊では徹底されていますが、我々の最優先事項は“生きて帰ること”、”負けない

こと”。勝利ではなく、負けさえしなければいいのです」
「まずまず」。

「つまり、何が違うの？」

「ぱりっ。さくっ」。

「戦場でもしもは考えてはいけけないのは鉄則です。中でも、助けるといふ感情はモジュールの中で優先度が極めて高い一方で、危険度も同様に高いですよね」

「ちゆるるっ」。

「生きて帰ってくれば、後はどうにでもなるということですよ。デブリーフィングでもしも、ではなくどう対応すべきだったかを話し合うべき。これがSTBの考え方です」

「くっくっくっ」。

「ぷはー、なるほどね。つまり、私はヤン提督に学ばないといけないことが多いわけ
かあ」

「そうですね。部隊長はもちろんですが、RFの方々は積極的に参加しているようですよ。前線組はFALさんに、後衛組は提督の方に大まかに分かれているようです」

「今度行ってみるね！それで、どうだった？うどん」

「とっつっても美味しかったです！」

「また食べたいですわね」

そんな話をしていたら、駐機場の方で叫び声が聞こえた。

なんだろうか。窓からは……あれは、P90とグリズリー？

あそこは確か、シルフの格納庫だったはず……何をしているんだろう？

「ぬあああああああ!!」

「ばっかP90なにやってんのおおおお!!」

ここはエル・ファシル基地の格納庫。STB航空戦隊の本隊が羽根を休める地下格納庫の航空機用エレベーター前……いや、エレベーター上で、私とP90は今まさに地下へと格納されようとしていた。

およそ女子らしくない叫び声をあげるP90は某格闘ゲームに迫ろうかという勢いでエレベーターのスイッチを連打している。

「止まらないいいいいいい」

「何やってんのよ本当に」

「い、いやあ、せつかくエル・ファシルに異動になってからの休暇だったから探検しよう
と思つて……」

コンソールと格闘しながらしよんぼりしているP90の背中が可愛い……なんて言ってる場合じゃない。

このままだとSTBの最重要機密エリア、特殊戦司令部データセンターの隣の戦隊機格納庫へとまっしぐらだ。

ここに入れるのはクリアランスコード・ブルー持ち、つまり特殊戦飛行戦隊のパイロットと電子戦要員、戦隊参謀、ヤン提督、参謀、直轄の情報軍最先任下士官、いくらかの通信士、それと各基地における先任戦術人形5名までと定められている。

下手をすれば今日の記憶をデリートされかねない。

保安要員に見つかればまず拘束されてしまう。

「まずいよ、どうしようこれ」

「もう諦めてもう一回今日を過ごそう」

「そんなのやだー!!」

2人でだだっ広いエレベーター上で喚いていると、突然エレベーターが止まった。

「み、見つかつた!?!」

「ああ、こんにちは、休暇2日目……」

「何を言ってるんですか、せつかく助けに来たのに」

エレベーターのメンテナンスハッチからひよこつと顔を出したのは、頼れる我らが秘

書兼後方幕僚カリーナ。金の亡者

最近はおつばら（割と）好き放題やっているヤン・ウエンリーとグリフィン本部との間に挟まって奔走しているが、指揮官ヤン・ウエンリーを発掘し第13旅団の創設を一手に担ったれっきとした幕僚だ。

規模が拡大した第13旅団の各基地の取りまとめや手隙の時には自身も作戦に参加して作戦立案や補給線の確保などを行う、極めて優秀な要員でもある。

「か、カリーナあああ」

「まったく、417さんが私のところに来てくれなかったら本当に記憶処分になってましたよ。もう、提督さまを起こさないといけないのに」

「えっ？」

「勘違いしないで下さい、提督さまは休暇じゃなくて基地司令として、群司令として形だけでも職務に就かせないといけないだけです」

「なるほど」

「私も休暇をいただいたはずなんですけど……もうこの際、FALさんに連絡して私はお2人のガイドでもしようかしら？」

「いい、いいの？」

「せっかくですし、ちよつとここを回つてから買い物に行きましょう。実は、本部に申請

していた娯楽品が一気に届いたんですよ」

「わーい！カーリーナ大好きー！」

「調子がいいですね……」

苦笑しながらカーリーナは、コンソールのジャックに腰のゴテゴテしたバッグからジャックをぶっ刺し、インカムのマイクに話しかける。

いつもヤン提督やらFALやらの後始末に追われている不憫な姿を見ているけれど、こうしてみるとめっちゃめっちゃ優秀なんだな。見た目も整ってるし、男のひとつでも作ればいいのに。

そんな私の目線に気づいたのか、カーリーナはこちらが恥ずかしくなるくらいの笑顔で軽く言い放った。

「私が好きなのは、沢山お買い物をしてくださる方ですよ」

「そ、そう……」

「こちらカーリーナ、エレベーター02を下まで降ろしてください。はい、搬入の手違いです。戦術人形2名と一緒に降ります。クリアランスコード・ブルー、認証コードX2デルタ」

へこちら司令部。コード認証完了。ようこそ、カーリーナ。規定に従い当該戦術人形2名の外部データリンク遮断処置を実行せよ」

「少々お待ちを」

スピーカーから流れてきた無機質な音声を聞き流しながら、改めて第13旅団の規模の大きさを感じた。

なんというか、PMCの規模じゃないよね。

「それじゃあ、おふたりともこちらへ。一応地下深くなので大丈夫だとは思いますが、データリンクからSTBネットワークへの侵入やプロトコルの解析を防ぐため、一時的にデータリンクを遮断しますわ」

「はいよ」

「はいい」

カリリーナがコンソールから引つ張り出したバーコードリーダーのような機械をP90と私の目にかざす。

一瞬赤い光が走り、宿舎のダミーコアやSTBネットワークから切断された感覚。

「こちらカリリーナ、遮断処置を完了。チェック、ツー・フォー」

へチェック完了。ようこそ、FN P90、Grizzly Win Mag。歓迎する

「わかつているとは思いますが、この中での通信や記録はできません。また、口外やコピーなども禁止です。もし破った場合……なんて、説明しなくても大丈夫ですわよね

「？」

につこり笑うカーリーナに気圧されながら、ようやく動きだしたエレベーターの振動に身を任せる。

数十秒ほど降りていくと、少し開けた広いエリアに出る。

ロボットアームや可動式のホース、ミサイルなどが大量に積んである。

「ここは、戦隊機がウエポンアクセサリを装備する場所ですわ。飛行計画に沿って機銃弾や燃料量調整、各種ミサイルの搭載とセイフティ・ピンの脱着等々、出撃準備を行う場所になります」

「すっげー！ かつげー！ これは全自動？」

目を輝かせながら辺りを見渡すP90。

確かにこれは圧巻だ。

「装備などのライン自体は司令部コンピュータが自動で行います。ですが、最後のセイフティ・ピンの取り外しと最終チェックは人力ですわよ」

「エリア2にいる各員に告ぐ。保安要員は注意せよ。01、03エレベーターにて戦隊機が発進準備中。繰り返す。01、03エレベーターにて戦隊機が発進準備中。近づくかないように留意」

アナウンスだ。見ると、隣のエレベーターシャフトの隔壁が開き、下からシルフがせ

り上がってくる。

「ちようどいいですわ、ここから見えていきましょうか」

ドラム状の巨大な機銃弾倉、翼や胴体のタンクへの燃料注入、ドロップタンクと各種ミサイルで裸の状態から武装していくシルフ。整備員たちが駆け寄り、機体の最終チェックを行う。

各動翼^{カナード}、ラダーや情報収集装置、そしてミサイルのセイフティ・ピン。

上がってきてから2分と経たずに完全武装を終えたシルフは上へと昇って行った。

「なんか工場みたいだね」

P90の言う通りだ。流れ作業で行われるスムーズな発進準備は、まるで生産ラインに見える。

「言い得て妙ですわね」

エレベーターはさらに下へと降りていく。隔壁が開くといよいよ戦隊機がずらりとならぶエリア。

エル・ファシルのシルフとスパルタニアンが、腹部に巨大な電源ケーブルを繋がれている。数機ほど機上にパイロットがいて、PDAを持って作業をしている。

「ここが戦隊機格納庫です、どうですか？なかなか壮観でしょう」

「ほえー、本当に軍事基地だ」

眺めていた時に、ふと疑問に思ったことが口をついて出た。
「パイロットって誰？」

思えば、オリジナル・シルフはFALのコアユニットを搭載した自律型の戦闘機だし、スパルタニアンは基本的にはシルフに付いて飛ぶ完全自律の戦闘機だ。オリジナルではないシルフは誰が飛ばしてるんだろうか。

戦術人形では無いと思う。

戦術人形は基本的には陸戦がメインで、わざわざ戦闘機に載せるよりは部隊として普通に攻撃の方が効率的だろう。

確かグリフィンのネゲヴ小隊だったかFN小隊でつい最近試験的に運用された火力支援小隊というのがあるらしいけれど、どうやら複数人1組の戦術人形で構成された部隊らしい。

妖精という支援プログラムAIもあるが、それは結局のところAIなのでパイロットには不向きだろう。

「パイロットは公募ですわよ」

「そんなんで機密とか大丈夫なの？」

「はい、公募とは言っていますが募集先は軍事刑務所です。軍事刑務所の中で希望者が送られてきて、その中でパーソナリティや適性検査などを経て合格した人がエル・ファ

シルの教導部隊に送られてきます。

決まった期間働けば減刑や釈放……色々と規定が厳しいですが、基本的には違反は即刻射殺あるいは機体からベイルアウト後に搭乗機の自律行動によって殺害されますので」

「ひえっ」

「お、思ったよりブラックなんだね」

真顔で語るカリリーナに闇を感じ、早々に話を切りあげる。

当のカリリーナはぶつぶつと「そもそもちゃんと働けば良いのですわ」などと呟きながらミーティングルームへと向かっていく。

とある機の前を通る時に、パイロットが声をかけてきた。

「よう、カリリンの嬢ちゃん。こんなどこに何の用だ？」

「ブリュイー中尉、部隊の2人を案内しているところですよ」

尾翼に07と描かれた機体のコクピットから顔を出した男だ。ブリュイー中尉と呼ばれた男は表情こそ変えないが、声色が少し柔らかい。

「ああ、どこかで見覚えがあると思えば要塞の上に降りた部隊の。あの時は流石だったな」

「はいはい、私たちは先を急ぎますのでこの辺で。もし追加したいパーツがあれば私に

要望書をくださいね。お安くしておきますわ」

「経費で落ちれば考えとくよ」

「もちろん自腹で、ですわ」

カリーナの言葉に僅かに暗い声をあげたブリュイー中尉はコクピットに引っ込んで行つた。

「なんか感情が薄そうな人だったね。あの人もなにかして送られてきた人？」

「いえ、ヴィンセント・ブリュイー中尉は上官と揉めて厄介払いされてきた人ですわ。」

旧NATO空軍からSTBに、最近では珍しい軍のパイロット上がりです。機体は7番機ランヴァボン。フランス人だけあって、特殊戦の中では感情は豊かな方だと思ひますわよ」

「あれで？ 私たちよりロボットっぽい人達ばかりなのか」

「日常的に味方を見捨てて自分だけが帰る部隊ですからね」

「でも、そのおかげで私たちは助かつてる」

「さて、着きましたわよ。ここがミーティングルーム。作戦の飛行計画や出撃プランがまとめられている部屋です。ここでブリーフィングを行つて、そのまま機体に向かえるようになっています」

私たちのブリーフィングルームとあまり変わらない作りだ。違うのは、壁に戦隊機の

ステータスが描かれたパネルが据え付けられていることか。

今は06と09の機体が作戦行動中となっている。

そのミーティングルームのドアを抜けて今度は人間用のエレベーターに乗る。

「さて、じゃあ地上に出てお買い物に行きましようか」

「なんか、ありがとう」

「いいんですよ」

くすりと笑うカリーナ。

その仕草はどこか普段と違う、女の子らしさを纏っていた。

「休暇、何するか決めてませんでしたし。私、グリフィンに入ってから長期休暇なんて初めてでしたし、皆さんと違って仲のいい友達なんて居ないですから」

「カリーナ……」

幕僚として奔走するが故に、親交を深める暇すらなく駆け回ってきたんだろう。でも、それ以上に……

「金にがめついからじゃないの？」

「うぐっ」

「冗談はさておき、暇ならそう言ってくればよかったのに。いくらでも遊びにいくのにさ。な、P90?」

「もちのろん！」

「ふたりとも……」

「さ、もうつくぞ。早く買い物行こ！」

エレベーターから出るとそこは明るい外。カリーナは普段頭に乗せているサンングラスをかける。

「……おふたりとも、今日は陽射しが強いですし……風が目にしみますね。はやく行きましようか」

それはそうと、1週間の内2日目の朝でここまで来ちゃってるのまずいよな。あと5日と半日どうしよっかな。

「グリズリーさん、そういうことは言っではいけませんよ」

「そうだよ。めいっばい楽しもう」

「え、ああうん……あれ、私今声に出てた？」

「ふーん、ふふーん、ふーん」

鼻歌というのは不思議なものです。特に何かの歌を口ずさもうとして出るものといふよりは、どこか余裕がある時に自然と出てしまうものな気がします。

「ご機嫌ですね、1000式」

隣を歩くのは緑のメツシユが黒髪に映える隊長。^{M4A1}朝、隊長からメールをもらって一緒にお買い物に行くことになりました。

集合は1030。エル・ファシル基地の歓楽街は、基地全体の中で電子的に隔離されたエリアにあつて、地域の町と部分的に重なっています。

つまり、エル・ファシル基地の歓楽街であつて、この地域の商店街と歓楽街でもあるわけです。

電車も通っていますし、民間人も普通に歩いています。

「隊長とお出かけできるのが楽しくて」

オフの時、隊長は分遣隊の隊員には口調が砕けています。きつと、少しだけ距離が縮まったんでしょう。

春から初夏になるうかという時期ですし、日差しも強くて気温は春にしてはやや高め。薄手の長袖パーカーの腕をまくって七分のパンツとスニーカー、髪を横でまとめてサングラスをかけている隊長はボーイッシュに決めています。

暗めにまとめたコーデにワンポイントで光るグリーンがあしらわれたパーカーとメツセンジャーバッグは私の見慣れない、多分ですがアメリカとかヨーロッパのスタイルなんでしょう。

手脚が長くてとてもスタイルがいい隊長によく似合っていてかっこいいです。

「そっか。私も100式と出かけられて嬉しいですよ、そのミリタリーコートに合うコーディネートはちよつと真似出来ないです。セーラー服みたいな意匠がとてもよく似合ってますよ」

「隊長こそ、今日はかっこよく決めていて素敵です」

実は私はあまり私服に自信がなくて、普段から来ているセーラーとコートを持ってきているのですが……。

「それはそうと、今日はどうして私を？」

メールをもらってからずつと考えていたことを聞きました。隊長なら、ほかのみんなとか、AR15さんとか、仲がいいと聞いたている旅団の幹部メンバーと過ごすとはかり思っていましたし。

「それはですね……」

周りを見ながら頬をかく隊長。一体なんだと言うのでしょうか。

「実は、お出かけしようと思ってたんですが、起きたら部屋に誰もいなくて、皆にも連絡したんですがもう出かけちゃったあとで……その……メーリングリストの中でまだ声掛けてなかった100式なら空いてるかもって連絡したんです」

なるほど。隊長、よくわかります、その気持ち。

なぜかそういう日に限って寝坊しちゃうんですよね。

で、そうなら大抵友人はもう予定を作っちゃったあと、みたいな。

「そうだったんですね。私は特にすることがなくて、今日はのんびり書店とか
装備アタッチメント
アクセサリーを見に行くつもりだったので大丈夫ですよ」

「そう、それはよかったです」

ほっとしたように肩から力が抜けた隊長。こうしてみると、最初に受けた感情モジュールがあまり作動していないような印象とは違って、結構動作量が大きいみたいです。作戦行動前後はおそらく戦闘感情適応調整で感情モジュールの動作を抑えているのでしよう。さすが、16Lab……

そんなことを考えながら歩いていると、道の横に自販機を見つけました。

イマドキの自販機にしては珍しく、瓶のコーラが売っています。

瓶コーラ、昔はよく飲みましたねえ……。

そうだ、せつかくお誘い頂いた方なのに気を使わせてしまっているみたいなので、2本買っちゃいましょう。

「隊長、ちよつと待っててください」

「どうかしたんですか?」

「少し喉が渴いたので」

「ああ、なるほど。そのベンチで待ってますね」

グリフィンの戦術人形ですがオフの買物も当然お給金から払います。私は極東のE02地区からの異動で、極東戦線は激しい戦闘が行われているためPMCに支払われるお金は八方に展開する戦線の中で最も高くなっています。

その分消耗も激しかったり娯楽も少なかったりしますが……私は服飾や食事にはあまりお金をかけないので、貯金は結構沢山あるんです。

自販機のコーラのボタンをポチッとタップ。すると、コアに埋め込まれたマルチチップから口座情報を読み取って自動でお金が支払われます。

本数は2本。冷えたコーラは美味しいですよ！

「隊長、おまたせしまし……」

コーラを手に隊長が待っているベンチへと戻ると、なにやら騒動の雰囲気。

隊長が人に囲まれています。

「オネーサン、綺麗だね。1人？」

「お茶でもどう？」

なんとというかテンプレートのようなナンパですね。実際のところ、普通戦術人形はナンパされにくいんです。たいてい眼からデータリンクの光を放っていますから、虹彩の所が人間と違ってやや明るいんです。

しかし、ここエル・ファシルの歓楽街では戦術人形はデータリンクは基本的に切断するように決まっています、通信は端末、支払いなどに使われるのは民間用の回線を使うことになっているので人間と戦術人形は区別がつきづらいんですね。

「結構です、人を待つてますから」

ベンチに腰かけたままぼーっと返事をする隊長。

うーん、これはナンパは諦めませんね。仕方ない、一肌脱ぎましょう。

「センパイ、お待たせしました」

声のトーンを高く、ややゆっくりめに発話します。これはJKというタイプの人間が行う会話のテクニクです。コツは単語の最後の言葉を伸ばすように発音するんです。

隊長に目配せをして意図を伝えます。

「あら、おかえり」

「なんだ、待つてた子も可愛いじゃん。君も一緒にどう？」

ここは冷静に演技を続けます。なんだか浮ついた見た目をしてますが、身体に穴を開けて金属とかプラスチックを通すのって大変そうですね。モジュールを付け替えたりにできないのはある意味不便かもしれません。

「いえ、結構です。私はセンパイとこれからデートなので」

にこやかに断りの言葉を放ちます。こうすることでナンパを撃退できます。

「2人も付き合ってるの？俺たちも入れてよ、悪いようにはしないからさ」
「む。あなた達、知らないんですか？」

気づいていない様子の方たちに優しく伝えてあげましょう。

「百合の間に挟まるおじや男ま虫は馬に蹴られて地獄に落ちるんですよ」

そつとナンパ男の後ろに回り込み、耳元で囁いてあげます。

「私たち、戦術人形ドールズですから。疾とく去ることをおすすめします」

「そ、そうだったんだな。悪いな、邪魔した。行こうぜ」

全く……。さて、隊長にコーラを届けましょう。まだちゃんと冷えています。

「ありがとう」

100式がくれたコーラは冷えていてこの暖かさにはちょうどいいです。

100式の母国日本的に言うところ、「キンッキンに冷えてやがる」ってところでしょうか。

それにしても、100式は意外とアグレッシブです。さつきも、駆動ユニットの出力を上げてナンパ男の後ろに回り込んでいました。もちろん定格出力以内でしたが。私は適当にあしらうつもりでしたが、さすがですね。

「おいしいです。さつきデートって言っていましたね、本当にデートみたいです」

「いえ、そんな……。デザートといえは、今日はどこに行くんですか？」

コーラを片手にこてんと首を傾けてこちらを覗き込む100式、なんだかとても愛らしいですね。……いえ、別に変な意味では無いですよ。

「今日はもともと特に目的もなくぶらつこうかなと思つてたんですが、今朝食堂でFALさんとカリーナが話してるのを聞いたんです。

どうやら、大型ショッピングモールに私たち^{戦術人形}専門の雑貨屋さんがオープンしたらしくて、そこに行こうと思つてます」

「戦術人形専門の雑貨店ですか、それは気になりますね。これを飲みきったら早速行きましょう」

戦術人形専門の雑貨屋とだけしか聞いてませんが、一体どんなものを売っているのでしょうか。気になるところです。

それにしても、瓶のコーラはなんだか缶やペットボトルのコーラより美味しく感じます。

なぜでしょう、味覚は変わらないはずなのに……。

コーラを飲みきつてゴミを捨てたあと、ショッピングモールに向かいました。道中、なんだか見た事のある金髪・茶髪・茶髪の3人組を見かけた気がします。きつと気のせいでしょう。

わいわい楽しそうに食いだおれを楽しんでいたようですが……いいですね、ARR15はまだ医務室ですが、完治したら誘ってみましょう。

あと、特殊分遣隊のみんな、提督、カリーナ、FALさんとNTWさん……でも、提督はあまり食べないかもしれませんね。

そんなことを考えていると、シヨツピングモールに到着です。AEOのような雰囲気ですね、至って普通のデパートメント・ストアです。

中に入ると、1階は雑貨フロアになっています。

アクセサリーや小物などが置いてあります。かわいらしい動物のデフォルメキーホルダーや最近巷で話題の娯楽作品のキャラクターなどの缶バッジなどまでよりどりみどりで。

「わあ、見てくださいこれ！私みたい！」

100式が手に取ったミュージック・データチップのカバージャケットには、セーラー服を着た女性が代わる代わる表示されています。それぞれ違う女性ですが、みんな美人です。

持っているのは……銃火器ですね。

いちばん古いものは、もしかしてケーキデコレーションガン^{M3サブマシンガン}でしょうか？

2人目はXM177E2ですね。私の親戚です。

3人目はMP40^{シユマイザ}。彼女もSTB所属で、確かガルダルヴァかバーミリオンに配属されてましたね。

4人目は1番新しいですね。おそらく最初と同じくM3でしょう。

……おや？もう1枚……これは小説でしょうか？表紙にはトンプソンを持った可愛い少女が描かれています。

タイトルは……「セーラー服と機関銃」。

「セーラー服と機関銃、100式のことですね」

「……までかつ……よくないですよ」

謙遜してませんが、100式は極めて高性能な戦術人形と言えると思いますけれど。

見た目もかわいらしいし、戦闘時はかっこいいし。

2階に上がるとそこは服飾や家具雑貨のフロア。服飾は普通、私服用のものしか売られていません。というのは、戦闘用の服にするには強度が足りないからです。

しかし、ここではいくつかあるものの中からサイズをオーダーしてくれたり、オーダーメイドを承っているらしいのです。

「ほえー」

なんだととってもかわいらしい声を上げる100式。

「これなんか100式に似合いそうじゃないですか？」

私が手に取ったのは普段の真面目な100式のイメージから少し攻めた、アシメのサイバーチックなマルチアツプリケ・ワンピース。

「そ、そうでしょうか。こんなに露出も多くて……」

普段はカチツとした服しか着ていない100式には似合いそうですが……。

「では、こちらはどうぞでしょうか？」

今度は少しロツクに肩にスリットの入ったシャツと少しだけ冒険家みたいなハーネス付きベストにショートタイ、ホットパンツと短めのブーツのセット。

なんででしょう、今まであまりファツションには興味がありませんでしたが、誰かを対象に着せ替えるのはとても楽しいかも知れません。

「これはいいですね、せっかくですし着ていきますー!」

どうやら気に入って貰えたみたいです。ここは折角ですし、私が出しましょう。

自分が出すと譲らない100式を試着室に追いやって、その際にお会計を済ませます。

さて、と素知らぬ顔で隣の店舗に向かいます。試着室から見える位置をキープしつつ、家具コーナーを眺めます。

通常の宿舎では1回の雑貨コーナー程度の私物しか置けません、STBの部隊員は自室を持っています。休暇の時くらいしか帰らない隊員もいれば、自室から通っている

隊員もいます。

私はあまり自室には帰らないタイプですが、自室になにか置いてもいいのかもしれない。せん。

ベッド……デスク……あ、そういえばPCを新しくしようと思ってたんです。ちよつと店員さんに聞きましょうか。

「すみません」

「いらつしやいませ。なにかお探しですか？」

「はい、PCを買いたいんですが」

「どのような用途で？」

「用途……」

ふむ。用途ですか。PCを使う用途といえは一般的にはなんなんでしょうか？

仕事は支給された特殊戦コンピュータ直結のパーソナルデバイスがありますし、ゲーム？配信？あるいはクリエイトでしょうか……？

「特にこれといった目的は無いです。もともと使っていた端末が古くなったので新調しようと思ひまして」

「なるほど。普段はどんな風に使ってますか？」

「普段はネットサーフィンとかですかね」

「デスクトップとノートどちらにします?」

「うーん、デスクトップで」

ノートを持ち歩く意味も今はあまりないですし、基幹デスクトップを置いておいて接続する方が簡単ですね。

「そうなるよ、こちらの1680万色に光るPCはいかがでしょう?」

「光る……?」

「もともとはゲームデバイスとして作られたんですが、高性能なゲーミングPCは普段使いにもとても快適なんですよ。最近はゲームしてない人でも買うことがありますし」

光の意味は……あるのでしょうか……。

「光らなくてもいいのですが……」

「では、ケースだけ交換して……他に付属品は要りますか?」

「物理入出力は欲しいのでキーボードとマウス、モニターですかね。それと、人形用の接続ソフトを」

「かしこまりました。お会計はどうしますか?」

「キヤッシュ一括でお願いします」

「では、こちらに認証をお願いします」

店員が差し出したコード読み取り装置に指先を当てて認証。

口座から直接引き落とされます。

「ありがとうございます。PCは明日、お部屋の方にお届けしますね」

「どうもありがとうございます」

「いえ、こちらこそお買い上げありがとうございます。またのご利用をお待ちしております」

お店の前の廊下に出ると、ちょうど着替えた100式が出てくるところに鉢合わせました。

「た、隊長、お会計しちゃったんですか!？」

「はい。プレゼントです、買う予定のない出費ですし」

「もう、これ受け取ってください」

ぷりぷりと頬をふくらませた100式が私にクレジット・トレードを押し付けてきました。

現金ではなくデータコインのやり取りが行われている今では、双方の認証を経てコインをやり取りできるのです。

「ふふ、拒否です。そうですね、コーラのお返しですから」

都合のいい理由を見つけたのできつさと撤退です。

3階へと向かうと、戦術人形装備のフロアです。ここへは、データリンク承認を得て戦術人形であると認められなければ入れないようです。あとは軍関係者などでしょうか。

「む、これはなかなか……」

100式が飛びついたのは銃剣のコナー。手に取って反射や材質などをまじまじと見ていますね。

「最近の対人形では銃剣はあまり使いませんが、ELID、感染者戦ではなかなかどうして使えるんですよ？」

そう言つて銃バイヨネット剣をVRで試す100式。

ふむ、SMGは確かに銃剣が速そうですね。私はFALさんみたいな近接格闘装備を見に行きましょう。

そう思つて着いたのは、近接武装コーナー。ナイフ、ソード、鎌やレンチに斧、ジャパニーズNINJAが使うクナイ、ショックロッドにボクサーグローブ、ば、バタフライナイフまで？

品揃えが豊富ですね。まるで武器の博覧会です。

……なんですか、これは。

近接武器エリアの横に新開発！とPOPのついたコーナーがありますが。

そこに置いてあったのは、近接武器とは名ばかりのものはや重機。

巨大な杭が置いてありました。1mはあるかという巨大な鉄杭と、それをはめ込む穴があるなにかの機械。

横には、”イクバール新開発、パイルバンカー!!”の文字。

パイル……バンカー？

なんででしょうか？

名前の響きはパイルドライバーとバンカーバスターを足して2で割ったような感じですが。

資料映像をダウンロード。

……これ、戦術人形は戦術人形でも正規軍の重装甲人形向けなんですな。

2mを越す大型人形であるクラトスが持っています。

鉄箱にのっそのっそとクラトスが近づいて行って、手に持った箱型の機械を前に構える……

凄まじい爆音とともに穴から鉄杭が射出されました。

もちろんターゲットの鉄箱は中央から破断、中もぎつちり詰まった4メートル四方の

鉄箱ですよ？

とんでもない火力ですね、しかも弾数制なんですか、これ。

夢兵器というか、浪漫兵器というか……。

このイクバルとかいう会社、聞いたことは無いですがどうやらとんでもない企業が出てきたようです。

その隣には、燦然と輝く……輝きすぎで目が痛いです。燦然と輝くブレード……と言うより、ブレード発振機構ですね。まさかレーザー兵器がこんなにコンパクトになってるなんて。

製造は……レイレナード？これも聞いたことの無い企業ですね。ですが、とっても使い勝手が良さそうです。これ、試してみたいですね。

私のジェネレーターでは出力が足りないので回数制限付きのバッテリーで運用することになるでしょうか。

これを2本ほど頂きましょう。

カートに入れて、同じく気に入ったものが見つかってほくほく顔の100式と合流。そのまま、内装コーナーに向かいます。

「そういえば、100式は内装どうしてます？」

100式は可愛らしく頬に指を添えて首を傾げています。

「えーと、確陸軍技術本部か陸技試作のイ号改をベースに、駆動骨格が甲タイプ、こつちでいうAタイプで、FCS以外は第5世代です」

「FCSは？」

「IZUNA―KAIのVer. 3です」

IZUNAとは高級です。100式のカスタムだと、軽く戦闘機が買えますね。

「さすが、極東の桜吹雪と呼ばれるだけではありませんね。SMGにしては耐久より攻撃寄りですよね？」

「桜逆像がありますからね」

しかし色々な種類がありますね……戦術人形の利点は、各部パーツを色々カスタムできるところです。

しかも、他の小隊と違って第13旅団は各自のカスタムが許されていますから、十人十色です。

「ほえー」

謎の鳴き声を上げる100式。第6世代型や第6世代後期型の最新FCSやセンサーを試しているようです。

私はまだしばらくはアップデートする予定はありませんが……そういえば、気になる

のはFALさんですね。FALさん、どんなカスタムしてるんだろう。

中身だけなら第7世代とか行ってるんじゃないかなろうか……。

と、ここにも専売の新開発パーツがあります。

ふむ。BF……これも聞かない名ですね。しかし、恐ろしく精度が高いですね。これではまるで、第8世代に手が届く……。

「隊長？」

100式の言葉で我にかえりました。試してみても、びつくりしたと嘘をついて、要件を尋ねると、お昼も回りましたし、どこかでご飯でも食べようとのこと……おや？あそこにいるのは……

「どうしたんです、こんなところで」

「あ、隊ちむぐう」

「ばっかナイン、街中でそんなこと言うなよ」

「わざわざ偽名なんか使わなくても良いのでは」

頼れる幕僚カリナーにP90とグリーズリーではないですか。

奇遇ですね。

「別にそのままでもいいですが、何か用事でも？」

「いやあ、ふたりともとっても目立ってたからつい」

「そ、そんなに目立ってましたか？」

「美少女コンビですからね、1人はスタイル抜群のクールな美少女、もう1人はガリーリに見えてヤマト・ナデシコ感を保っている美少女……皆さんで写真集だしませんか？」

「出しません。まったく、カリーナはいつも儲けることばかり」

「し、失礼な、そんなことはありませんわ」

女三人寄れば姦しい、と言いますが……5人も集まってしまうえば手がつけられませんね。

「5人も集まればお祭りですね」

ほとんど同じ感想を呟いたのはたまたま通りがかつた風な417。

「なんで小隊全員集合しちやったんですかね」

「今からご飯を食べに行こうと思っただんですが、皆さんはいかがですか？」

「いいね、行こう！」

「いいですよ」

S O P P II と16姉さま、絶対に助けに行きます……その時は、私のお友達を紹介しませぬ。提督と、先輩たちも……。

きつと、皆でこんなふう楽しく過ごせるよね。

「隊長ー？」

「M4さん、早く行きますわよ！」

「はやくはやく！」

「ごっちです」

「行きましょう、隊長」

青空の下、きつと待っているはずだから――

S t . 5 休暇は終わりぬ

心霊現象。宗教、オカルト、心理学、物理学、あるいは量子力学。

人間は、スピリチュアルなものをどうにかして明文化しようと試みてきた。

時代と共に切り替わっていく心霊現象を追っていくと、面白いことが分かる。

遙か昔、人類が記録を残し始めた頃から、心霊現象は神話としてある種のオカルトチックな対処法で受け入れられてきた。

死者が甦り、魂は揺れ動き、彷徨う亡霊たちが徘徊する。そういった心霊現象は神の仕業であると。

それはすなわち、目に見えないものや考えられない出来事は、我々ではない何か超次元的な力を持つものによって引き起こされているのだと。

それが、文字や記録の発達により体系化される。

そして、統合されたのだ。天地の創造や動植物の誕生日、天体の運行や災害を引き起こすものとおなじ超人的な何かによるものであると。

そして鎮めるために祈り、捧げ、願う。それが宗教だ。

数学や物理学の発達が進み、産業革命前後に入ると、宗教と心霊現象は分離と統合を

繰り返しながら少しずつ離れていく。

記述できないものとしてありえないものはありえない、という事だ。この辺りから、ある種の娯楽のような雰囲気をまとい始める。

心霊スポットや劇などだが、日常に存在した超常的な現象は生活から分離されていった。墓や虐殺が起こった場所、霊峰や海などだ。

科学信仰は生活と神話を分離することに成功した、とも言えるだろう。

そして、コンピュータの発達や宇宙進出が進むと、心霊現象はより形見が狭くなったと思う人が多い。

だが、実際はその逆である。

宇宙とは？そう、人間が神や心霊を生み出した闇である。

闇には霊が、邪が、鬼が、死が、陰が、妖が、怪が居る。

ほとんどの酸素や水分を必要とする地球生まれの炭素生物は宇宙空間では生きていけない。

そこにあるのは絶対零度の死のみだ。

コンピュータとは？そう、0と1の記述の世界である。しかし、プログラムは人間の予想を裏切ることがままある。

何故か？それは、電子の記述の奥深くまで潜らないとわからない。0と1の世界の奥

に、0と1以外の何かが潜んでいる。

想像力豊かで創造性溢れる人間は、果たして神話時代の精神性に逆戻りを果たしたのだ。

コンピュータの向こうに何がいるのか、考えたことはあるだろうか。

文字をやり取りする先に、誰たがいるのか。音声は空気の波ではなく電気信号に変換される。映像は？同じく光の波から電気信号へと。

もしかしたら友達だと信じていたデバイスの先にいるのは……そんな可能性もある。

そして、そんなネットの海へと引きずり込まれたという与太話は、決して少くない。宇宙の船乗りは、心霊現象を信じていた。

難破し広大な宇宙を彷徨い続ける宇宙船、不可思議な事故が起こる核融合炉、何かが見えるモニター。

彼は、死後の世界などは信じていなかったが、縁起は担ぐほうであった。

「なんだい、急に」

執務室で紅茶の香りの心地良さに身を委ねていたヤン・ウエンリーの言葉に、びくつと反応して飛び起きる元帥ネコ。久しぶりの登場である。

「それはごっつちのセリフよ。どうしたのよ、急に」

隣のデスクで訓練計画書を纏めていたFALが怪訝な目をヤン・ウエンリーに向けて。休暇だというのにこの人形、まったく休む気配がない。

「いや、なんだか話題が急に私に変わった気がしてね」

「本当になんなのよ。おおかた、誰かが噂をしてるか、幽霊が話しかけてきたんじゃないの？」

むつとして紅茶を啜るヤン。元帥はヤンの机から離れて部屋を出ていく。元帥の為に、このSTBの基地のドアには猫用の小さい穴が空いている。

「……案外、そうかもしれないね」

「あら、珍しいのね」

「私だつてたまにはそういうことも考えるさ」

からつと晴れた青空を眺めながら職務を全うしている（つもり）ヤン・ウエンリーが何故休んでいないかといえば、それは休暇初日に遡る。

惰眠を貪ろうとしていたヤン・ウエンリーの元に秘書兼幕僚のカリーナとFALがやって来てこう告げたのだ。

「提督さま、起きてください」

「なんだい……今日から休暇じゃないか、もっと寝させてくれ……」

「あなたに休暇なんてある訳ないでしょう、基地は休暇かもしれないけれど、あなたの休

暇は本社の方が決めるんだから」

「な、なんだって」

そう。実は、宇宙暦時代のヤン・ウエンリーが基地司令や艦隊司令の立場にいた時期には、ヤンの直属の上司とははるか星の彼方の距離が離れていた。

また、有能な部下や優秀な副官、身の回りの世話をする少年がいた事ユリアンも相まって、ヤンは休暇を取りたい時はほとんど勝手に取っていたのである。

このことは、ヤン・ウエンリーにとっては盲点だった。

そんなわけで、ヤンは部下が皆休暇を取っている中一人だけ業務に勤しんでいたわけだ。

そんなヤンを見兼ねてか、初日からFALが付きつきりでヤンの補佐をしている。

書類仕事は早々に終わらせ、もっぱらヤンと戦術や訓練などについて話している時間が多い。

「できた。提督、これどう?」

「なんだい」

FALが差し出した紙には、残りのAR小隊の面々を探し出すための長期作戦プランが書かれていた。

「ふむ。情報収集のみではAR小隊の残りの隊員たちが生存している内に救出できる可

能性は下がる一方である……敵のデータセンターを襲撃し、能動的に情報を収集する、か」

「AR15は、モデルとしてはM16やM4の姉にあたる傑作自動小銃よ。たぶん、単独なら私やAK-47と同じくらいの作戦能力はあるはず。」

そのAR15でさえあそこまで消耗していたんだし、特殊作戦仕様のM4 SOPM ODIIや陸軍仕様のM16A1ではいくらか強くても限界が見えているわ」

「確かにね。まして、ここ最近の戦線の激化はいい影響ではないだろうからね。いいだろう、これを草案にしてももう少し細部を詰めようか。休暇が終わったらすぐにカーリーナと深井少尉、M4を呼んでミーティングが出来るようにしておいてくれ」

「わかったわ。提督はそれをどうするの?」

「そうだね、まずはS特殊戦戦術コンピュータ S特殊戦戦術コンピュータ CとS特殊戦戦術コンピュータ T特殊戦戦術コンピュータ Cに草案をアップロードして、私の意見とコン

ピュータの意見のすり合わせをするよ。ここからは私の仕事だ、君も出かけてきたらどうだい?」

「心遣いには感謝するけれど、あなたの作戦立案方法が気になるからここで見ているわ」

FALの言葉を聞いてちらりとFALの方に視線を向けたヤン。

「別に見えても面白くないと思うがね」

「後学のためよ」

視線を紙に戻したヤンはおもむろに端末を起動し、コンピュータにデータをスキャンしてアップロードする。

SSCとSTCからすぐさま返答があった。

ヤンはマルチホロディスプレイを付けて、デスク上いっぱいそれを展開する。

「何をしているの?」

「STCが収集している鉄血の戦術防衛プランを照会しているんだよ。小さめのキャンブから大規模な基地まで、どのような防衛設備があつて、部隊配置や戦力などを分析したデータだね」

「なるほど、投入戦力や攻め方を考えるのね」

次いで、新たなディスプレイが浮かび上がってくる。

SSCからの鉄血の戦略予測シミュレーションだ。

今までの鉄血の詳細な戦略情報をイメージ化して表示した上に、今後の戦略予測をオーバーレイしてある。

(やれやれ、本当は当事者ではなく、歴史家として分析したかったんだがね)

なんとも不真面目なことを考えながらディスプレイを眺めるヤン。

「うーん、参ったな」

「何がまずいの?」

ベレー帽をくしやりと握ったヤンにFALが首を傾げる。

FALの目から見れば、大局的に見ても局所的に見ても包囲戦の局面である。現在位置が判明している敵の大規模データセンターの立地やほかの基地から見ても、あまりまずい局面には見えない。

「そうだね、この部隊を見てくれるかい」

そう言つてヤンがハイライトしたのは、戦線を転々とする1つの赤い輝点^{ブリッツ}である。

その輝点の行く先々では、青のグリフィン部隊を表すいくつかのラインが途切れている。

「こいつは……」

「そう、グリフィンの精鋭部隊を壊滅的撤退や全滅に追い込んでいる遊撃部隊だよ。こいつの最大の脅威はその移動速度にある。

この戦略行動記録を見ると、このE05地区からE01地区までの80kmを僅か半日で移動して2部隊を壊滅に追い込んでいる。規模としては機械化部隊ほど大きくないから徒步行軍だ」

「それは確かにまずいわね。これは……FN小隊もやられてる……」

辛うじて完全撃破は免れているものの、FALの原隊であるFN小隊も大破撤退を強いられている。

「ん……………これは何?」

FALが気づいたのは、航空写真にオーバーレイした戦線データだ。森林に隠れて一筋の細い線が長く戦場の近くを横切っている。

そして、鉄血の輝点の移動ルートと一致していた。

「これは……………線路かな?」

「線路?」

「この辺りの古い地図と重ねると、50年以上前にこのあたりを走っていた鉄道のようなだね。となると、これは列車砲や何らかの機動要塞が随伴しているのかもしれない」

「それだけじゃないわ。FN小隊は私の同僚のFive—Sevenが隊長を務めているのよ。いくら列車砲があっても、そう簡単にやられるとは思えない。もしかしたら、こいつは私の……………」

そう言ってFALは右眼をなぞる。赤い切り傷が走る未だに閉じたままの右眼は、ヤン・ウエンリーがこの世界にたどり着いてから初めて実行した作戦でついた負傷だ。

「……………やれるかい?」

「やれ、と言われたらやるわ。でも、やりたいとは言わない。私は戦士である前に兵士よ。部隊を率いる責務がある」

目を伏せて呟いたFALを見て、ヤンは冷めた紅茶を一口。

「では、作戦を立てるよ。難しい任務になるかもしれないが、君ならやつてくれると信じている」

その日、ひとつの作戦が特殊戦各コンピュータにアップロードされた。

その作戦は、現段階まで受動的な作戦ばかりだったグリフィンの鉄血に対する大規模攻勢に出るための序曲である。

グリフィン特殊戦第13戦術検索群はその嚆矢として統合陸戦隊との合同作戦を実行する。

参加するのはSTBから特殊分遣隊、ヒューベリオン直属の第1特殊部隊コマンド。統合陸戦隊からはネゲヴ小隊が参加する。

なお、STBにはその過程で新たに3人の最新型戦術人形がSTBに加入した。

結局このままいつもより少しだけのんびりとしたヤン・ウエンリーの1週間は過ぎていった。

「……………休暇は？」

「まあ、無理だろうね」

敵部隊多数、早期警戒ラインTB—03に接近中。エル・ファシル基地の周辺を哨戒中のAWACSから警報が発せられる。

早期警戒ラインにはおよそ8方位ごとに前線基地が置かれている。TB—XXでナンバリングされているその前線基地は、エル・ファシルを1—8としてSTBには計48の前線基地を持つことになる。

中央にS09地区グリフィン作戦司令本部を置き、東にエル・ファシル、北にバーミリオン、西にガンダルヴァなどが置かれる。

鉄血勢力下に建設されたものもあるが、簡単に言う超巨大な六角形の重心の位置にS09地区グリフィン作戦司令本部が置かれている。

その6大基地はほかの基地からの援護が受けにくい環境にある。

基地は1本の線が司令本部から放射状に伸びた先があり、それを繋ぐと六角形になるような構造になっていて、それを守るために5重の防衛ラインを敷いている。

その6大基地から8本の線が伸び、5重の防衛ラインの3番目に戦術前線基地^{Tactical Base}が置かれているため、上空から見ると巨大な雪の結晶にも見える。

エル・ファシル戦術コンピュータ^Sがその情報を確認。エル・ファシルから8機の迎撃機^{スバルニア}、ウオツカ隊がスクランブル^{緊急発進}。同時に防衛部隊であるバーミリオンからの増援である特殊戦第13戦術検索群グロック小隊がTB—03に向かい、防衛設備に付く。

ウオツカ隊は横一線のタクティカル・パートナーシップ隊形をとって鉄血の攻撃部隊と相対した。

そのはるか上空を航跡雲を引いて飛びすぎてゆく戦術戦闘機。雪風だ。

A W A C S のデータリンクに誘導されて、ウオツカ隊はエレメントに分かれる。2機がダブルアタックをかけ、2機は監視と対空ミサイル対策にまわる。攻撃役と守備役はとくに決まってはおらず、時と場合によつて異なる。

自律制御で飛ぶスパルタニアンのAIは学ぶシルフのパイロットに強く影響を受ける。

そのため、同じ期間教導された機でも判断や戦術などが違う。一つとして同じ機は存在しない。

ウオツカのAIは独自に連携を取り始める。

〈V o d k a l . 2 . G O 〉

僚機に信号を送り、エンジン出力を上げる。敵はエル・ファシル防衛ラインの1本目を突破し、2本目の要である第2データセンターラインに迫っていた。右から回り込むものと左から回ろうとしていくグループの二派に分かれた。

ここで敵部隊から対空砲火が上がる。最低でも対空砲を詰んだ装甲車とミサイル戦車が確認された。

ウオツカ隊は急速上昇。

Ground Targets
 ^ G T 3 | 9 . G T A M App ro a c h i n g ^
対空 ミサイル 接近 中

ウオツカ1-2からの警告。

目を活かせ、と教練されて育ったAIは、センサーをよく見る。

コクピットは生命維持装置などがなく、カメラと操縦機構のみがコクピットのあるベキ位置に置いてあるのだ。だが、電腦自体は教導の都合上カメラの画像にHUDを表示して行つたため、その名残でAIはまるでビデオゲームを行うようなイメージで飛ぶことになる。電腦がシートのある位置に据え付けられ、操縦桿やスロットルのシステムにインターセプトして飛んでいるのだ。

ダイブ・アタック。急降下に入ったウオツカ1と2は腹に抱える空対地ミサイルをぶっぱなす。

ウオツカ3、HUD上に敵をキャッチ。TDボックスが敵影を囲む。近接戦闘スイッチを素早く、オン。上がってきた敵へリ編隊のウイング側の一機が遅れている。

ウオツカ3はそれをキャッチした瞬間には猛ダッシュ。スピードは命と叩き込まれて育つた電腦だ。ウオツカ1、2が続く。

^ V o d k a l , E n g a g e . B r e a k , S t a r b o a r d (ウオツカ1、エ
 ンゲージ。回避せよ、右側)^

上方から敵の長距離地对空ミサイルが襲いかかってくる、と守備にまわったウオツカ4からの警告でリーダーグループは右へ旋回。

ミサイルが追尾してくる。低速だが追尾性能が高い。ひきつけた後方から、ミサイルをはさむようにウオツカ4、5が攻撃を加える。ミサイル、急速にGをかけて左旋回にうつる。

「なんだ？あれは本当にミサイルか？ジャムじゃないのか。雪風、記録しておけ」

ウオツカ1、アングル・オブ・アタックA・O・A・20度で3・5G旋回を開始。

ミサイル、半転して6G旋回降下。

ウオツカ1が追う。

背面降下。

ミサイル、急激な引き起こし。

ウオツカ1、2は降下を続け、2機そろって引き起こし、追跡のため左へターン。

ミサイルはウオツカ2、3の後方占位をかわすために6G旋回上昇を始める。

3秒で1000m以上上昇、右急旋回、ウオツカ4の後方につく。ウオツカ4の後方警戒レーダーが警報を発している。そこへ、フリーになっていたウオツカ1が最大

A・O・A、機首を7・4Gで引き起こし。

それに気づいたミサイルは左へ切り返し、バレルロール、180度旋回開始。

ウオツカーもローリング、互いに後方に回り込もうと機動する。

ウオツカー、ミサイルに食らいつく。

HUD上に表示、RDY GUN。

スパルタニアンの航空機関砲がミサイルを捉える。

目標、撃破。

ウオツカ隊は態勢を整える。

「これは……雪風、あのときのミサイルか？」

「I think

so.../be careful... SLt. Fukai」

零のH M Dには、雪風の高性能な長距離索敵レーダーが捉えている高速で飛来

するミサイルが映っている。

「いまエル・ファシルに侵攻してきているのはおとりだ……ミサイルだな。対地ミサイル、TB-03に急速接近中。グロック小隊、こちら雪風。ただちにTB-03から離れる。基地を放棄してでもいい」

だめだ。フェアリー空軍基地と違ってこの世界の基地には対空設備などあつてないようなものだ。迎撃は間に合わない。

スクランブルが上がっているのはスパルタニアンだが、もしもあのときのミサイルと

同じであれば地下格納庫のシルフもあぶない。

同じブロックにあるSSC、STCも無事では済まない。そうなれば、特殊戦第13戦術検索群は再起不能の損害を被ることになる。

なんとしてもエル・ファシルに辿り着かせてはならない。

雪風は増速、TB-03の直上へ。零は接近してくる敵ミサイルの種類を雪風の戦術データバンクTBDから割り出した。零は複合ディスプレイを移動目標指示モードに切り換える。

敵ミサイル18、接近中。

「おそろしく速い——超高速ミサイルだ。あの時のジャムの新型ミサイルと同型か。雪風、TARPS作動。撮れ」

〈TARPS operation started〉

そのミサイル群は200km程度を30秒弱で飛来。零はバンクさせた雪風機上から、それがTB-03に襲いかかるのを肉眼で捉えた。ミサイルはまるで赤い彗星か隕石のようだった。赤い尾を引いてTB-03に吸い込まれる。赤い尾はロケットモーターの炎ではない。弾頭部が空気摩擦で輝いているのだ。

一瞬にしてTB-03は壊滅した。滑走路上でホットフュエリング中のスパルタンアン、ラム隊は全滅。地上施設は影もない。滑走路には大穴があく。雪風のTARPSがこれらをカメラに収める。

かろうじて逃げ延びたグロック小隊の面々も衝撃波に倒れ伏しているのがカメラに映る。

「威力なども変わらないか。あれだけのスピードなら炸薬など必要ない。衝撃波でみんな吹き飛ばされた」

雪風がアラートを飛ばす。ディスプレイには新たな輝点^{ブリッブ}。第三波ミサイル群接近中。

今度は対空ミサイル。速度は対地ミサイルよりずっと遅いものの通常の三倍速度。

「雪風、ウォッカ隊に回避しろと伝えろ。PAN、コードU」

〈T O V o d k a , T h i s i s Y u k i k a z e / P A N | P A N | P A N /
C O D E — U / U n i f o r m , U n i f o r m 〉

ウォッカーは、雪風の緊急警告と自機の警戒システムの警告音で素早く回避機動を開始。だが接近してくる脅威がどんなもののかはデータベースになく、判定できなかった。

その下、何とか立ち上がったグロック小隊は近傍の掩蔽壕への避難を開始したが、すぐに雪風からの通信が飛んでくる。

〈こちらB—3。走れ。掩蔽壕では退避できない。どこへでもいいから走れ。後で見つける〉

「鉄血の長距離砲撃？」

指示の通りグロツク小隊はバラバラに走り始める。後ろを振り返ってはならない。

ウオツカ2はヘッドアップ、ミサイルをカメラで捕捉しようとした。困難だが、ミサイルはかすかな白煙を引くので注意すればわかる。AIは見る事ができれば回避する自信はあった。見えた。後下方から突っ込んでくる。

スバルタニアンのAIは初めて、感情を持ったのかもしれない。

これは、なんだ？

回避する時間はなかった。ミサイルというよりも、最後にウオツカ2のカメラが捉えたものはレーザービームのように映った。その一瞬後、機は爆散している。

〈Five vodka squadrons shot down.〉

雪風が冷ややかに告げる。

「了解」

と零。

「長居は無用だ。グロツク小隊を搜索する」

操縦桿を傾けようとした零の耳に新たなアラート。

鉄血地上部隊が未だに接近中。距離12kmほど、対空ミサイルキャリアーらしき巨大なミサイル・ランチャーが1、随伴歩兵なしで悠然と侵攻してくる。

ミサイルを射ちつくせばただの鈍重な遮蔽物にすぎない。鉄血はなにを考えている

のだろうか。

ジヤムのはミサイルキャリアーがそのまま戦術核弾頭だったが、今回はただの走行ミサイル・ランチャーだ。

いずれにせよ行かせない、とウオツカ隊の生き残りが迎撃態勢。

ウオツカ隊の3機は編隊を組み直し、12km前方のミサイルキャリアーに向かって、短距離ミサイルを発射。発射1.5秒後、ミサイルキャリアーがミサイル迎撃ミサイル発射。

ウオツカ隊の放ったミサイルは高速ミサイルにより、10kmも飛ばないうちにことごとく撃墜される。スパルタニアンは退避を開始。その後方から狙い撃たれる。大空に閃光と黒煙。

「ロックオンされた。エンゲージ」

ウオツカ隊の全滅を確認するまもなく、雪風の警戒レーダーが敵の照準レーダー波をキャッチ。雪風、最大推力で加速。離脱を試みる。

高速ミサイルが2、雪風の背後から急速接近中。秒速5km弱だ。距離40km。

第2弾はその後方、6km。命中まで約10秒。3秒後に2弾目。

超音速で飛ぶ雪風の後ろから鉄血のミサイルが突つ込もうとしている。

「あのとぎとは違う」

零は躊躇わずオートマニューバ・スイッチをオン。

雪風は零の指示に忠実に従い、完全制御飛行体となる。

零の指示を無視したあるときとは違い、零の指示の下自機を守るための最適な行動を選択する。

今度は雪風はクルピットを行つた。シートの下へぐいと押しつけられる。すさまじい大Gがかかり、内臓がつぶれる感覚。

コクピットを中心に360°回転、高度を一気に落とす。

鉄血のミサイル、雪風上方20メートルを通過、自爆。雪風はその爆発直前、ミサイルの衝撃波をくらつて震える。

第2弾接近中の警告音がヘルメット内に響いている。

衝撃波を受けた雪風が機の姿勢を立てなおすのに1秒ほどかかった。ミサイル命中まで2秒強。

雪風は瞬時に戦闘機動を開始。

今度は零は雪風の機動への予測と準備はできていた。

機の重心を中心にして、雪風はコマのように機体をぐいと180°回した。進行方向に機尾を向けて、エンジンパワーをアイドルへ。雪風は亜音速でバックする格好となり、敵ミサイルと相対した。

第二弾接近中の警告音がヘルメット内に響いている。

R D Y G U N . 超高速射撃管制システム作動。自動発砲。80数発目が敵ミサイルに命中。射撃

1 . 4 秒。敵ミサイルは雪風着弾0 . 2秒前に爆破。

零は一瞬だけ意識を失っていたものの、かろうじてオートマニューバ・スイッチをオフにした。

雪風が態勢を正常に立てなおしてしばらくたつてからだった。雪風は自動的に基地上空を周回するコースにのっている。

こみあげてくる吐き気をこらえつつ、マスター・コーションライト・パネルに目を走らせる。

無茶な機動をしたとはいえ、雪風は2回目はしくじらなかつたようだ。損傷、異常共に見つからず。

全系統異常なし。

雪風、高度を下げてグロック小隊の搜索誘導へ。

T B - 03は消滅した。

対空ミサイルを放った鉄血のミサイル・キャリアーはやはりかつて零が遭遇したものと同じく自らT B - 03の駐機場で自爆した。

T B—03は地下施設まで破壊されたものの、雪風の迅速な避難指示によって死者はゼロ、負傷者が十数名出ただけだった。

最大の損害は基地施設の喪失、戦力的損害はスパルタニアン12機、駐機していたシルフ3機が破壊されたものだ。

この情報はT B—03にいた戦術人形、グロック小隊たちの情報データ、そして雪風の情報ファイルとともに13旅団6大基地、グリフィン司令部、各戦線へと届けられた。「よく帰ってきてくれたね」

エル・ファシル基地の地下格納庫で零をヤン・ウエンリーが出迎える。

その声色は優しいが、顔は険しい。

「明らかに我々に対する技術革新が鉄血で進んでいるとみるべきだろう」

ヤンの言葉に零はヘルメットを脱いだ姿勢で固まる。

「どういうことだ」

零からすれば、ジャムとの戦いの中ではお互いにお互いを妨害したり似たような兵器がすぐに登場していたため、今回の出来事もあまり驚きではなかった。

零の考えていたことはただ一つ、雪風についてである。

「今まで鉄血はここまで大規模な新兵器を用いた攻勢に出ることはなかった。やはり、我々が彼らにとって脅威であることに変わりはないことがはつきりしたわけだ」

「だからなんだ」

「データを見たが、君は一度あのミサイルと遭遇しているね。雪風ですら回避・迎撃がやつとなミサイルでは、スパルタニアンはもちろんノーマルシルフでは相手にならない」

それは、第13旅団が持っていた優位性が大幅に揺らいだことにほかならない。

つまり、軽々しくシルフやスパルタニアンを出すわけにはいかなかったのだ。

「要点を言え」

零は苛立っていた。まるで、雪風を否定された気分だった。

雪風と自分は帰ってきたのだ。帰ってきたのだからいいではないか。対策など生きていればいくらでも考えられる。

零はそうやって雪風と飛んできたのだ。

そんな彼にとって、飛ぶ前から飛ぶことを否定するようなヤンの言葉は奇妙に零の心を刺激した。

「では、はつきりと言おう」

ヤン・ウエンリーは背筋を伸ばして零に正対する。

「これからは、防空にのみシルフとスパルタニアンを出す。ヒューベリオン直属もそう。今後の戦術情報偵察は、君たちスーパーシルフ単機のみで行ってもらおう」

零は拍子抜けした。

てつきり、ここではもう飛べないものだとはかり思っていた。

未だに帰還する方法が見つかっていない以上、ここで支援を受けながら模索していくためにも飛ぶことは必須だったからだ。

「かまわない」

「それから、雪風を交えて3人で話がしたい」

「なんだ」

「あのミサイルについてさ」

「いいだろう」

零とヤンはエル・ファシル基地の薄暗い地下司令室のモニターの前に来た。人払いをしており、中には零とヤン、そしてコンピュータ要員として引っ張り出されてきたカリーナの3人しかいない。

「SSC、STC、聞こえますか？」

腰のカバンから取り出したコードをジャックに繋いだカリーナが特殊戦コンピュータと連絡を取る。

その返答を、カリーナはモニターに出力するように導く。

〈こちらSSC。感度良好〉

〈こちららS T C。要件はなにか〉

「カーリーナ、雪風も繋いでくれ」

「かしこまりましたわ」

〈This is Yukikaze〉

「よし。聞いてくれ。先程の鉄血の襲撃に際しての話なんだが、私はこう考えている。

我々の戦力増強に追いつく速度、情勢や各体制、そして兵器を鑑みれば、鉄血工廠の裏には深井少尉たちが戦っていたジャムがいるのではないか、とね」

「フムン」

〈突然すぎる話だ。根拠を述べよ〉

「まずは今の我々のシステムができたきっかけでもある深井少尉と雪風の来訪からはじまる。」

深井少尉と雪風から聞いた話によれば、ジャムはこの雪風に極めて強く関心を寄せている。

そして、不可知戦域や超空間“通路”を通ってこちらに来た可能性が高い少尉と雪風は、いわばここで第二のF A Fを作った。

ジャムは通路を自在に構築できると仮定すれば、この世界にジャムがいても何もおかしくはないだろう？」

「たしかに、あのミサイルはジャムのものによく似ている。雪風の戦術データベースにヒットしたものだからな」

「そう。次に、鉄血の戦術兵器の進化速度だ。今まで、鉄血は我々の基地に対して直接ミサイルを撃ち込んでくるようなことはなかった。

それは、こちらから撃ち込まれる心配がなかったからだろう。だが、雪風を含む戦術戦闘機を開発したことによって、鉄血も対抗手段、ある意味で抑止力を誇示したんだと思っ」

〈続けよ〉

「3つ目、我々第13旅団はジャムらしき戦術人形とあいたい相對したことがある」

「なんだと?」

「本当ですか、提督さま?」

〈そのような情報はSSCデータベースにない。詳細を述べよ〉

〈戦術データベースにヒット。確かにその可能性は高い〉

「カーリーナ、我々第13旅団の最初の作戦で、FALと戦闘をした戦術人形を覚えているかね」

それは10か月前、ヤン・ウエンリーが初めてFALらを指揮して行ったSO9地区におけるM4A1奪還作戦のことだ。

鉄血のネームドであるスケアクロウと共に居た、謎の戦術人形がいた。

その戦術人形との1時間以上に渡る交戦で、FALは右視覚を含む大破に追い込まれた。FALの攻撃によっていくらかの損害は与えたようだが、詳細は以前不明。

FALのブラックボックスに記録されたデータがSTCによって表示される。

黒のポンチョらしき外套を着た戦術人形。

その輪郭はノイズが走るようにぼやけていて銃種や性能などを特定できない。顔の仮面はFALの攻撃によるものであろう流血こそあるが、顔の造作などはわからない。

極めつけに、その謎の戦術人形は最終的には1度も銃を見せなかった。

「私は、この戦術人形がジャムではないかと考えている。銃を見せなかったのも、見せなかったのではなく、そもそも持っていないのではないだろうか、とね」

「少尉と雪風さんはどう思われますか?」

「フムン……人型のジャムなど見た事がない。奴らについてわかっているのは我々の兵器に対抗して新兵器を作ってくることだけだ。だが……」

〈DOLLS are weapons. / So there is a possibility that JAM can also imitate DOLLS〉

戦術人形は兵器である。従って、ジャムが戦術人形を模倣する可能性はある。

へでは今後の対策を施す必要がある」とSSC。

「ヤン・ウェンリー提督のプランに従い鉄血に対する大規模攻勢に出るべきだ」とSTC。

「我々第13旅団の現有戦力では、ジャムの高速ミサイルに対抗できない。そのため、新型機を製造する必要がある」

零がその言葉にぴくりと肩を揺らす。全く同じことをFAFはしていたからだ。零は雪風と離れたくはなかった。だが、雪風が考えていることがわからなくなる時があった。

こちらの世界に来てから、雪風とはイレギュラーへの対処でいっぱいだった。雪風はもしかして自分を捨てようとしているのではないか。そうよぎったことがあった。

「深井少尉、君には統合陸戦隊との合同作戦の戦術偵察を行ってもらおう」

「何故おれが？」

「雪風と君だけが我々の命綱だ。その君と雪風に、ジャムや鉄血の現戦力とのバランスを判断してもらいたい。その結果次第で新型機のスペックを考えないといけないのでね」

今や第13旅団の工廠はFAFと同じくコンピュータが各種製造を担っている。も

ちろんヤンや各戦術人形のオーダーもあるが、基本的にはSSCやSTCなどのデータを集めて製造班のコンピュータが武器装備、基地設備などを製造している。

薄暗い部屋で、ヤン・ウエンリーは目を伏せながら口を開く。

「我々がすべきことは、世界を救うことや、人々を救うなんていう高尚なものではない。私がしてきた、人々へ尽くす戦いだ。」

そのためにも我々は、我々が生き残るために戦う必要があるんだよ」

ヤンは星を見上げ眩く。

「星はいい、か」

かつて、ラインハルト・フォン・ローエングラムがジークフリード・キルヒアイスに放ったとされる言葉を反芻する。

「何事にも動じずいつもじつと同じ場所で瞬き続け、私たちを見守ってくれる……」

ヤンは星の大海に帰りたいと思ったことは無かった。

イゼルローンは恋しかったが、それは星海への郷愁ではなくそこにいた人が作り出す空間へのものだった。

死んだ後でも、他人を死地に送り込むことになるとは、やっぱり私は地獄に落ちる事になっていたらしい。

そんなふうに考えるヤン。ブランデー入りの紅茶を一口。

思えば、この世界に来てから休まる暇はなかった。

カリーナは休ませてくれないし、上層部やFALは次から次へと厄介事を持ち込んでくる。困った。

しかし、ヤンは指揮官であって兵士ではない。

同盟軍やイゼルローンにいた時のように、体制のために戦う訳でも、何かしらの大義のために戦う訳でもない。

艦隊戦のように前線に出ることもなく、ある意味でヤンは退屈にも近い感覚を抱いていた。

わずかばかりの後ろめたさと戦術と戦略という頭脳戦の狭間で、ヤン・ウエンリーは自信を見失いつつあったのだ。

自身を知る人はいない。

帰る場所もない。

背負うものもない。

そんなヤンは、事ここに至って実感として気づいたのだ。

ヤン・ウエンリーという人間は、群雄が起ち、自身がその最前線に居る時代だからこそ満足した生を送ることが出来たのだ、と。そしてそれは、駒を指揮する指揮官でも、直接自身が立つ事でもなく、艦フネや星イゼルローンという象徴があつてこそだった。

もし激動の時代でなければ、ヤン・ウエンリーという人間の非凡の才は発掘されず、無名の歴史家としてその生涯を終えたであろう。

奇しくも、宇宙曆における後世の歴史家がヤンを評したのと同じように、ヤンは違う環境に身を置くことでようやくその事を肌で実感したのだ。

星が広がる空を見上げ、ヤンは一人佇む。

自身の魔性とも言えるその事実はつまり、戦乱の時代において平和を求めると嘯きながら、何十年かの平和の時期にはヤンは変化を求めると言うことだった。

もし仮に、退役したヤン・ウエンリーが担ぎ出されなければ。

フレデリカ・グリーンヒルとともに生活を送ることが出来なければ。

ヤン宅に帝国軍の監視がなく、隣にアレックス・キャゼルヌの家がなければ。

皇帝カイザーラインハルト・フォン・ローエングラムが同じ時代におらず、自由惑星同盟フリー・プランネッツが崩壊していなければ。

もし仮に、ユリアン・ミンツがヤン・ウエンリーに養子としてとられなければ。

ヤン・ウエンリーは、冗談交じりにきつとこう言つただろう。

「平和だとすることがないね、いい事だ。しかし、こうも平和だと何か起こらないものかと思つてしまうな」

ヤン・ウエンリーの性格とはつまり、戦乱にあつてこそ歴史の学徒としての願望がありつつも、平和であれば変化を望むものだった。その無為を有為に変えたのが、フレデリカ・グリーンヒルやラインハルト・フォン・ローエングラム、そしてユリアン・ミンツたちだったのだ。

もちろん、きちんとした環境さえあれば歴史家になれたことだろう。皮肉屋か、風刺家か、おそらくはそのどちらかを持つ歴史家として少しは名を残したかもしれない。

しかし、今ヤンがいるのはグリフィンだ。

歴史は消滅し、記録された史実はほぼ残っていない。

研究する対象がないのだ。敵は企業、自身も企業。大義もなければなんらかの政治体制だとか民衆の支持だとかいった社会的な基盤も極めて脆弱だ。

このような環境で、ヤンは退屈していたのだ。

「だから私は宙を見たのか」

ヤンはまだ、自分がなすべきことを見つけ出すことは出来ていなかった。

「どうしたんですか、提督」

「らしくないな」

「さつきからずつとこの調子なのよ」

「提督さま、きつとお疲れなのでしょう」

ヤンにも聞こえる声で話す4人が執務室の外で集合していた。

「入ったらどうだい？盗み聞きなんて性格の悪い」

「では失礼して」

カリーナ、FAL、M4、NTWの4人だ。

「何か用かい」

「いえ、休暇のない提督さまに差し入れを、と」

そう言つてカリーナが差し出したのはお酒の入った瓶と、1枚の封筒だった。

「V・S・O・Pですからいつものより少しお高いものですよ」

グラスを5つ取り出したカリーナは続ける。

「今夜は無礼講ですわよ」

盛り上がる4人を後ろに、ヤンは手紙を開ける。中には一通の手紙が入っていた。

宛名は「ヤン・ウエンリー提督様」、差出人の名前は……

「これはなんの冗談だい？」

「届けると言われたのですから届けただけですわ。中身については残念ながら」と肩をすくめるカリーナ。

差出人のところには、「イゼルローンの宇宙より」その下に連名で

「ワルター・フォン・シエーンコップ

エドウィン・フィッツシャー

フョードル・パトリチエフ

アレクサンドル・ビュコック

チユン・ウー・チエン

ドワイト・グリーンヒル

ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ

となっていた。手紙には、ひとつの写真が同封されていた。それは、なんとグリフィンの制服である朱のロングコートに身を包んだ面々の集合写真だった。

「これは一体なんの冗談だい？」

「私に言われても……」

「おいしいわね、これ。それで、なんの写真？」

くび、とグラスを傾けたFALがヤンに促す。

「見ていいよ。これは、私の、そうだな。私が所属していた自由惑星同盟フリー・プラネッツの関係者たちだ」

「ほう、提督の上官たちということか？」

「上官が3人、部下が3人、最後の方はお客さまよ」

懐かしむようにヤンはグラスを傾ける。

時間は少しズれるが、ヤンが第13艦隊司令官に就任した時の

統合作戦本部次長兼宇宙艦隊総参謀長にしてヤンの義父ことグリーンヒル大将。

あたたかくヤンらを見守り支援してくれていたが、クーデターに担ぎあげられ最後はクーデターの主犯を射殺しようとした。宇宙艦隊司令長官シトレ元帥と共に、ヤンを高く評価してくれた人物だ。

そして、民主主義に殉じた同盟軍最後の将にしてヤンの良き理解者、ビュコック元帥。ロボスの後任として宇宙艦隊司令長官を務めあげ、最終的には民主主義を守り抜いた立役者だ。

そのビュコック元帥の宇宙艦隊司令部の総参謀長がパン屋の二代目ことチュン・ウー・チェン。ヤンに同盟軍の残りの全てを託した。

エドウィン・フィッシャー中将はヤン艦隊に欠かせない「足」として長きに渡りヤンを支えてくれた。彼なしではヤン・ウエンリーの緻密な艦隊運動はなしえなかつただろう。

フョードル・パトリチエフ大佐は第13艦隊の次席幕僚で、その明るさとキレで行く度も献策をしてくれた。ヤンの最期の座乗艦、レダⅡにも同行し最後までヤンを守るた

めに戦った。

ヤンの指揮下の中では一二を争う問題児がワルター・フォン・シエーンコップだ。
ローゼンリッター
薔薇の騎士連隊の隊長で、同盟と帝国双方に名を轟かせた豪傑だ。

帝国からの客人であるウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ提督は、客将ながらヤンと共に回廊で最後まで戦ってくれた。無口だがヤン艦隊の面々は常に敬意を払って接していた。

「そんな方たちが新しくグリフィンに……」

「まず間違いないくこつちに回されるだろうね。なにせ、人手が足りないんだから」

第13旅団は人手が足りない。それは、ヤンが前線に出ている時には6大基地は自動
防衛機構のみで稼働している現状がよく示している。

急激に大きくなりすぎたのだ。

「これで少しは動きやすくなるかな」

「どういうことですか？ 提督さま」

「いや、簡単な事だよ。今我々は現代戦と称される部隊間戦闘を行っているだろう？」

「そうね。部隊単位かエレメント単位の個別戦闘がメインよ。AR15救出作戦のよう
な、ね」

「だが、人手が増えれば我々は最大規模で打つて出ることができる。つまり、艦隊戦のよ

うに」

「そんなことが出来るんですかあ？」

「M4はすこし水を飲んだ方がいいね。もちろんできるよ。詳しくはまた準備が整ったら話すがね。まあ、目新しいものでもないよ。」

銃火器が戦闘に占めるウェイトが大きくなる前、つまり騎馬部隊や歩兵らを中心とする陸戦がメインだった時代の戦術に近いかな」

「そういえば、ヤン提督はなんでそんなに歴史や戦史に詳しいんだ？」

NTWが素直な疑問をぶつける。いかに軍人といえども、保有する知識量が桁違いに多いヤンは下手をすれば戦術人形のデータベースよりも博識なのだ。

「なに、簡単な話だよ。私は元々歴史家志望だったのさ」

叶わなかったがね、とブランドーを呷るヤン。

「たしかに、軍人よりは似合ってるわよ」

微笑みながらいつの間にか膝の上に乗っていた元帥を撫でるFAL。

いつもよりも雰囲気が丸く感じる面々だった。

「よく言われるよ」

「提督さまがいちばん得意な戦術はなんなんですか？」

「うーん、難しい話だね。そもそも戦術なんてのは、補給と部隊の量が揃っていればあま

りにしなくていいんだ。

詭計や策略なんてのは邪道だからね。

そういう意味では、一点集中と戦線の移動が私の一番得意とするところさ」
カイザ 皇帝ラインハルトが得意とした苛烈な攻勢と壮麗で壮大な大規模戦線構築に対応するため、と言えるかもしれない。

ヤン・ウエンリーが相對した帝国軍、代表的な例でいえばアスターテ戦役では5000ほどの戦力差があつた。

アムリッツアではほぼヤン率いる第13艦隊のみで疾風ウオルフ・デア・シユトウルムウオルフ率いるミッターマイヤー艦隊を一時撤退、ビツテンフェルトの黒色シユワルト・ランツェンレイター槍騎兵艦隊を壊滅に追い込み、さらには奇襲を成功させたキルヒアイス艦隊をも相手取り撤退戦を成功させている。

ラインハルトの同盟領侵攻作戦、神々の黄昏ラグナロクではトリプラ・ライガール・タツシリ星域でヤン艦隊およそ1万5000隻という単艦隊でシユタインメツツ艦隊、レンネンカンプ艦隊、ワーレン艦隊を破り、バーミリオン星域会戦ではラインハルト本隊と増援のミユラー艦隊を含む2万6000隻の艦隊が作る24枚もの縦深陣を破りラインハルトの旗艦ブリュンヒルトに肉迫した。

回廊の戦い前哨戦ではメックリンガー艦隊シユワルト・ランツェンレイターと黒色槍騎兵、ファーレンハイト艦隊の挟撃を策謀によって防いだ上に、回廊の戦い本戦で最終的には帝国軍14万隻以上に

対して2万隻以下の艦隊で停戦まで持ち込んだのだ。

戦術的に見れば、ヤン・ウエンリーは1個艦隊で膨大な物量攻撃を防ぎ、あまつさえミユラー・アイゼナツハ・ミッターマイヤー麾下艦隊・黒色シユトルツランツエンレイター槍騎兵・ファールンハイト残存艦隊の4波の波状攻撃を防ぎきったことになる。

イゼルローン回廊におけるイゼルローン要塞攻防戦でもヤン艦隊はほぼ帝国艦隊より少数で勝っていた。

それは、策略もあるがやはり陣の効率的で迅速な移動と一点集中砲火による大損害を与える戦法によるところが大きい。

「改めて聞くと、とんでもない戦績だな……」

「運が良かったのさ。それだけではないが、とにかく運が良かった」

感嘆するNTWRを横目にグラスにブランドーを注ぐヤン。

「まあ、新しい兵装も開発中だし、君たちの戦いがもつと楽になるよう努力するさ。こんな戦争なんて、やってられるもんじやない」

そう呟いたヤンには戦術人形たちの気持ちも理解できなかつた。後方で呑気に自分たちを戦場へ送り出す自分を慕うなど考えられなかつた。

自身が陣頭に立てばこそ、ヤンは立っていないのだから。

嘆息してブランドーを補給し続けるヤンを見て、カリーナが話す。

「提督さま」

「なんだい？」

「提督さまに言っても聞かないと思えますが、お聞きください。私たちは、決して提督さまの事を嫌いになつたりはしませんわ。」

私たちは傭兵ですが、お金と同じくらい仲間が大切です。

そんな私たちの生存確率は提督さまのおかげで未だに1戦役に八割を割ることがありません」

「そうね。端的に言えば、”あなたについて行けば生き残れる”って思わせてくれる指揮官なら、当然みんな慕うわよ」

FALもカリーナの肩を持つ。どこかで聞いた言葉だな、とヤンが考えている間にNTWも口を開く。

「そうだな、私は狩りが出来ればなんでもいいが……提督、あんたの下はのびのびと自由にやれるから私は幸せさ。ま、もし締め付けがきつくなるようなら転属願を出すかもしれないが」

「そうれす！提督は緩すぎます！」

ついにクダを巻き始めたM4は呂律が回っていない。

グラスを片手にヤンに怒った顔を向ける。

顔が真っ赤だが、M4はまだ2杯目をついだばかりのはずだ。

「P90とか、グリズリーとか、隊員たちをまとめるの、とーっても大変なんれすからね！」

「わかったわかった、いいからそのグラスを置いて、この水を飲みなさい」

酒は飲んでも呑まれるな、とはよく言ったものだ。

しかしM4は絡み酒か。優雅に飲むFALやNTWは大人なのだな、と全く場違いなことを考えながらM4を介抱するヤン。

面倒臭がりなヤンだが、そのくらいの甲斐性は持ち合わせているのだった。

「M4さんは寝ちゃいましたか。突然ですが提督さま、これを見てくださいませ」

そう言ってカリーナが取り出したPDAは、空中にホロディスプレイを展開する。

そこに映し出されていたのは、今酔い潰れて元帥と共に寝息を立てているM4の姉にあたるM16A1だった。

「これは？」

「……これは、先日6番機ミンクスが手に入れてきたデータですわ。S09地区にあるセーフハウスにて、グリフィン404小隊HK416がM16と交戦の未敗北。

同部隊長のUMP45から鉄血の最重要機密と思われる情報を託され、我々第13旅団に接触を試みました」

「それをミンクスが手に入れたというのはどういことだい？」

怪訝そうにカリリーナを見やるヤン。このデータが本物であれば、直接グリフィンに情報を渡せばいい。

そもそもなぜHK416はM16と交戦したのか。404小隊が掴んだ情報とは何なのか。

「これは、M16から直接得た情報ではありません」

カリリーナの表情が翳る。

「ARR小隊所属、M16A1は単独行動中に味方部隊を逃がすため敵基地内に留まりM1Aとなっていたことがわかりました。その情報は、ここ数ヶ月S08地区を彷徨っていた数名の戦術人形から確認が取れています。」

S08地区上空を飛んでいたミンクスはふらふらと飛ぶドローンが撃墜される瞬間を確認しました。

そのドローンには、M4A1という人形の正体、敵の最重要機密、“エルダーブレイ”なる敵の最高位戦術人形、そして……

カリリーナが悲しくも慈しむような目ですやすやと眠るM4を見る。

「M4さんへの別れの言葉が記録されていました……」

「このデータはM16のメッセージの他に、続きがありました。つまり、データを介して

記憶の1部までもが流入していたのです。

鉄血の最重要機密であるコンピュータウイルスを用いた「傘」作戦、その「傘」ウイルスに感染し、鉄血のサーバーと接続してしまったがためにエルダーブレインと繋がってしまった彼女は……人格を喪失……いや、侵蝕され、もはや鉄血の戦術人形となりつつあったM16はグリフィンではMIAのまま布告することでした」

FALは言葉を失った。M16は戦友だった。いつも酒を片手に豪快に笑っていた彼女が、いない。

メンタルモデルのバックアップはない。それは、メンタルモデルそのものが侵蝕されてしまったことによる断絶である。

ヤンはグラスを握り潰そうかという力でからだは僅かに震えていた。

「……私の前でこれ以上馬鹿な真似はさせない。一企業が戦争をし、あまつさえそれが市民にも悪意あるものだとすれば私はそれを容認できるものじゃない。この子にもだ。

人間の行為の中で最も卑劣で恥知らずな行為は戦争賛美と、何も知らない国民を戦地へ送ることだ。

だが、利益のために1組織が国家や国民を蔑ろにすることも私は許さない」

席を立つヤン。その手には強く握られたPDAがある。M4の出自が記録されたものだ。

「カーリーナ、召集だ。シエーンコップ中將と薔薇ローゼンリッターの騎士連隊をエル・ファシルまで呼び出してくれ。それから、本部に連絡。作戦を実行する、と伝えるように」

St. 06 オペレーション・カノーパス：前哨戦

「作戦を確認します」

第13旅団エル・ファシルの大会議室で、カリーナが話す。

「3日前、我々STBフォート・エル・ファシルエール・ファシル基地前線基地TB-03が消滅しました。

鉄血は、これを機に大規模攻勢に転じるものと考えられます」

大モニターには、雪風のTARP戦術航空偵察ポッドシステムSが捉えたTB-03の画像、ミサイルの着弾映

像が映し出されている。

それを見るのは第13旅団から特殊分遣隊ユニットDデルタ、第1特殊部隊コマンドユニッ

トA、統合陸戦隊からネゲヴ小隊の面々、ヤン・ウエンリー、ヘリアン、そして作戦に

参加する特殊戦機のパイロットとフライトオフィサだ。

「当初立案された本作戦の目的は、敵の大規模データセンターを襲撃し戦域に取り残されて
いるAR小隊の戦術人形のデータを回収することでした。

しかし、3日前に鉄血は新兵器による攻撃を仕掛け、我々の防衛網を破ることに成功
しています。

猶予はありません。このタイミングで鉄血に攻め込まれ、エル・ファシルが陥落した

場合、ヒューベリオンのみではSTB基地、ひいては東部戦線の防衛は困難です。

現状、第13旅団の作戦能力の消失は地区作戦司令本部の防衛網の喪失をも意味します。

これは想定される最悪のシナリオであり、SSCはこれをKクラスシナリオとしてグリフィン本部へと報告しました」

第13旅団旗艦ヒューベリオンの対空防衛火器は鉄血の高速ミサイルを撃墜可能だ。だが、ヒューベリオンは無限に飛べる訳ではなく、それは第13旅団が保有する航空戦力も同様である。

「そこで、当初の作戦プランを変更し、本作戦では敵の大規模データセンター襲撃と同時に鉄血の主要基地に対し攻撃を仕掛ける二方面作戦を実行します」

「発言、いいい?」

手を挙げたのは統合陸戦隊ネゲヴ小隊の小隊長であるネゲヴだ。

「どうぞ?」

「二方面作戦を実行するのであれば、本部に増援を要請する必要があると思うわ。たったの3小隊で二方面作戦なんて、正気の沙汰じゃない」

「そこは私から説明しよう」

席を立ったのはヤン・ウエンリーだ。

ヤンはモニターをマップに切りかえ、説明を始める。

「君達も噂で聞いていると思うが、数週間前からグリフィン部隊がとある鉄血部隊によつて損害を被っている。」

特殊戦機の戦術偵察の結果、敵は列車砲、あるいは機動要塞と極めて作戦能力の高い随伴戦術人形だと考えられる」

「私たちがそいつを潰すつてこと？」

「いや、そちらへの投入戦力はFAL、君のユニットAだ」

「なんですつて？」

「ネゲヴ、君の小隊はM4たちユニットDと共に敵の基地へ襲撃をかけてもらう」

ヤンの発言に会議室がざわつく。

当然だ。

基地への襲撃ですら手が足りないというのに、列車砲への派遣がたったの一小隊なのだ。

基地への襲撃は工作だけなら一部隊でもなんとかなるかもしれないが、列車砲への襲撃は正面衝突になる。

「これは極秘だが、援護はある。君たちにはまだ知る権限がないため伏せさせてもらうが、基地の方は安心してもらつていい。グリフィンと提携関係にある小隊が陽動や援護

などの工作を行ってくれる」

シークレットマークが付いた狼の部隊章がモニターに表示される。

至っていつもの調子で語るヤンにネゲヴが嘯み付く。

「援護が必要なのはこつちではないでしよう?」

「いや、これで大丈夫だ。第1特殊部隊コマンドユニットAは通常の5名編成に2名を加えた特別編成で出撃してもらう。詳しくは個別ブリーフィングで話す。第1特殊部隊コマンドは列車砲撃破後、特殊戦1番機カーミラと2番機^{チュンヤン}春燕の援護の二元データセンタールに向かうこと」

「了解よ」

FALは一言、そう言って口を閉ざした。

ネゲヴは信じられないものを見るような目でFALを見る。

「ネゲヴ小隊と特殊分遣隊ユニットDは3番機雪風の戦術監視下で敵主要基地に攻撃を仕掛ける。目的は敵基地の保有する戦力の殲滅、及び基地能力の停止となる。

増援や大戦力の補充は気にしなくていいよ。あらかじめ敵補給線の封鎖と陽動を特殊分遣隊ユニットGが実行しておく」

ヤンの立てた作戦プランが青いラインでマップにオーバーレイされる。

「特殊戦機は敵高速ミサイルに留意すること。特にカーミラ、^{チュンヤン}春燕は雪風からデータを

しっかりと貰っておくようにね。

雪風は戦術偵察装備、カーミラと春燕チュンヤンは少し重いが最大火力を持つてもらうためA2重爆装備で出撃してもらおう。

作戦開始日時は1週間後の1030。敵補給線を断つてから4日後、同時に決行する。質問はあるかね」

「プロフェッショナルとして言いたいことはあるわ」

「だろうね」

「でも、私達は合同作戦をしているの。作戦には従うわ。提督の力量を見せてもらおうね」

「お手柔らかにね。さて」

ヤン提督の顔つきが変わる。暖かい笑みが消え、口を引き結び目付きが陰しくなる。

「この作戦の後、我々グリフィン第13旅団は総力を持つて残存目標を救出する作戦を展開することになる。ミンクスが得たデータによれば、敵はAR小隊が持ち帰ったデータを奪い返すのが目的だ。つまり、敵は間違はなく奪還に来る」

「皆さんも生きて帰ってきて、作戦に参加してくださいね」

「敵のトップは割れた。手強いが、どうにもならない相手ではない。グリフィンはもちろんだが、我々が結束しなければ負けるかね。かかっているのはたかだか1個の情報

だ。

だが、そのデータは社会を壊しかねないものだ。

あまり油断は出来ないが、気負いすぎても意味が無い。適度に気を抜いて頼むよ。それじゃあ、はじめようか」

「前に会ったことがあるかしら？ネゲヴよ」

M4に手を差し出したのはネゲヴ小隊の隊長であるMG、ネゲヴだ。

「いえ、初めてだと思えますよ。よろしくお願いします、M4A1です」

M4は手を握り返す。

「今回の作戦プランはどうなってるのかしら？指揮、隊列、装備なんかはそちらが用意してくれるとの事だったけど」

第2会議室に、13旅団の特殊分遣隊ユニットD、M4、P90、100式、グリズ

リー、HK417が、統合陸戦隊ネゲヴ小隊からネゲヴ、ガリル、TAR-21、Micro Uziが顔を揃えている。

「今回はアバウトで申し訳ありませんが基地までは私が、基地に入ってから各自で動

くことになります」

「指揮系統はどうするのかしら？この状況では……」

「それについてはこれを」

M4が差し出したのはデータチップだ。

「我々がスーパースィルフと連絡を取る時に使う通信周波帯のデータです。本作戦では雪風しかいませんので、一つだけですね」

通常航空支援がある場合はその作戦に参加する機体とデータリンクを繋ぐパッチをインストールする。緊急時はオープン回線のエマージェンシーコールや音声を出せばスーパースィルフが拾う。

「基地方面の現場作戦責任者は私です。部隊指揮は私とネゲヴさん、連絡は雪風を介して行いますのでご安心を」

「装備や機材はどうするのよ」

「持ち込みたいものはありますか？あればそれは持ち込んでもらって結構ですよ。持ち込めないものはこちらの箱に。戦場の補給ポイントに置いて貰えます。

他に必要なものはカーリーナさんに言ってもらえればなんでも用意できます」

「じゃあ戦車」

いたずらっぽく言って見せたネゲヴに対して、M4たち特殊分遣隊の面々は真顔に

なった。

怪訝そうなネゲヴ小隊のメンバーにM4が少し青ざめた顔で言った。

「いいですけど、用意してくれる代わりに、カーリーナさんはとんでもない利率突きつけてくるので……くれぐれも気をつけてくださいね」

「……やっぱり遠慮しておくわ」

そこへ深井零が入室してくる。

「深井少尉、お疲れ様です。ネゲヴさん、こちらが本作戦で私たちを支援してくれる特殊戦3番機雪風のパイロット、深井零少尉です」

「雪風……。そう、貴方が」

ネゲヴは目を細めて聞こえるか聞こえないかほどの声で呟く。

ネゲヴは特殊戦機が戦術偵察を始めた黎明期からその存在を知らされていた数少ない人形だった。

そして、雪風から被害報告やKIA報告を受けたこともある。

「……」

黙ったまま無感情に壁に寄りかかる深井零と冷ややかな目で零を見るネゲヴに何かを感じとったか、M4が言葉を繋ぐ。

「ネゲヴさん、雪風はいまやグリフィンに欠かせない情報を集めてくる存在です。貴女

なら、戦術人形と情報のどちらが大切かはわかりますよね」

あえて突き放すように言うM4にちらりと目線を向けたネゲヴは「一つ溜息をつき、口を開いた。

「私は戦術人形よ。与えられた任務は必ず遂行する。でも、戦略人形じゃない。」見捨てる」という任務でないのなら、目の前の仲間を選ぶ」

「ネゲヴさんらしくない発言ですね。いかにクズ鉄とはいえ鉄血の高等人形は侮れない存在です。私はよく知っています。AR小隊は高等人形の立てた包囲戦術とその渦中の戦闘で別の高等人形に敗北を喫しましたから」

出会ってからこれまでのM4からは想像できないような発言にネゲヴ小隊のメンバーは少し驚いたようにM4を見る。

特殊分遣隊のメンバーは、作戦行動時の鉄血に対する異常な憎悪を見せるM4を知っていたため、特に何も言うことは無かった。

「では貴女は味方を見捨てて逃げる事が出来る、と?」

「はい。私は最終的に鉄血を叩き潰すために撤退します。

任務と味方を天秤にかけるとするのなら、昔の私は味方を選ぶでしょう。

実際にそうしましたから。その結果がAR小隊の壊滅です。

今の私なら迷いなくその天秤をぶち壊して任務に集中するでしょう。

ヤン提督は鉄血のクズ共を正面から捻り潰せるだけの作戦を授けてくれますから、そのための犠牲なら許容しましょう」

「狂ってるわ」

「そうかもしれないですね。でも、その狂気は誰が保証してくれるのですか？」

こちらを見ているようで中空を虚ろな目で見つめながら、M4は嘯く。

「あなたは、あなた方は、自分がまともだと思っっているのですね。ですが、よく考えてみてください。」

その状況になったのは何故ですか？

あなたの正気は、”人道の観点から”、国際社会が保証してくれますか？

この崩壊した世界でなおも同族殺しを続ける、この社会が？

スポンサーが、周りがそう言っているからだ、と？

それは義務と責任の放棄に過ぎません。

犠牲なき戦争などという甘く辟易するような考えを持つものが社会を腐らせ、こんな戦争を続けることになるのです。

ヤン提督は数千万の犠牲とその遺族の非難の中そんな社会を守るために戦いました。

FALさんやM16姉さまのような大戦期の人形たちもそうです。

背中を守るべきものを持ち、守るべきものを持つものを打ち倒して進んできた。

私たちが守るべきものはなんですか？

味方の戦術人形ですか？

情報？プライド？戦績？

そんなもの、犬にでも食べさせてあげたらよろしいんですよ。

私たちの存在理由は、あのクソツタレの鉄クズ共から、あと少しで消えてしまいそうな社会を守ることです。

我々が戦術人形であると誇りを持って述べるのであれば、犠牲を受け入れて進むのが筋では無いのですか？

その過程でもし味方が斃れたのなら、その味方への最大の餞はなむけは敵を完膚無きまで、塵と化すまで殺すことです」

爛々と目を光らせながら静かにゆっくり、しかし確かな声でM4は話す。

ブリーフィングは終わった。数日はは装備チェックと出撃前訓練、1週間後には出撃となる。

第1会議室では第1特殊部隊コマンドユニットAが集まっている。

隊長FAL、副隊長NTW、Vector。最初の3人に加えて今回本部から異動になり配属されてきたACRと417の先輩であるG36CがユニットAのメンバーとなる。

「それで、特別編成つてのは？」

NTWがFALに聞く。

「さあ。私も何も聞いてないわよ。でもま、こんな作戦に参加するくらいだからよっぽど腕の立つ人形なんじゃない？」

「どんな人形かな……」

「ACRさん、気にしなくて大丈夫よ。ここ、とつてもゆるい部隊ですから」

「……」

カチカチになっているACRにG36Cが声をかける。

歯切れの悪いACRにVectorが質問をなげかけた。

「ねえ、なんか隠してない？」

びく、と肩を動かししたACRは申し訳なさそうな顔をして下を向きながら話す。

「実は、私は不良品なんです。メモリーに障害があつて、記憶が定期的にデリートされてしまふんです」

「さっきここに来た時も、異動してきたことを覚えてなかったわ。作戦のことは忘れな

「いみたいだけど……その欠陥のせいで、演習以上はしてない。今回は処女任務ってわけ」

「ポストイットみたいなものを用意するか、外付けの外部記憶装置を持っておけばいいんじゃないか？」

「だめね、もしそこに被弾したら致命傷でなくてもACRが戦闘不能になる。鹵獲される可能性もあるし」

「いい方法があるよ」と、頭を悩ませていた面々の前にヤン・ウエンリーが現れる。

「良い方法？」

「うん。こいつはどうかかな？」

「そうやってヤンが取り出したのは1枚のデータチップだ。」

「なに？それ」

「これはね。我が特殊戦STCに直結できる帯域に接続するパスコードのデータだよ」
場が騒然とする。

「なにせ、特殊戦の最重要機密にアクセスできる手段がたった1枚のチップをインストールするだけなのだから。」

「STCのバッファ領域と相互に接続しておくんだ。そうすれば、記憶にも戦術にも問題ないだろう？」

「ですが、入ったばかりの新人にそんな大事なものを……」

「うん？面白いことを言うね、えーと、ACRだったかな。ベテランなら何をしても良くて、新人は言われたことしかしないのかい？」

「ここは軍隊ではなくPMCだよ。役立つものは全部使わないとね。さて、話がズレた。入ってきなさい」

「失礼します」

「邪魔するぞ」

入ってきたのは2体の戦術人形だ。1人は羽根のような意匠が施された真っ白なバトルジャケツトに太腿が顕になったミニスカート、ニーソックスを履いている。

白髪にやや緑がかかった青い目、やや短めのポニーテールにまとめている。白い肌も相まって、全体的に「白」い。

持っている銃はおそらくARだと思われるが、見たことの無い形をしている。

大型、角張った銃身に銃口付近まで何らかの機構がバレルを包んでいる。

スコープもARにしてはやや適正距離が長めのロングレンジ仕様だ。

バレル上に大きなパーツが取り付けてあり、スコープを塞いでいるように見える。

マグもおそらく40は最低でも入るだろう。

ストックは銃身と一体型だ。

「自己紹介を」

促されて、白の少女は話す。

「コロニー・ラインアークから出向してきました。戦術人形、”ホワイト・グリント”と言います。武器種はアサルトライフル。契約のもと、ヤン・ウエンリー提督の指揮下に入ります。以後お見知り置きを」

丁寧に礼をしたホワイト・グリントは優雅に手を前で組み、目を閉じる。

次に口を開いたのは、ホワイト・グリントとは対照的にワイルドに黒髪を無造作にでまとめた、金色の目をした少女だ。

武器種はおそらくマシンガンだろうか？尖った長めの銃身とバレルを挟むように銃身が伸びている。そこからなめらかに繋がるハンドガード。

六角形のマガジンは横からはめ込むタイプ。

大型のブレードナイフにも見えなくもない。

「レイレナードマシンガン、モーターコブラだ。よろしく頼む。そこと同じく、契約に従い指揮下に入る」

それだけ言うとう腕を組んで何も言わなくなってしまう。

「ラインアーク……ホワイト・グリント……じゃああなたが、ランク9の？」

FALがハツとしたように呟く。

「……詳しいことはお話できません」

「そう……まあ、誰にでも秘密はあるし、話せないなら無理に話す必要はないわ。それに、レイレナード製とはね。そりゃ、上層部もなかなか卸しながらないわけね。」

期待しているわよ、よろしく。部隊長のフアブリーク・ナシオナル・ハースタル、FALよ」

長つたらしい企業名を述べるFAL。

対抗意識の表れだろうか？

「噂には聞いております。あなた方と共に作戦に参加できることを光栄に思います」
「隊長、そんなにも有名なのか？こいつらは」

NTWがFALに尋ねる。ほかの部隊員も聞いたことの無い名前だったため、首を傾げている。もちろん例に漏れずヤンもだ。

「半年ほど前だったかしら？6つの企業が国家体制に対して反旗を翻したの。もちろん裏世界で粛々とね。」

最新の戦術人形は未知の技術で武装していて、マンティコアやSWAPクラス、ELIDはおろか正規軍部隊も軽く屠ったそうよ。

彼女たちは自らを次世代型ネクストと称し、次々に勝利を重ねて行った。26体。編成拡大もしていないたったのそれだけで数多の戦線で活躍して行った……。

でも、ここ最近は活動が停滞していたのよ」

「金か」

「そう。そこで企業は、PMCにネクストを貸し出すことにしたらいいわ。我々グリフィンにも何体か出向していたらいいけれど……まさか、ホワイト・グリントとモーターコブラとはね。

ホワイト・グリントは初期から活躍している人形で、元々はアスピナ所属と聞いていたけれど、ラインアークに移ったのね。

レイレナードのトップ、シュープリスも認める凄腕と聞いているわ。

モーターコブラの所属するレイレナードは企業の中でも群を抜いて高い技術を持つ戦術人形を作っているわね。

”ネクスト”の実力、見せてもらいましょか」

無表情に立つホワイト・グリントと口角を上げながら睥睨するモーターコブラ。

面々は、陣形を決めるために訓練所へと向かうのであった。

訓練所へと向かう途中で自分は役に立たないから、と執務室へと向かったヤンは面会予定に何とか間に合った。

「やあ、待たせたね」

そう言いながら入室すると、目の前にはとんでもない光景が広がっていた。

「おや、ヤン提督。ご無沙汰しておりますな。まさかヴァルハラがこんなにも美女が多いとは思いませんでしたぞ」

「それよりもこの手を離せ!!」

ヘリアンの手を掴んでいわゆる壁ドンをしている美男子とそれを止めようとしているカリーナと青年たちだ。囃子立てている者もいるが。

「やれやれ……シエーンコップ中将、私は君とユリアンを待っていたんだがね。そのブルームハルト中佐とね」

「これは痛いところを付かれましたな。提督、小官がもつと早く気づいていれば」

「やめよう。もし、とかかもしれない、みたいなたらればは意味が無い」

食い気味にそう遮ったヤンは扉を閉めて話を続ける。

「私が死んだあとのことを君たちに聞きたいのは山々だが、今はそれどころではない。薔薇の騎士連隊の実力を遺憾無く発揮してもらう時が来た」

「この世界のこととはカリーナから説明してもらうが、君たちにやつてもらおう任務はこれだ」

そうヤンが取りだしたスクロール・ペーパーには、薔薇の騎士連隊にしかできない作戦案が芸術作品のように描かれていた。

エル・ファシルのキリングハウスにて、第1特殊部隊コマンドとホワイト・グリント、モーターコブラは準備を行っていた。

「陣形を決めるだけだから、静止目標30でいいわ。見るのは命中率とタイムのみよ。前衛か後衛かはスペックで判断するから、右翼か左翼かを決めるくらいね。あまり気負わずに、普段の調整のつもりでいいわよ」

FALが新人2人に説明する。

「了解しました」

「OKだ」

「いつでもいけるよ」

Vectorがコンソールを操作し、ターゲットパターンを決めてREADYボタンを押す。

「じゃあモーターコブラからね。始め！」

FALの声に合わせて、目標が設定されたパターンに従ってポップアップする。

その途端、モーターコブラが構えたライフルが爆音を上げて吼える。

秒間数十発にも迫ろうかという勢いで放たれる7.62mm弾は、驚くことに何の反動もないかのごとく抑え込まれながらポップアップしてくる目標にスイッチし続ける。

「チツ」

僅かに10秒ほどで全ての目標をヒットしたモーターコブラはしかし、舌打ちをしながら銃を下ろしマガジンを交換する。

「やりますね」

ホワイト・グリントに賞賛されたモーターコブラは、マグチェンジを終えてコツキングをせずに待機する。

「いや、今日は調子が悪い。30に対して70発は撃ちすぎだ」

「さすがレイレナード製ね。秒間何発出てるのよってくらいだったけど、命中率も悪くないわ。もっと上を目指せるだろうけれど、今回は貴女は左翼をお願いするわ」

「確かに承った」

「次はホワイト・グリントね」

「はい」

一言だけ返すと、ホワイト・グリントは武骨なライフルを構える。

「始め！」

1体目のターゲットがポップアップする。その瞬間、ホワイト・グリントは頭部を寸分変わらず1発で撃ち抜く。

マークスマン以上、バトルライフル以下ほどの発射レートだが、恐ろしく精密だ。

ターゲットがポップアップする瞬間にはもう弾丸が発射され、ターゲット全体が見える頃にはヒット判定が出る。

しかも、全て頭部に1発。

16・73秒。およそ1秒に2体。それがホワイト・グリントのキルタイムだった。戦術人形のスコアとして早いとはいえないが、全弾頭部誤差5cm以内に収まっている。

「すごいわね。RFクラスのMOAね」

「FCSは精密性を重視していますから」

「そうね、ホワイト・グリントは中右を張ってもらおうかしら。私が右翼、前衛左がG36C、右がVector。中左がACR、後衛にNTWで行きましょう。

鶴翼か魚鱗で悩んだけど、相手は列車砲だし鶴翼にするわ。データをしっかりと頭叩き込んでおいて」

「イエッサー！」

「連携に関しては即席だから望むべくもないわね。そういうのは1度戦場を越えないと身につかないし……ま、これからしばらくはこの分隊で活動していくわけだから、今回は味方のことを頭に入れつつ個人プレーで行くからそのつもりで」

「足を止めてもらえれば列車砲は私かなんとかする。弱点は叩き込んだから、奴を仕留

められる自信はある。だが、随伴までは手が回らん」

NTWが具申する。ダネルNTW―20はその威力と引き換えに連射力は高くないため、どれだけ早くても次弾まで3秒はかかるのだ。

「そうね、NTWの護衛っていう形になるかしら。問題は……」

FALがやや眉を寄せる。共有されているデータにも記載のあつた唯一の気がかりだ。

「謎の戦術人形部隊、ですね」

ホワイト・グリントが後を受ける。

列車砲と共に戦術人形部隊を屠ってきた謎の戦術人形。

相当練度の高い部隊か、あるいは鉄血の高等人形だと予測される。

FALの原隊、FN小隊も撤退の憂き目を見ている。

「そいつらは火力で押し切るとして、問題はまだある」

モーターコブラもただの火力馬鹿ではないようで、腕を組んで顎に手を当てる。

「敵のデータセンター襲撃は、ただ弾を撃ち込めばいいって訳でもないからな」

「そうだね、カーミラと春燕チュウエンがいるから、閉鎖されたネットワークに彼らのメインコンピュータが接続できるようにするか、私たちがダイブするかだけだ」

Vectorも普段より顔つきが険しい。

データセンターは通常閉鎖された独立回線を持ち、サーバーに保存されたデータと各人形を繋ぐ回線は別物になっている。今回は敵の持つAR小隊の残りの情報を奪取しに行くため、独立回線にインターセプトしなければならぬ。

「こればかりはぶつつけ本番と言わざるを得ないわ」

FALが口を開く。その口調は決して明るくはないが、隊員たちを鼓舞するようにトーンが高い。

指揮官や部隊長の士気は、部下の士気に直結するからだ。

具体例を挙げれば、ヤン・ウエンリーなどは決して悲観する様子を部下に見せず、皇帝カイザーラインハルトも常に陣頭に立ち味方を引っ張り続けていた。

「施設の外観は掴めていても、内部構造が掴めない以上、まずハブか施設図面を入手するのが第一段階、Vectorの言ったどちらかの手段で情報を得るのが第二段階になる。

補給はあるけど、長丁場の作戦になるわ。

今日から作戦までの1週間は宿舎ではなくここで寝て、ある程度お互いのことを把握しておかないとね」

鉄血とグリフィンの戦争。この戦争で戦っている私たちの戦意とは、私たち自身のものなのだろうか。

殺意、憎悪、敵意。戦術人形である私たちの意志とは、本当に私たちが思っている思惟なのだろうか。

ホロサイトに敵が映る。データリンクが敵の位置、狙っている味方、次に起こす行動予測を視野に表示する。

作戦会議でネゲヴに大見得を切ったものの、私自身が悩んでいたことは確かだ。

周りの状況を確認しながら、問題なく作戦が進行していることを隊員たちに告げる。

重要なのは敵^{鉄血}を殺すこと？

違う。

作戦を遂行することだ。もし仮に、鉄血を討ち果たしたら。私たちは、鉄血ではない何かと戦うために、またどこか別の戦場へとむかうことになる。

だから、重要なのは与えられた任務を達成すること。

鉄クズへと敵だった機械を変えながら、ふと疑問がわきあがる。

自分が今戦っていて、自身の思考ルーチンの大部分を鉄血に対する憎悪で占めているというのは、M4A1という戦術人形自身の思考の結果だからなのだろうか、それとも

製造段階でそう刷り込まれているのだろうか、と。

「それは難しい質問ね」

と私の質問にペルシカ博士は腕を組む。AIの原理という意味で、難しい質問だっただろうか。

「あなた達ハイエンドモデルは、思考ルーチンは定型化されていない。たとえば、最初期に建造された戦術人形なんかは上官の命令に対するある種盲目的な信頼やロボット三原則なんかを組み込まれていた。

でも、世代が進むにつれてAIの思考形態が変わっていった。難しい話は省くけれど、プログラムを入力しないと動作しないコンピュータと、プログラムを作るプログラムを持つコンピュータっていう風に」

ペルシカ博士は言葉を選びながらゆっくりと話す。

「そして、今では人間の脳を模した全てを思考する、端的に言うると人造脳がメインになっている。貴女の頭の中は、頭蓋骨格のなかに脳殻と呼ばれる金属製のシエルが入っている。その中には、コンピュータではなく、生体脳が入っている。

その生体脳をナノマシンとマイクロチップによってネットワークと接続し、さらにブラックボックス化されたモジュールを埋め込むことで戦術人形の脳として使用される。

その生体脳はふたつと同じ物が存在しない。

ハイエンドモデルにバックアップが存在しないのはこのため。つまりあなたは、ほとんど人間と変わりがない」

辛い事実を告白するように僅かに俯きながら、ペルシカ博士は語る。

「だから、感情はあなた自身のもの。殺意、敵意、憎悪、そして好意も。

ただ、ブラックボックスの中身にある倫理規定モジュールはある程度の操作が効く。ブラックボックスは都度書き換えが可能だから……あるいは、何らかの命令が書き込まれている可能性はあるから、必ず、とは言えない。それにあなたは……」

ペルシカ博士はそこで言葉を切った。

つまり、私は身体が機械の人間、ということになるらしい。

思ったよりも人間だったな、とどこか他人事のような感想を抱きながら、戦線を押上げていく。

作戦領域に侵入してから30分。敵基地は目前だった。

「こちらニユーヨーク^ネ。ターゲット、12。左側の岩肌からこちらに迫ってくるわ」
「こちらアヴェンジャー^M1、目視しました。こちらから援護を回します。少し下がって

ください。サクラ4、^{100式}サクラ4、40秒

〈サクラ4、レディ。30秒で戻ります〉

とんでもない会話が聞こえた気がする。40秒で隊列に復帰せよとのお達しを30秒で帰ると言った100式。

さすがは虎の子の特殊分遣隊ユニットDと云ったところか。

グリフィン本部所属の統合陸戦隊にも引けを取らない陸戦能力と特殊作戦、情報任務を兼任するだけあって強い。その一言に尽きるほどに効率化されている。

前線から桜吹雪、いや、桜嵐が敵部隊側面目掛けて戦場を蹂躪していく。

噂に聞くエネルギー吸収壁、^{サクラ・リフレクション}桜逆像か。

しかしそれよりも、単体行動が強すぎる。部隊前面で受け持っているダミー人形の操作をしながら、自身はSMGクラスの戦術人形特有のヒョウのようなすばしっこさで飛び回りながら敵陣を横一線に突破し、反転攻撃に入る。

そちらに気を取られた敵は、私のいいのだ。

こちらに桜色の閃光が走ってからきっちり30秒で100式は自身の隊列に復帰した。

「助かったわ」

〈こちらブラボー^P5、援護がいるよ！右翼にて敵基地入口を爆破したら、虫の群れみたい

にうじゃうじゃ……半個小隊はいる！」

「こちらアヴェンジャー、何秒持たせられる？」

「持たせろつて言われればいくらでも！」

「こちらニューヨーク、私が行くわ。敵左翼をウチの小隊が抑える。2分……いや、90秒持たせて！」

「ブラボー5、コピー。戦線は絶対に下げないよ！」

左翼はほぼ囲い込むように私たちネゲヴ小隊が基地外縁まで敵を押し込んでいる。分隊支援火器としても高い性能を誇る私だからこそ、戦線を移動することが出来る。

窮地に陥っているのは最右翼、敵基地倉庫入口へと向かっていたP90だ。

いかに特殊分遣隊ユニットDの前衛といえども、半個小隊を相手にひとりではどうにもならないだろう。

TAR-21、ガリルの後ろを通って中衛、先程援護に来てくれたI00式、M4と合流する。

「あ、ニューヨーク！」

「急いでるのよ！」

「ブラボー5なら大丈夫です。右翼を制圧したら、この信号弾をあげてください。そしてウチのイエーガー3とベア2が援護しますからポイントチャーリーまで800m

後退、そこにあるトーチカで入口を見ておいてください」

そう言つてM4はフレアガンを手渡してきた。

フレアガンなんか使わなくても、データリンクで伝えればいいと思うんだけど……。

「了解よ」

でも、制圧したら撤退とはどういう事だろうか。

予定より15秒遅れてP90の受け持つ最右翼に到着した。ボロボロになっているP90がいる光景を覚悟したが、そこに広がっていたのは予想もつかない光景だった。

「あはは、どこ撃つてんのさ！ いたずらならまけないよー！」

そう笑い声を上げながら笑顔で戦場を駆け回り敵部隊を翻弄する十人のP90だった。

「んな……！」

「あ、遅刻だよニューヨーク！」

困惑しながらも伏射姿勢をとり、敵部隊に照準を合わせる。

サイトを覗く。その瞬間、データリンクを通じてP90からデータが送り込まれてくる。

それは、自身の行動パターンと敵の詳細な装備データだった。

撃つべき射線が無数の赤い線デッドラインとなつて敵を射抜く。次の瞬間、私はトリガーを引き絞つた。

この時、敵部隊の隊員が最後に目にしたのは、ランダムに跳ね回る、2倍に分裂したSMGタイプの戦術人形と、その人形の影から飛んでくる無数の弾丸だった。

掃射、排莖、マガジンを交換、コッキング、掃射。

今回は強襲戦ということで35発箱型弾倉装備なので、4回その作業を繰り返した。

赤い線の最後の一本がふつと消滅した時には、敵部隊はただの無機物となつて辺りに散らばっていた。

「さすが、とんでもない火力だね」

そう言つて後ろに現れたのはP90だ。

「いまのは？」

「私のスキルだよ。通称“リスのお嬢さん”」

P90によると、視覚ではなくカメラで世界を見ている機械である私たちには区別つかないホログラムダミーを投影し、そのホログラムと共に敵の情報を収集して自身の攻撃を確実にクリティカルヒットできるといふスキルらしい。

曰く、人間のカーリーナやヤン・ウエンリー提督たちにはきちんと青白いホログラムに見えるものの、戦術人形で騙せなかったのはFAL、M4A1、そしてあと1人だけ

しい。

その戦術人形は、目で見ないという……そんな戦術人形がいるのかしら？

おっと、いけない。制圧したら信号弾だったわ。

バックパックからフレアガンを取りだし、空に掲げてトリガーを引く。

オレンジ色の煙を引いて、信号弾が上がる。

すぐに駆けつけてきた417とグリズリーと共に、少し後退して様子を伺う。

わらわらと開いたドアから敵がなだれでくる。

分隊支援火器の本領発揮だ。

それから1分ほど経ったか。左翼方面、敵基地の敷地内で巨大な爆発が起こった。

へこちらアヴェンジャー、敵施設に侵入。右翼側、突入してください

「コピー」

なるほどね。右翼側が突破されたと思った敵の戦力がこちらに集中したところを見

計らって、左翼が全戦力を集中して突破したと言ったところかしら。

「まったく見事ね、アヴェンジャー」

作戦の第一段階、敵基地への肉迫は成功した。

次は、敵基地の破壊ね。

さすがにヤン・ウエンリーの戦術教練を履修しているだけはある。深井零少尉は、雪風の機上で戦場を見下ろしながらそう思った。

大胆かつスピーディな戦術はヤン・ウエンリーの弟子というものに相応しい。

角度が140度ほどの、やや横隊に近い2重鶴翼陣で作戦領域、敵警戒網に突入した連合部隊は部隊長M4A1の指揮の下戦闘を開始した。

1列目がSMG・HG、2列目にAR・MGを固めた変則鶴翼陣は、状況に応じてその角度を変え、敵の戦力に対して圧倒的少数でありながら柔軟に対応していく。

その様は、さながら限界まで開いたハサミで布を裂いていくように、敵防衛部隊を滑らかに打ち倒していった。

途中の敵増援では左翼を後退、押し込まれているのではなく陣中心部からの距離を縮めることで余裕のある中央から100式を援護に向かわせ、右翼では反対に戦線を維持し続け、左翼からネゲヴを向かわせてから引いて押す、という攪乱戦術を取った。

最後には、右翼を引いて敵を向かわせている間に左翼側基地壁を爆破し基地内部への突入を開始。

空戦ほどのスピードを持つ戦場はないため鈍重で決着までが長く感じるが、M4A1

の戦術と高度に取れた連携は見事だ。

そんなことを考えていた零の耳に、突然アラートが響く。

広域警戒レーダーだ。

「なんだ」

雪風はすぐさまロングレンジ・レーダーを表示する。

最近ではフライトオフイサが欲しいと思う零だった。

〈Target detected/Grey Sylph/Vector 2.90

/Head on, Two minutes to intersection〉

ターゲット捕捉。グレイシルフ、速度2.9、ヘッドオン。二分後に交差する。

「ヤツか」

グレイシルフ。かつて惑星フェアリイで雪風が遭遇した、ジャムにコピーされた雪風だ。

すでに雪風の戦術コンピュータはグレイシルフを敵として認識している。

雪風はミドルレンジに入ったグレイシルフをレーダーで追尾する。

だが、まだ発砲はできない。なぜなら、今回の敵基地襲撃作戦において敵基地に例の高速GTAMランチャーが確認されたからだ。現在の雪風は高高度、30000メートル

を飛行している。この高さであれば、いかにジャムの高速ミサイルといえども振り切

ることができよう。だが、グレイシルフは雪風と全く同じ性能を持っている。グレイシルフとドッグファイトになれば、ミサイルかグレイシルフのどちらかに撃墜される可能性は高くなる。

零にとっては初めての経験だが、味方部隊がミサイルランチャーを破壊するまでは回避に徹するしかない。

レーダーモードをスーパーサーチに。ロックオン。

雪風は戦場上空をエンドレスエイト、八の字を描きながら周回するコースを取っていた。

零はエンドレスエイトを切り上げ、戦場外縁を反時計回りに円を描いて周回する。わずかに高度を下げる。

グレイシルフは高度を維持し、雪風のコースからやや離れるように遠ざかる。

スーパーシルフが搭載する全方位パルスドップラー・レーダーは目標の位置、高度、速度、加速度、さらにレーダーモードを解析し、敵武装のオンライン情報をMTIに表示する。

これは、戦術人形のATTIシステムをパルスドップラー・レーダー用に改造して搭載したものだ。

「雪風、アヴェンジャー^{M4}に情報を送れ。こちらB-3、エンゲージ。目標の早期破壊を

要請する」

〈急ぎます。120秒下さい〉

120秒。まだ距離はあるものの、空戦での120秒はあまりにも長い。

一時離脱も視野に入れながら、零はリーダー上のグレイシルフを睨んだ。

なにを考えている、ジャム。

戦域上空を低空で飛び抜ける2機の編隊、スーパーシルフ。

特殊戦1番機、カーミラと2番機チユンヤン春燕だ。

対空兵装を長距離ミサイルで潰したものの、装甲列車砲自体はバリア状のフォースシールドで損壊を免れている。

1番機カーミラのパイロット、ミハイル・ズボルスキー中尉はフライトオフィサー、フリードリヒ・ポルガー中尉に現状を確認する。

「列車は？」

〈だめだ。フォースシールドらしい。とんでもない出力だぞ、あれは〉

ミサイルさえ相殺するフォースシールドとなれば、地上部隊ではHEATなどの一点

集中型の大威力爆薬を使うしかない。特殊戦機であれば、そもそも戦わないのだが。

「春燕はどうしてる？」

〈編隊飛行用データーリンクで接続中。動く気は無さそうだ〉

春燕のフライトオフィサ、ワン輝華中尉はパイロット、タン唐 応徳中尉に長距離索敵
リーダーがミサイルを捕捉したことを伝える。

「機長、中尉、敵ミサイルを捕捉。数は2。着弾まで30秒」

〈カーミラに伝える。回避行動に移る〉

「了解。カーミラ、こちら春燕。敵ミサイルを捕捉。回避行動に移る」

〈こちらカーミラ。捉えた。なるほど、速いぞ。俺に策がある。編隊を崩すな〉

ズボルスキー中尉は一体何を考えているのだろうか。タン中尉は疑問に思いながらも、編隊を維持する。

「機長、カーミラは敵のミサイルを列車に当てるつもりのようなだわ」

〈無茶をする。だが、確かにこの開けた平地では有効かもしれない〉

ワン中尉の言った通り、ズボルスキー中尉は敵ミサイルを当てることでフォースシー
ルドを臨界させるつもりだった。

そのことを、ポルガー中尉は地上部隊に伝える。

「コピー。皆、一旦下がるわ。陣形を維持したまま1km下がる。

前衛は火力を集中、ケルビムは全速で離脱。

エクスシア、セラフは援護を！」

矢継ぎ早にFALの指示が飛ぶ。対鉄血列車砲用の長距離鶴翼陣形を取っていたユニットAは引き始める。

前衛のG36CとVector、中衛FAL・モーターコブラは火力を投射しつつじりじりと、後衛NTWと中衛の中2人ACR、ホワイト・グリントは高速で丘の陰へと下がる。

「なんの意味もない……」

Vectorが火炎瓶を投擲、戦術人形が使用する特殊燃料が3mにも迫ろうかという勢いで燃え上がる。

「これでどうでしょう？」

G36Cはフォースシールドを展開、Vectorよりやや前に出て敵の攻撃を引きつける。

その隙に、FALとモーターコブラは左右へと広がりながら後ろへと下がる。丘の至

近まで来たところで、F A Lは擲弾を発射。目標は敵本体ではなく、敵レドームの目の前。擲弾が爆発し、土煙を巻き上げる。

「はっ、なかなか歯ごたえのあるやつは嫌いじゃない」

同様にモーターコブラがスキルを発動する。"白焔、一時的に無理矢理弾薬。パックとマガジンを直結し、さらに銃身を拡張・展開することで強制冷却を行う。"

7秒間、モーターコブラは設計限界以上の火力で吼える。

継戦能力を考えても、1度のスキル発動ではそれが限界だ。

フォースシールドは確かに弾丸やエネルギーを吸収する。

だが、ここが現実世界である以上、物理法則は超えられない。

慣性の法則、エネルギー保存則、そして力学法則。

許容量が圧倒的ではあるがフォースシールドである以上、臨界点を超えればフォースシールドは強制冷却、つまり展開不能になる。

フォースシールドを全体に張り巡らせるのではなく、エネルギーを着弾点に集中しなければ、圧倒的火力や強力な一撃は突破される危険性を孕んでいるのはフォースシールドである以上同じなのだ。

例外は、P90の"リスのお嬢さん"や100式の"桜逆像"など、厳密にはフォースシールドではない類のものだ。

レイレナード製の、個人携行火器としては世界で最も濃密で精密な弾幕に、装甲列車のフォースシールドはエネルギーを集中することを余儀なくされる。

Mk15ファランクスと見紛うその圧倒的な射速は、対人形戦プログラムでは対応しきれなかったようだ。

その隙に、前衛のふたりが後退を開始する。

その上空を、地面から僅か15mほど、極めて低空でスーパーシルフが飛び抜ける。カーミラと春燕が飛び抜けてから8秒ほど遅れて赤い塊がレーザーのごとく追跡していく。

「あれは……なんだ？」

モーターコブラが呟く。

「ミサイル？」

Vectorが一瞬で通り過ぎた赤い光を分析する。

「断熱圧縮……よくもPAなしに……」

ホワイト・グリントがそう呟いた。

スーパーシルフは真つ直ぐ装甲列車に突っ込んでいく。

激突する——瞬間、カーミラと春燕は急激に機首を引き起こす。5G以上の無茶な機動だ。

機体が耐えても、人体が耐えきれないのでは無いかと体感するほどの大G戦闘上昇。ミサイルは追尾しようとして上昇しかけるが、間に合わずフォースシールドに突っ込んだ。丘の陰まで衝撃が届く。

陰に伏せていながらショック・ウェーブがユニットAを襲う。そして、すぐに煙が猛烈な勢いで押し寄せる。

「断熱圧縮ってなんだ？」

伏せた姿勢のままモーター・コブラがホワイト・グリントに聞く。

随分と間の抜けたというか、神経が凶太いというか、いつもの調子で聞くモーター・コブラにホワイト・グリントは優しく答える。

「私達も……そうか、我々はアーマーがありますものね。」

今回の場合における断熱圧縮は、エントロピー増大則に基づいて、ミサイルが音の壁を突破した先にぶつかる壁。

つまり、ミサイルの先端で超高速で圧縮された空気が高温になることです。

断熱圧縮はマッハ3前後から発生するはずですから、あのミサイルは戦闘速度の私たちに追いつけるということになりますね」

「なるほどな、ジャムか……俄然興味が湧いてきた」

「VOBとかアーマーとか気になる話はあるけれど、今はそれどころじゃないわ。カー

ミラが上空に戻る時に、こちらに接近してくる人形を発見した。さっさと装甲列車を潰して、人形に対応する必要がある」

部隊長FALが隊員に告げる。

「ここからはスピードが物を言うわ。見える？ 奴のフォースシールドは2発のミサイルでほぼ臨界に近い状態にある」

「2発？ 1発では無いのですか？」

ACRの質問にFALはこともなげに肩をすくめる。

「うん、あのフォースシールドの状態から見ると一発じゃ臨界まで行かないと思うわ。実際、一発目と競うように二発目がコンマ秒で着弾していたし」

NTWが驚くように目を開きながら肯定する。

「よく見えたな、隊長。^{スローネ}あれは確かに2発だ。隊長は片目の上にFCSも中一近接戦闘用だろ」

「ま、昔取った杵柄つてやつね。話を戻すわ。ケルビム^{N T W}はここで射撃体勢をとって。

前衛にアルケー^{G 3 6 C}、シールドで前を頼むわ。

チャンスは一度、私とデユナミス^{モーターコブラ}が奴のフォースシールドを寄せる。その瞬間を狙って」

NTWはマガジンを取り外してしてチャンバーを確認する。

「私を誰だと思ってる?」

取り出したのは1発。

装填するのは強装弾、”ブロックショット”と呼ばれるダネルNTW-20の最大火力を発揮する特殊弾薬。強装弾といっても、+P弾やホローポイントのような物ではなく、極めて脳筋的発想ではあるがガンパウダーの組成を変え威力を増加させている。

通常の20mm弾に、エネルギーをチャージすることで威力を底上げすることが出来るスキルであるブロックショットに、さらにNTW専用の強装弾を使うことになる。

通常のブロックショットと比べると銃身の耐久という点でほぼ1度の出撃で1発しか射撃できないという制約が付くが、装甲列車のフォースシールドをぶち破る威力どころか、艦船の小口径砲塔クラスの破壊力を持つ。

その強装弾をチャンバーに入れ、ボルトハンドルを戻し、NTWはにやりと頬をつり上げる。

「瞬間?長すぎるくらいだ」

「頼もしいわね。ドミニオンとセラフは近づいてくる戦術人形を牽制して。」

列車を倒したら、すぐ向かうわ」

「わかりました。時間は稼ぎま……」

そこでホワイト・グリントは言葉を切つて眉を寄せる。

「モーターコブラ
「ケルビム」

「ああ」

「どうしたの？」

ホワイト・グリントは西の方に視線を向ける。その空に、緑がかった青白い粒子が見える。

「あれは、小隊ではありません。単騎。私たちの同類……ネクストです」

「野郎、居場所を示すみたいだに堂々とPAを張ってやがる。スローネ、^長気づいたか？ レーダーとデータリンクがジャミングされてる」

カーミラからの戦術人形接近の報を最後に、確かに連絡が取れなくなっている。

FALは顔をしかめる。

「はあ、なんとなく想像はしてたけど。あなた達がグリフィンに來たように、鉄血にも戦力として売られているネクストがいるわけね」

「戦術人形だから汚染は気にしなくていいから少しは気が楽ってわけだ。おい、色から見てあれはオーメルのJUDITH、移動速度と列車、半砂漠地帯のこんなところに出張ってくるような奴といえれば一人しかいない」

モーターコブラが空を舞う粒子を睨めつけながら言う。

「はい。あれは反体制勢力、マグリブ解放戦線のイレギュラー、”砂漠の狼”バルバロイ

だと私も思います」

ホワイト・グリントがやや沈んだ声で後を引き継ぐ。

その表情は暗く、後悔や同情のような雰囲気を帯びていた。

「おそらく、ススを残してまだ理性的に仕事を受けられるアマジューグが鉄血に出てきたのでしよう。

ローゼンタール、いいえ、オーメルは本格的に鉄血と提携、あるいは乗っ取りを企てているようです。

なるほど、ようやく合点が行きました。

ラインアーク、レイレナード、BFFはグリフィンを支援すると決めたようです。だから私たちがグリフィンと契約した、と。

それは、ローゼンタール、ひいてはオーメルが鉄血に着いたからでしょう。

GAとインテリオル・ユニオンはかねてから正規軍に対して援助を行っていました。これがかなり雲行きも怪しいですね。

もしこのままレイレナード・BFFとローゼンタール・オーメルが泥沼化すれば、いずれ他のパックスにも影響が及ぶ。

下手をすると、ELID研究に力を注ぐGAEとアクアビットも交えた戦争になりかねません」

「かなりマズいな。いま、ランク持ちは何とか均衡を保っているが、それも依頼があれば激突は免れない。」

鉄血の高等人形、ジャム、正規軍、ELID、グリフィン、ネクストがぶつかるような戦場は想像したくない」

「ぞつとしないわね。グリフィンで自由に動けるのは私たち第13旅団だけだし、戦力も揃ってきたとはいえ正規軍やELIDとまともにぶつかるような力はまだない。ここにジャムとネクストまで出るとなると、いくらレイレナードとBFF、ホワイト・グリントがいてもグリフィンの負けは必至」

「おまけにマグリブまで金に目が眩んで鉄血に付いたとなれば、戦力差は絶望的だな」

アフリカ生まれのNTWは実感を持って語る。

「向こうじゃマグリブはタリバンやアルカイダなんて目じゃない巨大組織だ。下手をすると、国家以上の力を持つてる」

「はやく鉄血を叩き潰す必要がある。そのためには、AR小隊が再招集されないといけない」

「牽制として、まずはグリフィン、我々第13旅団の持つ戦力を更に誇示しなければなりません。絶対の力こそが抑止力となりうる。ラインアークはそうやって守られてきました。」

グリフィンとラインアーク・レイレナード・BFFの力、結束を示す必要があります」
ホワイト・グリントは銃を握りしめる。

「だから、アマジューグは……バルバロイは、私が狩る」

クリアランス・コード認証。貴方をグリフィン関係者だと確認しました。ようこそ、
第13旅団戦術データベースへ。

アクセス承認。当該戦術人形のデータを表示。

万が一、戦術人形のスペックなどに興味が無い場合、スキップしてください。

No. 003

NAME: Vector

Call sign: "Dominions (3)"

STB第1特殊部隊コマンドユニット先任戦術人形

Weapons Specification:

クリス USA

短機関銃

口径：45

銃身長：140mm (SMG・SBR/SO)

使用弾薬：45ACP弾

装弾数：13・17・30発 (45ACP)

作動方式：ブローバック方式

全長：406mm (ストック展開時617mm) (SMG・SBR/SO)

重量：2.5kg (SMG・SBR/SO)

発射速度：1,200発/分

銃口初速：400m/s

有効射程：45m

バリエーション：SDP

Doll's Specification:

CQB戦：A

近接格闘術：B+

SMG

SBR/SO

CRB/SO

射撃：B＋

体力：B

機動：A－

爆薬取扱：A

編成拡大：可（未実施）

医療：B＋

諜報：A

研究開発：A

クリス Vector。第6世代型戦術人形。16Lab製ではないものの、年代的には第6世代型に分類される。前線要員である為、高耐久・高出力型である。ロールアウトしてから教導部隊を経て第13旅団な創設メンバーとなる。SMGタイプの戦術人形の中では突出した攻撃型であり、後輩からもクールな先輩として頼られている。（なお、創設メンバーからは面倒臭がりで悪ガキ扱いされている）

電源：戦術人形用固体高分子形燃料電池

駆動骨格：第6世代型・SMG戦術人形用駆動骨格高耐久カスタム

FCSS：CR09VT Ver. 2

センサー：第6世代型デュアルカメラアイa（ブラウン）、第6世代型聴音センサー、

第6世代型嗅覚センサー 第6世代型味覚センサー、第6世代型触覚センサー

電脳：戦術人形用?????
電脳

生体パーツ：消化器系?????????
生殖系・循環器系

通常武装：本体(30発マガジン)、スキル用火炎瓶

Lv60：45ACP弾をなんと1200発/分という連射速度で発射するSMG。前線要員だがフォースシールドなど防御機構を持っていないため、生体パーツは内臓器のみになっている。

Skills：

焼夷手榴弾

焼夷手榴弾を投げ、半径1.5ヤード内の敵に7倍の爆発ダメージを与える

追加ステータス効果：5秒間、0.33秒ごとに1倍の持続ダメージ。

Vectorの火力特化スペックの弱点である防御面を改善するために選ばれたスキル。特殊な混合燃料を使用しており、燃烧時間・燃烧範囲・燃烧高度が高い。

投げた範囲の敵はへのダメージはもちろんだが、火柱……いや、火壁で射線を遮る。目眩し、移動や攻撃のモーションを隠すなどの様々な恩恵を得る。

これは余談であるが、特殊戦機の支援によりVectorは火炎の中の敵情報をダウンロード可能になった。このため、Vectorのスキルに補足された場合、火で燃え

ずとも、一方的に火の外から V e c t o r に撃ち殺される運命が確定する。

St. 7オペレーション・カノーパス：フェーズ1

「すう……はあ……」

3つ数える。息を吸う。

3つ数える。息を吐く。

いつもの通り、完全な私だ。

草原を駆けるジャツカル、大空を舞う猛禽、そして我が身を襲う敵。

いつだって、私は狩人^{ハンター}だ。

弾は一発。それ以上は必要ない。

狙うは一点。それ以外は関係ない。

撃つのは一瞬。それ以降は何も、無い。

ほとんど義体化した右腕の、数少ない生体パーツである指が温度と感覚を教えてくれる。

風、僅かな冷気、砲撃の熱風、戦場のヒリつく乾いた空気。

この前買い換えたばかりのFCSは体に良く馴染む。

撃ち抜くべき一点が、まるで人混みの中で一瞬見える先の景色のように。針穴から向

こう側を見た時の、フォークス。

なんの違和感もなく、その一点が意識できる。

3つ数える。息を吸う。

3つ数える。息を吐く。

まだだ。まだ、^{ターゲット}ヤツのフォースシールドは私の一撃を防ぐことが出来る。

モーターコブラと隊長とG36Cを信じるしかない。

もつとだ。もつと深く。

意識を撃ち抜くことのみに集中しろ。周りの雑音を消せ。余計な景色を見るな。香る風を散らせ。口の中の砂利を吐け。

必要なのは、トリガーを引く指の感覚と、撃つ瞬間の仮想射撃線。

センサーを鋭敏に、電脳回転数を上げ、少しずつ世界の速度が遅くなっていく。

伏射姿勢はいつもの事だが、なんだか今日は居心地がいい。

ここが草原だからだろうか？

林と丘、川を挟んで反対側にはまた森林が広がる。低木で疎の木々は、あの故郷の木々に似ている。

ターゲットのフォースシールドが揺らめく。

臨界寸前のフォースシールドを少しでも長く持たせようと、フォースシールドの圧力

を変えている。

皆の攻撃が始まったんだ。

ああ、なんて素敵ないだろ。こんな日が来るなんて思ってもみなかった。

最初に配属されたのは、かたつくるしい軍隊。こんな風にのびのびと狩りなんてできなかった。

私の性能上、活躍できる場面もそう多くなかったし、ほとんどお荷物みたいな扱いで故郷からどんどん離されて行った。

ああそうだ、あのバルバロイとかいう奴のいたマグリブにもいったっけ。

どこもかしこも、私を一撃しか撃てない大竹槍として腫れ物みたいに扱った。

結局、ほとんど地球の裏側までやってきて、辿り着いたのはPMCの、しかも寄せ集めの予備役部隊。

狩りどころか、銃を撃つことさえままならない日々。

それがどうだ。故郷と似た草原で、命の削りあいをしてながら一瞬を撃ち抜く狩りができるなんて。

ああ、幸せだ。私は、きつと隊長FALと提督を愛している。私を、こんなに自由にさせてくれている上官のことが大好きだ。

だってそうだろう？

この瞬間、今この瞬間は、私が全てを支配する。
この世界は、私だけのものだ。

この無限の瞬間は、私だけの時間だ。

フォースシールドが集まり、バリアから盾状になる。

だめだ。自然と笑みがこぼれてしまう。

ああ、ああ……。もつと、もつとだ。

私に、もつとこの瞬間を味わわせてくれ！

あの射撃中毒者、なんとかならないのかしら。
シューティング・フリーク

FALは後ろで極めて獐猛な笑みを浮かべながら射撃タイミングを計るダネルNT
W-20の気配を感じとり、珍しくも頬に汗を滴らせながら割と本気で引いていた。

なんか、今までは割と安全地帯からの狙撃だったからかしら、自身がここまで出張つ
てくる任務はなかなか無かったから仕方ないかもしれないけど、流石にあれは後輩には
見せられないわね。

「アルケー、お願い！」

「おまかせあれ〜」

赤いベレーが風のように駆けて行く。

丘の頂上に差し掛かるところで、フォースシールドを展開。僅かにジャンプした後、左手に抱えていた廃材の板をボードのようにして丘を滑り降りていく。

「あら、あらら？」

……半端ないほど手をブンブン振って転ぶまいと必死に耐えてる。大丈夫かしら、あれ。転けたら終わりよね、アレ。

バランスは崩したものの、何とか転ぶことなく斜面を滑降するG36C。

G36Cを狙う砲門も、(バランスを崩したおかげで)左右にぶんぶんと体を振るG36Cに当てられない。ランダム過ぎるのだ。

「あつはつはつは！嫌いじゃないぜ、皆そうだが、ここなあいう無鉄砲なやつは！」

そう言いながら同じく丘の頂上を越えて射撃を始めるモーターコブラ。

「まるであーいいうのがうちのスタンダードみたいに言うの、やめてもらえるかしら？」

スキルクールタイムが終わり、補充された擲弾筒を構える。

G36Cが突貫してから5秒。少しずつ坂の斜度が緩くなり、スピードが落ちていく。それに伴って、フォースシールドに少しずつ被弾が増えてくる。

そろそろか。

モーターコブラ
「ケルビム、やるわよ！」

「おうさ、任せとけ！」

「レディ……」

モーターコブラの機関部が唸りを上げて準備をしてる。
本気でアレ、もともとバルカンとかじゃないわよね？

「フアイア！」

3発、擲弾をフィールド表面で爆発するように撃つ。

同時に、モーターコブラが“白焰”を発動し吼える。

6…5…4…3…2…1…モーターコブラの射撃が終わる瞬間、戦場に

轟音が響く。

もう銃じゃないわね、アレ。

パン、とかバン、とかいう普通の銃の射撃音や、MG系の連続する破裂音ではない。R
Fのガアン、というような金属音でもない。

擬音に表すとするなら……ドパン、とでも表せばいいのだろうか。

火花のごとく下腹部に響く重低音を伴う破裂音は、銃と言うよりは砲であろう。

その瞬間は間違いなく、戦場が静止する瞬間だ。

後ろを見ると、NTWの銃口から白煙が上がっている。

油圧式のショックアブソーバーが作動し、銃身が銃本体の4分の1ほどもブローバツ

クして、元に戻る瞬間だ。

射出された弾丸を目で追うと、僅かに0.3秒ほどフォースシールドが耐えていたのがわかる。

だが、臨界点に達したフォースシールドは、NTWの一撃の前には無力だった。

0.3秒後、フォースシールドは無惨にも消失し、そのままコアを撃ち抜かれた装甲列車は機関部からも黒煙を上げて停止した。

「ふふ……はは……はははは……！」

わ、笑ってる……あの子、あんなにヤバかったかしら？

相当溜まつてたのね……ちよつと今度メンタルコアの様子見てもらわないと……
後ろから聞こえた微かな笑い声に、そう決意するFALだった。

「まさか、マグリブ解放戦線が鉄血工廠などにつくほど落ちぶれようとは思ってもよりませんでした」

へふん、貴様とて金払い次第で命を量っているではないか。ラインアークの傭兵^{ランク}◇

砂漠の狼”バルバロイ”と相對したホワイト・グリントは、銃を構えることもせずばうつと立ちながら、バルバロイを見下ろしていた。

バルバロイは、ホワイト・グリントに気づくと1度武装を下ろす。

「おや、私とて契約は選びますよ。なにせ、ラインアークは難民を保護していますからね。イメージ戦略も大切にしておりますゆえ」

油断なく銃を構えるバルバロイは、煤けたグレイオレンジの義体だ。戦術人形特有のパーツ換装で、逆関節型の高機動型、軽量タイプ。

左手にショットガン、右手にアサルトライフルを装備している。

「そういえば、貴様、噂と違うな。一丁しか持っていないのは、舐めているからか？」
「うん？ ああ、失礼しました。正規軍ならいざ知らず、PMCと契約しておりますので。戦術人形とはいえ、何も用意していない民間軍事会社には汚染の危険性がありますので、”技術”は使えませんから。」

ラインアークから、MODとして送って貰うことになってます。これは機密でもなんでもありませんし、公開してもらって構いませんよ。

……”ランク9を狩るなら、今がチャンスだ”とね」

「それは不要だ。ランク9、ホワイト・グリントはここで倒れるからな」

双方の視線がぶつかる。

バルバロイのジェネレーターが回転数を上げ、大量の青白く輝く粒子が放出される。

「そういえば、この前の大戦で地球環境の汚染が深刻化しているらしいですが……ご存知ですか？その粒子、環境によくありませんよ。マグリブ解放戦線、イメージが良くないですね」

「ほう、アスピナのジョシユア・O・ブライエンと同じ名を冠しておきながら貴様が環境保護を語るか」

斥力場によってコントロールされた安定的に還流する粒子が、バルバロイの半径3mほどを円形に包み込む。

「プライマル・アーマー……環境破壊アーマーと言い換えた方がいいのでは？」
「対ネクストでプライマル・アーマーを張らないなど、愚かな」

瞬間、バルバロイは各所に取り付けてあるブースター・ユニットから爆発のような音と共にエネルギーを放出し、サイドスライド。

「このバルバロイを相手に近距離まで踏み入ったこと、後悔する暇も与えん」
「よく喋る……」

ホワイト・グリントは銃を構える。

大地を蹴る。その瞬間こそ、バルバロイがホワイト・グリントを仕留めることが出来た唯一の瞬間だっただろう。

大地を蹴ったホワイト・グリントは、メインブースターの出力を上げる。そのまま滞

空をはじめろ。

そのまま銃を撃ち始める。正確無比な射撃が、プライマル・アーマーに弾かれる。

プライマル・アーマーは、フォースシールドほどの完全防御性は無いものの、継続性に優れた常時展開型アビリティだ。

高密度で対流する粒子が弾丸を弾くのだ。

フォースシールドは簡単に言うとは衝撃を吸収する斥力場で、その斥力は衝撃を吸収するほどにジェネレータに負荷を与え、臨界点を超えればフォースシールドは消滅する。

一方、プライマル・アーマーは、滞留する粒子が弾丸を軽減、防護する。粒子の密度こそ防御力に密接に関わるものの、ジェネレータで生成される粒子があればほぼ常時展開できる。

〈BFFめ、よくも当てる〉

バルバロイは逆関節を一気に駆動させハイジャンプ。

ホワイト・グリントと同じく、ブースターを動かして巧みに滞空する。

「流石にバルバロイ、当てにくいっただけだね」

ホワイト・グリントは念の為カーミラ、春燕チユンヤンに退避しろと伝えようとしたが、粒子のせいで通信が出来なくなっていることを思い出し、光発信号で上空に退避しよう通信した。

ト。 高空に飛ぶ2機の機影を見て、安心して戦えると胸をなでおろしたホワイト・グリント。

遠慮なくブースターを吹かし、速度を上げる。

バルバロイのアサルトライフルは、高速で飛ぶホワイト・グリントを捉えられない。バルバロイは1度着地し、再び大地を蹴る。

うーん、やはり軽量逆関節のブースターの出力を補って余りあるあの跳躍力は脅威です。すね。

早く仕留めなければ、下手をすれば喰われる。

ホワイト・グリントはギアを上げる。

「おーおー、やってんなあ」

ブースターを縦横無尽に吹かし、バルバロイに射撃をしながら高速で空を飛び回るホワイト・グリントと、着地と跳躍を繰り返しながら猛追するバルバロイ。

そして、それを呑気に眺めるモーターコブラ。

「ネクスト、並の性能じゃないとは思っていたけど、あんた達空飛べるのね」

「ま、ずっとじやないがな。あたし達からすりや、春燕とかカーミラみたいな戦闘機だつて羨ましい」

シヨットガンとアサルトライフルの2挺を連発しながらブースターで距離を詰めるバルバロイは、なるほどただの戦術人形では手が出ない。

「け、ケルビムモーターコブラさん！」

「どうしたい、エクスシアA C R」

「あの薄青白い膜はいつたい？ セラホワイト・グリンフさんとかケルビムモーターコブラさんは使っていないみたいですが……」

「ありやあプライマル・アーマーだ」

「プライマル・アーマー？」

「ああ。簡単に言えば、環境汚染フォースシールドだな。生物や環境全てに害だが、ジェネレータの出力が許す限り半永久的にシールドを張れる。完全じやないけどな。あたし達があれを使つてない理由は、ま、イメージ戦略だな。自分たちを売り込むのに、わざわざマイナスイメージをつけることは無い。

ついでにいえば、皆にも害だし。……これでも、ちゃんと仲間は大切にしてくるんだぜ」

「さすが次世代……」

「ねえ、あれ抜ける？」

「うん？ そうだな……多分抜けるが、タイミングがなあ」

感嘆する A C R の横で、物騒な会話をする V e c t o r と N T W 。

実際問題、彼女ら戦術人形^{ノーマル}にとってはごく一部の精鋭しか相手にならない。

まして、ホワイト・グリントが名乗りを上げているのだから、手出しは無用なのだ。装甲列車を撃破してしまったため、要するに暇なのだった。

「しかしまあ、よくやるよ……」

モーターコブラはバルバロイとホワイト・グリントを見上げる。

ネクストとは次世代戦術人形、しかしその実態は戦術人形とは程遠い。

銃火器の記憶を持つ戦闘兵器……ではなく、彼ら／彼女らは完全に兵器そのものなのだ。

そもそもネクストとは戦術人形の更に上位の兵器、アーマード^A・コア^Cである。

個人が登場して操作するものとしてはおそらく最強の一角を占めるだろう。

通常の A C であれば、訓練さえ受ければ万人が使用することが出来る。しかし、そのアーマード・コアにも位階が存在するのだ。

パーツ換装により様々な戦場、状況への対応を可能とする汎用兵器こそがアーマード・コアでありながら、その可変性を無視し自身のスタイルのみで地位を築く、一般の兵器たる A C を単体戦略兵器として扱う存在がいた。

それが、アリーナでありカロードなどの順位^{ランク}付け。

ランク上位ともなれば、1個軍隊にも匹敵する戦力を持つ。

そんなランク持ちは、通常の武装が戦術人形になった存在とは違う。まさに、存在自体がそのままACなのだ。

そして、既存のACと一線を画すとある”技術”を使って製造されたのがネクストである。ネクストは機体も特殊であるものの、最も重要なのは、万人ではなく選ばれたものしか扱えないという点だ。

ネクストはアレゴリー・マニピュレート・システムというシステムで操作される。これは、AMS適正というある種の才能がないと扱えないのだ。

そのため、ネクストACは特に、ランク持ちは戦闘スタイルにあわせた武装固定の専用機となっていることが多い。

グリフィンを例にあげれば、モーターコブラはネクストの機体を持つものの、”03—MOTORCORA”という武装の戦術人形であるが、トップランカーと目されるホワイト・グリントは、”White—Glint”というネクストであると同時に、^{搭乗者}リンクス”UNKNOWN”という人間でもある。

正確に言えば、^{搭乗者}脳が生体培養である戦術人形に対し、適性が必要なネクストの脳は培養では無い生体脳なのだ。

「実はな、ホワイト・グリントってのは2代目なんだ」

モーターコブラは訥々^{とつとつ}と語る。

「あたしが武器だった時代、ホワイト・グリントってのはスロー^隊ネが言った通りアスピナの傭兵”ジョシユア・オブライエン”って奴のやや軽量の機体だった。企業に属さないイレギュラー、傭兵。ジョシユア・オブライエンと、もうひとり。あの烏崩れのアナトリアの傭兵とジョシユア・オブライエンはたった2人でオリジナルをほぼ全滅させやがった。

あたしはその時は、アナトリアの奴のメインウェポンだったからな。よく覚えてるよ」

モーターコブラは懐かしむように言う。

彼女たちは、ヤンや深井零とは少し似ているが異なる。異世界からの客人である彼女らに対して、ネクストとは別世界の兵器が戦術人形となつてこの世界に舞い降りた。

ヤンや深井零はこちらの世界に来たタイミングでの記憶だが、彼女たちは全ての記憶を持っている。

「あたしの古巣もアナトリアの野郎に潰されたし、アクアビットはジョシユア・オブライエンによって潰された。そして、アスピナの傭兵とアナトリアの傭兵は戦争の勝者となつたのさ」

リンクス戦争と呼ばれるネクスト大戦は、アナトリアの傭兵によって勃発し、アナトリアの傭兵によって激化し、アナトリアの傭兵によって終わった。

モーターコブラは、レイレナード・BFF製のパーツを主として愛用していたアナトリアの傭兵の愛銃だった。

だが、そんなモーターコブラも知らないとある密約があった。

レイレナードのとある技師たち、アスピナの天才アーキテクトらの支援を得て協定に基づいてアナトリアの傭兵はレイレナード本社エグザイルを襲撃した。

害ある汚染粒子砲台やあまりにも脆いデザイン優先の建築、陸路で出社できない本社などぶち壊せ、などという声もあつたほどなので、レイレナードに協力的な立場に見えたアナトリアの傭兵は彼らにとつてはかなり魅力的な傭兵だっただろう。

もちろん、それだけではないが。

「ところが、だ。終戦直後、アナトリアを1機のネクストが……いや、兵器が襲撃した。それが、プロトタイプ・ネクスト、”アレサ”。搭乗者は……ジョシユア・オブライエンだった。

イレギュラーは2人とも潰そうって魂胆だったんだらうな。

その戦いでジョシユア・オブライエンは死亡、アナトリアの傭兵も行方不明だ。

あたしか？あたしもアナトリアの傭兵とはそれつきりさ。フィオナとよろしくやつ

てたんじやないかな」

プロトタイプ・ネクストとは、文字通りの試作型。

ネクストよりも大きな機体にこれでもかと詰め込んだ過剰武装、環境汚染どころか搭乗者をも使い潰す悪魔の兵器。

モーターコブラの火力ですら、アレサのプライマル・アーマーを減衰させるので手一杯だった。

激闘の果てにアレサを破ったアナトリアの傭兵だったが、機体は大破。

ボロボロの機体はそのままコロニー・アナトリアに収容されたものの、修復は絶望的だった。

もちろん、弾薬を使い果たし最早ブレードどころか鈍器として使われたモーターコブラも手の付けようのない損壊具合。

そのまま、アナトリアの傭兵はフィオナ・イエルネフェルトと共にアナトリアを去った。

「その、アナトリアの傭兵って人の名前は？」

「さあな、奴がレイヴン上がりへのっぽこリンクスってことしか知るやつはいない。なにせ、奴の相棒のフィオナ・イエルネフェルトですら一度も名前を呼んでない。呼ばなかったのか、知らなかったのか……おそらくは後者かな。まるで”U・N・Owen”

だ」

機関部だけ取り出されたモーターコブラは、そのまま幾度も戦場を渡り歩いた。

なにせ、あのアナトリアの傭兵の使っていた武装という箔が付いている。

中量二脚のネクストの武装として、ある時は傭兵の、ある時はランカーの、ある時は固定砲台として使われた。

そして、数奇な運命と呼ばばいいのか、モーターコブラはとある独立傭兵の手に行き着く。

もちろん当時の彼女に意志はない。だが、それでも。

モーターコブラは、今のところおそらくは、最も人類を殺した武器の片割れと言えるだろう。

「それで、ある日ラインアークにあるネクストが現れた。それが、ホワイト・グリントだ。機体も中量になってバランス型になってた。最新の機能を大量に詰め込んだ、おそらくはランカーの中でも屈指の実力者としてな」

その独立傭兵、通称“首輪付き”の元にたどり着く少し前。とあるネクストの武器として戦っていたモーターコブラは、1つの情報を手に入れた。

それが、かつての伝説白閃光の名を冠するネクストだった。

「じゃああれは、ジョシユアって人の方じゃなくて、2代目のホワイト・グリントってわ

「け？」

「ああ、まあ、まず本人が自分のことをラインアークって言ってるし、中身もジョシユア・オブライエンならそういうだろうしな。実際、2代目のリンクス搭乗者はUNKNOWNだし。噂によりやあ、奴のオペレーターはフィオナ・イエルネフェルトらしいが……」

「じ、じゃあ、あの人がモーターコブラさんの……」

「シー……そつから先は言うな。お互いに、触れたくない、触れられたくない領域つてのはある。今のあたしはモーターコブラというグリフィンの戦術人形で、今のやつはホワイト・グリントというグリフィンの戦術人形だ。それ以上でもそれ以下でもない。それに……」

モーターコブラはACRの唇に指を当てる。

それは、触れてはならない領域。

ブッシュマスターACRの記憶のように、ヤン・ウエンリーの過去ののように、FALLの傷のように。

モーターコブラの領域とは、アナトリアの傭兵との記憶と首輪付きとの記憶。

「それに？」

「中身、知らないしな」

「ええー!!」

「いやだって、アイツなんも喋らねえし。一方的に話しかけられはするけど、一言も発さないし。ま、話さないのか話せないのかもしれないが。性別もみんなが言ってるから男だと思っただけでも本当か知らんし。あのホワイト・グリントの電腦が誰かも知らんしな。多分女だろうけど」

「あんたたち、作戦規定くらい守りなさいよ」

見かねたFALが咎める。

コールサインなど無視して会話をする彼女たちだったが、やはり情報の漏洩は心配だ。

作戦に参加している人形のスペック、戦術傾向、投入した理由などの推察までもできる。

「や、あたし達ネクストはもうバレてんだ。なんつうか、ぼつと出のイレギュラーでもない限り各企業の諜報機関が特徴を全部調べて持ち帰ってるからな。戦場に出てきた時点で面ア割れてるんだ。バルバロイだってそうやって割り出したわけだしな」

戦場で名のある個人とは、主に2つに分けられる。

1つは兵器とパイロット。強大な力をもって戦場を支配する。

その突出した戦力は、ある種畏怖を持って戦場に名を轟かせる。

近現代での代表例では、やはり空軍が挙げられる。

”レッドバロン”リヒトホーフエン、その名をマニューバに残すマックス・インメルマン、第二次大戦期ドイツ空軍の”ウクライナの黒い悪魔”エーリヒ・ハルトマン、バルクホルン、キツテル、ルーデル。

日本海軍では岩本徹三、西沢広義、坂井三郎などが有名だ。

陸戦では近年の戦場の構造上個人が名を残すのは難しい。

だが、もう一つの場合は名を残す。それが、スナイパーである。

コラー河の奇跡で知られる”白い死神”シモ・ヘイへ、”ホワイトフェザー”カルロス・ハスコック、”ラマデイの悪魔”クリス・カイル。

狙撃は、ほかの陸戦とは訳が違う。初撃、狙撃という行為自体に名刺が付いている……とまで言われるほど、個人の戦力に依存している場合もあるほどだ。

ACランカーやネクストはこの前者にあたり、パイロットと機体の両方が戦場に出てきた時点で大々的に名乗りを上げているようなものだ。近世以前の戦士、とりわけ日本の戦国武士における一騎討ちや果たし合いもこれに近い性質を持っていると言える。

低ランカーやイレギュラーでも戦場を蹂躪するACは、対抗策としてはACをぶつけるしかない。

そのため、戦場では極めて重要な監視対象になっている。

センサーの感度、ジエネレータの出力、ブースターの加速度や吹かし方、武装の特徴、

ロック速度や精密性、果てはパイロットの癖までも情報は収集される。

言わずもがな、現在の特殊コマンドユニットAは全企業・イレギュラーの監視対象下にある、という訳だ。

「はあ、あなたね、それはわかかっていても極力防ぐべきなのよ」

FALは額に片手を当ててため息をつく。

「悪いな、そりゃあそうだ。気をつけよう」

モーターコブラが肩をすくめる上空では、バルバロイがホワイト・グリントを捉えようとしていた。

流石に砂漠の狼、平地戦では分が悪い。

ホワイト・グリントはバルバロイをねじ伏せる自身も実力もあつた。だが、バルバロイは戦術人形として非常に高水準の性能を持っているネクストであることに変わりはない。

いかにEN出力を管理しようと、ネクストはあくまでも陸戦兵器。地面に着くことは避けられない。その瞬間が最も危険だ。

バルバロイ、逆関節との平地戦はそこそここなしているつもりでしたが……やはり、相性が悪い……！

プライマル・アーマーを展開していない今、ネクストといえども瞬間火力の高いシヨットガンとアサルトライフルをもろに喰らえばノックバックは免れない。そこに火力を集中されれば、ホワイト・グリントといえども重大な損傷、あるいは撃破もありうる。

巧みにブースターを吹かしながら右に左に、時には前に跳びながらホワイト・グリントは射撃を続ける。

バルバロイのプライマル・アーマーは半分ほど減衰しただろうか。プライマル・アーマーを破らなければ始まらないが、その膜の奥には頑強な装甲が控えている。

「どうした？ 大口を叩いた割に、動きが鈍い」

「それはFCSの問題ですよ。積んでいるものが違いますからね、私からすればあなたはかなり速いですよ、アマジীগ」

焦ってはいけない。アマジীগのAMS適性は私以下、必ず動きが鈍くなる時が来る。

そう思っていたホワイト・グリントは、一瞬の閃光の後目の前に突如として現れたバルバロイに意識を奪われる。

こんなに早く、2段……ですか

なんとかホワイト・グリントも対応してブースターをふかす。

右にスライド。更にそこにバックブーストを上書きする。ネクストでなければ電脳や生体パーツは慣性でぐちゃぐちゃになっていくほどの超機動だ。

FC Sは振り切れ、バルバロイを失探ロストしたホワイト・グリントは一度体勢を立て直そうと高度を上げる。

そうしようとメインブースターを踏み込んだ瞬間だった。

4度、閃光が走る。

なっ……！

目を見開くホワイト・グリント。

〈足掻くな。運命を受け入れろ〉

至近距離、バルバロイの息遣いさえ聞こえそうなほど近くにバルバロイが現出した。

そっと胸に押し当てられたショットガンが火を噴く。

猛烈な衝撃。

「ぐうっ……！」

強烈なノックバックがホワイト・グリントを襲う。飛行慣性は完全に上書きされ、ホワイト・グリントは大地へと煙を吹いて墜落していく。

一瞬の空白の後、背中を最も巨大な質量体である地球との激突による衝撃が襲う。

「かハっ……！」

肺の空気が絞り出される。硬い殻に包まれた電腦さえも揺さぶられ、状況を正確に把握できない。

アラートが視界を真っ赤に埋め尽くす。それだけではない。眼球周辺の毛細血管が破裂し、視界はレッドアウトする。

クレーターのど真ん中で、腕どころか指一本すら動かすことが出来ず、ホワイト・グリントは四肢を投げ出し、銃すら落とした無様な姿勢で痙攣する。

「つ……あ……」

〈フン、こんなものか〉

眼前に着陸したバルバロイの姿すら捉えられず、ホワイト・グリントは蛙のようにただただ痙攣するしかない。

思考がまとまらない。許容量を超えた衝撃に論理崩壊を起こしかけている。

センサーが悲鳴をあげている。損壊したパーツのダメージ・コントロール、衝撃でオーバーフローしたセンサーの情報、何が起こったかさえ把握出来ない現状がホワイト・グリントの電腦を焼き尽くそうとしていた。

〈貴様……本当にその程度の力で何かを守ろうとしていたのか？〉

バルバロイは無様に横たわるホワイト・グリントを眺める。

〈ジヨシユア・オブライエン……彼奴ならこの程度の技術、造作もなく使うだろうに〉

しかし、ホワイト・グリントはその言葉も聞こえていない。ようやく腕を微かに動かすことができるようになったが、まだ呼吸ができない。センサーも荒ぶっているが、少しずつ自身の体の状況がわかってきた。

損傷はそれほど大きくない。胸部も、ネクストの装甲が味方して、かろうじて弾丸は内臓までは届いていない。

むしろ、落下による衝撃の方がずっと深いダメージをホワイト・グリントに刻んでいた。

ブースターや駆動骨格も、上手く信号が届かない。

な、なにが……違う、どうすれば……どうする……？

敵を目の前にしながら……ただミミズのように地面を這うことしか出来ない……このダメージの現実を……

ぐぐぐ……とホワイト・グリントは体の中から何かがせり上がってきてくるのを感じた。口を閉じることが出来ない。そのまま何かが口から溢れ出す。

鉄。塩。流れ出したのは赤い液体、血だ。

〈端正な顔立ちが……台無しだな。血で死化粧か？〉

穴という穴から血を流し、それでも未だに体勢を変えることも出来ない。勝負は決した。

逆流した血が気道を塞ぐ。肺に血が流れ込む。

赤暗くなっていく視界の中、1つのシステムメツセージが表示される。

——ブースター・オンライン

〈ではな、ラインアークの傭兵〉

バルバロイは両手の銃をホワイト・グリントの顔に向ける。

バルバロイが引き金を引く。

その瞬間、ホワイト・グリントの周囲の土が爆煙とともに舞い上がる。

〈何?〉

バルバロイは咄嗟に後退、周囲を見渡す。

数メートル先に、丘を転がり落ちるホワイト・グリントの姿があった。

〈ギリギリでブーストを始動したか。あの衝撃で動けるとは、流石にランク9〉

血を撒き散らしながらゴロゴロと力無く転がるホワイト・グリント。だが、その回転こそが今のホワイト・グリントを救った。

身体を全周囲から微振動が包み込む。先程ホワイト・グリントに致命傷にも届く程の衝撃を与えた大地の振動が、今度は優しくホワイト・グリントを揺らす。

——センサー、復帰

——電脳出力、回復

——駆動骨格、再接続

口に溜まっていた血は全て流れ出た。視界を覆っていた赤い膜はまだあるが、視界はきちんと見える。

なによりも、胸を打つ地面の感覚が、呼吸を戻してくれた。

追撃しようとした跳ねたバルバロイ。上空からホワイト・グリントを襲おうとしたその時。ちょうど、仰向けになったホワイト・グリントの血に染まった青い眼と目が合ったように、アマジグは感じた。

仰向けになったタイミングで、ホワイト・グリントはジェネレータの出力を限界を超えて放出した。

吸気と排気が同時に行われたような、そんな音がしたあと、ホワイト・グリントの体は重力を振り切って時速2000kmにも届く速度で上昇する。

へバカナ、プライマル・アーマーもなしに……いん

バルバロイの目の前まで1秒も経たずに上昇したホワイト・グリントは、力の入っていない腕をブーストを使用しながら高速で回転しバルバロイの首筋に叩き付ける。

ここでホワイト・グリントが使ったのは、オーバード・ブーストという技術だ。ネクストの持つ最大のブースターであり、ジェネレータの出力のほぼ全てをブースターに回す。

プライマル・アーマーを使用することで音速をも突破するものだが、ホワイト・グリントはアーマー無しの生身でその衝ソニックブーム撃を受けた。右腕と両脚を折り畳み、左腕をだらんと垂らした姿勢で垂直上昇したため、左腕はボロきれのように血を吹き出している。その左腕を、ブースターによる回転の速度で叩きつけた。

〈貴様、本当にリンクスか!?〉

「ケホっ……あら、知り、ません、でした……？私、格闘の、心得も、あるん、ですよ……」
ホワイト・グリントの血を体にべつとりと付けながら、先程とホワイト・グリントが辿ったのと全く同じ軌跡でバルバロイが墜落していく。

鼻と耳の血を拭い、その純白の服を血と土で汚しながら、ホワイト・グリントは自身の銃を拾う。

「驚き、ましたよ……あなた、まさか、キャンセル、使えたんですな……」

2段までは予想ができていた。アマジグ程のリンクスであれば、この程度の技術は使えてもおかしくない。

だが、まさかその先まで辿り着いていたとは。

当時は情報なんて全然なかったし、そもそも起動前にダメージを多々与えていたから決着はその前についた。

知らなかったとはいえ、不甲斐ない。

血の涙を滴らせ、垂れた左腕からだらだらと血液を流すホワイト・グリント。左腕の服を破き、肩の根元で結ぶ。

「ですが、あなたは、重大な、ミスを……犯しました……」

まだ満足に喋れないものの、意識ははつきりしてきた。

先程バルバロイが行ったのは、2段クイック・ブースト・キャンセル。

ネクストのブースターは3種類ある。

1つは通常の機体を動かすブースター。垂直上昇用と前進、後退、左、右と移動するものだ。

2つ目はホワイト・グリントも使ったオーバード・ブースト。

そして3つ目が、機体各所に取り付けられたブースターに粒子を貯蔵し、プラズマ化させ瞬間的に放出することで前後左右に超高速ダッシュを行う、クイック・ブーストだ。ネクストのネクストたる所以は、プライマル・アーマーとこのクイック・ブーストにある。

通常、QBはブースターに粒子を貯めて発動するためリチャージタイムが発生する。連発はできず、最短でも0.5秒ほどのタイムラグが発生する。

だが、これには2つの抜け穴が存在するのだ。

ひとつが、2段QBと呼ばれる技術だ。クイック・ブーストを1段やや弱めに発動し、

その余剰エネルギーを2段目に回すことで消費エネルギーをそのままにより速く、より速く、ダッシュすることが出来る。

1度で全ての粒子を使うのではなく、僅かに絞って発動することで2段のダッシュを可能にする技術。これが2段QBだ。

そして、2段QBには人類の限界の先が存在する。 突出した天賦の才能による人類の新段階 AMS適性が極めて高いか、経験による人体の変容 ネクストの操縦に習熟しているか、あるいは……自身の精神を崩壊させるほどの負荷を許容し、致命的な精神負荷による限界の突破 自らの精神を費やしてネクストを動かすほどのリンクスのみが見える技術。クイック・ブーストは、ブースターに貯蔵されている粒子さえあれば発動できる。つまり、単一方向ではなく複数方向であれば連続でクイック・ブーストを発動できるのだ。

これをQBキャンセルというのだが、ここまでは大した技術は必要ない。

このQBキャンセルを、2段QBで行うことが出来るのだ。

それが、2段QBキャンセルである。

2段QBキャンセルは、クイック・ブーストの出力のコンマ秒単位の微調整、方向の意思決定、高速移動によるFCSや各種センサーの混乱、状況把握、3次元空間把握能力、四肢の動作、人体をミキサーにかけたような苛烈なGほか、大量の障害を乗り越えた果てにたどり着く境地である。

2段QBとクイックブースト・キャンセルという全く方向性の異なる技術を多重使用すること自体が針の穴を目隠しをして毛糸で通すような暴挙であり、時化に揺れる船の中でそれを行うような無謀である。

国家解体戦争からORCA、”人類史上最悪の事件”まで幾人も存在した天才達の中で、この2段QBキャンセルという神の領域に達したリンクスは記録上僅かに2名。

”ホワイト・グリント” ジョシユア・オプライエン、

”バルバロイ” アマジージュ

のみだ。

事実、先程2段クイック・ブーストを使用したバルバロイに対してホワイト・グリントは同じく2段クイック・ブーストで対応した。

しかし、バルバロイはその後にもう一度2段クイック・ブーストを発動しそれをキャンセルしたのだ。

地面に激突する寸前でクイック・ブーストを吹かし撃墜を免れたバルバロイがホワイト・グリントの前に立つ。

〈ほう、ミスとは？〉

「私を……有無を言わさずに……殺さなかったことです……」

〈ふむ。だが、その体で何ができる？最早ただの戦術人形にも勝てるまい〉

ホワイト・グリントは血の口紅で紅に染まる口角を上げてニヤリと微笑む。

「……獲物を前に舌なめずりは……3流のすることです……」

その瞬間、バルバロイの視界は白い閃光に埋め尽くされた。

「ね、ねえ、大丈夫なの？」

Vectorがモーターコブラに心配そうに訊く。当然だ。腹から接射でショットガンを全弾浴びた上に、高度数十メートルからの落下。並の戦術人形であれば、大破ではなく被撃破だ。

「ん？あー……ちとまずいかもな。ま、アイツがやられてもあたしがいる。心配すんな」

「そういう問題じゃ……」

「あれは、アイツへの罰だ。甘んじて受け入れなければならない、な」

「罰？」

まるで寝ているかのように横たわるホワイト・グリントに、バルバロイがゆっくりと近づいていく。

「ああ。アイツはバルバロイの力を見くびった。その罰がああ左腕なのさ」

腕を組んで鼻から息を吐くのはFALだ。その左眼は、ホワイト・グリント同様自身への咎として傷が残っている。

「しかし、あの光景は犯罪ね……力なく横たわる美女に迫る野獣つてところかしら。で、本当に大丈夫なの？あれ」

「実際のところはかなりマズい。そもそも、あたしたちは今スペックの1から2割しか出せない状態だからな。例えば、F1カーにちよつと弄つただけのスポーツカーで挑むようなもんだ」

「プライマル・アーマーを使用しておらず、武装も本来ホワイト・グリントは3つ所持しているが現在のはひとつ。」

「プライマル・アーマーがないため、クイック・ブーストも使用できない。言わば、ただ少しだけ性能のいいノーマルACと変わりがない。そんな状態でバルバロイと交戦しているホワイト・グリントは、指一本で箸を使って豆を移せと言われているようなものだ。」

「手え出すなよ。これは、アイツが超えなければならぬ壁だ。ここで沈むようなら、アイツはこの先に進む資格はない」

「モーターコブラは昏く目を光らせる。」

「かつて自分が乗り越えた壁。アナトリアの傭兵が最初に戦ったネクストは、バルバロイだった。」

「幾度も挑んだ。その度に、世界が分岐した。成功した世界線……その果てが、アナト

リア失陥とは笑い話にもならないが。

「……」

ユニットAの面々は黙って状況を見守る。

ホワイト・グリントが突如メインブースターを吹かし、クレーターを脱出する。

そのまま、力なく丘を転がり落ち、バルバロイが追撃する。

「しっかし、変わらんなあ」

「ん？」

「バルバロイだよ。アイツ、寡黙ぶつてるが意外とおしゃべり好きなんだ。質問やら何やらしてくる上に、決めゼリフまで持ってやがる」

獲物を狩る狼のように飛びかかるバルバロイに対し、ホワイト・グリントがまるで瞬間移動したかのように飛び上がる。

「なにが、”足掻くな。運命を受け入れる”だよ。聞き飽きたつづうの」

ホワイト・グリントが器用にメインブースターと各所のブースターを組みあわせてくるくると回り、物理攻撃でバルバロイを叩き落とす。

「それに、あいつも……」

気づくと、周囲に僅かながら白い粒子が乱舞している。

着地したホワイト・グリントの周囲を淡く囲む。

「プライマル・アーマーがないと、胸に被弾するのいつも一緒か？」

ホワイト・グリントは、QB分だけ粒子を、精製したのだ。

一瞬、世界が白く染まる。

先程バルバロイが見せた超機動、2段QBキャンセルをホワイト・グリントも発動したのだ。

瞬時にバルバロイの後ろを取ったホワイト・グリント。

バルバロイも反応して2段QBキャンセル。

しかし、ホワイト・グリントはネクストと呼ばれる兵器の規格では遂に誰も手の届かなかったさらなる段階へと到達していた。

白い閃光が、バルバロイを包む。

ネクストの強化駆動骨格の出力は、プライマル・アーマーが作る粒子の斥力をこじ開け、バルバロイの後頭部に銃を突きつけることに成功する。

「フィナーレです」

そんな声が、静まり返った戦場に響いた。

元より精密な射撃でプライマル・アーマーを貫徹した弾丸がヒットしていた頭部に射撃を受けたバルバロイは、そのまま倒れ伏した。

ホワイト・グリントは離脱。

身体の各所からスパークによる火花を散らすバルバロイ。

電脳に重大な損傷を受け、制御系がショートしジェネレータの出力が抑えられなくなったバルバロイは爆発する。

第1特殊部隊コマンドユニットA、作戦の第一段階をクリア。
カーミラと春燕からの連絡が、ヒューベリオンに届く。

クリアランス・コード認証。貴方をグリフィン関係者だと確認しました。ようこそ、
第13旅団戦術データベースへ。

アクセス承認。当該戦術人形のデータを表示。

万が一、戦術人形のスペックなどに興味が無い場合、スキップしてください。

No. 008

NAME: H&K G36C

Call sign: Arche (5)

STB特殊部隊コマンドユニットA前線要員

Weapons Specification:

ドイツ

H & K

口径：5.56 mm

銃身長：228 mm

ライフルリング：6条右転、1：7インチ

使用弾薬：5.56 x 45 mm NATO弾

装弾数：30発箱型弾倉

作動方式：ガス圧、ショートストロークピストン式、ロータリーボルト
 全長：720 mm（ストック展開時）
 500 mm（ストック収納時）

重量：2,820 g

発射速度：750発/分

銃口初速：850 m/秒

有効射程：800 m

Doll's Specification:

CQB戦：B+

近接格闘術：B+

射撃：B+

体力：A

機動：A―

爆薬取扱：B

編成拡大：済（3―Link）

医療：B

諜報：B

研究開発：B

ロールアウト後にグリフィンのSMG部隊のエースとして名を轟かせる最精鋭戦術人形のひとり。向かう戦場という戦場で穴のない性能の高さや戦術、戦闘スキルの高さを評価されている。

STB設立後は早い段階で異動してきていたが、部隊指揮をしていたため先任の指揮下で作戦行動をするのはオペレーション・カノーパスが初である。

身体機能：第6世代型戦術人形。第5世代のデータを元により高性能に、コンパクトを実現した精鋭戦術人形。

おっとりした性格だが、仲間意識が強く時には激昂する事さえある。

電源：第6世代型戦術人形用固体高分子燃料電池＋SMG用モーターデバイス

駆動骨格：第6世代型戦術人形用駆動骨格C

FCS : HIBL

センサー：第6世代型デュアルカメラアイ(ワインレッド)、第6世代型聴音センサー、

第6世代型嗅覚センサー、第6世代型味覚センサー、第6世代型触覚センサー

電脳：???????

生体パーツ：???????

通常武装：本体(30発箱型弾倉)

Lv. 68

SMGとしてはスタンダードなタイプ。攻防において隙がなく、敵に回すと最も攻めづらいいわゆる「セオリー通り」の戦術人形。しかし、教科書一辺倒ではなく柔軟な思考と高度な判断能力を兼ね備えている。弱冠ほどの電脳ではあるが、比較的成熟した思考回路を持つ。

なお、日常生活においては年相応以下のメンタルモデルであり、噂によるとかなり甘え上手らしい。

Skills :

フォースシールド

弾丸や衝撃を吸収するフォースシールドを一定時間展開する。

フォースシールドの利点は一定時間あるいは一定量の攻撃に対して無力化できる点である。

このフォースシールドは比較的クールタイムが長いものの任意で発動でき、G36Cの作戦行動を幅広く支えるスキルでもある。

しかし、G36Cの真価はこのスキルに頼りすぎないところにあるといえよう。

S.T. 8 オペレーション・カノーパス フェーズ2

「よお、こっぴどくやられたようだな」

バルバロイを撃破したホワイト・グリントにモーターコブラがニコニコしながら歩み寄る。

「なんですかそのしてやったりな笑いは。ぶちのめしますよ」

「おお、怖え。ほら、布と応急キットだ。顔を拭いて傷を塞げ。まったく、アブ・マーシユ謹製の綺麗な顔が顔から出るありとあらゆる液体でぐしゃぐしゃだぜ」

モーターコブラが差し出した布とキットを受け取りながら、ホワイト・グリントはむすつとして反論する。

「2段ブーストキャンセルなんて、この世で限られたリンクスしか使えない技術ですからね。あなたも知らなかったでしょうに」

「まあ、そらそうだが」

お前は使えるくせに、と僻みじみした視線を送るモーターコブラを他所に、くしくしと顔を拭い、左腕と胸の壊れた装甲を応急修理していく。

「あなたは落ちたことは無いでしょうが、私はこれで2度目ですよ。胸に被弾して大地

に墜落するなんて、そうそうある経験でしようか？」

左腕は何とか動くようになったが、パーツ交換かオーバーホールが必要そうだ。

ホワイト・グリントは服の裾をぱん、と払い、キットをしまおう。

「大地との抱擁なんてなかなかする経験じゃないぜ。羨ましいこった。……どうだった、奴は」

「そうですね、ランカーよりイレギュラーの方が危険、というのは昔から変わらないようですよ」

「よく無事だったわね」

そこに、FALらユニットAのメンバーが周辺警戒から帰ってくる。

「無様なところをお見せしました」

「私たちが手も足も出なかつたわ。それと、今度から約束して」

FALの言葉に、モーターコブラとホワイト・グリントは目を見合わせる。

「次からは遠慮しないで、奴らをぶちのめしなさい。どうせ私たちは交換できるのよ。

あなたの傷より遥かに安くね。まったく、センスを疑うわ。出し惜しみしてそんな怪我

しちやって……ほら、これ」

そう言つてFALが差し出したのは、チョコレートだった。

「これは？」

「第1フェーズ突破記念、かしら。うちでは、MVPにはご褒美があるのよ」
「何？そんならあたしがやりに行ったのに！」

「ふふ、残念でした。次は頑張りなさい、次も私が貰いますけど」

そんな2人を微笑みながら見守るFALに、NTWとG36Cが詰め寄る。

「おい、聞いてないぞ。なんだその新しいルールは。それに、MVPつたら私じゃないのか」

「私だって、頑張ったのですが……」

そんな2人に、FALは苦笑してさらにチヨコレートを取り出す。

「冗談よ。ほら、みんな、休憩よ。弾薬の補充とか、メンテとか今のうちに済ませておきなさい」

「私ら、忘れられてなくてよかったね」

「はい、次はもつと頑張らないと……！」

一時の休息の後、ユニットAはデータセンターへと向かう。

「なあ、俺たちにもないのか？あれ」

「奇遇だな。俺も欲しい」

上空では、カーミラと春燕チュンヤンがカメラで羨ましそうにその光景を見ていたとかなんと

か。

「ふむ……」

「どうなさいました？ 提督さま」

腕を組んで声を漏らしたヤン・ウエンリーに、カリーナが声をかける。

「なに、簡単なことさ。我々がこうしている間、鉄血は何をしているのだろうか、と考えていたのさ」

ヒューベリオンの管制室では忙しく情報がやり取りされている。ヤンはその情報を眺めながら、基本的には口を出さない。どうしても危険な時のみ通信を入れる。

「それは……」

「うーん、こればかりは考えても埒が明かない。だが、なんだか嫌な予感がする」

「嫌な予感、ですか？」

「うん。いま、戦線ははっきりいって我々が保持しているといえる。だが、その保持というやつは、薄氷のようなものなんだ。実際問題、我々が鉄血に対して行える防衛行動には限りがある。例えば、あの対地ミサイルをエル・ファシルに撃ち込まれたら終わりだろ？」

ヤンが示したのは決して可能性の低いシナリオではなかった。

結局のところ、鉄血の高等人形やジャムのミサイル、そして映像で捉えたネクストに
対して、グリフィン第13旅団の打てる手は皆無に等しい。

そして、最大の問題は……。

「なにより、こちらの戦力も物資も有限なのに、あちらは反則レベルの無尽蔵な戦力を投
入してきている。

まったく、強くなればなるほどより強い敵が出てくるわけだ。

我々が今まで敗走せずに来られたのは、たまたま鉄血の注目度が低かったからに過ぎ
ないんだ」

「じ、じゃあどうすれば」

きゅつと手に持っていたバインダーを握りしめ、カリーナが不安そうにヤンを見る。

「そんな顔をしないでくれ。手は考えてあるよ。ただ……」

「ただ……？」

ヤンはそつとベレー帽を取って顔に載せる。

「皆に嫌われるかもしれないね」

白兵戦を主とする薔薇の騎士連隊は、とある密命を受けて辺境の鉄血の工場に侵攻し

「こちらアヴエンジャー、敵基地に侵入。これより破壊工作・基地戦力の撃滅に入りませう」

鉄血基地に侵入したM4A1ら連合部隊は、中に入るとスリーマンセルで行動を開始する。

第1目標は対空ミサイルタレット。

現在、上空では雪風がグレイシルフと睨み合いを続けている。

「アヴエンジャー、突撃します。カバーを」

それだけ言うとM4は遮蔽から飛び出す。

後ろではTAR-21とガリルが制圧射撃を加えている。

(タレットは屋外にある。雪風からのデータでは、このコンテナ群の向こうにあるはず……)

脚を止めてはいけない。

射撃時に最も当てるのが難しいのは、言うまでもなく移動目標だ。戦術人形や防衛システムのAIと言えども、静止目標に対して移動目標の命中率は極端に下がる傾向にある。

それはすなわち、移動目標のターゲットイングシステムは対応力がピンキリで設定されていることにほかならない。

FC Sの質と言ってもいい。

単騎で移動目標を撃ち抜くことに特化した武器というのが存在しないのも偏差の難しさを表している。

衛星とリンクし、自艦のコンピュータも最新鋭でありながら機銃を排したイージス艦などがそのいい例であろう。

移動目標であれば、終末誘導をすればいいのだから。

予測可能な動きではダメだ。

予測不可能な動きをしろ。

弾道計算CPUを騙し、偏差射撃管制システムを狂わせろ。

M4A1はコンテナ群を抜け、対空ミサイルタレットの前にたどり着いた。

そこに居たのは、グレーのポンチヨ姿の戦術人形。

「そこをどきなさい。貴方は鉄血ではありませんよね？」

ポンチヨは何も話さない。身じろぎもせず、仮面をつけている顔をこちらに向けている。

「私は貴方に危害を加える気はありません」

M4は作戦前にFALとした会話を思い出す。

FALが交戦したポンチヨ姿の戦術人形。

コイツだ。

FALの右眼を切り裂き、おそらくはTB—03を吹き飛ばした張本人。

「……ジャム」

びくり。

ポンチヨの肩が動いた気がした。

「貴方はそう呼ばれているらしいですね」

M4は銃をそつと地面に置いた。

「どかないのなら、力づくで排除します」

ここで、ジャムはポーズをとる。

腰から取り出したのはグレーのノイズが走るマチェット。

視野に僅かにノイズが走り、次の瞬間にはポンチヨの姿が変わる。肌や髪は色がつ

き、ポンチヨは迷彩服に。

抜けるような純白の肌、サイド上に青いリボンで束ねたブロンドに近い茶髪、その両

目はブルーに。

肉体の形も変化する。

豊かな胸、背中に吊っているのは銃。

FN製バトルライフル。

口径7・62mm。

「模造品と模倣品、私たちは結構お似合いじゃあないですか？」

そう言つて、M4A1は白く短い棒を取り出す。

右手に巻いたバンドの甲にあるジョイントに嵌める。

「時間がありません。押し通る……！」

戦線はもはや第13旅団のものだった。単独行動を開始した100式は、ガリルらの情報を得てM4の援護に向かつていた。

たどり着いたそこでは、とても現代の戦場とは思えない光景が広がっていた。

「ちいっ！」

右手から淡く輝くレーザーブレードを伸ばしたM4と、グレーのこちらも淡く輝くマチェットナイフを撃ち合わせるFAL。

1合、2合……バシユウ！という特殊な音が響き渡る。

「これは……っ！」

合流したガリルとTARが状況を説明する。

なるほど、あれが報告にあつたジャム。

100式は納得し、コンテナの陰から様子を伺う。

バトルギアの腰に巻いた白のジャケットを翻しながらM4が一旦距離を取ったところだった。

「なるほど」

(……あれは、10ヶ月前のFALさん?)

100式の予測通り、ジャムが擬態しているのはデータログに残っていた通りのオペレーション・アンドロメダ時のFALだった。

「確かに強い。でも、まだ本気じゃないですよね?」

M4の言葉に、無表情のFALは首を傾げる。

その姿は、さながらコアの入っていないFALが動いているような、そんな強烈な違和感を焼き付ける。

いつものFALの気品溢れる傾げ方では無い。

まるで、首が45度なんの予備動作も慣性もなくただただ曲がっただけ。

「つ……私の前で……」

(つ、いけない!)

100式はこれから起こる事柄を直感し、コンテナの陰から飛び出す。

「隊長!!」

(間に合え……間に合ってください……！)

だが、いかに100式であろうともその距離を踏破することは叶わなかった。

100式が割り込む前に、M4は再度ブレードを発振しアスファルトを蹴った。

「FAL^{あの人}を穢すな……!!」

その瞬間、FAL^{ジャム}の体にノイズが走り、まるでそこに元からいなかったかのように掻き消えた。

——ようにM4には見えた。

次の瞬間、脇腹に強い衝撃。至近距離から強烈な掌底を喰らったと気づいた時には、M4は真横に猛烈な速度で吹き飛ばされる。

コンテナに人型大の陥没痕を作り崩れ落ちる頃には、M4の思考ルーチンは衝撃で混乱しきっていた。

体が動かない。

目の前に野戦服が見える。

首を掴まれる感覚。

頸部にかかる重さは、脱力した自分の体の重さだった。

「くあつ……！」

身体が浮く。視野に表示されるダメージコントロールには、そこまで大きな損害はな

い。

だが、右腕のブレードが消失している。エネルギー切れだ。

都合八度の打ち合いで、ジェネレーターではなくバッテリー駆動のレーザーブレードはただの棒切れと化していた。

足をじたばたと動かすが、ただ自分の首にかかる負荷が増すだけだった。

鬱血して狭くなる視界の隅に、こちらに向かつて銃を構えながら駆けてくる100式の姿が見える。

だが、M4に100式に助けてもらおう気などさらさらなかった。

(まだ……まだ、私は怒り足りない！憎み足りない！)

ぶん、と左腕を振る。腰に巻いていたジャケットの腕部分、丁度結び目となっているところに触れる。

(こんなもんじゃない、まだ私は！)

思い切り腕を振り上げる。左手に握っていたのはもう一振りのレーザーブレード。

M4の首を持ち上げていた左腕を切断されたFALは、それでも表情一つ変えずに1歩、2歩と下がる。

「隊長、大丈夫ですか!?!」

100式がM4とFALの間^{ジャム}にたち、何発か射撃。

FALの姿からもとのポンチヨ姿へと戻ったジャムは、そのまま消えていった。

「けほっ……大丈夫」

「その手……！早く冷やさない」と

「まだ！」

M4はレーザーブレードを取り落とし、拾い直してからミサイルタレットに向けて投擲する。

基部に真つ直ぐ刺さったそれは、一撃でタレットを破壊する。基部から黒煙を上げるタレットは、おそらく稼働不可能になった。ミサイル自体は無事なので、持ち帰って研究もできるだろう。

「こちらアヴェンジャー。敵ミサイルタレットを破壊」

雪風からの返答はなかった。基地に侵入してから68秒ほどかかってしまった。雪風は大丈夫だろうか。

「隊長、隊長！」

「そんな泣きそうな顔しないでください」

情けない顔をしながら駆け寄ってくる100式。いつも首に巻いているマフラーをほどいて、近くの水道で浸してからM4の掌に巻き付ける。

レーザーブレードは指向性を持つ高エネルギー塊である。水圧カッターのように一

方向にエネルギーを放出することで切断を可能としている。その基部がジョイントで装着する方式になっているのは、基部が200℃に近い高温になるからだ。

そんな代物をグローブ越しに、発振自体は数秒とはいえ素手で掴んでいたM4の左腕は、もはや火傷深度云々ではなく溶け落ちそうなほどにぐずぐずになっていた。

「状況は？」

「大丈夫です、基地は制圧しました。あとはいくつかの爆弾をセットして離脱、爆破するだけです」

「わかりました。撤退の用意をしましょう」

M4は作戦目標の達成を宣言、連合部隊は撤退行動に入る。

「さて、どうしたもんかしらね」

鉄血のデータセンター近くの高台、目標建造物を見下ろすそこに陣取っていたのはFALたち特殊部隊コマンドユニットA。

戦力としては十二分に足りるものの、目的のデータがどこにあるのか、サーバーへアクセスするためのハブの場所などが全く不明な以上、力押しはできない。

「なあ、スローネ^{隊長}。考えたんだが」

胡座を書いて不機嫌そうに水筒を持つモーターコブラがふと思いついたようにFA

しを見る。

「やっぱりシンプルに電力を追えばいいんじゃないのか」

「リスクが大きいわね。それまでに見つかる可能性を考えると……」

サーバーは電力を食うので、その建物全体の電力の流れを追うのはままあることだ。

だが、迷路のような電力グリッドを監視警戒網をかくぐつて追うのは並大抵のハッキング能力では無理だ。

特A級でも難しいとされる神業でもある。

噂によると、こういった独立マトリックスネットワークグリッドにダイヴしてそういった高度電子構造体にハッキングを仕掛けて生きて帰ってきたのは2人しか居ないらしい。

しかも、その2人もダイヴ中は脳波フラットラインが停止したらしいが。

「じゃあ、やっぱりあたしが潜入しようか?」

「それも同じ」

特殊作戦仕様のVectorは高度な改造カスタムを行っており、サブレッツサーや各種ステータスが隠密・潜入向けになっている。

だが、これも先程の話と同じだ。マトリックス上か現実化だけの違いである。リスクが大きすぎる。

「そうなるよ、やはり正面から司令室を経由して情報を見てから行くというセオリー通

りになるのでは？」

「サーバーをシャットダウンされたら元も子もないし……」

G36Cの提言も最初は選択肢にあつたのだが、サーバーを見つけるまでに時間がつかればかかるほどシャットダウンされる早さは比例して早くなる。

その手段は取れなかった。

「じゃあ、遠隔ハックはどうでしょう？」

「だめね。あの独立回線、恐ろしいことに有線でしかアクセスできないみたい。春燕チュンヤンからの情報だけど、通常回線用のサーバー以外に電波が飛んでないらしいわ。つまり、直接ジャックするしか情報は抜けない」

ACRの新鋭戦術人形らしい発言も、やはり今回のパターンでは無理筋だ。

「そうなるよ、敵のサーバーはそのままに戦力だけを破壊するEMPなんかがあればいいんですが」

左手を吊ったホワイト・グリントが楽観的に述べる。痛み止めが効いているのか、やけにぼわぼわしている。

「そんな便利なものがあるわけ……」

そこでFALはふとある事実に気づく。

「そういえば、あなた達の装備って電波とか通信をジャミングできるのよね？」

「はい〜」

「あれ、なんかこう……ばあーって放出できたりしないの？バルバロイのよりもっと広範囲に、薄く」

我ながら変なことを言っているな、と自覚しながらFALはホワイト・グリントに聞く。

すると、いきなりしやきつとしたホワイト・グリントは真面目に考え込む。

「AAの応用なら……出力を絞って、より広範囲に、より薄く……？」

ぶつぶつとホワイト・グリントは顎に手を当てて考え込む。

「でも、ネットワークを破壊せずに敵の電腦のみを破壊するには……」

「なあ、こんなのはどうか？」

モーターコブラがホワイト・グリントに耳打ちをする。

そこから、あれよあれよという間にホワイト・グリントは作戦の準備を進めていく。

高台の前にホワイト・グリント、後ろの方にモーターコブラ。さらにその後ろに残りのメンバー。

「いきます」

そう言うのと、ホワイト・グリントは吊っていた左腕を下げ、淡い光に包まれる。

次の瞬間には、ホワイト・グリントは美少女から白い流線型を象ったバトルギアを

纏った姿に変身していた。

青白く輝く複眼、ブレードアンテナが一角獣ユニコーンのように前に突き出ている。

胸の部分のコアは僅かにくすんだ白、背中には巨大な翼の様なブースターユニット。

スマートながらきちんと肉の詰まったようなどっしりとした安定感を与える二脚は、いくつかのスタビライザーが速度を感じさせる。

「か、か……」

「かつこいい!!」

「やっぱ人気でるよ。かつけえ」

そんな部隊員の声を他所に、ホワイト・グリントは告げる。

〈準備はいいですか〉

「あたぼうよ」

そう返したモーターコブラをちらりと見て、ホワイト・グリントはOBを吹かして翔ぶ。

基地の防空システムがホワイト・グリントを捉える。

わらわらと迎撃に出てくる鉄血たち。

そんな中、ホワイト・グリントはデータセンター屋上へと降り立つ。

四肢を僅かに広げる。

すると、遠目でもわかる変化がホワイト・グリントに起こった。

コア、脚、腕に位置するいくつかの六角形のパーツがせり出す。

「来るぞ、衝撃に備えろ」

そう言うのとモーターコブラのジェネレーターが唸りを上げて粒子を放出し始める。

粒子は整波装置の作り出す斥力場によって前面に展開される。

次の瞬間、ホワイト・グリントの複眼のシャッターが閉じられる。

祈るように。

未だ彼女が導き出せずにいる、答えのために。

最初に音はなかった。ホワイト・グリントを中心に、衝撃波が広がっていく。びりび

り、とモーターコブラの作るプライマル・シールドが震える。

一拍遅れて膨大な空気の振動、轟音がシールドを叩く。

1波目の衝撃波は、僅かに粒子を含んで同心球状にデータセンターを包み込んだ。

更に、ホワイト・グリントはきゅつとそのマニキュレーターを握る。同時にさらに六

角形のパーツが一旦伸びきり、今度はぎゅうつと縮む。

その動作に合わせて、同心球の巨大なプライマル・アーマーはその大きさを小さくし

ていく。

そして、ホワイト・グリントを中心にくるくると回転を始める。

回転はどんどん加速していき、だんだんと発光を始める。

さながら星の創生のごとき光景だった。

遠心力によりやや潰れた楕円形に変わった球は、ホワイト・グリントによる制御が消失すると同時に遠心力に従って霧散していく。

「やるこゝとが派手だねえ」

モーターコブラが呟く。

粒子は小さく電子的な性質を示す一方で、その粒子が安定的に還流することでプライマル・アーマーとなる。しかし、ホワイト・グリントは安定的な還流ではなく、斥力場によって影響下——粒子の対流する円周上の電脳に対する破壊的妨害を仕掛けた。

これも、AMS適性は低いものの並外れた経験値を持つホワイト・グリントが戦場で学習したテクニクだ。

この技術は長らく戦場に身を置いていた経験故であり、これによって、サイレント・アバランチ、バースト、あるいはシャミア、戦場ではスフィアと言ったプライマル・アーマーに対する特別な影響を及ぼすものがある戦いでは、ホワイト・グリントはめっぽう強かった。

「よし、各自データセンターに突入。誰でもいいからジャックインして、データを抜き出しなさい。ターゲットはブリーフィングで話した通り。データを抜いたら特殊戦機に

連絡すること。ゴー！」

部隊員たちは散り散りにデータセンターへ向けて突撃していく。

ホワイト・グリントはもう一度飛び、今度は上空からの援護射撃を開始する。

対ネクスト戦力のないデータセンターの部隊では、ホワイト・グリントに対抗する手段はなかった。

そのまま各所が制圧されていき、サーバーにたどり着いたFALによつて作戦の完了が宣言された。

「列車とバルバロイに比べれば、至極簡単なフェーズだったな」

「良く言いますよ、あなた何もしてないでしょうに」

時間は前後する。

M4からミサイルタレット破壊完了の報を受けた雪風は、グレイシルフとの戦闘状態に入っていた。

この2分、グレイシルフは睨み合いを続けるだけで攻撃照準レーダーも感知はなかった。

アーマメント・コントローラーはオンライン。マスターアームも火が入っている。

深井零は不気味には思わなかった。ジャムとはそういう存在だ。

だが、不思議ではあった。ジャムがここまで見に徹することは未だかつてなかったことだ。

だが、それもM4からの通信が来たのと同時に状況が一変するまでだった。

雪風のメインディスプレイにアラート。攻撃照準レーダー波を検知。

グレイシルフが増速する。

作戦完了の報は零にもとどいていない。

この空域にこだわる必要は無い。零はそう思った。だが、雪風はそうは思っていないようだった。

雪風は零にしきりにオートマニユーバ・スイッチをオンにするかドグファイト・スイッチをオンにせよ、と迫る。

零は一旦仕切り直すため、距離をとることにした。

雪風は対地水平姿勢を維持したまま上昇。高度限界近くまで上がり、20kmほど行ったところで反転。

ジャムはまだ様子見をしているのか、撃つては来ない。

零は搭載している6発の中距離高速ミサイルを発射。

グレイシルフ、ミサイル迎撃ミサイルを発射。

同時に、機首をこちらに向けたまま螺旋を描き、高度を上げる。

シルフにあんな機動はできない。シルフのエンジンノズルは2次元形状で可動するが、エアインテークは非可動だ。

あの機動では、吸気が上手くいかずエンジンが破壊されてしまう。グレイシルフはシルフのコピーだと思っていたが、そうではない。

零はそう感じた。

あれは、決して雪風のコピーではない。なにか、もつと大きな謎の存在の一部分だ。

機銃弾を機体を滑らしながらかわす。バレルロール。

グレイシルフと斜めに交錯する。

突然、グレイシルフはエアブレーキを開いて急減速。そのまま機首を落とし、急降下。

「この機動は……」

零には覚えがある。かつてオドンネル大尉の乗るフーンIIとの格闘戦の際に雪風が実行した機動だ。

雪風、旋回してグレイシルフを追う体勢。だが、グレイシルフは消えていた。

正確に言えば、零の目には捉えられない状態になっていた。しかし、フェアリー空軍、ジャムを捉えることに全てを捧げてきた軍隊に所属する雪風にとって、それは全く障害とはなりえなかった。

”凍った目”と呼ばれる空気の動きを感知する空間受動レーダーが、MTI上にはつきりとその姿を捉えていた。

グレイシルフはその場で反転宙返りからバレルロール、ポスト・ストール・マニユーバを実行。こちらに正対し斜め下から突っ込んでこようとしている。

雪風、最大 アングル・オフ・アタック A O A、ガンサイト・オープン。上昇に移る直前のグレイシルフをロックオン。ファイア。射程ぎりぎりだったが数発がヒット。しかし、撃墜には至らない。

グレイシルフは高度を上げずそのまま大推力で雪風下方を通過。零、機首を下げ順面のまま逆宙返り。レッドアウトするが、半径を緩めない。

感覚でグレイシルフの後ろだと思ったタイミングで操縦桿から力を抜く。

視界がすつと元に戻っていく。すると、目の前に反転上昇しようとするグレイシルフが見えた。

距離1000m。

零は自分の感覚もまだ捨てたものでは無い、と思った。

ロックオン。短距離高速ミサイル、2発を発射する。

ミサイルが迫る。途端、グレイシルフはまたしてもありえない機動を見せた。

くん、と機首を瞬時にこちらに向け猛ダッシュしてくる。

エアブレーキやカナードの配置上、シルフにあんな機動は不可能だ。

おれに、雪風にミサイルを当ててる気なのだ。

零はほとんど無意識に、ミサイルに自爆するようキルスイッチを押す。

雪風の戦術コンピュータも同様に、短距離ミサイルの威力であればグレイシルフに致命傷を与えられると演算した上で零の命令をミサイルに伝える。

だが、ミサイルの方が速かった。

ミサイルのシーカーがグレイシルフの熱源に対して殺傷可能半径に捉えたことを確認、炸裂。

グレイシルフは焰を上げて堕ちていく。

雪風にも数発の破片が飛んでくる。幸い、グレイシルフとの初遭遇時ほどのダメージはなかった。

「Complete Mission. RTB」

零は無感情にそう言った。

その日、グリフィン第13旅団旗艦ヒューベリオンはとある通信文を受信した。

その通信文は、同時にグリフィン本部、正規軍作戦司令部、各企業にも同時に発信さ

れた。

鉄血工廠の首魁、エルダーブレインの宣言である。

「ごきげんよう、世界の諸君。この度鉄血は、G & Kの戦術指揮官の率いる部隊に対して
宣戦布告する。」

同時に、提携関係にある各企業と共に、BFF、レイレナード、そしてラインアーク
に対し、我々の当初の目的に関わらず諸君らを排除する。

従つて、S09地区グリフィン第13旅団基地に対する攻撃を実行する。

その後、ラインアーク・BFF本社“クイーンズランス”、レイレナード本社“エグ
ザウイル”にも順次攻勢を仕掛けるであろう。猶予は1週間。

逃げたいものは逃げるがいい。我々の目的はただ1人。

我々鉄血は、ヤン・ウエンリーの抹殺をここに宣言する」

その電文を読み上げたカリーナは、おそろおそろ電文からヤンへと視線を移す。
当のヤンはだらしなく指揮卓の上に足を組み、ベレー帽を顔に乘せていた。

「て、提督さま……」

「こいつは困ったことになったね」

あつけらかんと言うヤンに、カリーナは食つてかかる。

「どうするんですか!?このままじゃ、私たち……」

ベレー帽を取ってカリーナに目だけ向け、ヤンは言う。

「確かに大事だが、今更慌てたって意味が無い。落ち着きなさい」

そう言うのとヤンは、カリーナにコンソールにつくよう指示する。

カリーナがコンソールにつくと同時に、10通を越す通信が届いた。

ヤンはそれを全部モニターに表示させる。

さすがにヘリアンやグリフィン本部のお偉方の前、ということでヤンは姿勢を正す。

〈ヤン指揮官、今回の件はどうするつもりかな〉

最初に口を開いたのはグリフィンのトップ、クルーガーだ。

「我々としては、各基地の防衛を行うために、旅団の通常偵察に出している全ての特殊戦機・戦術人形を集めるつもりです。

全ての指揮管制はこのヒューベリオンで私が直接行います」

〈増援部隊は必要か〉

厳しい顔をするクルーガー。

さすがに厳しい現状に、今までヤンのことを野放しにしてきたクルーガーも手を打たざるを得ないと考えたのだろう。

「いえ、必要ありません」

〈本当かね〉

「はい。我々には十分な戦力と、そして逆攻勢に出るだけの余力は残っています」
〈であれば私から言うことは無い。ヤン提督、結果の報告を待っている〉

それだけ言うとかルーガーは視線を落とす。どうやら仕事のさなかのようだ。

その次に口を開いたのは、ラインアークのトップ、ブロック・セラノ氏だ。

〈我々としては、既に鉄血側から宣戦布告がなされた以上、あなたがたを売るといふ選択肢はありません。彼女たちはやるといったらやりますからね。

我らの最高戦力” ホワイト・グリント” も出払っている以上、あなたがたに防衛をお願いする他ありません〉

当然である。他2社は独自のネクスト戦力を保有している。レイレナードは最高峰のネクスト部隊、ランクー・ベルリオーズをはじめとするランカー。

BFFは今回の通信にも顔を出している” 女帝” メアリー・シェリー、王小龍といった上位ランク持ちが顔を揃えている。

しかし、コロニー・ラインアークは保有する唯一の戦力がホワイト・グリントなのだ。そのホワイト・グリントがグリフィンと契約している今、ラインアークはグリフィンに防衛を依頼するしか道はなかった。

「もちろん、こちらから戦力の供給を約束します」

そう飄々と話すヤン。彼の過去を知るもの、シェーンコップやアッテンボローなどが

見れば、堂々とした話し方にびっくりしたかもしれない。

レイレナード・BFFの両トップも同じく協力体制を組むことで合意した。

「我々が鉄血の大攻勢を防ぎ切るのは簡単です。ですが、それには万全の体制と言うものがが必要です」

〈万全の体制？〉

ヘリアンが聞き返す。

「はい。つまり、我々第13旅団が何者の束縛も受けず自由に行動できること。そして、とある戦術の使用許可です」

〈とうとうと〉

「現状、鉄血だけを叩いてもこの戦いは終わりません。鉄血の裏にいるGA、ローゼンタールを叩かなければ、我々はずっと驚異に晒され続ける」

〈確かにそうだ。彼奴らめ、厚顔無恥にも戦場でノーマル相手に粹がっている〉

メアリー・シエリーが憎々しげに呟く。

「そして、ジャムやELIDの問題もある。この問題に時間はかけられません」

〈つまりどうしたいのかね〉

「逆攻勢に出ると同時に、ローゼンタール・オーメルに対して宣戦布告し、同時に我々の持つネクスト戦力と航空戦力のすべてをあげてローゼンタール・オーメル・GAに対す

る同時攻撃を仕掛けます」

場が騒然とする。

〈そんなことを許すはずがないだろう〉

ヘリアンが直ぐに顔を取り繕って返す。

その上司であるクルーガーは、書類から目を上げてヤンを見る。

〈なるほど。それ故の”何者の束縛も受けない行動の権利”か〉

つまるところ、ヤンの戦略とは第13旅団それ自体が自由に行動できてはじめて成り立つものなのだ。

いわば、帝国の”ラグナロック神々の黄昏” 作戦に際して同盟軍元帥になり自由裁量権を与えられ

た時のように。

〈よからう。ヤン提督、我々グリフィン&クルーガー社から貴特殊検索群を我が社の部隊から切り離す〉

〈ばかな、そんなことが出来るはずが〉

〈ふむ。できるのだよ。クビ、ということだ。君らの部隊は我が社に対し不利益を被る可能性を持っている。それは貴部隊に所属する戦術人形を含む人員すべてだ。

それはラインアーク・レイレナード・BFFに対しても、戦力の提供はするが連合は組まないということになる〉

「はいまや我々の最高戦力の彼らを切り離すことがどれだけの」

「だが、我が社は鉄血から宣戦布告を受けた訳では無い。受けたのは『第13旅団』、ラインアーク・レイレナード・BFFだ。」

「GA、ローゼンタール・オーメルの後ろ盾を得た鉄血に対抗するのは愚策だろう」
「ヘリアンとクルーガーの言い合いは続く。」

「従って、私は社の存続を考えて彼らを切り離すことにしたわけだ。」

「ヤン・ウエンリー、これからも我がG&Kの戦力を買ってくれたまえよ」

「感謝します」

「では、ヤン提督。我々と共に来い。データを見る限り、貴様の戦術は我々と相性がいい」

「そう切り出したのは『女帝』メアリー・シエリー。」

「ホワイト・グリントも使う、精度と信頼性重視の兵器を製造する企業だ。」

「せっかくだですが、我々はクビになったとはいえ既に基地を保有しております。軽々しく移動はできません。」

「そちらがこちらの基地にいらっしやるのであれば歓迎はしますが」

「それもよからう。我らのノーマルやネクストをそちらに送らせていただく」
次に口を開いたのはレイレナードの代理人だ。

「我が社のモーターコブラもそちらにいる上、あのアブ・マーシユの傑作もいとなれば文句はない。我社のネクスト戦力も貴部隊に貸しだそう」

「感謝します」

そこから先はトントン拍子に話が進んだ。

またしてもカリリーナが雑務に追われていたが、珍しくもヤンがその矢面に立つて先導した。

その日のうちに、ヤン・ウエンリーは第13旅団の対鉄血作戦プランを練り上げ、各方面へと通達した。

クリアランス・コード認証。貴方をグリフィン関係者だと確認しました。ようこそ、第13旅団戦術データベースへ。

アクセス承認。当該戦術人形のデータを表示。

万が一、戦術人形のスペックなどに興味が無い場合、スキップしてください。

No. 010

NAME: 1000式 (Type 1000)

Call sign: Sakura (4)

極東地区司令部第二陸戦隊最前任SMG↓STB特殊分遣隊要員

Weapons Specification:

一〇〇式機関短銃

日本

設計・製造：陸軍技術本部・中央工業・名古屋造兵廠鳥居松製造所

短機関銃：

口径：8mm

銃身長：230mm

ライフルング：6条右転

使用弾薬：8mm南部弾

装弾数：30発（湾曲箱形弾倉）

作動方式：オープンボルト、シンプルブローバック方式

全長：872mm

重量：4270g

発射速度：700〜800発／分

銃口初速：334m／秒

有効射程：150 m

Doll's Specification:

CQB戦：B+

近接格闘術：B+

射撃：B+

体力：B

機動：B+

爆薬取扱：B-

編成拡大：済(3-Link)

医療：B+(野戦式)

諜報：B

研究開発：C

一〇〇式機関短銃。

第5世代前期型の比較的古い戦術人形。東部戦線にて前衛戦術人形の中の最先任として活躍していたところを引き抜かれ、少尉に昇格。第二次大戦期大日本帝国陸軍の銃火器であるため、ややステータスは低いものの補って余りある精神力とスキルを併せ持つ。Lv60。

やや天然気味の電脳で、部隊の中でも癒し系・小動物系の属性を持っているが、戦場では人が変わったように戦う。

味方が傷つくことを極端に恐れており、ややサバイバルズギルト気味。

電源：第5世代型戦術人形用固体高分子燃料電池・イ号改

駆動骨格：第5世代型SMG戦術人形用駆動骨格・甲

FCS：IZUNA|KAI Ver. 3

センサー：第5世代型デュアルカメラアイa（ワインレッド）、第5世代型聴音セン

サー、第5世代型嗅覚センサー、第5世代型味覚センサー、第5世代型触覚センサー

電脳：???
??電脳

生体パーツ：消化器系・循環器系・生殖系

通常武装：本体（30発湾曲箱型弾倉）

Skills：

桜逆像
スクラ・リフレクション

5秒間、自身に最大42ダメージを吸収するシールドを展開する。

なお、効果時間中にシールドが破壊された場合、

破壊されてからの5秒間、自身の回避を65%上昇させる。

破壊されなかった場合には、シールドの効果時間は終了してからの5秒間、自身の火

力を85%上昇させる。

100式の前線保持能力を支える根幹のスキル。ダメージ吸収シールドよりは、その副次効果である回避出力or火力上昇がメインとなっている。

このスキルにより、100式は極東戦線での知名度を飛躍的に伸ばした。戦場を席卷する桜色の吹雪。

St. 9 ブリーフィング

ヤン・ウエンリー率いる第13旅団は正式にグリフィン&クルーガーを離れ、独立武装集団としてグリフィンと改めて提携関係を結んだ。

「やれやれ、これじゃあまた愚連隊じゃないか」

などとぼやくヤンであったが、兼ねてよりヤンを知る面々は比較的嬉しそうな表情の色合いを隠そうとはしなかった。

エルダーブレインが宣言した1週間の期限に際して、第13旅団各基地は防衛体制を構築して行つた。

そのさまは、さながら祭りのような熱気に満ちていた。

ヤンを差し出すようなものは一人もいない。皆、「ヤン・ウエンリーなら」と防衛設備の点検・増設や備蓄、補給体制を整えていく。

無理もない。今までで最大の激突である上に、全ての部隊をヤン・ウエンリーが直轄で指揮をするのだ。負けるはずがない、鉄血を我らの資源に加えてやろうという陶醉にも似たお祭り騒ぎをはじめていた。

それは、1部の陽気な戦術人形にとどまらない。

堅物なものや冗談を好まないものでさえ、進んでこのお祭りを盛り上げてやろうとしているようだった。

6 大基地にもいくばくかの変化があった。

各基地に、ヤン・ウエンリーのお墨付きの基地司令が配属されたのだ。

シヴァ基地司令エドウイン・フィッツシャー中将

ガンダルヴァ基地司令フォードル・パトリチエフ中将

テイアマト基地司令アレクサンドル・ビュコック元帥

ランテマリオ基地司令チュン・ウー・チエン中将

エル・ファシル基地司令ドワイト・グリーンヒル大將

バーミリオン基地司令ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ上級大將

以上である。

また、近接陸戦部隊”薔薇の騎士”ローゼンリッター連隊が正式に旗艦ヒューベリオン直属となった。

各基地は司令の指揮の元、防衛体制を築いている。

加えて、各基地同士の連絡交通網もより高速化が図られた。

今まで、隣同士の基地であれば2時間とかからなかったものが、各対角線でも結ばれるようになる。

これは、防衛戦力を無駄にしないための措置である。

各基地における航空戦力・戦術人形の戦力差はほぼない。

だが、ネクスト戦力は大きな偏りがある。ホワイト・グリントとモーターコブラはヒューベリオン直属であり、レイレナードのネクスト部隊は本社を守る戦力と割かねばならないため、決して多くはなかった。モーターコブラとホワイト・グリントに言わせれば、「まあ妥当」という二機のネクスト。

強大なる月光を振るう”オルレア”アンジエと、戦力としては頼りないものの成長性は未知数の”スプリットムーン”真改である。

一方、BFFからはそこそこ豊富な戦力が提供されている。というのも、BFF本社は”クインズランス”は多数の護衛艦を従える巨大な船なのである。

そのため、比較的ネクスト戦力は地上に多く配備される。アンシールを残し、”女帝”こと”プロメシユース”メアリー・シエリー、”ストリクス・クアドロ”王小龍、前後衛常に2人1組で戦うウォルコット姉弟。

さらに、BFF・レイレナードと提携しているインテリオル・ユニオンから豊富な戦力が提供された。

”クリティーク”シエリング、

”シリエジオ”霞スミカ、

”レ・ザネ・フォル”ステイレット、

”ブルー・ネクスト”セーラ・アンジェリック・スメラギ、
”ヴェローノーク”エイ・プールの5機である。

これにホワイト・グリントとモーターコブラを加え、第13旅団が保有するネクスト戦力は一時的ではあるが12機となった。(ウォルコット姉弟を1機と数える)

ヒューベリオンに2機、各基地にそれぞれ最低1機が配備される。トップランカーやオリジナルは単騎、低ランクは2機で配備されることになる。

航空戦力である特殊戦機はエル・ファシル基地の特殊戦司令部が稼働させるため、本拠をヒューベリオンではなくエル・ファシルとする。

全13機のスーパーシルフはエル・ファシルからそれぞれ2機のエレメントで各戦線の戦術偵察や情報収集に出る。

雪風のみがヒューベリオンに発着艦する。

各基地に駐屯する戦術人形部隊には提携企業からこれ幸いと実地試験を兼ねた試験兵装や内装などが提供された。

その最たる例は、”妖精”と呼ばれる統合型戦略・戦術・戦闘支援システムである。

ネクストの最先端を行くレイレナードとIOP社16Labにより製造された、コマ技術というネクストの動力と同じ技術を使用して製造された支援システムだ。

妖精は大別して戦闘妖精、戦略妖精にわかれる。

戦略妖精は戦場における大規模作戦支援を行う。

部隊単位に火力や防御力の上昇など様々な全体効果を与える。

戦闘妖精は戦術人形と同じように戦線に出て支援を行う戦術人形である。

その中でも、ヤンが最も重きを置いて製造させ全部隊に配備させたのが電磁妖精である。

電磁妖精は、庇護下の部隊員に対して簡易的なプライマル・アーマーを張る妖精だ。このプライマル・アーマーは、フォースシールドとプライマル・アーマーの長所を取ったものだ。

フォースシールドはいわば電力を消費して力学的エネルギーを吸収・相殺するものだ。臨界までの許容量はジェネレーターに依存し、かつ戦術人形クラスジェネレーターであれば単方向のみに一時的にしかシールドを張ることは出来ない。

一方のプライマル・アーマーは理想的な受動防衛システムではあるが、運用における唯一にして最大の障害がコジマ粒子という汚染物質の存在である。

そこで、ヤン・ウエンリーはオペレーション・カノーパスにおけるホワイト・グリントやバルバロイと同戦域にいた戦術人形たちのデータを元に、汚染を最小限に抑えられた濃度でプライマル・アーマーを作れないかを検討した。

結果、戦術人形自身にコジマジネレーターを搭載することが不可能であること、最低

限の出力であれば1度の戦闘時に300秒未満であれば致命的な汚染の前に無毒化できることが判明した。

この妖精と呼ばれる技術はグリフィンでは未完成であった。

しかし、なぜかヤンは設計図を所持していた。

のらりくらりと追及をかわしながらヤンは配備を急がせたのだ。

「さあ、準備は整った」

ヤン・ウエンリーは粛々と話す。

「私は、鉄血工廠による支配というものを認めない。それは、あの頃から変わらない私の立派な信念」というやつだ」

ヒューベリオンの会議室でヤン・ウエンリーは紅茶を片手に周りを見渡す。

卓についているのは将官。各基地司令、シエーンコップ。

「なに、今度こそ私は君の力になれるのだから。奮起しようというもの」

ドワイト・グリーンヒル大将がヤンを見る。

かつて自由惑星同盟のクォーターに担ぎ出され、結果的にではあるがヤンを苦しめることになってしまった彼は、今はヤンの横で微笑んでいる。

「なに、わしもまた貴官と戦えて光栄に思つとるよ。貴官の壮麗な戦略、見せてもらおうじゃないか。なあ、”魔術師”」

ニヤリと笑うのは叩き上げの同盟軍宇宙艦隊司令長官アレクサンドル・ビュコック元帥。

「今回は生きた航海図ではなく、一介の部下として戦う所存です」

「今度こそ提督をお守りしますよ」

ヤン艦隊の足として欠かせなかつたフィツシャー中将与パトリチエフ中將もヤンを再び見てその変わらなさを満喫しているようだ。

「私としては、また戦えるのが光栄でもありあの別れ際からまた顔を突き合わせているのが気恥ずかしくもありませんが」

とハムサンドを取り出してかぶりつくのはチュン・ウー・チエン中將。毎度毎度どこから取り出しているのか。

「またこの名前のフネに乗ったあなたと戦えるのは幸せです」

とだけ言って口を閉じたメルカツツ上級大將だが、その顔は綻んでいる。

メルカツツ提督はヤンの死後に座乗艦であつたヒューベリオンを引き継いで戦い、最期にはヒューベリオンと共に宇宙に散つた。

「ヤン・ウエンリー提督は、勝算のない戦いはなさいません」……フン、ユリアンもさすがにわかっている。提督、我々”薔薇の騎士”の出番はありますかな」

ヤンの養子ユリアンの言葉を引用したシェーンコップは腕を組みながら閉じた目を

片方だけ開けてヤンをちらりと見る。

「もちろん、陸戦となれば君たちの戦力は必要不可欠だ。用兵に関しても、ね。君たちは切り札としてこのヒューベリオンに乗ってもらおう。だが、貴官にしては珍しく、なにか控えめな様子だが」

「なに、気になっただけです」

「なにかね」

「提督、今まであなたは自由惑星同盟、ひいては民主共和制のために戦ってきた。こいつは変えようのない事実だ」

「事実と真実は違うがね」

「そのあなたが、いまは政治体制のためでなく、軍人ですらないのに戦っている」
「もちろん戦いたくて戦ってるわけじゃない」

「では、なんのために？」

「それは」

そこまで言ったところでヤンは珍しく言い淀む。

一度口を閉じたヤンにシェーンコップはさらに舌鋒を浴びせる。

「まさか、彼女たち戦術人形に情が移ったなどとは言いますまい」

「ちよつと貴方」

あまりの言い草に、今までずっと黙り込んでいたFALが机を叩く。

「私はFAL。今のヤン提督の直属の部下よ。」

光輝栄えある薔薇の騎士連隊の連隊長サマは何か勘違いしてらっしやるようだけれど、ひとつ言わせてもらおうわ」

怒っている。あのFALが。

額に青筋を立て、握りしめた拳は震えている。

「貴方のような軍人とヤン提督は違うのよ。戦うことに理由を求めるのはおかしいわ」

「ほう？ヤン提督のような人間にこそ戦う理由が必要では無いのかな、お嬢さん^{フロイライン}」

「はあ、あなた達は……といつても、主に貴方でしょうけど、提督とずっと一緒に戦ったのに、何も提督のことをわかっていないのね。」

ヤン提督はね、嘘つきなのよ」

場が静まり返る。呆気にと取られているのだ。

メルカツツやビュコックでさえも目を丸くしてFALを見る。

「おいおい、それはちと言いきすぎじゃないのかね」

「貴方は黙ってなさい」

反論を一蹴されちびちびと紅茶を飲むヤン。

「あなた達、本気でヤン・ウエンリーという個人が自由惑星同盟、いや、自由民主共和制

の全て、殺してきた敵、殺してきた味方の遺族の思いを背負ってきたとも思っているの？

そんなの、どんな人間にだってできやしない。

それは、断言してもいいわ、皇帝ラインハルト・フォン・ローエングラムにだって不可能よ」

FALは叩きつけた拳を少しだけ緩めて、その隻眼でぐるりと見回す。

「ヤン・ウエンリーはただのちっぽけな人間に過ぎない。あなた達は、そのヤン・ウエンリーの不敗神話と状況しか見なかった。ヤン・ウエンリーに戦う理由なんていらぬのよ。だってこの人は、ただ戦術を立てるのが上手いだけの、へっぽこ歴史学者志望なんだから」

それは、かつてFALがヤンに放った言葉の真意だった。

” 「矛盾に目をつぶることはいい。でも、あなた、嘘をつくのは目をつぶるより悪質よ」 ”

ヤン・ウエンリーはたまたま宇宙暦796年から800年の自由惑星同盟にいただけの、1人の人間だ。

生活能力は皆無、運動はできず、歴史と戦術が好きなだけのずぼらでへっぽこな冴えない男。

それが、同盟軍最後の智将だの、民主共和制最後の砦だの、不敗の魔術師だのという周囲の状況に惑わされていた。

シエーンコップやキャゼルヌでさえもその例に漏れない。例外はたったふたり、ユリアン・ミンツとフレデリカ・グリーンヒル・ヤンのみが、ヤンの本質を見抜いていたと言える。

例えば、シエーンコップであればヤン・ウエンリーに対していくらかの分析をしていた。

信念だとか退役だとかそんな話をしてはいたが、それはあくまでその時点における状況の中にいるヤンの返答である。

つまるところ、ヤン・ウエンリーとは戦術の天才でありつつも一介の歴史学者の側面の方が強かったのだ。

だからこそ、専制政治よりも民主共和制のために戦ったのだ。

状況に流されるままに戦っていたヤン・ウエンリーだが、その本質は覇を好む勇士ではなく、自身の論理に従う学徒であっただけのことだ。

言ってしまうえば、「もしこういうことになったら、自分ならこうする」を実行してきただけなのだ。

「ヤン・ウエンリー提督が何者にも縛られない状況で選択したことを教えてあげましょ

う。

このへっぽこはね、退屈してるのよ。なにせ、歴史資料が何も無いし、国家体制だって崩壊したこの世界では、この人が興味を持つようなことなんて何も無いのよ。だから、この人はいま、歴史を作ってるの」

そんなつもりはない、と反論しようとしたヤンだったがFALの視線に射すくめられる。

「私たちは戦術人形。あなたたち人間とは違う、ただの兵器よ。壊れても替えがきく。そんな私たちを使って、この人は歴史の目撃者になろうとしている。あまつさえ、この頭脳ゲームを楽しんでいるのよ。そんな気配がなかったとは言わせないわよ」

「確かに、提督は論文のようなものを執筆していましたな。まるで、自分がその歴史の中に居ないかのようにローエングラム王朝のことを分析して」

フィツシャー中將がそんなことを呟く。

ヤン・ウエンリーは戦いに関してはどうんざりしていたが、その実戦術や戦略を考えていたのであり、また歴史を目の当たりにできることを自覚はしていなかったが楽しんでいた節があった。

「当然よね、人命はかかっていない。罪悪感を持つ方がおかしい。だから、この戦いに理由建前なんて必要ないの。ゲームを遊ぶのに、感情移入をすることはあっても、罪悪感を

持つ必要なんてないもの」

最後にFALはすうつと息を吸い、声を張り上げた。

「自分でもわからないほどに嘘を重ねて、この人は、この人はね、1人で星を見あげたのよ。あなたがそんな意地汚い質問なんかをしてる間に、提督はずつと戦ってたのよ。

何が戦う理由よ、そんなもの必要ないでしょう？

もうこの人は戦う理由なんか縛られないでいいの。

このゲームを、ただ楽しんで戦う。それだけでいいの。

もう責任とか政治とかなんてどうでもいいのよ。

ここは別の世界なの。未だに前の世界の理屈なんか持ち込んでもらっちゃ、こつちが困るのよ」

そう一息に言うとFALは退室しようと立ち上がる。

「待ちなさい」

「何？」

引き止めてきたヤンを睨むFAL。

「まさかとは思いますが、そこまで私をこきおろしておいて立ち去ろうと言うのではあるまいね」

鋭い目つきを全く意に介さずヤンはにっこりと笑っていた。

FALにしては本当に珍しく、「ひっ」と引きつった顔で声を上げた。

「随分好き勝手言ってくれたね。君のおかげで私がどれだけ始末書を書いていると思っ
ているのかな」

そこからヤンの舌鋒はどんな銃弾よりも鋭くFALを撃ち抜き続けた。具体的に
えば、ウンザリした面々が早々に部屋を出てから30分は続いた。

「あのお嬢さんフロイライン、なかなか鋭いな」

「でしょう？まあ、あれは流石に言い過ぎだと思いましたが」

猫元帥を小脇に抱えたカーリーナが、会議室の外で幹部たちと会話している。

「それはそうと、作戦はどうするのかね。まさか、あのスプーンだかナイフだかみたい
な名前のヤツみたいに”高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に”とは言えないな」

「ビュコック提督、笑えない冗談はやめてくれ」

「その件に関しては、提示された期限に到達があるそうですわ。もし入用のものがあり
ましたら、私、カーリーナまでお申し付けください。みなさまは提督さまの旧いお知り合
いと聞いておりますので、お安くしておきますわよ」

「その資金は申請すれば下りるのかね」

「もちろん各基地の予算から出していただきますわ」

St. 10 オペレーション・デネブ ・独立計画都市グリフオンの戦い

西暦2063年6月6日。

宣戦布告にあつたとおり、鉄血の首魁エルダーブレインは麾下の東方方面軍に対してS09地区中央部第13旅団基地群に対しての攻勢作戦を発令した。鉄血軍はS09地区南方コロニー・エチナに集結した。

その戦力は東方方面軍の第3軍、第5軍、第7機械化師団、第4機械化師団に加えてGA・オーメルのネクスト24機であつた。数にして歩兵部隊12万體、12個戦車大隊、8個機械化歩兵大隊、2個師団砲兵旅団、目標捕捉中隊、砲兵大隊、特殊戦機に対応する2個防空砲兵大隊と大戦力が連なつていた。

対する第13旅団は空中空母ヒューベリオンを中核に、航空戦力は特殊戦スーパーシルフ13機、シルフイード60機(各基地に10機ずつ)、スパルタニアン90機(各基地に15機ずつ)。

ヒューベリオン麾下の特殊分遣隊ユニット5小隊、特殊部隊コマンドユニット3小隊、薔薇の騎士連隊^{ローゼンリッター}。

基地部隊が第503連隊（エル・ファシル、バーミリオン、ガンダルヴァ）、第105連隊（シヴァ、ランテマリオ、ティアマト）。

連隊の内訳は、第202大隊（エル・ファシル、ガンダルヴァ）、第357大隊（バーミリオン、シヴァ）、第474大隊（ランテマリオ、ティアマト）。

加えてグリフィンからの増援部隊として陸戦部隊20小隊、各企業からのネクスト12機が迎え撃つ。

ヤン・ウエンリーは数段階に渡る鉄血への反攻作戦^{カウンター}“オペレーション・デネブ”を発令した。

鉄血は本作戦をシナトラ作戦と名付けた。

ヤン・ウエンリーも作戦情報を入力しており、座乗艦ヒューベリオンで指揮を執る。

ヤンの元には、飛び回るスーパースिल्フや各戦線からの情報が嵐のように入ってきていた。

「提督さま、鉄血が攻撃を開始しました」

カリーナがヤンに情報を渡す。鉄血東方軍団は、6月6日午前9時に攻勢を開始した。

ヤンの予想では、鉄血支配領域であるコロニー・エチナから真っ直ぐ北上し、緩衝地

帯で中立を保っている独立計画都市グリフォンを直指することが考えられた。そのため、ヤンは独立計画都市グリフォンの周囲40kmを嚴重警戒区域として、偵察機や偵察部隊を大量に送っていた。

その中で、哨戒に出ている第13旅団フォート・シヴァ、コルト小隊と鉄血第3軍第11スカウト連隊の遭遇戦がグリフォンから32km南で勃発。

ヤン・ウエンリーはこれに対処すべく、グリフォンに対して特殊部隊コマンドユニットA、B、Cを投入した。

「提督さま、なぜ357大隊ではなく特殊部隊コマンドを？」

カリーナは刻々と移り変わる状況に対し、戦術指揮を行っていた今までは異なる戦略戦を軸にした戦場にまだ慣れていなかった。カリーナの不安もつともだ、とヤンは優しく答えた。

「うん。グリフォンへの侵攻は、我々への南からの攻勢軸と考えられるだろう？ エチナから真つ直ぐ北上、シヴァを攻撃しながら左右の時計回り、反時計回りをそれぞれ回ってくるつもりだ。シヴァを突破して中央のS09地区グリフィン作戦司令本部を占拠しても、周りの5個の基地から増援が来て包囲殲滅されてしまうからね」

ヤンが六角形に基地を置いた理由がこれである。どの基地が攻撃されても、確実に増援が来て挟撃できる位置関係があるからであった。

「シヴァの右隣はバーミリオン、左隣はランテマリオだ。この3個の基地のうち、シヴァは1番防御が堅い。だから、攻勢軸に対して正面からぶつかりつつある程度誘い込むためには機動性に富んだ部隊が必要なんだ。

こんな時、アッテンボローがいてくれれば助かったんだがね」

そんなヤンの予想通り、鉄血は増援を送りこんで激戦となった。コルト小隊は一度シヴァに撤退し、第1ースカウト連隊に加えて押し寄せる鉄血第3軍を相手取った、広範な森林地帯での陸戦が展開される。特殊部隊コマンドユニットは、鉄血第3軍の苛烈な攻勢に対して正面から激突した。

「こちらスローネ、ケルビム、ハンクス聞こえる!? 至急左翼側に火力を集中!」

激戦の渦中、FALはコルト小隊撤退のために、迫る鉄血の大部隊を相手に持久戦を強いられていた。

〈無茶を言うな、こういうのは私じゃなくてマークスマンのヤツらの領分だ〉

〈四の五の言ってる暇があったら撃つたらいいかですか?〉

言い合いつつも、後方からのスナイパーの射撃が的確に鉄血を撃ち抜いていく。今作

戦のために、特殊部隊コマンドの戦術人形は可能な限りの編成拡大を行っていた。

3個小隊は広く布陣し、それぞれが前衛のSMGを援護するARのボックス陣形、後方1kmにスナイパーが位置している。即応の遊撃としてネクスト2機が足りないところを補ってはいいたが、小隊ユニット3個のみでは3個連隊を相手取るのは不可能だ。戦闘開始から2時間、押し止められただけでも奇蹟のなせる技だ。

「ちい、このままじゃコルト小隊の撤退する前に追いつかれる」

〈スローネ、もう戦線を維持できません！〉

「だめ！アルケー、ここは私たちが死んでも守りきるのよ！」

左翼G36Cから悲鳴があがる。無理もない、左翼側では敵の大型人形であるマンティコアが押し寄せている。たとえNTWの援護があつても、戦線を維持するのは無茶だった。

〈アルケー、頭を下げろ〉

声が響き、咄嗟にしゃがんだG36Cの上を猛烈な弾幕が叩く。モーターコブラだ。今回はホワイト・グリントと同じくネクスト装甲を展開しており、コジマ粒子を使用しないメインブースターを使用している。黒い機体。ホワイト・グリントよりも流線型を基調とする機体は、レイレナードのAA-LIYAHがベースになっている。

〈ありがとう、デユナミス〉

〈安心するのはまだ早い。来るぞ〉

第13旅団の全隊に付随する戦闘妖精、電磁妖精が遂に出番を迎える。FALの指示で3機の電磁妖精はそれぞれの隊列の真ん中へと飛んでくる。ドローンの機体を持つ妖精は、搭載するジェネレータを稼働させプライマル・アーマーを起動した。

「タイムリミットは300秒、それまでに押し返すわよ!」

コマンド部隊は次々とスキルを発動する。一挙に戦線を押し上げていく特殊部隊コマンド。戦線外縁では、ホワイト・グリントが陽動を兼ねて上空から射撃を加える。独立計画都市グリフォン手前まで迫っていた敵部隊は、5kmほど離れた地点で再編を図りはじめた。

しかし、押し進もうとした特殊部隊コマンドだったが、突出し挟撃されることや背撃を警戒したヤンは独立計画都市グリフォンから北東40km地点に防衛ラインを敷き、翌7日に戦略的撤退を命令した。ヤンはこの撤退の援護のため、スーパーシルフー1番機“オニクス”、12番機“ガッターレ”を爆装で投入。部隊長FALはグリフォン全域にわたる遅滞戦闘による撤退戦を展開、同日中はグリフォンを東西に走る川まで戦線を保持したのち撤退を成功させた。

8日午前3時には、鉄血はグリフオン中央を走る川を渡り鉄血本隊は同日グリフオンを制圧。グリフオンに臨時作戦司令部を置いた鉄血東方軍団は半月状に陣を展開、鉄血軍司令部は作戦の第一段階の目標は達成したと認識し、一度各戦線を保持することを宣言した。

ヤン・ウエンリーはこれに対し、散発的に部隊を投入し、じりじりと戦線を押し上げようとする鉄血に牽制を行う。

「ここまでは作戦通りだ」

ヤンはサングラスをかけ、表情を隠しながらモニターを眺める。帰還してきたFALからコマンドの面々が指揮卓の後ろに揃っていた。

「みんな、よくやってくれたね。期待以上の戦果だ」

FALは不満そうに頬を膨らませながら、ヤンに対して言った。全員目立った負傷はなく、煤と硝煙の香りが漂う。

「グリフオンを放棄する必要はなかったんじゃない？市民だって……」

「みんなの夢を壊してしまったかな。だが、ここで撤退しなければ、グリフオンの市民は確実に犠牲になる」

ヤンは表情を見せない。昔から、ヤンは何かしらの感情を隠すためにサングラスをかけるくせがあつた。

「どういこうと？」

「グリフォンは間違いなく、今回の鉄血のシナトラ作戦の要諦だ。市民の避難がまだ終わっていない今、無理にあそこで押し返すれば、補給が尽きて押し返され、グリフォンに立てこもるしかなくなる。そうなれば、2個機械化師団の砲撃や市街戦は間違いないだろうからね」

ヤン・ウエンリーはPDAに目を落とす。そのPDAには、現状の作戦プランと予測、修正プランが記されている。

「私としては、中立都市の無辜の民が犠牲になることは許容しがたいものでね。なにせ、大義も意義もない戦争だ」

ホワイト・グリントが苦々しげに目を落とす。こころなしか、その肩もやや縮こまっている。眉根をよせたホワイト・グリントは、気落ちした声で言った。

「……耳が痛いですね。確かに、私たちが全力を出せば、脆弱なヒトは深刻なダメージを負うことでしょう」

ホワイト・グリントの経歴を目の当たりにしてきたモーターコブラは、言外の意を汲み取ったか、その横で腕を組んで目を逸らす。

「そうだな。確かに人は守られるべきだ。だが、それは延命と何が違うんだ？」

ヤンはサンングラスの奥で、優しい目線をネクストに投げた。かつて、養子に師父とし

て投げかけた視線のように。

「延命？それは違う。私は知っている。人の可能性を」

鉄血作戦司令部は今後の制圧目標として、第13旅団六大基地と中央に位置するS0 9地区作戦司令部の占領を挙げた。先にヤン・ウエンリーがそう仕組んだように、S0 9地区作戦司令部を制圧するには、まず六大基地を攻略する必要があった。

それぞれの目標のために、鉄血軍集団は、シヴァ基地を目指す α 軍集団と、反時計回りに防衛ライン外縁を進みバーミリオン基地を目指す β 軍集団に、6月10日に分割された。

六大基地内縁を周回する軌道のヒューベリオンでは、忙しくなくヘリが発着し、特殊戦機が給油と補給を行っている。やはりと言うべきか、ヤン・ウエンリーには地上の基地は似合わないようだった。

特殊部隊コマンドは休息のためポッドに入る時間と、食事を与えられて待機が命じられた。ヤン・ウエンリー曰く、次に君たちが動員される時は“確定的な勝利”を決める時か“致命的な敗北”を防ぐ時だから、しっかり休んでおくように、とのことだった。

「状況はどう、カリーナ」

ポッドから出てシャワーを浴びた面々が食堂で食事をとっていたところ、同じく食事を取りに来たカーリーナがいた。

「思っていたよりは悪くは無いと思います」

歯切れの悪いカーリーナに、ホワイト・グリントがため息混じりに一言言う。

「つまり、戦力差から見れば善戦しているものの、劣勢であるということですね」

事実、防衛網は既に縮小段階に入り、独立計画都市グリフォンはその防衛網から除外された。抵抗は虚しく思えてくるほど、鉄血の戦力は膨大だった。

「いや、そうではないんです」

ユニットBの部隊長F A—M A Sが首を捻る。

「それは一体どういうことですか？」

カーリーナは驚き半分、恐怖半分といった、どこか縋るような顔でメンバーを見る。

「損害が少なすぎるんです。電磁妖精の件があるとはいえ、我々はおよそ1.2倍から1.5倍の敵を相手にしています。散発的な戦闘で大きな戦いは皆さんのもののみではありませんが、被撃破ゼロ、大破がわずかに20。対して、敵に与えた損害は戦術偵察によると既に1000体にのびります」

メンバーが固まる。まだ開戦からわずか4日である。戦力差ではこちらがその損害を受けているようなものにも関わらず、異常と言うほかない。

「ヤン・ウエンリー提督さまは……魔法使いかなにかなのでしょうか」

真横でそのヤンの指揮を目の当たりにしたカーリーナは、畏敬を通り越して、恐怖に近い感覚を抱いていたようだ。

「魔法使いではない。魔術師と呼ばれてはいたがね」

深いバリトンボイスが沈黙を破る。奥で食事を楽しんでいた薔薇の騎士の連隊長、ワルター・フォン・シエーンコップ中將だ。

「魔術師……ですか？」

「ああ。あの方は自分の功績を過小に語るがね、一撃で船が沈むような戦いでなければ今のような戦果になるのも頷ける。もちろん、提督の戦術だけでなくお嬢さんフロイラインがたの戦闘能力の高さもあるが」

「なるほどね」

FALが納得したように腕を組む。

「提督が戦術の天才って話は理解していたけど、環境が整えばアレキサンダー大王も真つ青の戦略家になっていたわけか」

「侵略は是としないだろうがね。その能力はあるのに、どうにも本人にはそのやる気がない」

シエーンコップはソーセージをつつきながら、懐かしむように語る。

「バーミリオンの時だって、同盟軍から出奔した時だってそうだ。まったく、素質はあるのにやる気がないのは人類の損失だと思っただがね」

食堂には、どこか微妙な雰囲気か漂っていた。戦略家ヤン・ウエンリーの実力が、天井知らずであること。ヤンの思考は、一体どれほどの高みにあるのか。未だ、その答えを知るものはいない。

クリアランス・コード認証。貴方をグリフィン関係者だと確認しました。ようこそ、第13旅団戦術データベースへ。

アクセス承認。当該戦術人形のデータを表示。

万が一、戦術人形のスペックなどに興味が無い場合、スキップしてください。

No. 012

Name: LARグリズリー

Call sign: bear (2)

第13旅団特殊分遣隊ユニットD部隊所属。統合作戦支援分隊（通称グリズリー小队）小隊長兼任。

Weapons Specification:

半自動拳銃

L. A. R. Manufacturing Inc

重量

本体 : 1.36 kg (4.8 oz)

装填時 : 1.5 kg (5.3 oz)

全長 : 267 mm

銃身長 : 5.4 インチ、6.5 インチ、8 インチおよび 10 インチ

弾丸 :

. 45 ウィンチエスターマグナム

. 10 mm オート

. 44 マグナム

. 9 mm ウィンチエスターマグナム

. 357 マグナム

. 50 Action Express

. 45 ACP

. 357 / 45 グリズリー・ウィンチエスターマグナム

作動方式 : ショートリコイル

初速：457 m/s

装填方式：脱着式箱形弾倉：7発

DOLL's Specification：

CQB戦：A

近接格闘術：A

射撃：B

体力：B

機動：A―

爆薬取扱：B

編成拡大：不可（電脳出力不足）

医療：B+

諜報：B―

研究開発：B

身体機能：Lv50第5世代型戦術人形。HGタイプのため、本人形自体の戦闘力は高くない。一方、支援分隊の隊長らしく支援能力はトップクラス。火力上昇と回避上昇という支援効果に加え、さらにスキルとして火力上昇効果を持つ。

電源：戦術人形用固体高分子形燃料電池

駆動骨格：第5世代型・HG戦術人形用駆動骨格カスタム

FCS：050DE・Ver. 1.6

センサー：第5世代型デュアルカメラアイa（パープル）、第5世代型聴音センサー、

第5世代型嗅覚センサー、第5世代型味覚センサー、第5世代型触覚センサー

電脳：?????電脳

生体パーツ：左腕・両脚・消化器系・生殖系・循環器系

通常武装：本体（7発マガジン）、支援用コアリンク出力システム

スキル：火力号令

味方火力を8秒間上昇させる。

St. 11 オペレーション・デネブ：シヴァを巡る攻防

6月10日、シヴァ基地を目指す α 軍集団と、反時計回りに防衛ライン外縁を進みバミリオン基地を目指す β 軍集団に分割された鉄血東方方面軍は侵攻の用意を整えていた。

α 軍集団は6月12日、シヴァ基地防衛ラインの3本目にある前線基地TB-26を制圧し、15日には防衛ラインの4本目まで迫っていた。

〈ヤン提督、防衛ラインは破られつつあります〉

「心配ない。フィツシャー中将、貴官の用兵の妙を再び頼むよ」

ヤンはそれだけ言うと、カリーナに指示を下した。その内容は、まさにヤン・ウエンリーが魔術師と呼ばれる所以であった。この戦役を分析する各勢力の分析官や指揮官たちは、この芸術作品を驚き受け入れるもの半分、詭計に属するモノだと断ずるもの半分にわかれた。この時、ヤンの視界には既に、今後の敵の動きが映し出されていた。

16日、当初の予定よりだいぶ遅れて、 α 軍集団支援の為、 β 軍団第4機械化師団が

シヴァ基地に迫るα軍集団の攻勢軸に対して90度の角度からシヴァに横撃を加える形で第4防衛ラインに攻撃を開始。第4機械化師団軍はシヴァ基地南部へ進撃するα軍集団を東部から援護攻撃して、補給改善のために、補給路に近く度々妨害工作を行っていたランテマリオの前線基地を占領し西からの補給を確保しようとした。

18日には防衛網を突破し前線基地TB-27を占領。小規模な市街地が連続する山脈沿いに町を次々と占領していった。

しかし、これはランテマリオ基地司令ビュコック提督とシヴァ基地司令フィツシャー中将の巧みな連携であり、ヤン・ウエンリーはこの伸びきった補給網を叩くべく行動を開始。

20日にはヤン・ウエンリーはランテマリオの第474大隊222突撃中隊、直轄の特殊分遣隊、加えてランテマリオのネクスト”オルレア”、ティアマトの”プロメシユース”、”ストリクス・クアドロ”を投入。敵補給路を分断、さらに侵攻部隊をそのまま独立計画都市グリフォンの後背へと向かわせた。これに対し、鉄血はGAネクスト”タイラント”、フィードバック”、オーメルネクスト”ナル”、”アンズー”らリンクスタイプのネクスト4機、武装タイプ”のネクスト6機を投入する。

「アヴエンジャー^{M4A1}です、よろしく。222nd、私たちの後に続いてください」

いつもの黒地に緑のラインが入ったバトルギアに白の制式バトルジャケットを腰巻きにしたM4A1は、ひと言そう言った。今回は特殊分遣隊ユニットDの部隊長だけでなく、今回の攻撃任務の指揮を務めている。222突撃中隊は、474大隊の約3分の1を占める戦力である。

「アヴエンジャー、指示をお願いします」

中隊長コルト・シングル・アクション・アーミー率いる222突撃中隊がシヴァの西側ゲートに揃っている。ヘリから降り立った特殊分遣隊5ユニットと合流する。

「我々の任務は、敵補給路を破壊し、独立計画都市グリフォンとその南のコロニー・エチナとの間に橋頭堡を築くことです。私が先頭をいきます。各員は陣形を崩さずに続いてください」

ホログラムを投影し任務を説明する。西から出て、南西に進み敵補給路を守る部隊を撃破、そのまま補給路を分断し南下、エチナとグリフォンの間の連絡路を監視できる位置に野戦陣地を作るルートだ。陣形は特殊分遣隊の魚鱗の後ろを222ndが追従する形。

特注のジェネレータを装備したM4A1が先陣を切る凸形陣で222ndは戦域に

突入した。

「……はあ!？」

シングル・アクション・アーミー

コルトSAAと222ndの部下たちは、その様に驚愕した。先陣を切るというのは、てつきり電磁妖精の技術を使った16Labの新兵装か何かだと思っていたのだ。しかし、M4はレーザーブレードを発振させると、そのブレードで殺到する弾丸を蒸発させたのだ。

「あなた正気!？」

〈電磁妖精は有能ですが完全ではありません。消耗は可能な限り抑えるべきです〉
全力疾走しながら自身に銃撃を集中させ、その全てを蒸発させていきながらM4は答える。

〈受動防御では限界があります。攻勢防御の試作ですよ〉

それはさながら、何十年も前の映画……遠い昔、遙か彼方の銀河系の騎士のごとく。M4を狙う敵を、後続く人形たちが撃ち倒しながら特殊分遣隊と222ndは進撃を続けた。

この時、驚異的なことにM4A1の被弾はゼロ。部隊損害はダミー人形が三体、数発の被弾があつたのみであつた。

攻勢防御とは、かつてのボタン戦争の時代に考案されたものの派生である。ミサイル

に対する防御は00年代前後に対空機関砲やバルカン、CIWSから対ミサイル防御ミサイルに取って代わる。受動から能動へと変わるのだが、これを陸戦レベルまで落とし込むにはとてもではないが密度が足りない。

殺到する銃弾や砲撃に対しては壁を張るフォースシールドや電磁バリア、あるいは運動エネルギーを吸収する電磁トーチカなどの様々な手段が考案された。プライマル・アーマーですら受動防御のひとつである。幾多の戦線で考案された防御装置、その中の一つに、ニュートロン防御膜というものがある。元は接近する艦船や戦闘機本体などの目標に対して使われる防護膜だ。電荷を持たず極めて透過性の高いニュートリノを反粒子と反応させることで膨大なエネルギーを発生させるエネルギーフィールドを形成する。この技術を応用し、敵の弾丸に対して被害があると思われる射撃線に対して中性子防御線を張ることで弾丸を溶融させるものだ。

ヤン・ウエンリーはオペレーション・カノーパスでのM4の個人装備であったレーザーブレードに着目した。鉄塊を溶解させるほどの出力のブレードであれば、弾丸に対して有効な攻勢防壁となりうるのではないか。

研究開発班はしかし、この夢想とも思えるような案を具体化してしまった。

ヒントはレイレナードのネクスト「オルレア」の持つレーザーブレード、MOONLIGHTが第13旅団研究開発班の元にもたらされたことだった。規格外の出力を誇

る紫の刀身は、安全装置がついていた。それを解除すると、なんとその刀身をブレードを振りながらダッシュすることでエネルギー光波として射出する機構が備わっていたのだ。

その悪魔的な機構をなんと、たったの4日で研究開発班は試作に成功。試験的にM4のブレードに搭載したというわけだ。

20日中に補給路の分断に成功した222ndは、そのまま日付が変わると共に独立計画都市グリフォンの西を通ってグリフォンの南へと回り込む。午前3時50分、M4率いる特殊分遣隊と222ndはグリフォンとエチナのルートを守るネクストと遭遇する。事前にこれを察知していたM4は、部隊に随伴しここまで出番のなかった3機のオリジナルを前線に出す。

〈まさか貴様と協働するとはな、女帝様〉

”オルレア”アンジェ、一撃必殺を旨とする長大かつ高出力レーザーブレード”M O N L I G H T”を持つ烏殺し。その実力はモーターコブラ、ホワイト・グリントらはもちろん、メアリー・シエリーやシユープリスも一目置くほどのネクスト。

「フン、契約が無ければ貴様など近づく暇も与えず撃ち抜いてやるものだが……今は
そうもいかん。目の前で粹がる粗製共、彼奴等は捨て置けん。本来なら貴様もだが」

”プロメシユース”メアリー・シェリーは大口徑スナイパーライフルを超精密射撃で
運用する。BFFの最大戦力である。

「私は強者にしか興味はない。蚊を何匹叩き潰そうが、何の益にもならん。腕利きの
烏か山猫でなくてはな。おい、王小龍、貴様、間違つても私に当てるなよ」

「今がただの協働であればやぶさかでもないがな。今は貴様の力が必要だ」

”ストリクス・クアドロ”王小龍もBFFのネクストラしく、精密な狙撃戦を得意と
する。今回は、アンジェが近接戦闘を挑み、戦域外縁から2機のBFFネクストが十字
の射線から狙撃戦を展開する。10対3、いくらオリジナルとはいえ苦戦を強いられる
ことが予想された。

しかし、粗製ではオリジナルであるアンジェと同じくオリジナルのBFF最高戦力2
機に対しなすべはなかった。あつという間に片がついた。驚くべきことに、アンジェ
とBFFの2機の息はピッタリ合っていたのだ。

アンジェの背中を襲うネクストにはメアリーの魔弾が降り注ぎ、回避しようとクイッ
クブーストを吹かしたあとの一瞬の硬直を縫って光刃が迫る。2段やキャンセルなど
望むべくもない、練度の低いネクストたち。刃をかくぐり、安心した先は王小龍の畏

の下。

あるものはMOONLIGHTに両断され、あるものは撃ち抜かれる。生存したのはわずかに2機、フィードバックと武装タイプのネクスト1機が這う這うの体で撤退した頃には、グリフオンは第222突撃中隊によって包囲されていた。

これにより、グリフオンを基点にシヴァに侵攻していた鉄血部隊への補給と後方からの支援は事実上消失したことになる。もちろん、グリフオン東方からシヴァの東隣のバーミリオンへと向かうルートは残っているものの、西方ランテマリオからグリフオンのルートは222ndによって封鎖が完了した。

同日中に退路が絶たれたことを知った？α？軍集団は、シヴァ第4防衛ライン付近まで陣形を広げていたものの、そこで一時的に侵攻を停止せざるを得なくなった。奪取したTB―26を中心に陣を広げていた？α？軍集団だったが、TB―26を含む13旅団前線基地は事前に撤退を含む23の行動プランが設定されていた。今回TB―26で実行されたのはプラン18、基地物資の意図的な破壊と基地インフラの電子的ロックを軸にした基地機能の停止である。

これにより、基地における各インフラ、地面深くに埋め込まれた周期的なEMPパルスの発信、鉄血に最も不要な木材物資の破片のみが大量に残された状態のTB―26に駐屯せざるを得なくなった？α？軍司令部は補給不足だけでなく、精神的・情報的にスト

レスを抱えることとなる。

シヴァアではランテマリオとの補給線を確保し、また十字攻勢の一方が停止したことに
よって、反撃のための準備が着々と進められていた。

一方で、東側のバーミリオンでは血で血を洗う激闘が繰り広げられていた。

St. 12 オペレーション・デネブ：バーミリオン攻防戦

β軍集団は、α軍集団支援の為引き抜かれていた第4機械化師団を取り戻してやつと攻勢を順調にしたが、すでに作戦は予定よりも2週間以上遅れていた。そもそも、これだけの軍勢を用意しておきながら物量ですり潰すことが出来ていない時点で、鉄血は大苦戦していることに違いはなかった。当初の予定では、1週間もかからずに第13旅団を殲滅できるはずだったのだ。

先に進んでいたβ軍集団第5軍は6月22日にバーミリオン東方タツシリ川の第357大隊ウルフパック小隊を排し、23日にはライガール市付近でタツシリ川を渡りバーミリオン攻防戦が始まった。

バーミリオンの357大隊はシヴァと戦力を共有するため、最初に攻撃が予想され、事実その通りになったシヴァに多くの戦力を割り振っていた。そのため、26日にはバーミリオンは第4防衛ラインを破られ包囲が完成し孤立することになった。

ヤン・ウエンリーは包囲を破るのではなく、バーミリオンを除いた変則五角形、シヴァとガンダルヴァを結ぶ対角線を絶対防衛圏として設定。北方のガンダルヴァ、エル・

ファシルから継続的にバーミリオン包囲部隊に対する攻撃を仕掛ける。

加えて、ヤンは357大隊に増援として空挺降下で特殊部隊コマンドユニットB、Cを送った。

27日、バーミリオンの南で第4機械化師団の一部がタツシリ川に到達。野砲部隊が1週間に及ぶバーミリオンの砲撃を開始し、基地上部構造体は瓦礫と化した。それでもバーミリオンの357大隊は地下基地から必死に抗戦した。

「……………参ったね……………」

爆音と振動が鳴り響く地下格納庫^{ハンガー}で、特殊部隊コマンドユニットB部隊長F A | M A SとユニットC部隊長A K | 47は辛気臭い顔を突合せていた。

「なんつーか……………ストレスフル」

砲撃が開始されてから早8時間。日付が変わってから延々と放火に晒され続け、振動と爆音は止むことがない。実は、感覚器官にとつて振動というものは極めて厄介な影響を及ぼす。

例えば、視覚は常に振動によりぶれ、焦点が合わない。聴覚は言わずもがな振動による音が絶え間なく聴覚神経を刺激し、内臓まで揺らす爆振動は各神経系に対する強いス

トレスを与える。この時には、まだこの状況が1週間も続くとは思ってもいないのだが。

「提督、無事ですか？」

「私は大丈夫だ」

F A — M A S に聞かれたパーミリオンのウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ提督は一言だけ返すと目を閉じて口を閉ざす。その姿は同じ立場から見れば地蔵のように見えたかもしれないが、彼の部下たるパーミリオンの戦術人形にとっては揺るがないトップというのは精神的にも安心をもたらず。

これが銀河帝国のビットテンフェルトなどであれば、拳を握りしめ我慢の限界に達し、部下のオイゲンに諫められていたであろう。

「報告します」

357大隊のコマンダー、スコープオンがやって来た。顔色は良くない。無理もない。既にパーミリオンは包囲下にある上、基地上部の防衛兵装は軒並み使用不能。トーチカからの射撃や必死の抵抗も、時間の問題だ。

「357大隊、防衛に出ているもの以外の全小隊のメンテナンスが終了しました」

流星に基地司令と司令直轄の部隊長だけがあると、おてんば娘スコープオンも固くならざるを得ない様子。

「ん、了解」

ヤンから持ちこたえるべし、との指示を受け取ってきた特殊部隊コマンドだったが、現状では砲撃が止むのを期待はできない。砲撃が止んだ時は、むしろ最期の時といえる。であれば、抗戦の意志を見せて砲撃を続けさせることが肝要だ。

「防衛戦であれば抵抗を続けなければならん。指揮は君たちに任せる。反撃を続けるのだ」

「ですね。47、どうしようか」

「そうだな……まるで先達が戦ったスターリンググラードみたいな戦いだけど、そうだとすると勝機はある」

ロシア生まれの傑作自動小銃AK-47。その出自としては第二次大戦後であるため、スターリンググラードを経験してはいない。だが、あまたの戦線を超えてきた勇敢な戦士である。

「ここ、バーミリオンの市街地はインフラが死んでるとはいえ、建物の瓦礫や廃墟がまだまだ残ってる。ここでゲリラ戦を展開するんだ」

要塞である旅団基地は重要攻撃対象であるため、その破損率は60%をゆうに超える。しかし、バーミリオンに隣接する市街地・歓楽街は比較的損害が少ない。まさにスターリンググラードの再現である、建物一戸、部屋ひとつを争う泥沼の市街戦が始まる。

旅団基地は独立したインフラを持つが、隠し通路として地下水道・マンホールなどが市街地へと広がる。これを利用して、特殊部隊コマンドと357大隊は徹底したヒットアンドアウェイを実行した。

357大隊と特殊部隊コマンドは奮戦した。それでも限界はあり、7月4日夕刻頃には、鉄血はパーミリオン基地外壁まであと150mまで進出したが、357大隊も1時間間に被撃破ダメージ人形30体、大破人形20体もの犠牲をほらいながら死守を続けた。

地下工廠のドックは常に負傷した人形でいっぱい、廊下には息も絶え絶えな人形や欠損パーツをもち所在なさに休止状態にしているダメージ人形で埋まり歩くのがやっと、装備弾薬を製造するラインも限界ギリギリまで稼働していた。

配給は備蓄が底を尽き、1回の出撃で配給の高カロリーエネルギーバー1／3本で上等、二日間ともに食事と休息を取らずに戦い続けて緊急機能停止シャットダウンを起こした人形もいたほどだ。もはやパーミリオンが陥落するのは時間の問題だった。

一方、鉄血側の消耗も激しく、ある連隊は2500体から12体まで討ち減らされ、そ

の場でほかの連隊に取り込まれた。

バーミリオンに配置されたネクストであるウォルコット姉弟はそんな中でも待機を命じられ、歯がゆい日々を送っていた。

しかし、357大隊は奮戦した。補給がままならない中でも苛烈に戦い続け、遂には第3防衛ラインまで鉄血を押し返すことに成功した。7月7日のことである。

絶対的な優位を保持していたはずの対バーミリオン戦線において予想外の損害を受け、更に悪化し続ける状況に鉄血は戦闘を停止し、一時態勢を整えるべく第3防衛ラインTB—15で再集結を企図した。しかし、そのような隙を作ってしまったことが、敗因に繋がったと後世では分析されている。

「バーミリオンの357大隊とFA—MAS、AK47たちはよく頑張ったね」

ヤンはわずかな睡眠の後に指揮卓へと戻る生活を続けていた。

「彼女たちはもちろんですが、提督さま、お食事を摂らないと提督さまが倒れてしまいま
す」

心配そうに食事のトレーを持ってきたカリーナに、ヤンは優しく断りの言葉を入れ

る。

「大丈夫だよ。それに、今はあまり食事を摂る気分じゃない」

「でも……」

ヤンがヒューベリオンで指揮を執る中で、失策と呼べる失策は存在しない。ヤンの戦略は、皇帝ラインハルトの相手の退路を断ち手段を狭めるものとは少しだけ異なる。戦いを略すから戦略、という言葉がある。ヤンのものはまさに戦略の王道だった。も

はや激突が避けられない鉄血との戦いにおいて、ヤンは鉄血に対する戦争行動を可能な限り最小に留めている。

「まったく見事ね、ヤン・ウエンリー提督サマ？」

現れたFALから特殊部隊コマンドユニットAの面々。

「なんだい、急に」

「あなた、ここまで来てシラを切るの？なにが不敗の魔術師よ、立派な戦略家じゃない」「それが出来ていないから勝てなかったんだがね」

ヤン・ウエンリーの戦略の第一段階は、オペレーション・カノーパスでの鉄血に対する基地への攻撃から始まっていた。マグリブのバルバロイを撃破し、データセンターと主要前線基地を潰す。つまり、鉄血に対する質的優位を示したのだ。

第二段階は、戦力の分散である。旅団六大基地はそれぞれが相互に干渉できる位置に

ありながら、外周から基地へと至る道はそのどれもが峻険な山々、砂漠、海などに囲まれている。その中で唯一ある程度の平地が広がるのがシヴァである。

しかし、シヴァ南方は湿原、東方は森林と平原と大戦力を行軍させるのには時間がかかる。機甲師団ならなおさらであり、散発的に兵力を送るか、全ての地形を更地にするしか大兵力を同時には運用できないのである。

第三段階として、敵が絶頂にあるタイミングでの補給路の分断である。シヴァの防衛ラインを破り、あと数日あればシヴァを陥落せしめることが出来るほどまで進出した鉄血だが、その補給線は長く薄い。自身が最高潮のタイミングで決定的なカウンターを食らうというのは、AIといえどもメンタルコアに甚大なダメージを与える。

最後に、敵を包囲し各個撃破できるようにしておきつつ、戦域的には敵に対する優位を作り数的有利で勝利を得るのがヤンのプランだった。

戦術での評価と同じく、勇に傾く皇帝ラインハルトの正面から立つ戦略とは異なり、より周到に、確実に勝つやや知に傾く戦略であった。

ラインハルト・フォン・ローエングラムの戦略家としての資質は言うまでもなく、またそのカリスマ性や戦術手腕、卓越した大局観に加えて軍事のみならず治世においてもパウル・フォン・オーベルシュタインや后となるヒルデガルド・フォン・マリィンドルフなどの配下の優れた助言なども彼の栄光を支えていた。

そんなラインハルトの戦略は、ある意味で最初から強者として勝つべくして勝つという戦略に偏る。もちろん、先に拳がる配下の優秀さなども戦略家の資質ということもできるが、彼の戦略は常に敵よりも優秀な部下を揃え、数を用意し、敵の動きを読むというよりは敵の動きに対応することがほとんどであった。

対するヤン・ウエンリーは、戦略家としてはラインハルトの後塵を拝する戦歴ではあるものの、敵の動きを読むことに長ける。あるいは、敵の動きを操作すると言つてもいいだろう。智勇の均衡という表現がなされるが、その点においてヤンはラインハルトに智で優り、ラインハルトはヤンに勇で優るということだ。

「あなたがこんな腹黒だったとはね」

そのヤンの戦略家としてのタイプをものの一言で言い表したFALは顔の下半分で笑いながら上半分はドン引きするという器用なことをしながらヤンを見る。

「1度も見せたことは無いよ」

苦笑しながら紅茶を啜るヤン。それはそうと、とカーリーナがFALたちに話を振る。

「みなさんは、どうしてこちらに？」

「そりゃあ暇つぶしよ」

あつけらかんと言うFALにカーリーナはあんぐりと口を開けて二の句が継げずにいる。ヤンはため息を漏らした。

「バーミリオンに助けに行きたいのは山々だけれど、私たちのやることはそうじゃないし」

「バーミリオンは心配ないよ。問題は、敵じゃないんだ」

ヤンは少しだけ顔を険しくする。

「とうとう?」

カリリーナがヤンに聞き返す。

「カリリーナ、よく思い出してごらん。これだけ大規模な戦闘を行っているんだ。そして、我々”第13旅団”当初の目的をね」

F A LとN T W、V e c t o rは顔を見合わせてため息をついた。

「……あの戦闘狂ね」

「今まで出てこなかったのが不思議なくらいだ」

「あー……私、胃が痛くなってきた」

カリリーナはハツとしたように戦域マップを確認する。

一方、第13旅団で作戦行動を行って日が浅いホワイト・グリント、モーターコブラ、A C R、G 3 6 Cはなんのことかわからずに首を傾げている。

「誰のことです?」

「あのM 4やM 1 6をして手を焼く生粋の戦闘狂、それもメンタルモデルが幼いもんだ

からアリを潰す感覚で鉄血を叩き潰すとんでもない破天荒ムスメ」

「あれだけ天真爛漫という言葉と恐怖や狂気みたいなマッドな言葉が合うやつもいな
い」

「鉄血への過剰な拷問、生きたまま解体して拳句に破壊した敵の残骸や内部パーツ等を
集めて”コレクション”とかいって宿舎にディスプレイしてるんだとか。ずいぶんと
高尚な趣味をお持ちの、戦場では有名な人形虐待嗜好者」

額に手を当てるFAL、腕を組むNTW、頭を抱えるVectorから次々と語られ
る悪行の数々に流石のホワイト・グリントとモーターゴブラ、ACRも顔を青くする。
G36Cは長く戦線に身を置くだけあって、その言葉で気づいたようだった。

「あら、SOPちゃんですか」

「そう。我々のそもそもの目的は、AR小隊の再招集だよ」

生き残っているAR小隊最後の一人。M4 SOPMOD IIを誘い出すことが、本作
戦の裏の目的だった。

「今までは作戦が数時間単位で終わっていたから、戦いの香りを嗅ぎつけても間に合わ
なかっただろうけど、なるほど、もう1ヶ月経つものね」

「そうだ。M4 SOPMOD IIの回収はM4に行かせるから、作戦の締めは君たちに
行ってもらうことになる」

「それにしても、S O P IIも大変な事ね。もしかしたら、壊れちゃうかも」
「そうですわね、あの子は人一倍16さんに懐いていましたから」

鉄血の初期の作戦ではシヴァとランテマリオの両基地を制圧後、時計回りに攻略する計画であったが、 α ?軍集団は β 軍集団のバーミリオンでの苦戦によって連携を欠いていた。またシヴァからランテマリオまでの行程はそれまでの平原とは違い、尾根が連なる山岳地帯であった。

この地域の道路は整備されておらず、補給もままならないため鉄血軍の進撃は滞った。このような地形は機甲部隊の進撃には適しておらず、逆に第13旅団にとって防衛には適していた。

それでも鉄血部隊は23日にシヴァの南で攻勢を再開し、最終防衛線付近まで進出したが、ついにシヴァ基地から僅か10kmの所でついに弾薬が尽き、進撃を停止した。結果的にはここが東部戦線における鉄血の最遠侵攻地点となった。

474大隊は α 軍集団を包囲しようと、アルバ湿原を目標とする攻勢を開始した。20日に鉄血は第13旅団包囲網全体の崩壊を避けるため、 β 軍集団にバーミリオン南東アバクス平原を除く独立計画都市グリフォン以北からの全面撤退を命令した。

7月8日、シヴァーランテマリオ戦線において第13旅団474大隊が攻勢をかけるのと同じタイミングで、ヤンはガンダルヴァーシヴァの絶対防衛線を迫りガンダルヴァの202大隊の半数を擁する555突撃中隊をパーミリオンに差し向けた。555突撃中隊は機動力に特化したHG・SMG・軽量ARの混成小隊からなる高速遊撃部隊である。555突撃中隊はパーミリオンの包囲を突破し、両端を食い破りつつパーミリオンの357大隊と連携して反撃に出る。

「今までの鬱憤を全部ぶちまけてやれ！突撃！」

1週間もの間消耗戦を強いられていて、ストレスの限界に達していた357大隊と特殊部隊コマンドは縦長の紡錘陣形を作り、鉄血に対して大規模反攻作戦に出た。357大隊と特殊部隊コマンドの“疾風ウオルフ”ウオルフ、デア・シクトウムを思わせるほどの進撃は電磁妖精による防壁が着いて来れないほどの猛烈な速度であり、555突撃中隊は両側面の残敵を掃討するのでやっとだった。β軍集団は虎の子の機械化師団の1個大隊分をウオルコツト姉弟に潰され、遂にパーミリオンからの一時撤退を開始する。

しかし、フラストレーションの頂点にあった357大隊がそれを許すはずがなかつ

た。なんと、357大隊の紡錘陣は撤退途中のβ軍集団の中央を突破し、そこから反転、逆撃を加え、逃げ遅れた第4機械化師団の包囲を始めたのだ。15日には包囲網が完成した。これによりβ軍集団の戦線には大きな穴ができてしまった。

鉄血はアバクス平原までの支配領域の死守を命じたが、20日までアバクス平原とアルバ湿原の鉄血部隊、それを救援しようとする後方にいた鉄血増援部隊と第13旅団の間の戦闘は続いた。膠着状態で遅滞戦闘による撤退戦が成功していると鉄血全体が考えたが、それはひとえに、ヤン・ウエンリーがまいた餌にすぎなかった。

St. 13 オペレーション・デネブ：反攻

7月21日、鉄血はアルバ湿原とアバクス平原でひとまずの安息を得た。膠着状態に陥った戦線では、第13旅団前衛と鉄血の前衛部隊が骨肉を削る戦いを繰り広げていた。しかし、ヤン・ウエンリーは既に次の手を打っていた。

「ふむ。どうやら、そろそろ終幕だ」

ヤン・ウエンリーはグリフオンに駐留する特殊分遣隊に対して、アバクス平原に一時退避しているβ軍集団への攻勢に出ることを指示。特殊部隊コマンドユニットAとシヴァの第357大隊^{ハチ}88特戦小隊^{ハチ}、増援となる4機のインテリオルネクスト、”シリエジオ”、”レ・ザネ・フォル”、”ブルー・ネクスト”、”ヴェローノーク”を投入。

加えて、α軍集団からの攻勢を防ぐべく、特殊分遣隊、薔薇の騎士連隊をアルバ湿原に投入。

「今度は、ぜったい……！」

彼と一体になったことで、私は彼のことを理解出来た。同時に、あの砂漠での敗北がどれだけ彼にダメージを与えてしまったかも。格納庫ハンガーで1人精神集中をしていると、ひとりのネクスト反応が通りがかったのを感じた。

「む、セーラか」

「先輩ですか」

旧い極東の集中法であるZAZENを組んでいた私はばかりと目を開けて霞スミカ先輩を見やる。「シリエジオ」を駆る実質的なインテリオル・ユニオンの最高戦力だ。前と変わらないやり手のビジネスウーマンのような切れ長の目が私をじっと見ていた。えげつないほど美人。

「あまり気負うなよ。どうせ相手は、戦術など何も無い雑魚どもだ」

「ですが、私は……」

私、セーラ・アンジェリック・スメラギは、世界で初めてネクストでノーマルに敗北したリンクスだ。ネクストとしての機能はもちろん、私リンクスに執拗なストレスをかけるような戦術を取られた14歳の私は、ネクストに乗っついていながら遅れをとってしまった。

「もう戦いたくないか。それもよかろう。戦術人形から民生に行くという手もある」

レオーネの中でも一二を争う実力者であり、あれだけ厳しい先輩が、逃げてもいいと告げた。私は思わず姿勢を崩し、立ち上がってしまった。

「ですが！」

「ここでは戦いとは企業の代理戦争ではない。戦いたくない者は戦う必要は無い。生きるために戦う必要も無いんだからな。私は……私は、正直もう戦いたくはない」

先輩が悲しそうに目を伏せる。その顔は、おそらくあの”人類史上最悪の事件”に関することだとおもう。

私は結局インテリオルのネクストとして戦ったものの撃破され捕虜になり、リンクス戦争集結のゴタゴタで脱走したあとは世界を放浪する旅に出ていた。だから、”人類史上最悪の事件”や使い潰されるネクスト戦力の話は噂程度にしか知らない。風の噂で、先輩が関与していたらしいということは聞いていたけど。

でも、先輩の顔は後悔とは少し違ったものに見えた。悲しさ……慈愛……？

「だが、私には義務がある。責任がある。もう、あいつのような存在を作り出さないために。どこまでも堕ちていくあいつの手を掴めるだけの力を得るために」

手を見つめる先輩。きつと、なにか大切な物を喪ってしまったんだ。それも、自分が助けられるはずだったなにかを。

黙って立ち尽くす私を見て、はっとしたようにいつもの先輩に戻る。

「お前は……戦うか？」

「はい」

「何故？」

「私も、先輩と似たようなものです。私のような存在を作りたくない。人と人が戦うことでしか生きられない世界なんて、間違っていると思うから。空の向こうに、きつと行けるはずだから」

「……そうか。だが、肝に銘じておけ。空を目指したイーカロスはその翼を失って死んだ。高く飛ばば飛ぶほど、より深く墮ちることもある。その時は、私が拾ってやる」

「ふふ、なら安心です」

オペレーターから出撃の要請が来る。ヤン提督の通信もだ。

「おや、いい顔をしているね。なにかあったのかい、霞君、セーラ君」

「ええ、まあ、ちよつと」

「それはよかった。モチベーションは全ての基本だからね。君たちには露払いをお願いしたい」

「面白い。我々が前座か？」

「いや、露払いというのは第一段階の話だよ。いいかい、ここで鉄血は間違いなく退く。だがね、考えても見てご覧。今一番世間的にまずいのは誰だと思う？」

「え……それは、鉄血ではないのですか？」

「セーラ、まだまだだな。被害を被ったのはもちろん鉄血だが、ネクストを投入したにも

かわわらずことごとく撃破された奴らがいるだろう」

へそう。GAとローゼンタールIIオーメルだよ。彼らは、レイレナードのアンジェ君、BFFのメアリー殿や王小龍殿、堅実に守り続けるインテリオルの君たちに対する大きなビハインドを背負ったことになる。

つまり、新たなネクストが出てくる可能性が高い

「あのローゼンタールのことだ。どうせ、あの堅物のレオハルトの奴が嫌な顔をして出てくるだろうな」

先輩が苦虫を噛み潰したように眉をしかめ、口をゆがめながら言う。先輩もオリジナルだけど、”ノブリス・オブリージ”レオハルトは”MARCHE AU SUPPLICE”ことベルリオーズ、”イクバールの魔術師”サーダナ、”オルレア”アンジェさんに次ぐナンバー4。”彼”の力を疑っている訳では無いものの、私程度のリンクスでは相手にすらならない。ちなみに本作戦に参加する旅団側のネクストはナンバー順に最高がアンジェさん、次がメアリーさん、王さん。そこからシェリング、スミカ先輩、ステイレットさんとなっている。

「そんな顔をするな。戦線にはヤツがくる」

「ヤツ?」

「ランク9、それにあいつの……いや、そういえば、セーラは旅に出ているから知らな

かったのだったか」

〈特殊部隊コマンドユニットAは我が部隊の最精鋭だよ。オールレンジに対応出来る戦術人形たち、そしてネクスト戦力の2機。心配はいらなから、存分に暴れてくれたまえ〉

「ああ。だが、ひとつ心配がある」

スミカ先輩がとつても重い声で言う。私にも心当たりがある。我らがインテリオル4人娘の最大の関心事……というか心配事。

「ヴェローノークなんだが。その、だな。弾薬費が……」

エイプルさんの機体「ヴェローノーク」は高価なASミサイルを雨あられと撃ち放つ機体。火力は凄まじい。問題は、その火力に比例して弾薬費が天井知らずなところ。

〈……カリーナに伝えておくよ。経費で落とせ、とね〉

エイプルさん、噂では安価な大豆の芽を食べて食いつないでいるという話もあるくらい貧乏生活らしいんですね。きつと、今回のお給料でしばらくは暖かい生活を……送れるんじゃないかな。

「いいか、まずは敵の戦力をとにかく減らすことが目的だ。遠慮はいらん、我々で狩り尽くすぞ」

ステイレットさんから通信だ。旗艦ヒューベリオンに集まった私たちインテリオルのネクストは、ガンシップから戦域外縁に降下。ややばらけて、私は前でシリエジオの近くに降りる。後方にヴェイロノーク、真ん中にレ・ザネ・フォルというY陣形を取った。

「セーラ、私がついてます。弾薬の心配もいりませんし、安心して。ヴェイロノーク、目標を確認しています。作戦を開始しましょう」

「同士討ちに気をつけることだな。レ・ザネ・フォル、火力投射を開始する」
 「セーラ、さっきの話……お前の覚悟を見せてもらおうぞ。シリエジオ、ミツシヨンスター」

ヴェイロノークのミサイル、レ・ザネ・フォルのレーザー光が戦場を白く染める。右側では、既にシリエジオがレーザーライフルを発射しながら突っ込んでいる。

「ぶ、ブルー・ネクスト、戦闘に入ります！」

パルスライフルを撃ちながら前線を押し上げる。戦術人形ドールズになってから初めての实战。すごい、シミュレータでは体験したけれど、実戦では全く違う。AMS適性がすご

く高い人達の世界みたい。

五感がすごくクリアで、手足も意識にコンマ秒と遅れずについてくる。敵の位置、こちらを向く銃口、味方の射線。確か、戦術人形ドールズのシステムを搭載したと聞いていたけれど、こんなにも綺麗なんだ。

〈いい動きだ〉

プラズマキャノンとレーザーキャノンで対ネクストでも回避を許さないレ・ザネ・フォルの視点で褒められると流石に高揚します。

〈敵、増援を確認〉

オペレーターから連絡が入る。こちらでも確認できた。高速エネルギー塊、急速接近。咄嗟にクイック・ブリストで後ろに下がる。

〈お出ましか、墮天使め〉

〈好き放題やってくれる。4機が相手とは。だが、私はノブリス・オブリージュ。我が名にかけて!〉

背中に6門の高出力レーザーキャノンを備えたネクスト、ノブリス・オブリージュ。〈セーラ、無理はするな。ヤツは腐つてもローゼンタールのトップだ。私たちは数で押す〉

汗が頬を伝う。先輩に言われるまでもなく、肌でわかる。格が違う。びりびりとプ

レッシャーに押し潰されそうになる。シミユレータで先輩やステイレットさんと戦った時には感じなかった、猛烈な死の恐怖。

〈まずは前衛からか。行くぞ、蒼と桜〉

〈逃げ切れんか。セーラ、応戦するぞ。隙を見せるな〉

く、いとノブリス・オブリージユがこちらを向く。

手のライフルやレーザーブレードはそこまでの脅威じゃない。ただ、一瞬でも隙を見れば背中なのレーザーキャノンがプライマル・アーマーを貫いてダメージを受けることは想像に難くない。止まってはダメ。

1番危険なのは、切り返しの瞬間とブースターのチャージの瞬間。できるだけ滑らかで流線を描く。

〈さらに敵増援、ネクストです！〉

GAの武装ネクスト！まずい、GAのネクストはEN兵装には弱い一方で、高いAPを持つてる。持久戦に持ち込まれたら、押し切られる。

エネルギー

インテリオルに所属するネクストは総じてEN兵装が多い。PAに対して有効ではあるものの、実際は実弾とダメージ量は変わらない。いくらローゼンタールのシンボルでも、4対1、その内3機がエネルギー兵装ならプライマル・アーマーはすぐに剥がせる。

そのはずなんだけど、ここに敵増援はかなり不利だ。

「あう……!」

クイツク・ブーストのような瞬間単方向のGには慣れてはいるけれど、高速で螺旋を描くような長期の多方向のGは全く違う重さ。全身の血が遠心力で身体の中を動き回るのがわかる。

〈ほう、やる〉

ノブリス・オブリージュは初弾以外でまだレーザーキャノンを放ってはいない。たぶん、私がつつた戦法は間違っていない。でも、なんだか違和感が拭えない。何かを見落としてるような。

〈だが!〉

目の前で光が炸裂する。

「な、なに!?!」

移動しようとしていた先にレーザーの残滓が散る。今の光は、レーザーキャノンのもの?!

〈セーラ、止まるんじゃない!〉

「え?」

上を向くと、そこにはこちらに背中の中の天使の羽根のような武装を広げて佇むノブリス・オブリージュがいた。

〈私が対応できないと思うか？この程度の無勢など、何度も切り抜けている〉

その砲口は既にチャージを終えていることを知らせる、薄青白い光を湛えていた。きつと、私がノブリス・オブリージュを見上げていたのは1秒に満たない時間だった。しかし、その時間はとても長く感じられた。

〈さくらばだ〉

私は、目を瞑らなかつた。

〈随分と口が回りますね、レオハルト〉

レーザーキャノンが発射される直前、ノブリス・オブリージュに弾丸が降り注ぐ。精密射撃だ。寸分の狂いもなく、砲口と機体の頭部へと7発。ノブリス・オブリージュは砲撃体勢を解き、回避する。

〈ネクスト反応2、急速接近中！IFF、ブルー！味方です！〉

オペレーターが叫ぶ。その頃には、もう肉眼で捉えられる距離にそれはいた。

ノブリス・オブリージュと同じ純白の機体。X字を描くオーバード・ブーストの輝き。右手のライフルに左手を添えて前に構え、足を後ろに流し、頭部はコアパーツに格納されている。さながら戦闘機のような機体。

羽根のような意匠の大型ブースターはしかし、天使の羽根じゃない。

あれは、まるで大空を翔ける鳥のように生き生きと、確かな存在感を示している。

〈貴様は……〉

流線型で丸みを帯びた肉感のあるボディ、オーバード・ブーストを停止すると、脚の下に、頭部がせり上がり、展開していたブースター部分が形を変える。青白い複眼、一角のスタビライザー。

へこちら、ホワイト・グリント。応援に来ました。おや、あなたは……セレン女史、その節はどうも。それに……お久しぶりです、レオハルト

へランク9か。相手にとつて不足なし。我が名はノブリス・オブリージュ、独立傭兵といえども手心は加えん

名乗りを上げた同士が睨み合う。ノブリス・オブリージュの後ろには、GAの武装ネクストが集結する。さすがにラインアークのランク9でも、ノブリス・オブリージュと堅牢なGAネクスト相手じゃ……

へよお、誰かと思えば坊ちゃんの方じゃあねえか。久しぶりだな

爆音が響く。後ろから、新たなネクスト。レイレナードのALLEYAHベース、黒と赤の機体。右手には傑作マシンガン、03—MOTORCORA。あのカラーリングはレイレナードの所属を示すものではないけど、レイレナードの企業カラーだ。

しかし、あのアセンブリは見たことがある。左手と背部、肩部武装こそないものの、あれは伝説のレイヴンにしてリンクス戦争の覇者、アナトリアの傭兵の機体。

「貴様は……そうか、アナトリアの。あの時の雪辱、今が晴らすときだ。アスピナとアナトリアの独立傭兵、いくぞ」

「うーん、私はジョシユアではなくラインアークのホワイト・グリントなのですが……これは、イメージ戦略に再考の余地ありですね」

「私は私でアナトリアのではないんだがな。おい、坊ちゃんは両方見たことあるだろ？ とぼけてんなよな。ん？ おお、セレンじゃねえか。久しぶりだな、その節は……なんだ、迷惑かけた」

「戦場で何を話しているんだろう。これが、強者の余裕？」

「貴様に咎はない。気にせんことだ。セーラ、あの馬鹿どもの真似はするな。あいつらはただ単に何も考えてないだけだ。しかし、確かな力だからな。私たちは一度退いて、補給に戻るぞ」

「しかし、ネクストと鉄血はどうするんです？」

「こちらスローネ、第1特殊部隊コマンド。戦域に到達。状況を開始するわ。鉄血は私たちに任せなさい。優雅に決めるわよ」

「カリーナ、アルバ湿原の方は？」

ヤンはいつも通り指揮卓の上であぐらをかき、カリーナに聞く。

「状況はこちらに優位ですわ。474大隊はアルバ湿原の敵を半包围状態に置き、継続的に攻撃を続けています」

「そいつは上々」

とヤンはベレーをとる。明らかに脱力した様子だ。カリーナは指揮卓を降りてエレベーターに向かうヤンを見て、疑問をぶつける。

「提督さま、もう指揮はよろしいのですか？」

ヤンは立ち止まり、振り返ってカリーナに疲れた顔で答える。

「ああ、うん。もうひっくり返ることは無い」

今まで1度も無かったヤンの「勝利宣言」に、カリーナは目を見開いた。

「で、でも、まだ戦闘は続いていますわ。それに、ジャムだつてまだ」

「それについては心配いらぬよ。今更出てきたつてどうにもならないことは、ジャムだつて知っている。彼らは我々と引き分ける時にしか出てこなかった。今回もそうとは限らないが、アバクスにはFAL、アルバにはM4がいる。2人ともジャムと戦った

経験があるし、今回は援護が沢山いる」

実際、ジャムが出てきて戦線を押し返されても、もはや鉄血に残存兵力はなかった。南以外に戦力を振り分ける必要が無い旅団側は、未だに3分の2を残す無傷の202大隊、ネクスト、特殊戦機を残している。

ヤンはいつになく疲れた様子で続ける。

「これで、鉄血は兵力を大きく減らし、GAとローゼンタールに対しても牽制ができた。しばらくは安定した日々が送れるはずだよ。私は働きすぎた。少しは休ませてもらいたいね。……とはいえ、この後もまだ仕事は残っているんだが。ああ、まったく。戦いというのは本当に嫌になるね」

結局、ヤンの予測通りジャムは姿を現すことなく、アバクスでは敵戦力の継戦能力を奪い、一方のシヴァから残りの474大隊麾下部隊と共にアルバ湿原を手中に収めた。

これ以上の消耗を是としないエルダーブレインは直々に撤退を命令。赤色山脈を越え、鉄血支配領域までの撤退が開始された。

あれだけの大口を叩いておきながらの撤退にGA、ローゼンタールは反発したものの、ローゼンタールは最高戦力、ノブリス・オブリージュを、GAは2万という膨大な兵力を提供しながらそれでも第13旅団の進撃を止めることは叶わなかった。

コロニー・エチナ以北からシヴァ基地までのエリアは川、湿原、森林、そして山岳に

挟まれる。そんな場所では、大部隊の運用は極めて困難だった。ヤン・ウエンリーはまずある程度の軍勢をグリフォン近隣まで誘い込み、長く伸びた補給線を特殊分遣隊により分断。これにより、鉄血は足を止めざるをえず、増援と言っても空を飛べるネクスト以外は遅々として進まずに各個撃破の餌食となった。

大規模な軍団による集団戦闘を主とする王道の鉄血軍に対する少数精鋭の第13旅団。奇しくもイゼルローン回廊のごとく、大軍団に対して見事に戦線を支えきったヤンであった。

7月下旬、24日には第13旅団による激烈な攻勢が開始された。包囲網はさらに狭められ、ネクスト戦力を先鋒とする楔型の凸形陣が12重にわたって鉄血・GA部隊を貫いた。

凸型陣は斜めに鉄血の横隊を貫き、それと交錯するように次々と別の凸型陣が肉迫する。ノブリス・オブリージユはホワイト・グリントにより墜ち、もはや鉄血・GA・ローゼンタールになすすべはなかった。

8月に入っても攻撃の手は緩まらず、陣地は次々に突破されていった。

8月12日、ついに継戦能力を失った鉄血は第13旅団に対し敗北を認められた。

総戦力のうち40%が撃破され、残る戦力も重大な損害や作戦行動を遂行できないほどの損傷を負ったものが4分の1を占め、鹵獲された戦術人形も数知れず、高等人形である”スケアクロウ”、”ネゴシエーター”、”イントウルダー”までもが捕虜となり、GA・ローゼンタールのネクストも生還したのは24機中わずかに4機。その他全てが鉄クズと化した。

完敗だった。

第13旅団の6大基地は未だ健在であり、最も被害の大きかったバーミリオンですら基地能力の破壊はできず、ネクストは全機が生還、航空戦力もスパルタニアン19機、シルフィード10機が撃墜されたもの作戦能力の戦役前の80%を割ることは無かった。

戦術人形では、被撃破は驚くべきことにゼロ。

大破は多かったが、そこから完全撃破まで行ったものはいなかった。

戦闘では最も消耗の激しかったバーミリオン357大隊も、全員がその義体を新しくすることなく帰還している。

ここに、鉄血の反乱における最大の戦闘であるシヴァーバーミリオン戦役は幕を下ろした。

St. 14 オペレーション・デネブ：戦後

独立計画都市グリフォンの西方、M4A1率いる特殊分遣隊が陣を張るエリアで、8月12日、とある出来事があった。

「隊長、報告です」

100式がテントの椅子で横になって顔の上に本を乗せていたM4の元へとやってきた。M4は本を取り、体を起こす。

M4に言わせれば、人間は人間らしく、人形は人形らしく。そして、隊長は隊長らしくあるべし。とのことで、この前買ってきた戦術教本を読みもせずに顔に乗せていた。曰く、「隊長つて基地では忙しいですが、終戦近い前線では部下に仕事投げるのが普通なんですよ」。どこか歪んでいるような気がしなくもないが、良く考えれば部隊の指揮官はヤン・ウエンリーであつた。

「どうかしましたか？」

「北西から戦術人形の反応を感知したと5番機アプサラスから連絡がありました。IF Fシグナルはグリフィン、AR小隊を示しているとのことですよ」

「なるほど、予測通りですね。わかりました。私が向かいます。念の為、あなたと417

も来て貰えますか」

「了解しました。呼んできます」

ほう、とため息をついたM4。その吐息には、様々な感情の色が混ざる。

(SOP IIに会えるのは嬉しい。感動もしてる。またAR15とも戦える。でも、16姉様を失ったことは、あの子にとって間違いない災厄)

417と100式と合流したM4は、軍用車両に飛び乗って運転を開始する。

「たいちよー！も、もうすこしスピードを！」

「え、上げろつて？まったく、100式つたら」

「100式、余計なこと言わないで!!いやあー!!」

ベタ踏みである。砂埃を巻き上げ、泥濘を蹴散らしながらジープは進む。戦術人形用の特殊車両は、平地での最高速度200km/hを記録する。M4も、AR小隊の隊長に違わぬネジの外れた戦術人形だった。

さて、IFFFを頼りに進んできた3人だったが、GPSがないため特殊戦機が投下したポッドの位置情報を頼りに大まかな位置まで絞り込んだエリアに入ったところでジープを止めた。

「んー！やっぱりドライブは最高です！あれ？100式、417？」

「だ、大丈夫……です……」

「うぷ……」

「そうですか？ まあいいです。SOP11はこの辺にいるはず。いいですか、私が呼びかけます。2人は背中合わせに立って、絶対に警戒を解かないこと」

野戦において特殊作戦装備のM4 SOPMOD11を相手取ること。それは、捕食者の狩場に踏み入った哀れな草食動物になると同じことだ。

M4は警戒しながら森へと分け入る。

「SOP11、私です。AR小隊、M4A1です」

小声で語りかける。SOP11は聞き逃さない。

「迎えに来ました。また一緒に戦いましょう」

ヒュン、とM4のそばを何かが掠める。ピンクと緑の髪飾り。それは、いつも1000式が髪留めに使っていたアクセサリーだ。

「はあ、イタズラは程々にしてください。さもないと……」

「さもないと？」

「私は、本当に怒ります」

わら……とM4の髪が浮く。銃を置き、右手甲にレーザーブレードを付ける。目がかつと開いているM4は、微笑みながら1歩前進する。

「ひっ」

気配が後ずさる。

「え、M……4……？ほんもの、だよね……？」

高めのあどけない声が響く。

「はい。ほんものですよ？」

ニコニコである。こころなしか、M4の周囲の光が歪む。

ドドドド、と擬音でも聞こえてきそうな雰囲気だ。歩みをゆつくりと進めるM4。

「私は、守りたいものをたくさん得ました。手を出すなら、あなたであつても……容赦はしません」

ぶん、と腕を振って手近な木を焼き倒す。すると、木陰から黒い特殊戦服に身を包んだ白髪に赤メツシユの少女が駆け出してきた。

「ごめんなさい！M4、ごめん！私が悪かったからー」

平謝りする少女に、M4はひと息ため息ついてから手を差し伸べる。

「はい、いいですよ。迎えに来ました。一緒に、帰りましょう」

手を取って立ち上がったM4。SOPMOD IIは、頭に漫画のような疑問符を浮かべる。一体どこから出てきているのだろうか。

「帰る？いまは戦役中じゃないの？」

「はい、もう終わりました。私たちの勝利です」

柔らかに微笑むM4のジャケットを見て、SOPPIIは2個目の疑問符を浮かべる。

「M4、その服……それに、その部隊章は？あの人たちも」

「道中で説明します。もちろん、あの二人に手は出してませんよね？」

「ももも、もちろん！黒髪の方の子の髪飾りを失敬したくらいで……あたっ！」

M4 渾身のデコピンである。ただのデコピンではなく、戦術人形のデコピンだ。SO

PIIの額から煙が上がっている。

「いいですか、あなたたちAR小隊のみんなは家族です。ですが私の仲間たちに手を出

すのは許しません。ほら、行きますよ」

涙目でおこを抑えるSOPPIIは、ぼろりと所感をこぼす。

「か、変わったね、M4」

「人は変わります。1年も経てば」

「それで、そのヤンつていう指揮官がとっても強いんだ？」

「はい。怖いくらいに」

「楽しみだな！ARR15もいるんでしょ？」

ドライブの最中、M4とSOPIIは再会を喜び会話を楽しんでいた。後部座席に座る100式は髪留めを返してもらい、髪を整えている。417は窓の外を見ているが、ちらちらとSOPIIを見ている。

「もちろん。私たちの特殊分遣隊はあくまで遊撃なので、人員が増えても問題はありませんが。ふふ、心配はいりませんよ、417」

「ふえ？そんな心配はしてませんよ、隊長」

「へえ、さつきからちらちらとSOPIIを見てたじゃないですか。AR小隊は私の家族ですが、特殊分遣隊は私の大切な仲間です。みんなも、私が守ります。今度こそ」

ぶく、と頬を膨らませて窓を開ける417。振り返ってそんな417をじつと見るSOPIIが、そういえば、と口を開く。

「ヒヤクシキ、だっけ。アナタの噂は聞いてたけど、そっちの417、の方は聞いたことない。でも、見た目はあのいけ好かないヤツにそっくり。姉妹？」

「いけ好かない？」

「ああ、HK416ですか。彼女は確かにいけ好かないですね。確かに417は私のケーキ……澄ました顔で私は興味ありません、みたいな顔をしておきながら卑怯な手を使って私を出し抜こうとした拳銃に目標を取り逃した憐れな416の姉妹銃ですね」

言葉の節々に恨みをちらつかせながらM4が解説する。食べ物への恨みはなんとやら。

「あのケーキは私のだもん！M4だって食べられなかったくせに」
「はい？そもそも、あれはあなたが……」

喧嘩を始めようとした2人を100式の鋭い声が諫める。

「隊長、後ろに」

後ろに付いてくる高速反応、1。IFF応答無し。

「IFF応答無し。敵ですな」

M4はダツシユボードのスイッチを押すようSOP IIに指示する。SOP IIが言われるままにスイッチを押すと、特殊戦機のフライトオフィサ席にあるものと同じコンソールが出てくる。

「SOP II、100式と席を代わってください。アヴェンジャー1、コンタク^{接敵}ト」

M4が宣言する。同時に、417が後部座席の後ろ、トランクの窓下で銃を構える。

「交戦規定δ、状況iwi2。特殊分遣隊、エンゲージ^{戦開始}」

M4はハンドル横の赤いスイッチを押す。すると、ハンドルが格納され、ディスプレイモニタと視野を妨げない小ぶりのスロットルレバー、スティックが出てくる。

M4はアーマメント・コントロールをオンに。

「隊長、こちらのデータリンクにインタラプト。システムを解析しています」

「DOS起動、サブストラクチャー展開。メインには攻勢防壁。ICEは一応取って

おいて

〈コピー。メインボディ、アンダーデコイにシフト〉

敵は第13旅団に対しての情報的不利を打開すべく、人形とSTCを繋ぐデータリンクに対するハッキングをしかけてきた。

データリンクに対して直接インターセプトはできないが、基幹となるハブ、今で言うところのデータリンクに接続しているハードであるジープのメインコンピュータに対する解析ハックだ。

〈なかなかやりませぬ、ネットワークに潜り込まれる前にシャットダウンしましたが、今度は大規模ECM〉

〈いいえ、違う。これは、コジマ粒子。我々を追っているのは、ネクストです〉

辺りに乱舞し始めた白や薄紅の光を睨め付けながらM4は車を走らせる。これでは、車両に搭載された機関砲やミサイルは用をなさない。目視による射撃、つまり後部の417以外に攻勢手段はない。

〈後ろ、まだ見えません〉

〈姿を見せない……?〉

不気味だった。電子攻撃を受けているが、直接攻撃はない。ネクストのFCSのレーダー照準波も感知していない。しかし、ネクストにしかありえないコジマ反応。M4S

OPMODIIを回収したタイミングでの襲撃。黙り込んだままのSOPPII。

（このネクストは、攻撃が目的ではない？我々に対する示威行動でもない。情報収集？でも、それにしても直接的すぎる）

グリフィンのをベースにしたデータリンク基幹に対するハッキング。それもかなり高度なハッキング能力を持つ。それでいて大雑把な戦術。

「まさか！」

M4はひとつの可能性に思い当たる。

「M……16……！」

〈ほお、よく気づいたな〉

M4はジープを止める。

「我々第13旅団のデータリンクは、AR小隊のをベースにしています。ベースラインは、あの作戦の前のSSLARバージョン3.8。その技術はグリフィンの中では16Lab製か第13旅団所属でなければ全く触れられない攻勢防壁で守られている。そして、第13旅団で鉄血に捕らえられた者はいない」

ジープを降りたM4は、油断なく銃を構える。

〈成長したな、M4A1〉

「姉さん、やはりあなたは鉄血に……」

「ああ、どうやら捕えられて洗脳されちゃったらしい」

上空からゆっくりと降下してくるのはモノクローム。

白い髪、黒いぼろぼろの外套。右手に銃、左手には大ぶりのナイフを持っている。眼帯の反対、傷跡の残るその目は闊達な彼女のものとは思えないほどに澱んでいた。

「そうですか。生きていてくれてありがとう」

M4の言葉に、M16は意外そうに眉を上げる。

「これは、訣別です」

人は、生物体としても種精神としても揺籃からの離別をする。庇護者の下から、自立する。

「私は姉さんと戦えて良かった。これは最後の感謝です」

「おう、楽しかった」

「これからは、私はあなたの敵になる。あなたは私の敵になる」

戦術人形、M4A1も同様に、離別を受け入れる。成長とは訣別。縁は紡がれ、出会いとは別れと表裏一体。

成長、生長には別れが必要だ。

「そうさな、あたしとしちゃあ、お前と戦いたくはないな」

「でもっ」

「そうもいつてられない。お前には、まだ早すぎる」

果たしてM4は、M16との訣別を経て成長を遂げたのだ。有り得たかもしれない別の世界線とは異なる、受け入れることでの成長を。

「ふふ……今日はなんて素敵な日でしょうか」

〈余裕じゃあねえか〉

「だってそうでしょう？ 喪つたと思つた家族が、みんな生きていたことがわかつたんですから」

晴れやかな顔でM4は嘯く。

〈……お前……〉

ずつと真顔だったM16の顔が初めて感情を持つ。疑問、少しの恐怖。

「大丈夫です。どんな姿になろうとも、敵の尖兵に墮ちようとも」

M16は戦慄した。M4は、狂っている。

「私は、家族を愛しています」

その目の奥は深淵。底知れぬ闇と、対照的に抜けるような笑顔。SOP11のような無邪気な殺意でも、鉄血のような泥臭い敵意でも、AR15のような憎しみでもない。

それは、愛情だった。どこまでも透明で、光が届かないほどに深い。濁つた水溜まりを覗いても恐怖は抱かない。遙か底まで続く穴、満たされるのは濁りなき想い。透明度の高い湖は、吸い込まれそうな恐ろしさを持つものだ。

へは、おもしろえ。またすぐに会う事になるだろうが、その時は楽しみにしてる」

冷や汗を垂らしながらM16は捨て台詞を吐き、オーバード・ブーストを輝かせながら飛んで行った。

「ふふふ……はあ。状況終了。帰投します」

ひとしきり笑顔を浮かべながら空を眺めていたM4はジープに戻り、アーマメント・コントロールをオフにしてクルマを始動する。

「え、M4……?」

「SOP II、あなたには聞かなければならないことがたくさんあります」

「ひひひ、ひゃい!」

満面の笑みを浮かべるM4に、SOP IIは背筋を伸ばして答える。

「ですが、今はゆっくりしましょう。今日はお祝いです」